柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第21集

田塚山遺跡群

——新潟県柏崎市田塚山遺跡群発掘調査報告書——

1996

柏崎市教育委員会

柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第21集

田塚山遺跡群

——新潟県柏崎市田塚山遺跡群発掘調査報告書——

1996

柏崎市教育委員会

田塚山遺跡群

——新潟県柏崎市田塚山（たつかやま）遺跡群発掘調査報告書——

1996

柏崎市教育委員会

序

田塚山遺跡群は、柏崎平野の中央に位置する独立丘に立地しています。今回の調査では、縄文時代のムラや、弥生時代の溝、あるいは中世の仏堂など、時代性に富んだ遺跡であることがわかりました。また、ここは、北陸自動車道の柏崎インターチェンジから、わずか250mの距離で、このように、私たちの生活のすぐ近くに遺跡が存在することを示しております。

遺跡とは、私たちの先祖が遺してくれた財産です。過去から現代まで、脈々と受け継がれてきた先祖たちの精神や文化は、今は目には見えません。しかし、そのような精神を培い、文化を伝えてきた場所こそ、現代の私たちが暮らすこの地域なのです。そして、私たちの先祖が、この地域で懸命に生きていたことの目に見える証こそが、遺跡なのではないでしょうか。そこには、私たちの精神や文化を創造した人々の痕跡が生きているのです。私たちには、遺跡をもっと身近に感じ、大切にしていく姿勢が必要でありましょう。その意味で、田塚山遺跡群は、私たちが、遺跡をもっと身近なものとして感じられるきっかけとなるのではないでしょうか。

本報告書は、市内藤井・茨目・両田尻地区において行われた団地の造成工事にともない、事前に実施した発掘調査の記録です。調査では、小さいながら縄文時代のムラの跡や、防御施設と考えられる弥生時代の溝跡、そして中世の仏堂などが発見され、私たちの祖先の歴史を知る上で極めて貴重なさまざまな事実を教えてくれました。また、現地説明会の際には、雨天の中250名もの方々からご参集いただき、遺跡に対する関心の高さを切実に感じることができました。ささやかではありますが、この報告書が、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のため活用されるとすれば、この上ない幸いであります。

また、今回の調査が無事終了できたことは、事業主体でもあります高頭不動産株式会社、ならびに施行責任者となられた株式会社植木組のご理解とご協力の賜物と思っております。また、幾日も続く残暑や身を切るような初冬の寒さの中、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員および両田尻地区・下田尻地区の皆様ならびに調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成８年３月

柏崎市教育委員会
教育長　相　澤　陽　一

例　　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市藤井・茨目・両田尻地区に所在する田塚山遺跡群の発掘調査の記録である。

2．本事業は、緑が丘ニュータウン造成事業に伴い高頭不動産株式会社から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。

3．発掘調査は、平成６年９月12日から同年11月30日まで現場作業を実施し、その後平成８年３月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町３丁目喬柏園内社会教育課遺跡調査室において行った。また現場作業は、社会教育課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。

4．発掘調査によって出土した遺物は、注記に際し遺跡名を「タツカ山」と略し、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。

5．本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（社会教育課遺跡調査室）が保管・管理している。

6．本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集も共同で行った。

品田高志：第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章第１節・第Ⅴ章第２節第２項ｂ・第Ⅸ章第２節

斎藤幸恵：第Ⅱ章・第Ⅴ章第２節第２項ｃ～ｄ・第Ⅴ章第３節第２項・第Ⅵ章・第Ⅶ章第１節
第Ⅶ章第２節ａ～ｂ・第Ⅶ章第３節～第４節

中野　純：第Ⅴ章第２節第１項～第２項ａ・第Ⅴ章第３節第１項・第Ⅶ章第２節ｃ・第Ⅷ章
第Ⅸ章第１節・第Ⅹ章

7．本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。

8．発掘調査から本書作成までは、事業主体である高頭不動産㈱並びに工事施行責任者㈱植木組からは数多くのご協力とご理解を賜った。またこのほかにも多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。　（五十音順・敬称略）

安達聖人・飯塚純一・石坂圭介・笠井吉正・小山　茂・坂井秀弥・佐藤雅一・高橋恒彦・田中耕作
寺崎裕助・戸根与八郎・飛田瑞穂・三井田忠明・箕輪一博・矢田俊文・山崎健五郎・柏崎市立博物館
柏崎市立図書館・新潟県教育庁文化行政課・北陸中世土器研究会

調　査　体　制

調査主体　柏崎市教育委員会　教育長　渡辺恒弘（～平成７年10月29日）
相澤陽一（平成７年10月30日～）

総　　括　西川辰二（社会教育課長）

管　　理　川又昌延（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱・～平成７年３月31日）
坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱・平成７年４月１日～）

庶　　務　宮山　均（社会教育課社会教育係主査）

調査担当　品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）

調 査 員　中野　純（社会教育課文化振興係学芸員）
小山田夕実（社会教育課文化振興係学芸員・～平成７年１月31日）
斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）
渡辺富夫（社会教育課文化振興係嘱託）
帆刈敏子（社会教育課文化振興係嘱託）
高橋由佳（社会教育課文化振興係嘱託・～平成７年２月28日）
黒崎和子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）
堀　幸子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

現場作業スタッフ
相崎与吉・飯塚静夫・伊原一三・植木政栄・植木房吉・内山保夫・大図朝谷・大図信一
大橋　勇・大橋太郎・大矢　昇・岡田寛成・尾崎貞夫・押田　栄・片桐　寿・北原英男
栗林　稔・駒形武雄・駒野照行・品田喜助・品田晴雄・柴野修一・須田哲夫・高橋孝信
田辺益郎・中沢時春・西巻徳一・野村　直・萩野　東・早川六三郎・布施達栄・本間嘉一
牧野　鼎・矢嶋末吉・矢代清英・矢代春雄・山崎忠吉・吉田雄二・渡辺寅之丞
（柏崎市シルバー人材センター会員）
岸　郁子・樋口昭子・宮川弘子（両田尻地区）
上杉ヒメ・中村道子・高塩加代子（下田尻地区）

整理作業スタッフ
村山英子（社会教育課文化振興係嘱託）
竹井　一・萩野しげ子・赤沢フミ・岩下清美・伊藤啓雄（遺跡調査室）
安達厚子（遺跡調査室・～平成７年５月31日）

目　　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 2

Ⅱ　田塚山遺跡群と環境 …… 5

1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 5

Ⅲ　田塚山遺跡群の概要 …… 11

1　田塚山遺跡群概観 …… 11
1）遺跡群の現状と調査区 …… 11
2）遺跡群概観 …… 11
3）基本層序 …… 13
2　調査区とグリッドの設定 …… 13

Ⅳ　田塚山Ａ地区 …… 14

1　Ａ地区の概要と調査区 …… 14
1）Ａ地区の概要 …… 14
2）調査区概観 …… 14
2　遺構 …… 15
1）遺構の概略と分布 …… 15
2）遺構各説 …… 15
3　遺物 …… 19
1）土器類 …… 19
2）石器類・鉄滓 …… 19
4　田塚山遺跡群Ａ地区のまとめ …… 20

Ⅴ　田塚山Ｂ地区 …… 21

1　Ｂ地区の概要 …… 21
2　遺構 …… 22
1）遺構の概略と分布 …… 22

2）遺構各説……22
3　遺物……35
1）縄文時代の遺物……35
2）中世の遺物……36

Ⅵ　田塚山Ｃ地区 ……38

1　Ｃ地区の概要と調査区……38
1）Ｃ地区の概要……38
2）遺構の概略と分布……38
2　遺構……38
3　遺物……42
1）縄文土器……42
2）石器類……42
3）須恵器……42
4）土師器……42
4　Ｃ地区のまとめ……44

Ⅶ　田塚山Ｄ地区 ……45

1　Ｄ地区の概要と遺構の分布……45
1）Ｄ地区の概要……45
2）遺構の概略と分布……45
2　遺構……45
3　遺物……49
4　Ｄ地区のまとめ……50

Ⅷ　田塚山Ｅ地区 ……52

1　遺構……52
1）遺構の概略と分布……52
2）遺構各説……52
2　遺物……63
1）土器類……63
2）石器類……65

Ⅸ　考　　察 ……67

1　田塚山遺跡群Ｅ地区の縄文集落……67

1）はじめに……67
2）周辺の縄文時代遺跡概観……68
3）E地区の縄文遺跡……69
4）まとめ……73
2　田塚山の中世仏堂と墳墓……75
1）はじめに……75
2）仏堂の復元と景観……75
3）中世土師器の編年的位置付けと仏堂の年代観……78
4）安田条「下方（仮称）」と中世遺跡群……82
5）おわりに……84

X　総　　括……85

1）はじめに……85
2）田塚山遺跡群の概観と時期区分……85
3）田塚山遺跡群の変遷……85
4）おわりに……86

引用参考文献……87

報告書抄録……88

図　版　目　次

図　面　図　版

1　田塚山遺跡群グリッド図
2　A地区全体図
3　B地区全体図
4　C地区全体図
5　D地区全体図
6　E地区全体図
7　遺構全体図の割付図、遺構全体図A地区－①
8　遺構全体図A地区－②
9　遺構全体図A地区－③
10　遺構全体図A地区－④
11　遺構全体図B地区－①
12　遺構全体図B地区－②

13　遺構全体図Ｂ地区－③
14　遺構全体図Ｂ地区－④
15　遺構全体図Ｂ地区－⑤
16　遺構全体図Ｂ地区－⑥
17　遺構全体図Ｂ地区－⑦
18　遺構全体図Ｃ地区－①
19　遺構全体図Ｃ地区－②
20　遺構全体図Ｃ地区－③
21　遺構全体図Ｃ地区－④
22　遺構全体図Ｄ地区－①
23　遺構全体図Ｄ地区－②
24　遺構全体図Ｅ地区－①
25　遺構全体図Ｅ地区－②
26　Ａ地区　濠(大溝)・溝・道路跡
27　Ａ地区　土坑・溝跡
28　Ｂ地区　仏堂
29　Ｂ地区　仏堂
30　Ｂ地区　区画溝(溝区画)
31　Ｂ地区　区画溝・土壙墓
32　Ｂ地区　区画溝(溝区画)
33　Ｂ地区　土坑・溝跡
34　Ｂ地区　溝・道路跡
35　Ｃ地区　ＳＸ２
36　Ｃ地区　住居跡・土坑
37　Ｃ地区　土坑・道路跡、Ｄ地区　木炭窯
38　Ｄ地区　住居跡
39　Ｄ地区　トラップピット・土坑・道路跡
40　Ｅ地区　柱穴・土坑・道路跡
41　Ｅ地区　住居跡
42　ＳＢ225柱穴土層注記表

写　真　図　版

43　田塚山遺跡群全景
44　田塚山Ａ・Ｂ地区
45　田塚山Ｃ・Ｄ地区
45　田塚山Ｄ・Ｅ地区
47　田塚山Ｂ地区仏堂関連遺構群
48　ＳＢ－225仏堂本堂の内陣と外陣
49　田塚山遺跡群１　田塚山遺跡群とその周辺

50　田塚山遺跡群２　ａ．田塚山遺跡群遠景　ｂ．田塚山遺跡群近景
51　田塚山遺跡群３　遺跡群全景
52　田塚山遺跡群４　ａ・ｂ．調査区近景
53　調査１　ａ．表土剝ぎ　ｂ．表土剝ぎと遺構確認
54　調査２　ａ．遺構確認　ｂ．遺構発掘
55　調査３　ａ・ｂ．遺構発掘
56　田塚山Ａ地区１　ａ．調査区全景　ｂ．調査区近景
57　田塚山Ａ地区２　ａ．調査区全景　ｂ．調査区近景
58　田塚山Ａ地区３　ａ．調査区全景　ｂ．調査区近景
59　田塚山Ａ地区４　ａ・ｂ．濠（大溝）内ピット・溝群
60　田塚山Ａ地区５　ａ・ｂ．調査区南東部
61　田塚山Ａ地区６　ａ・ｂ．ＳＤ－38濠（大溝）
62　田塚山Ａ地区７　ａ・ｂ．ＳＤ－38濠（大溝）
63　田塚山Ａ地区８　ＳＤ－38濠（大溝）
64　田塚山Ａ地区９　ａ・ｂ．ＳＤ－38濠（大溝）
65　田塚山Ａ地区10　ａ～ｃ．ＳＤ－38濠（大溝）
66　田塚山Ａ地区11　ａ～ｃ．ＳＤ－38濠（大溝）
67　田塚山Ａ地区12　ａ～ｃ．ＳＤ－47溝
68　田塚山Ａ地区13　ａ～ｃ．溝
69　田塚山Ａ地区14　ａ．濠（大溝）内遺構群　ｂ・ｃ．土坑　ｄ・ｅ．溝
70　田塚山Ａ地区15　ａ．ＳＤ－39　ｂ．ＳＤ－51・52・ＳＲ－57ｇ　ｃ．調査区壁　ｄ．出土遺物
71　田塚山Ｂ地区１　ａ・ｂ．調査区近景
72　田塚山Ｂ地区２　ａ．仏堂関連建物群全景（正面）　ｂ．仏堂関連建物群全景（背面）
73　田塚山Ｂ地区３　ａ・ｂ．仏堂関連建物群全景
74　田塚山Ｂ地区４　ａ・ｂ．仏堂本堂の内陣・外陣
75　田塚山Ｂ地区５　ａ・ｂ．庫裡（ＳＢ－226）
76　田塚山Ｂ地区６　ａ～ｈ．本堂柱穴群１
77　田塚山Ｂ地区７　ａ～ｈ．本堂柱穴群２
78　田塚山Ｂ地区８　ａ～ｈ．本堂柱穴群３
79　田塚山Ｂ地区９　ａ～ｈ．本堂柱穴群４
80　田塚山Ｂ地区10　ａ・ｂ．ＳＤ－１ａ・ｂ溝
81　田塚山Ｂ地区11　ａ．ＳＤ－１ａ・ｂ溝　ｂ．ＳＤ－１ａ・ｂ溝土層断面
82　田塚山Ｂ地区12　ａ．ＳＤ－１ａ・ｂ溝土層断面　ｂ．墳丘墓盛土（ＳＤ－１）
83　田塚山Ｂ地区13　ａ・ｂ．ＳＤ－160区画溝
84　田塚山Ｂ地区14　ａ～ｃ．ＳＤ－160区画溝
85　田塚山Ｂ地区15　ａ～ｃ．ＳＫ－229土壙墓
86　田塚山Ｂ地区16　ａ～ｃ．ＳＫ－510土壙墓
87　田塚山Ｂ地区17　ａ～ｈ．土坑・溝群１
88　田塚山Ｂ地区18　ａ～ｈ．土坑・溝群２

89　田塚山Ｂ地区19　ａ～ｈ．土坑・溝群３
90　田塚山Ｂ地区20　ａ～ｈ．土坑・溝群４
91　田塚山Ｂ地区21　ａ・ｂ．出土遺物
92　田塚山Ｃ地区１　ａ．調査区西部　ｂ．調査区北東部
93　田塚山Ｃ地区２　ａ．調査区東部　ｂ．調査区中央部
94　田塚山Ｃ地区３　ａ・ｂ．調査区北東部
95　田塚山Ｃ地区４　ａ．ＳＩ－113住居跡　ｂ．ＳＢ－114建物跡
96　田塚山Ｃ地区５　ａ．ＳＸ－２検出状況　ｂ．ＳＸ－２②検出状況
97　田塚山Ｃ地区６　ａ・ｂ．ＳＸ－２完掘
98　田塚山Ｃ地区７　ａ・ｂ．ＳＸ－２土層断面
99　田塚山Ｃ地区８　ａ～ｃ．ＳＸ－２②焼土遺構
100　田塚山Ｃ地区９　ａ～ｃ．ＳＫ－３・４土坑群
101　田塚山Ｃ地区10　ａ～ｈ．土坑群
102　田塚山Ｃ地区11　ａ・ｂ．出土遺物
103　田塚山Ｄ地区１　ａ・ｂ．調査区全景
104　田塚山Ｄ地区２　ａ・ｂ．調査区全景
105　田塚山Ｄ地区３　ａ．ＳＩ－63住居跡周辺　ｂ．ＳＩ－60・61・62住居跡周辺
106　田塚山Ｄ地区４　ａ．ＳＩ－60住居跡周辺　ｂ．ＳＩ－62住居跡周辺
107　田塚山Ｄ地区５　ａ．ＳＩ－60住居跡周辺　ｂ．ＳＩ－61住居跡周辺
108　田塚山Ｄ地区６　ａ．ＳＩ－62住居跡周辺　ｂ．ＳＩ－63住居跡周辺
109　田塚山Ｄ地区７　ａ・ｃ．柱穴　ｂ・ｄ．土坑　ｅ・ｆ．ＳＸ－１　ｇ・ｈ．ＳＫ－３
110　田塚山Ｄ地区８　ａ・ｂ．トラッププピット群
111　田塚山Ｄ地区９　ａ．ＴＰ－102・103トラッププピット　ｂ．ＴＰ－106・64トラッププピット
112　田塚山Ｄ地区10　ａ．ＴＰ－106トラッププピット　ｂ．ＴＰ－64トラッププピット
113　田塚山Ｄ地区11　ａ～ｃ．トラッププピット土層断面
114　田塚山Ｄ地区12　ａ．ＳＲ－57道路跡　ｂ．出土遺物
115　田塚山Ｅ地区１　ａ．全景　ｂ．近景
116　田塚山Ｅ地区２　ａ・ｂ．調査区全景
117　田塚山Ｅ地区３　ａ・ｂ．調査区全景
118　田塚山Ｅ地区４　ａ．ＳＩ－401住居跡　ｂ．ＳＩ－402住居跡
119　田塚山Ｅ地区５　ａ．ＳＩ－403住居跡　ｂ．ＳＩ－404住居跡
120　田塚山Ｅ地区６　ａ．ＳＩ－405住居跡　ｂ．ＳＩ－406住居跡
121　田塚山Ｅ地区７　ａ．ＳＩ－408住居跡　ｂ～ｅ．柱穴土層断面
122　田塚山Ｅ地区８　ａ～ｆ．柱穴土層断面　ｇ・ｈ．ＳＲ－260道路跡
123　田塚山Ｅ地区９　ａ～ｃ．ＳＫ－261土坑
124　田塚山Ｅ地区10　ａ・ｂ．出土遺物
125　田塚山Ｅ地区11　ａ・ｂ．出土遺物
126　集合写真

表　目　次

第１表　田塚山Ａ地区遺構集計表……18
第２表　田塚山Ｂ地区寺院関連遺構柱穴集計表……27
第３表　田塚山Ｂ地区遺構観察表……32～33
第４表　田塚山Ｃ地区遺構観察表……39～40
第５表　田塚山Ｄ地区遺構観察表……46
第６表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（１）……57
第７表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（２）……58
第８表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（３）……59
第９表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（４）……60
第10表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（５）……61
第11表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（６）……62
第12表　田塚山遺跡群Ｅ地区縄文土器観察表（１）……65
第13表　田塚山遺跡群Ｅ地区縄文土器観察表（２）……66
第14表　田塚山遺跡群周辺の縄文時代遺跡表……68

挿　図　目　次

Ⅱ　田塚山遺跡群と環境
第１図　柏崎平野地形分類図　／６
第２図　田塚山遺跡群の位置と周辺の遺跡　／７
第３図　刈羽郡域の荘・保と主要城郭　／９
Ⅲ　田塚山遺跡群の概要
第４図　田塚山遺跡群と周辺の地形　／12
Ⅳ　田塚山Ａ地区
第５図　田塚山Ａ地区出土遺物　／19
Ⅴ　田塚山Ｂ地区
第６図　中世仏堂関連建物跡柱間計測図　／24
第７図　田塚山仏堂関連建物跡柱穴配置図　／26
第８図　田塚山仏堂関連建物跡の柱穴法量分布図　／28
第９図　田塚山仏堂関連建物跡柱穴の深度分布図　／28
第10図　Ｂ地区出土遺物（１）　／35
第11図　Ｂ地区出土遺物（２）　／37
第12図　Ｂ地区出土遺物（３）　／37
Ⅵ　田塚山Ｃ地区
第13図　Ｃ地区出土遺物（１）　／43
第14図　Ｃ地区出土遺物（２）　／43
Ⅶ　田塚山Ｄ地区
第15図　トラップピット分布概略図　／48
第16図　Ｄ地区出土遺物　／49
第17図　Ｄ地区ピット類法量分布図（１）　／50
第18図　Ｄ地区ピット類法量分布図（２）　／51
Ⅷ　田塚山Ｅ地区
第19図　Ｅ地区出土遺物　／64
Ⅸ　考　察
第20図　田塚山遺跡群周辺の縄文時代遺跡　／67
第21図　Ｅ地区ピット類法量分布図（１）　／70
第22図　Ｅ地区ピット類法量分布図（２）　／71
第23図　Ｅ地区ピット類の直径と柱痕径　／72
第24図　田塚山仏堂本堂の類例　／77
第25図　絵巻物にあらわれた仏堂と庫裡・僧房　／79
第26図　刈羽・三島型中世土師器の編年試案／81

Ⅰ　序　　説

1　調査に至る経緯

柏崎平野南部には、かなり広く中位段丘が形成されている。この中位段丘地帯と沖積平野との境界付近には、鯖石川の氾濫や浸食から免れた中位段丘が、今も点々と取り残され、島状に浮かぶ光景を目にすることができる。田塚山は、これら島状中位段丘の中では最大の丘であり、近在の村にとっては身近な裏山として親しまれていた。

ところで、田塚山周辺地域においては、これまで遺跡の存在はまったく知られていなかった。田塚山など点々と浮かぶ丘の規模は概して小さく、また周辺の沖積地も湿地性が強いことから、遺跡の存在についてはそれほど意識されていなかったのが実情である。ところが、平成２年７月、両田尻地区の小さな丘、小児石から遺跡が発見されて以来状況は一変した。小児石遺跡は、縄文時代前期の陥し穴遺構のほか、鎌倉時代から戦国時代までの中世全般におよぶ墓地、そして近世前期頃の塚群が築造されていた遺跡である。ついで、平成３年には、となりの下田尻地区の沖積地から、古代～中世を主要時期とする不退寺遺跡が発見されるにおよんだ。遺跡の空白域とされていた当該地一帯において発見された２つ遺跡とは、台地上には縄文時代の遺跡、沖積地においては中世の遺跡が営まれていることを、初めて知らせる結果となったのである。

田塚山は、柏崎市街地から東へ３㎞ほどの距離にあり、両田尻・藤井・茨目の３大字界が接する丘である。北陸自動車道柏崎インターに接した当該地は、立地の利便さの故に、近年様々な開発がなされ、市街地化の著しい地区の一つとなっていた。そして、ついにこの田塚山にも開発の波が押し寄せてくることとなった。

平成４年、高頭不動産㈱は、田塚山における宅地造成事業について本格的な準備に入った。当該事業計画は、平成元年にはすでに着手されていたものである。その後、若干の計画変更を経て、平成４年１月に土地取得事前協議を行い、４月に国土利用計画法の規定に基づく協議、そして７月には新潟県大規模開発行為の適正化対策要綱第６条の規定に基づく事前協議の説明会が催されるなど、矢継ぎ早に進められていた。これらの協議に際し、埋蔵文化財保護サイドから提出された意見書には、隣接した地点に新たな遺跡が発見されていることを受け、試掘調査等の必要性が説かれていた。

しかし、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に係る協議等は、互いの連絡不十分も重なって、具体的な協議の実施が遅れ、現地踏査は平成５年３月の実施となった。踏査の結果としては、事業地内に新たな遺跡を確認することはできなかったが、小児石遺跡が隣接すること、開発区域外に田塚山の塚群が存在すること、また平坦地が多いことから縄文時代の集落などが想定された。これらの踏査結果を踏まえ、新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略）と協議し、事業予定地内の８地点に対して事前に試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認することとした。試掘調査は、翌４月に実施した。その結果、５地区１万㎡近い範囲において、遺構・遺物を検出し、遺跡を確認するに至った［柏崎市教委1994ｂ］。しかし、本発掘調査の実施については、遺跡の規模が大きく、突発的な対処を平成５年度内に実施することはほぼ不可能であった。また、平成６年度においても、実施可能との判断は難しい状況にあったことから、継続的に協議を続け、日程の

調整を図ることとした。

平成６年度は、前半期における発掘調査も好天に助けられ、概して順調に進められていた。このため、平成６年度の年間スケジュールについて再検討を試み、田塚山遺跡群の調査を秋に実施することを予定して協議を進めることとなった。市教委は、発掘調査費を６月補正予算に計上、本調査に向けた協議を実施、９月に文化財保護法第57条の２の規定に基づく土木工事等の届出を受けこれを県教委に進達するとともに、同法第98条の２の規定に基づく発掘調査の通知を文化庁長官宛に提出した。本調査着手は、９月12日から器材等の搬入・グリッドの設定を行い、19日から作業員と重機を投入、本格的な調査を開始した。

2　発掘調査の経過

田塚山遺跡群における本発掘調査は、平成６年９月12日から器材搬入等の準備および草刈りに入り、同年11月30日における測量の終了・器材撤収まで、延べ52日間にわたって実施した。この期間中、発掘作業補助員（作業員）の参加は、９月19日の発掘作業初日から空中写真撮影を実施した11月11日まで延べ32日間におよび、その延べ人数はおよそ1,100人余となった。発掘調査した面積は、Ａ～Ｅまでの５地区の合計で9,961㎡であった。

作業手順　発掘調査の進め方については、全域が地形によりＡ～Ｅまでの５地区に分けられることから、地区別に対処していくこととした。その順位は、事業者・工事関係者から、Ｅ地区→Ｄ地区→Ｃ地区→Ｂ地区→Ａ地区の順序で行ってほしいとの要望があったことから、でき得る限り要望にそえるよう配慮することとした。発掘作業補助員は、柏崎市シルバー人材センターの会員と地元女性有志で構成される45名ほどであり、全体を７班に編成し、調査員・調査補助員を３班にわけ、３地区を並行して調査することとした。表土剝ぎは、Ｃ地区とＤ地区がすでに昨年度中に終了していることから、Ｅ地区から着手し、次いでＡ地区→Ｂ地区の順で掘削していくこととした。遺構確認は、すでに表土が除去されているＤ地区の遺構確認を行い、引き続きＣ地区へ移行することとした。全体の大まかな流れとしては、第１班はＥ地区からＣ・Ｄ地区を仕上げてＢ地区へ、第２班はＤ地区からＣ地区を経てＢ地区へ、第３班はＡ地区からＢ地区へと、本遺跡群で最大の面積を持ち、表土剝ぎに時間を要するＢ地区へ向かって調査を進めていくこととしたものである。これは、３つの班の連携が保てる位置関係をとる必要があったためである。

調査準備　休憩施設等は、施行責任者でもある㈱植木組の協力を得て、すでに９月10日頃までにセッティングを完了していたことから、９月12日を現地作業の初日として、器材の搬入と水準点の移動等を行い、調査準備に着手した。13日は、調査対象区域の全域を網羅できるように各地区に複数の仮ＢＭを設定し、14日もこの作業を継続するとともに、表土剝ぎのため、重機の段取りとオペレーターとの打ち合わせを行う。15日は敬老の日で作業は休み、16日には背丈を超える夏草の除去とともに、休憩施設への進入路の造成を行った。

９月19日、作業員さん43名が田塚山の発掘現場に集合。本日が本格的な調査の初日となる。造成事業の主体者である高頭不動産㈱の担当者、施行責任者である㈱植木組の担当者、そして遺跡の調査担当部局である市教委社会教育課長・同補佐とともに、仕事始めのあいさつ及び安全等の諸注意事項の諸連絡等を行い、午前９時30分、発掘作業を開始した。

それでは、地区別に発掘調査の経過について、その概要を以下に述べたい。

Ｅ 地 区　９月19日、表土剝ぎに着手。ある程度表土剝ぎが進み、重機から安全を確保できる距離が取

れた段階で、遺構確認作業に入る。表土剝ぎは、22日に終了した。遺構確認作業は、柱穴と考えられるピットが多数検出されたことから、住居跡の復元を試みた。しかし、ピットが多く復元は難航する。遺構確認作業も26日には終えることができたため、遺構分布図の作成に着手した。この作業は10月３日まで要したが、９月30日に台風が襲来するとのことで、29日に遺構検出状況の写真撮影を行った。遺構の発掘作業は、10月３日から開始した。４日、ＳＫｐ－92から玦状耳飾りの未成品が出土した。遺構発掘は、半截や土層断面の写真撮影・図化を行いつつ、完掘作業を15日までに終了させることができた。

Ｄ地区　９月19日、すでに表土が除去されていたことから、まず木根処理に入り、この作業も20日には終了した。遺構確認作業は、20日から着手、22日までには終了し、確認状況の写真を撮影する。遺構の発掘は、28日から着手、10月３日は、最近まで使用されていた旧道の尾根道跡の発掘を行い、同時に縄文時代と考えられるトラップピットを調査した。５日に土層断面図を作成した。その後しばらく、調査の主体をＣ地区に移行したため、調査を中断していたが、10月17日に遺構の発掘作業を再開、19日に完掘し、完掘の全体写真の撮影を行った。

Ｃ地区　本地区もすでに表土剝ぎが終了していたため、木根処理作業から着手した。この作業は、９月20日から22日までの３日間でほぼ終了、22日の午後から遺構確認作業に入る。Ｃ地区は、本遺跡群ではＢ地区に次ぐ面積があり、ジョレンがけ作業だけでも時間を要した。確認された遺構の中には、Ｄ地区から引き続くトラップピットや、調査区東端では古代の所産である性格不明の遺構などが検出された。この確認作業も、10月６日には終了し、７日に遺構検出状況の全体写真撮影を行うことができた。遺構の発掘作業は、７日から半截に入ったが、遺構分布図の作成もこれと並行して行った。分布図は、13日に終了、遺構の発掘作業も10月27日までには完了し、建物跡の復元を試みるなどの検討を行い、翌28日に全体の完掘写真を撮影し、発掘作業を終了した。

Ａ地区　本地区は、南側の墓地と東側斜面下に住宅地が控え、発掘された土砂は西側の斜面へ排土しなければならないなどの制約があった。このため、９月19日、調査区の設定を行い、表土剝ぎの手順や排土等について検討した。発掘作業は、Ｅ地区の表土剝ぎが終了した翌週、９月26日から着手した。26日、重機による表土剝ぎと並行して木根処理と遺構確認作業も合わせて実施した。表土剝ぎ作業は、10月３日まで行い終了したが、９月28日～30日は台風とそのための対策を講ずる必要があって、あまりはかどらなかった。木根処理及び遺構確認作業は、10月４日までに終了、この日グリッド杭の杭打ちを行うとともに遺構検出状況の写真撮影のための全体清掃を試みたが、夕方時間切れで撮影できず、次の日は雨天でＡ地区での作業は中止、結局写真撮影は６日となった。６日は、遺構分布図の作成も終了させることができた。遺構の発掘作業は、９月28日・29日の両日、覆土が柔らかく、平面形が不整形のものを発掘し、風倒木痕もしくは木根痕について調査していたが、遺構発掘が本格化したのは10月７日に至ってからである。７日は、ＳＤ－47溝のほか小ピットを発掘し、12日にはＳＤ－38大溝の発掘に着手した。ＳＤ－38については、13日、14日も継続したが、尾根部分を直線で切断しているにもかかわらず、１ｍほど下った斜面からは「く」の字状に曲がり、尾根先端部分を囲むように設定されていることが判明した。大溝の断面形は、Ｖ字形であり、底面付近から弥生土器小片が出土したことから、弥生時代の環濠の可能性が考えられた。このため、当初調査区外としていた西側斜面についても調査対象範囲として拡張せざるを得なくなり、急きょ14日午後から重機による表土剝ぎを開始した。その結果、17日までには尾根先端部を囲む環濠ではなく、尾根の首部分を「〔」状に断ち切るものであることが判明して解決した。遺構の発掘作業は、これらの経緯を経つつ、18日に完掘、全体清掃を行い、19日に全体の完掘写真を撮影して発掘作業を終了した。

B 地 区　10月３日、Ａ地区での表土剝ぎ作業が終わりに近づいたため、夏の間繁茂した下草の刈り取りと除去作業を行った。表土剝ぎは、４日から着手、６日から木根処理と遺構確認作業にも着手することができた。表土剝ぎ作業は、24日に終了、木根処理も26日までに終了した。遺構確認作業も26日には大半が終了したことから遺構分布図の作成にも着手した。Ｂ地区は、そもそも試掘調査で縄文時代後期前葉頃の特異な文様が施された完形土器が出土したところで、縄文集落が想定されていた。しかし、表土剝ぎと遺構確認が進むにつれ、この想定とは大きく異なっていることが判明した。まず、10月７日、中世前期の墳丘墓を区画する溝が検出され、次いで13日は珠洲のほか13世紀頃と考えられる中世土師器皿が出土した。そして、19日には、総柱建物跡の疑いが濃い遺構群（柱穴群）が検出された。そして、11月２日、ついに大形柱穴の配列が寺院本堂の間取りと同じであること、正面に向かって右側の建物跡は、今でいう庫裡のような施設と判断されるに至った。寺院関連遺構の確認作業は、11月５日まで続けられたが、これ以外は10月28日までに遺構確認・分布図・一部拡張作業などがほぼ終了した。遺構の発掘作業は、土壙墓については11月８日に土壌サンプリングを行うなどしつつ、寺院関連遺構を含め11月10日までに終了した。

空中写真撮影　11月に入り、Ｂ地区の発掘作業終了の目途が立ったことから、直ちに空中写真撮影の段取りに入った。撮影日時は、11月11日とした。まず、11月２日から、重機による排土場や調査区域周辺の整地作業を開始した。９日、発掘作業が終了したＡ地区・Ｄ地区・Ｅ地区の３地区から全体清掃を開始、翌日は、曇り時々雨と、天気が崩れてしまい明日の本番が心配されたが、とにかく５地区全域の清掃作業を行った。11日、晴天。午前中、最後の全体清掃。12時10分、良く晴れ上がった初冬の青空に、大型カメラを積んだセスナ機が舞う。午後１時、撮影無事終了。休憩施設の後片付けを行い、２カ月近くに及ぶ発掘調査を支えた発掘作業補助員と解散式を行い、発掘作業を完了した。

平面図作成・地形測量　空中写真撮影が終了した11月11日午後から本格的に着手した。あまり天候にも恵まれず、冬型の季節風が吹き荒れる中とにかく作業を続けた。ようやく目途が立った11月末、器材等の撤収作業と並行して測量を続け、11月30日に至ってようやく全てを完了した。

発掘調査現地説明会　田塚山遺跡群の発掘調査は、当初縄文集落が展開した遺跡群と想定していた。しかし、調査した結果、縄文時代前期後半から中期前葉、そして後期前葉の遺構・遺物が検出されたが、集落形成は概して小規模であった。しかし、玦状耳飾りの未成品や形状の特異な土器の出土など、新たな知見を得ることができた。そして、まったく予期していなかった弥生時代の防御を強く意識した遺構――大溝の検出もあった。そして、最大の成果は、鎌倉時代と考えられる仏堂の発見であり、平成６年11月16日付けの新聞で報道されるに及んだ。遺跡を知るには、写真や調査報告書だけでは限界がある。遺物は、調査後でも見れる。しかし、発見された遺構は、その現場で見るに限る。今回、この成果を広く伝えるため、事業者とも協議しつつ、現地説明会を開催することとした。平成６年11月23日（勤労感謝の日）、この日は前日から雨天で、当日も小雨であった。しかし、250名ほどの人たちが現場もぬかるむ最悪のコンディションの中、現地説明会に参集いただいた。「子供の時からいつもあそんできたこの裏山に、これほどのものがあるとは知らなかった。」とは、見学者の弁である。

整理・報告書作成作業　田塚山遺跡群における発掘調査事業は、当初より現場作業を優先して対処することとしていたため、２カ年事業として計画した。その初年度の平成６年度は、現場作業を中心に実施することとし、出土遺物や調査図面などの本格的な整理作業や調査報告書作成作業等は、翌平成７年度に実施した。ただし、報告書作成作業が本格化するのは平成８年の年明けからとなった。

II　田塚山遺跡群と環境

1　地理的環境

柏崎平野概観　新潟県の中央西部に位置する柏崎平野は、鵜川と鯖石川及びその支流河川により形成された臨海沖積平野である。平野部は、米山・黒姫山・八石山を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれ、北西部は日本海に面している。沿岸には荒浜砂丘があり、その後背地は湿地性の低地となっており、これらを取り巻く丘陵縁辺には、中・高位段丘が分布する。この柏崎地域の地形は、鵜川・鯖石川によって東部・中央部・西部の3地域に分けられる。東部は、八石山を頂点とした向斜軸に沿った丘陵地帯、西部は米山を主体とした山地で、田塚山遺跡群の位置する平野中央部は、鯖石川の蛇行により形成された扇状地である。

平野中央部の地形と田塚山遺跡群　田塚山遺跡群は、柏崎平野の中央部に所在する。田塚山は、上面を平坦とする中位段丘であり、南北約350m、東西500mに及ぶ、中央部では最も大きな独立丘である。田塚山の周囲には、田尻山や小児石遺跡の存在した丘など、いくつかの独立丘が比較的多く存在する。その分布は、田塚山－田尻山を経て、上田尻で黒姫山を頂点とした南部丘陵に接続しており、このラインに尾根が存在したことが考えられる。それが、鯖石川の沖積・浸食作用により断続したと考えられよう。このように、この付近一帯にもっとも大きな影響力を持つ鯖石川は、この平野部で大きく蛇行して扇状地状の地形を形成する。そのため、沖積地の地形は、鯖石川の蛇行によって形成された自然堤防が複雑に分布している。このため、近世までに成立した集落は、そのほとんどが自然堤防上もしくは丘陵の際を選地し、旧河道や自然堤防の後背地が水田等の耕地に、また現河道付近は氾濫原としての川原を為している。

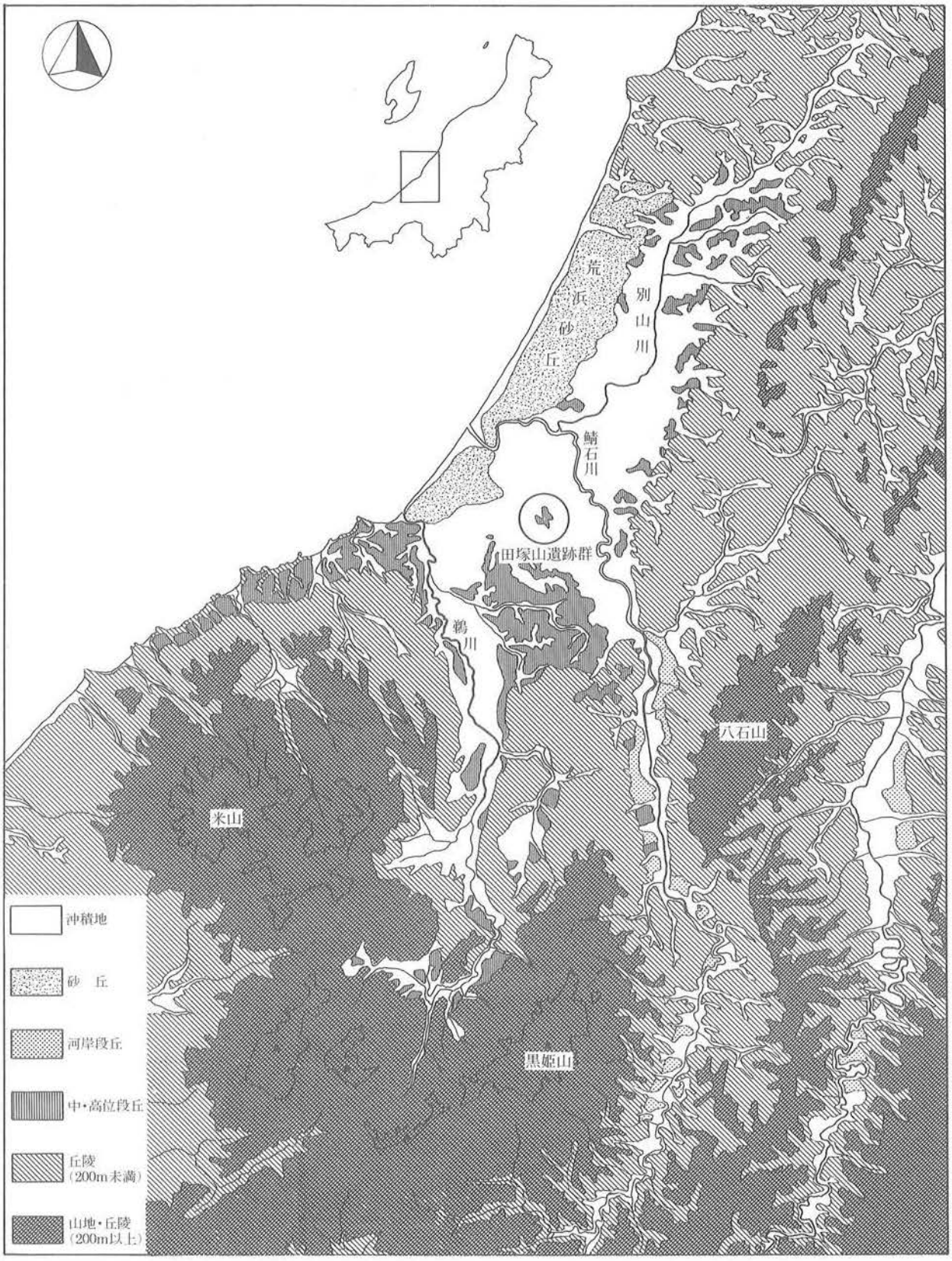
田塚山遺跡群の周囲の上田尻・下田尻および田塚の集落は、鯖石川によって形成された古い自然堤防上に立地しており、上田尻と藤井の間には鯖石川の旧河道が考えられる。このことは、田塚山遺跡群・小児石遺跡のある丘陵が、鯖石川の氾濫原や川原に近接していることになり、中世仏堂や墓地を考える上で、興味深い立地と言える。また、後述するが、この周辺の安田・平井地区にも、寺院と思われる小字名が氾濫原や川原に近接している。このように、本地域の歴史は、とくに鯖石川と大きくかかわっている。後述する不退寺略縁起には、田尻付近が港であったとの記述があり、鯖石川の流路の変遷の解明がこの地区の景観復元の重要な課題であろう。

2　歴史的環境

田塚山遺跡群では、縄文時代～近代の遺構・遺物が確認されている。ここでは、主に縄文時代・弥生時代後期・古代・中世の周辺の遺跡を述べるとともに、特に中世に主眼をおいて歴史的環境をまとめたい。

a　縄文時代

本遺跡群では、縄文時代前期～後期に属する遺構や遺物が検出されている。柏崎市域の当該期の遺跡は、主に平野北東部の海岸地域、鵜川下流の段丘上に分布しており、近在の縄文時代の遺跡としては、小児石遺跡（11）で陥し穴2基と性格不明のピット1基が検出されている［柏崎市教委1991ｂ］。北の別山川流域には西岩野遺跡（1）で中期後半～後期初頭の遺物が検出され［柏崎市教委1987］、岩野遺跡（2）では中期後半の遺構・遺物が出土している［柏崎市教委1980］。与三遺跡（6）では、中期後葉・後期初頭の遺物が発見されている。南の丘陵上には縄文時代後期前葉を主体とする集落跡である十三本塚北遺跡（16）、縄文時代中期を主体とする十三仏塚遺跡（17）が存在する。さらに南西には縄文時代前期後半を主体とする集落跡、大宮遺跡（18）があり、藤



第１図　柏崎平野地形分類図（１：150,000）

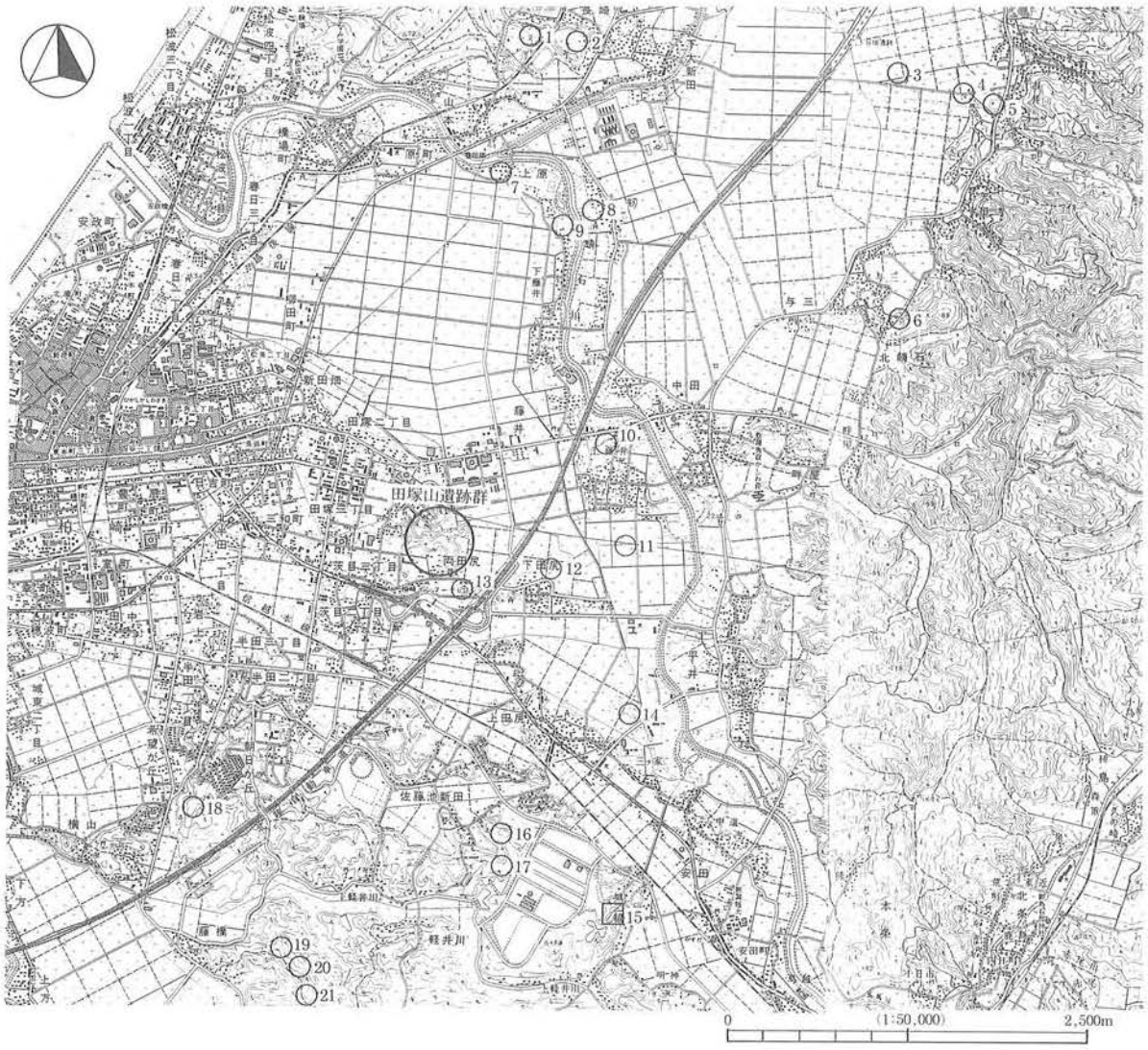
橋東遺跡群内には、縄文時代中期初頭～前葉の京ケ峰遺跡（19）と呑作Ａ遺跡（21）、縄文時代後期中葉の呑作Ｄ遺跡（20）が存在する［柏崎市教委1995］。京ケ峰遺跡と呑作Ａ遺跡では、縄文時代中期初頭～前葉以前に機能していたと考えられる陥し穴が検出されているが、本遺跡群で検出されたものとは異なり、上面が楕円形、底面が隅丸方形で、底面中央には小穴が穿たれている。

b　弥生時代

本遺跡群では、Ａ地区において最下層から弥生時代後期終末期の土器片が出土した大溝が確認されている。後期の遺跡は、北東の別山川流域に多く分布している。発掘調査によって遺構・遺物等が確認された遺跡は、西岩野遺跡（１）［柏崎市教委1987］、萱場遺跡（３）、戸口遺跡（４）［柏崎市教委1990ｃ］がある。西岩野遺跡は台地上に営まれるが、萱場遺跡と戸口遺跡は沖積地に存在する。

c　古代

現在の柏崎市の大半は、奈良時代には古志郡に属していたが、９世紀初頭に三嶋郡として分置独立したとされている［米沢1980］。三嶋郡域に所在する郷としては、『倭名抄』に見える「三嶋」「高家」「多岐」の三郷、『延喜式』にある北陸道の駅の中に三嶋駅・多太駅という駅順があることから、ある程度の郷域が伺える。もとより具体的根拠には乏しく、断定には無理があるが、地理的環境等からその郷域を推定すると、鵜川流域：三嶋郷、鯖石川中流域・長鳥川流域：高家郷、鯖石川下流域・別山川流域：多岐郷であった可能性が高い。



第２図　田塚山遺跡群の位置と周辺の遺跡

田塚山遺跡群では、C地区において9世紀後半～10世紀に属すると思われる性格不明の遺構および焼土を伴う土坑などが確認されている。この時期、周辺では不退寺遺跡（12）から古代の須恵器・土師器が確認されているのみで、さらに北の別山川流域に、8世紀後半に成立し10世紀まで存続したとされる戸口遺跡（3）、9世紀後半～10世紀を主体とする吉井水上II遺跡（5）が確認されている。当該期の集落は、ほとんどが沖積地に形成されており、この遺構が台地上に選地されたことは、その性格とともに、今後の検討課題である。

d　中世

田塚山遺跡群では、B地区で仏堂跡・墓地が確認され、中世土師器・珠洲焼・刀子等が出土している。

本遺跡の周辺の遺跡は、鯖石川の自然堤防上に存在する。剱地区の剱下川原遺跡（8）・境川原遺跡（9）と、上原地区の上原遺跡（7）から所属時期は不明であるが珠洲焼が表採されている。藤井地区では、前田遺跡（11）と中田久保川原遺跡（10）が周知されている。前田遺跡からは13～14世紀に属する刈羽・三島型の中世土師器と、16世紀の京都系の中世土師器が採取されており、中田久保川原遺跡からは、珠洲焼の壺が出土している［柏崎市史編さん委1987a］。上田尻地区では、大新田遺跡（14）、下田尻には、古代・中世の遺物が表採されている不退寺遺跡（12）がある。本遺跡群の南東の小丘上には、13世紀から16世紀前半にわたって存続した墓地・小児石遺跡（13）［前掲1991b］が存在する。

鵜川荘と田塚山遺跡群　本地域には、「比角荘」「佐橋荘」「宇河（鵜河）荘」の3つの荘園が存在していたことが判明している。これらは11世紀末から12世紀中葉頃には寄進地系荘園として成立していたものと考えられている［荻野1986］。しかし、その荘域は明確ではなく、文書等にあらわれる地名から推測できるにすぎない。それらから推測すると、比角荘は現在残る地名からおおよそ現市街地に相当し、佐橋荘は鯖石川中流域と長鳥川流域、鵜川荘はおよそ鵜川流域一帯と鯖石川下流域であると考えられる。これらのことから、本遺跡群は鵜川荘に所属していたと思われる。柏崎平野北東部の別山川流域についてもあまり明確ではないが、中世前期には古代の倭名抄郷である多岐郷が再編された「苅羽郷」として国衙の支配下にあり、中世後期に「原田保」等の5保もしくは海岸部の2保を含む7保が成立したのではないかと考えられている［品田1990］。

福寿山不退寺　不退寺遺跡では、古代の須恵器・土師器、中世では珠洲焼・青磁・古銭が表採されている。現在、ここには観音堂がある。遺跡名は、この観音堂の前身であるといわれる福寿山不退寺による。田塚山遺跡群の仏堂とのかかわりは現在のところ明確ではないが、本遺跡群の近隣にあり、中世にその存在を確認できる寺院として、以下、中世の不退寺を考えてみたい。

不退寺には縁起が残っており、『田尻村のはなし』［酒井1975］と『田尻村誌』［酒井1975所収］に、その略縁起が掲載されている。それによれば、あるとき、十一面観世音菩薩と得大勢至菩薩が村長の夢枕に立ち、「自分たちは軽井川から来たが、この地に堂を建てて安置するように」と告げた。この二仏は行基の作であるという。そこで二仏をおまつりしたところ、霊験あらたかであり、七堂伽藍の繁栄となった。弘長年間（1261～1264）には最明寺時頼公が諸国巡礼のおり、越後横通33カ所のうち25番に定めたという。その後、宝物や寺伝は焼失したが、伽藍跡の大石ですらたいへんありがたい功徳があった、というのがその大略である。

『田尻村誌』には、若干異なる不退寺縁起が掲載されている。延暦年中（782～805）に、高塩喜三郎という里長が霊夢を見て二仏を安置し、天長年中（824～833）に七堂伽藍を建立した。正嘉年中（1257～1259）には北条時頼が諸国巡礼の折に道場を建立し越後横道33番の内25番に定免したが、文明年間（1469～1487）の戦乱で焼失した、という。また、この縁起には、当時この堂は港であり、往来繁盛の巷であった、と書かれている。もとより縁起であるが、この不退寺は、本尊名をそのまま堂名としておらず、寺号を持つところから、寺として存在していたことが推測される。しかし、誰の発願によって建立され、どのような性格を持つ寺であったのかなど、詳細は不明である。その後、承応三（1654）年の『下田尻村新田検地帳』には、畑となっていた字「普躰寺」が新たに水田となっている。縁起にあるように、文明年間の火災によるものかどうかは不明ながら、16世紀もしくは

第３図　刈羽郡域の荘・保と主要城郭［国土地理院柏崎・岡野町１：50,000使用］

17世紀の早い段階に、廃れていたと考えられる。

不退寺と安田毛利氏　安田地区は、田尻地区の南側に存在する。中世には、北条毛利氏から分かれた安田毛利氏が領していた。大字安田字北谷・南谷にある安田城跡（13）はこの安田毛利氏の要害である。

この安田毛利氏と不退寺の間で、15世紀に山をめぐって争論があったことが、次の文書から見える。それは、「（文明十？）六月十七日　上杉定永書状」［柏崎市史編さん委1987ｂ、106］、「文明十（1478）年十二月晦日　上杉家房定老臣連署奉書」［同、108］、「六月十九日　長尾能景書状」[1]［同、126］の３通である。不退寺とのかかわりは不明ながら、これ以前にも、享徳元（1452）年～応仁二（1468）年に安田道元が所領内の山木を盗むものがいる、と訴えている［同、97］。

「文明十（1478）年十二月晦日　上杉家房定老臣連署奉書」では、「問題の山は、長年重広が知行してきたのを、不退寺はずっと異議を申し立てていなかったが、いまになって抗議してきたのは『越度之至』である。これ以後は毛利越中守が全知行するように」と言っている。このように、この争論は、不退寺側が起こしたようである。争論の場所は、「安田氏の要害の際にある山」であり、要害＝安田城とすると、近くの山というのは軽井川地区になる。前項で述べたように、不退寺縁起では、二仏は軽井川から来たことになっており、安置する土地を軽井川の人間と相談した、という記載があり、不退寺にとって、軽井川を特別視する理由があることをうかがわせる。また、軽井川には、建久八（1197）年の銘を持つ経筒を出土した上軽井川経塚や、十三仏塚遺跡の上に造営された十三本塚の塚群も存在する。塚群の築造年代は不明ながら、その土地は聖地であったとの伝承もある。もとより不退寺との関連性は不明である。この争論の結果は、不退寺が負けている。

この後、『下田尻村新田検地帳』に現れるまでの150年間、不退寺の様相は不明である。しかし、安田毛利氏を相手に争論を起こし、誇張はあるにせよ「七堂伽藍の大地［寺か］」と書かれた寺が中世でその勢力を縮小していくことは、中世における当地域の支配の問題及び後述する小字名からの地域の特色を考える上で重要である。

田塚山遺跡群周辺の小字名　小児石遺跡周辺の小字については、『小児石』［柏崎市教委1991ｂ］に詳しい。それによれば、田尻地区には、小児石遺跡・田塚山遺跡群周辺の宗教的な小字と、そのまわりの「□□屋敷」という対称的な小字の分布が見られる。このほかにも、田尻地区およびその近辺には、鯖石川の川原や氾濫原に、寺社関係の小字が見られる。下田尻の「法恩寺」、安田の「天王寺」、平井の「十王堂向」「小寺川原」「八幡」がその例である。このように宗教的な地名が集中する地域はここ以外になく、特殊な場の存在が考えられる。荘の境付近であることを考え合わせると非常に興味深い事例であると言えよう。

本遺跡群の周辺に確実に存在した中世村落は、現在のところ不明である。しかし、『下田尻村新田検地帳』と『白河風土記』などに見える近世村落は、若干の移動はあるものの、基本的に現在の集落の位置と変わりがない。このような状況から、近世村落の存在した場所が、中世においても居住可能な地域であったことが推測できよう。これら集落の存続については、田塚山遺跡群に存在した仏堂の存続と不退寺の伸長にかかわるものであるが、中世を通じて存続する小児石遺跡の中世墓地が、基本的に地域的なムラの墓地と考えられており、時代的に古代や近世と連続しないことを考えると、この周辺における中世の墓地と集落の関係、寺院と墓地との関係という大きな検討課題が出てくるが、今後、資料の増加を待って、再検討したい。

註

1）『新潟県史』［新潟県1987］では、能景の守護代在職期間から、文明十四（1482）年～永正三（1506）年のものとしている。しかし、八条殿＝上杉持房は延徳三（1491）年に没しているため、文明十四（1482）年～延徳三（1491）年の間のものと考えられる。

Ⅲ　田塚山遺跡群の概要

1　田塚山遺跡群概観

1）　遺跡群の現状と調査区

「田塚山」は、柏崎平野の中央部では最も大きな独立丘で、南北約350m、東西は500mにおよんでいる。しかし、その形状はいくつかの沢によって刻まれ、細長い尾根状を呈した台地となっている。上面は、標高20mでほぼ平坦、地形的には中位段丘に相当し、沖積地との比高差はおおよそ10m余りである。現状は、すべて山林で、一部に近在集落の墓地が分布していた。

この田塚山に広がる遺跡群は、遺跡台帳上は「田塚山遺跡」の１遺跡である。しかし、前述したとおり、浸食によって平坦面の連続が細くなったりあるいは分断され、平坦部の形状も幾かのまとまりに区分することができる。このような現地の地形から、調査実施の便宜的な意味もあって、Ａ～Ｅ地区までの５地区に区分することとした。発掘調査を行った結果でも、各地区ごとに時代や遺構等の内容等に差異があり、各々にまとまりが看取できた。したがって、登録上は１遺跡であるが、しかしその実態は５遺跡が連続的に合体している状況と見ることも可能なため、『田塚山遺跡群』として報告することとしたものである。

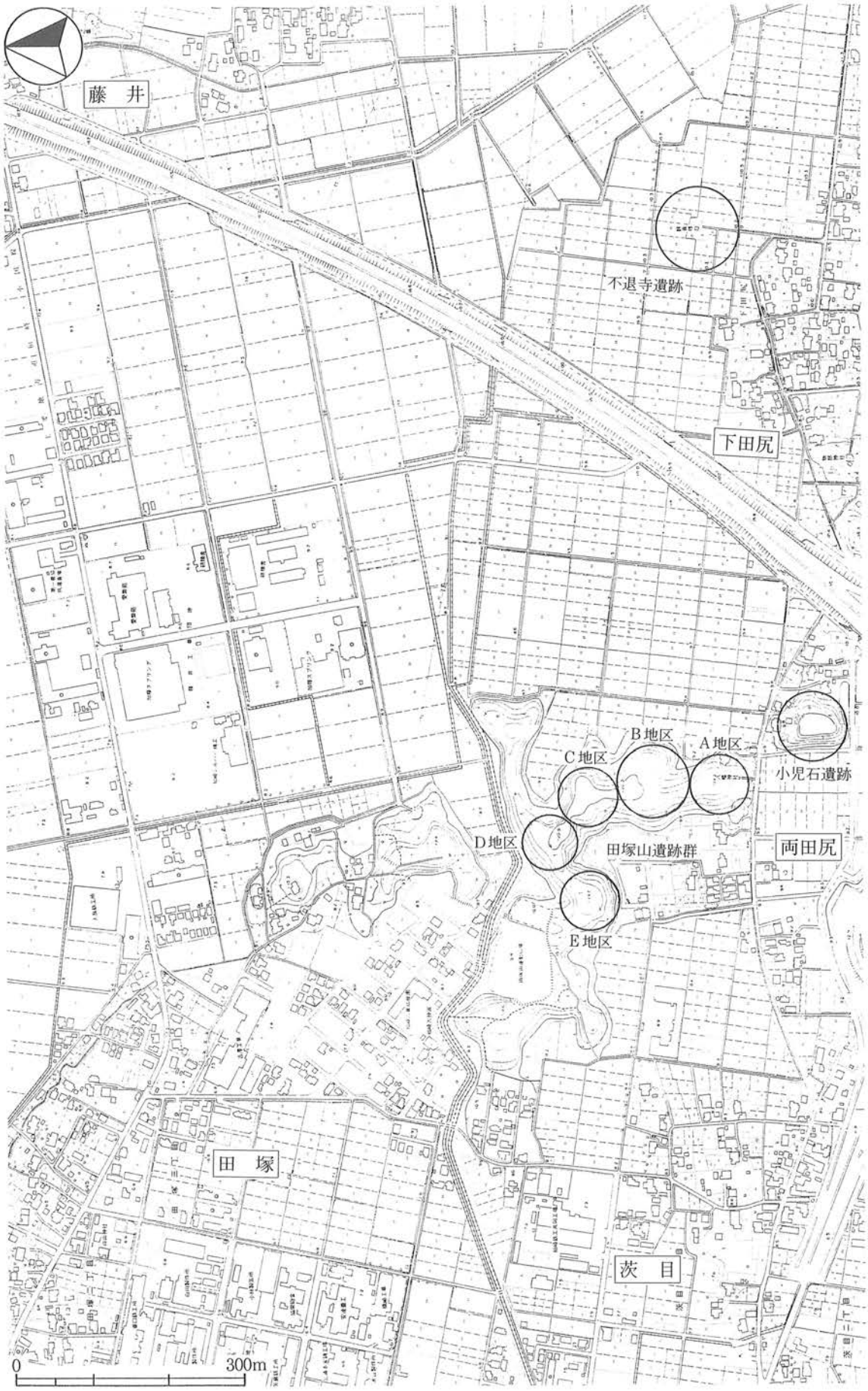
なお、本遺跡群については、今回開発の対象となった区域に限って田塚山遺跡群として報告するが、Ｅ地区の西側には類似した台地が連続している。また後述するように、小さな丘でしかなかった小児石からも縄文時代や、中世の墓地遺跡が発見されているように、沖積地に島状に浮かぶ丘には、かなりの確率で遺跡が営まれていた可能性が高い。

2）　遺跡群概観

本遺跡群において確認された遺跡の時代は、縄文時代、弥生時代、平安時代、鎌倉時代の大きく４時代にわたっている。縄文時代は、Ｅ地区の前期後半期の小規模な集落跡のほか、Ｄ・Ｃ・Ｂの各地区まで広い範囲にわたっていた。遺構としては、住居跡と考えられる柱穴群や土坑が検出されているが、時期の明確でないものが多い。しかし、Ｂ地区から出土した特異な形態の土器などは後期前葉期であり、このほかにも中期前葉の遺構・遺物が若干検出されていることから、前期後半期・中期前葉期・後期前葉期に小規模な集落が断続的に営まれたものと推定できる。また、住居等のほかに、Ｔピットと呼ばれる溝状の陥し穴も検出されている。この陥し穴は、海岸線から約３㎞と、県内の分布域では、最も海岸に近い遺跡例となるのではないだろうか。

弥生時代の遺構は、Ａ地区とした区域から検出された。このＡ地区は、田塚山では最も南端に位置し、地形的には尾根の先端部に相当する。本地区から発見された遺構は、断面Ｖ字形の大溝で、規模は上面幅およそ２ｍ、深さも１～２ｍを測る大きなものであった。この大溝は、田塚山の丘陵本体から尾根先端部を断ち切るようにして設定されており、防御を意図していたことが窺える。溝最下層からは、弥生後期終末期頃と推定される土器片が少量出土している。

平安時代については、焼土を伴う遺構などがＣ地区から検出され、須恵器や土師器などが出土している。しかし、性格は明らかにできていない。当該期の集落は、ほとんどが沖積地に形成されるが、本遺跡例の



第4図　田塚山遺跡群と周辺の地形

ような台地上の遺跡は少ない。

鎌倉時代の遺構は、寺院関連遺構とされるもので、本堂・庫裡、そして墳墓で構成されている。中世の仏堂跡は、平坦面の最も広いB地区に造営されていた。その構造は、掘立柱による建造物であり、本堂と、これと渡り廊下で結ばれる庫裡と考えられる付属の建物で構成されている。本堂は、内陣と外陣を中心に、その外側に縁側がめぐり、柱穴が三重に取り巻く構造をなしている。また、本堂縁側の北東隅は、隅切りによってカットされていたが、北東方向の鬼門を避けた可能性が考えられよう。また、内陣は、外陣の中心からやや西側に寄っていることが、柱穴の配置から窺える。したがって、本堂の正面は、東を向いて建てられていたことが明白であり、参拝者は西方に向かってお参りしていたことが判る。庫裡は、2間×7間の建物で、北向きに半間の庇か濡縁が付いている。寺院の西側裏手には、墳丘墓の溝区画が検出され、これがさらに改修・拡張がなされた墓地が存在する。この位置関係は、本堂を正面から拝むことが、そのままお墓を拝むこととなるよう意図された配置と考えられる。また、庫裡の北側にも溝区画があり、これも墓地もしくは聖域視された空間が設定されていた可能性がある。

なお、中世の遺構群は、仏堂のあったB地区以外ではまったく確認されていない。また、A地区の更に南側の尾根先端部には、塚状の盛土遺構が2基ほど確認されている。現在のところ田塚山の塚群と仮称しているが、中世の墳丘墓あるいはA地区が弥生時代後期を主体としていることから、方形周溝墓（墳丘墓）などの可能性がある。

3） 基本層序

田塚山遺跡群における表土層は、概して薄く、遺物包含層の発達は極めて未熟であった。また、各地区によって表土の土色に差異があり、全体を同じ基準で見ることはできない。ここでは、大まかな状況について簡単に概要を述べるに留めたい。

各地区の状況を概括的に述べるならば、第Ⅰ層は現表土層で、腐葉土の交じる褐色土である。層厚は5～10cmほどである。第Ⅱ層は、いわゆる遺物包含層であるが、B地区とE地区では暗褐色土、C地区とD地区では明褐色土で明るい色調を呈し、A地区では墓地の造成や細い尾根筋を旧道が通るなど攪乱が著しいこともあって、濁褐色を呈していた。第Ⅲ層の地山漸移層はほとんど発達せず、第Ⅱ層の直下には第Ⅳ層の地山層が露呈する。なお、第Ⅳ層地山層は、基本的には中位段丘を構成する第四紀更新世の安田層であり、粘土層・シルト層・砂層の互層をなしている。本遺跡群内では、A地区の第Ⅳ層下部に砂層が検出された以外はすべて粘土層であった。

2 調査区とグリッドの設定

田塚山遺跡群における調査用のグリッドについては、調査対象面積が10,000㎡にもおよぶことから、GPSを使用し、国家座標軸に沿って設定することとした。グリッドは、大グリッドを10m四方とし、小グリッドを2m四方として大グリッドを25分割した。呼称については、Y座標軸については南からA・B・C…のアルファベットを使用し、X座標軸については西側から1・2・3…の算用数字を使用して呼称することとした。グリッド名称と座標軸との関係については、グリッドのFラインがX軸＝151000、18ラインがY軸＝8400である。

Ⅳ　田塚山Ａ地区

1　Ａ地区の概要と調査区

1）　Ａ地区の概要

Ａ地区は、独立丘陵である田塚山でも南に伸びる尾根部に占地し、本遺跡群の中では最も南側に位置している。台地の平坦部は、北側に位置するＢ地区と、やや細くなった尾根筋により連結するが、南端部ではややまとまった広がりをみせる。このＡ地区の南側には、いくつかの小丘が点々と連なっているが、本地区に南接する小丘が小児石の丘である。

Ａ地区の現状は、大半が山林で杉や雑木が繁茂していた。ただし、遺跡本体をなすと考えられる平坦地の中央部は、現代に造成された墓地が営まれている。また、当該尾根の先端部には、斜面を削り出したテラス上に八幡神社が鎮座し、隣接して両田尻集落の集会場がある。

ところで、この墓地の南西側、八幡神社の裏山にあたる尾根筋の縁には、以前に行った分布調査によって塚状の高まり２カ所が確認され、「田塚山の塚群」と仮称されている［柏崎市教委1991ｂ］。この「塚群」の性格については、塚と墳墓の二者が可能性として想定できる。尾根の先端付近に位置するという立地そのものは、列状配列の塚群と極めて類似した存在形態である。しかし、隣接した小児石の丘からは、中世全般にわたって営まれた墓地遺跡が発見され、塚と極めて近似した形態をなす墳丘墓も調査されている［前掲1991ｂ］。このため、未調査である現状では、にわかに断定することは難しいとせざるを得ないであろう。実は、(仮)田塚山の塚群と小児石遺跡の存在が、当該地の試掘調査に至る理由の一つであり、田塚山遺跡群発見の端緒ともいえる遺跡であった。このような経緯から、小児石遺跡に最も近いＡ地区は、当初より中世墓地等が想定されていた。平成５年に実施された試掘調査でも、尾根筋の平坦部とともに斜面部も調査の対象とされた。しかし、試掘調査によって確認された遺構は、時期不詳の溝などであり、本地区の時代や性格などの把握等は、本発掘調査に委ねられることとなった。

2）　調査区概観

Ａ地区における試掘調査では、尾根状をなす台地の平坦部から遺構等の落ち込みが検出された。この調査結果から想定される遺跡範囲とは、尾根上の平坦部、特に南半のやや広い平坦地が想定でき、斜面部までの広がりはほとんどないものと判断された。この南半部の規模は、南北およそ50m、東西およそ40mほど、標高は約20m、周囲の沖積地との比高差はおよそ11mであった。

Ａ地区は、今回の宅地造成事業区域でも南端に相当している。このため、調査対象とされた区域は、どちらかというとＢ地区と連続する細い尾根部が主体であり、南半部の主要部については北辺をわずかにかすめる程度となった。当初設定した調査区とは、ほぼ上面の平坦部に限定したものであった。しかし、後述するように、尾根を断切る弥生時代の大溝が、南半の主要部を取り囲むように、斜面下方へと延びていることが確認されたことから、斜面下方の大半を表土剝ぎして調査するに至った。このため、最終的な本地区の調査平面積は、およそ1,283㎡となった。

2 遺　　構

1） 遺構の概略と分布

A地区から検出された遺構は、溝とピットで占められ、この他には旧道とされる尾根道の痕跡などがある。時期的には、弥生時代と近世以降が多いように見受けられるが、時期の確定できる遺構は弥生時代後期末の土器を出土したＳＤ－38大溝以外ほとんどなく、縄文時代や中世に属する遺構が含まれている可能性は否定できない。なお、遺構の発掘にあたっては、旧道の痕跡については部分的なトレンチ発掘、風倒木痕については、一部完掘したが、全てを発掘していない。この他には最近のゴミ穴などの攪乱があり、特に注射器や体温計のものと思われる水銀が検出された土壙などは手をつけなかった。

今回の調査対象区域となったA地区内の遺構分布をみると、中央に「く」の字状に構築された大溝を境に、北半部と南半部で大きく様相が異なっていた。北半部の遺構には、旧道の痕跡や溝、そして風倒木痕が多く分布するのに対し、南半部では溝以外にピットが多く検出されている。このような分布の相違は、A地区における遺跡主要部に近い南半部と、A地区とB地区との遺跡間をなす北半部という差異に起因しているものといえよう。特に、北半部の遺構を見ると、中世以前にさかのぼりそうな遺構は、ＳＤ－47溝がその可能性を残すのみで、遺構分布の空白域に近い状況となっている。

南半部の遺構には、ピットが多く検出されているとしたが、実はそのほとんどが時期不詳となっている。ピットの中には、直径や深度から柱穴の可能性の高いものが含まれている。しかし、配列等からは住居跡や建物跡の復元に至っておらず、可能性をとどめるのみである。ただし、ＳＤ－38とした大溝の配置状況は、A地区の遺跡主要部を防御するために構築されていたと見るのが自然である。したがって、大溝の内側には、住居跡等の存在する可能性は極めて高く、今回検出されたピットの一部に柱穴が含まれているものと考えたい。

なお、A地区の遺構配置については、図版２のA地区全体図を参照のこと。

2） 遺 構 各 説

A地区の遺構は、溝とピット・土坑に大別され、これに旧道の痕跡や風倒木痕等が掲げられる。時期の特定できる遺構が少ないことから、本項では遺構の種別にしたがって個別説明を行っていくこととする。ただし、遺構の性格等によっては適宜一括して記述したい。

a 溝　　跡（図版７・９・10・26・27）

検出された溝の実数は、おおよそ11条ほどとなる。これらをその構築要件から区分すると、以下の３類に分類できる。まず第一は、尾根を断ち切るように東西方向に構築されていたもので、ＳＤ－47、ＳＤ－38、ＳＤ－14の３条の溝が掲げられるが、これらをA地区溝跡A類としたい。第二としては、台地の平坦部に築かれていたもので、ピット群とともにあることを特徴とするＳＤ－21、ＳＤ－26、ＳＤ－27の３条とし、これらをA地区溝跡B類としたい。第三の類別としては、尾根の等高線に平行して築かれた溝とし、ＳＤ－51、ＳＤ－18、ＳＤ－17、ＳＤ－39の４条を抽出できる。これら４条については、A地区溝C類としたいが、これらの性格はともに旧道とした道路跡に関わるものである。したがって、本項ではなく、道路跡の項にて概観することとしたい。以下、個別に説明を加えるが、A類については個々に、B類については、一括して述べたい。

ＳＤ－38大溝（図版９・26）　Ｅ－19～20グリッドから検出されたこの大溝は、断面形が略Ｖ字形を呈していることに大きな特徴がある。平面プランの確認段階では、尾根部分を断切るだけの施設と思われていた。しかし、東側斜面への延長が確認され、Ａ地区全体を囲む可能性が生じたことから、当初本発掘調査の対象から除外していた東側斜面部に対しても表土剝ぎを実施し、調査区の拡張を行って全体の把握を試みた。その結果、斜面の途中までで切れていることを確認、尾根部分の高い部分を中心に切断し、Ａ地区本体を内側として防御するよう整えられていたことが判明した。本溝の全体像とは、丘陵の一画を尾根筋部で断ち切り、尾根筋頂部からの標高差６ｍ下方のところまでを防御するように切り込んでいたことになる。なお、本溝の東端部については、端面が明確な面をなしており、計画性が指摘できる。

調査され確認できた延長は約24ｍであるが、西側のＥ－18グリッドへの延長は確実である。平面形態は、調査区内においては「く」の字状を呈している。しかし、おそらく尾根筋で折り返した様な「〔」形を呈するものと考えられることから、総延長はおおよそ38ｍ程度が想定可能である。溝の幅は最大1.70ｍほど、最狭部で1.25ｍ、平均ではおおむね1.52ｍであった。深度は、平均値をとればおおむね1.29ｍで、西端部の最深部では1.79ｍ、尾根部における底部標高の最高点では0.96ｍであった。

断面形は、略Ｖ字形を呈し、底面の幅がほぼ15㎝とかなり狭くなっていた。このため、実際の発掘作業では両足を前後にそろえての不安定な作業となり、この断面形が身動きを拘束する構造を持っていたことが確かめられた。溝の両壁は、基本的には平らな面を呈するが、外側とされる北壁については上方部の角度がやや緩やかとなっており、内側と考えられる南壁との相違が看取できる。土層断面から観察された土砂の流入状況では、台地の平坦部では北側から、東側斜面部では斜面上方からの流入が認められる。このことは、平坦部における大溝北側には内側より高い部分があり、土砂の流入しやすい状態にあったことを示唆している。この点から、大溝北側に沿って土塁状の遺構が築かれていた可能性を指摘しておきたい。

土層断面については、台地部３面、東斜面部では２面を図化した。後者斜面部においては、溝底面を２面確認したが、少なくとも１度の改修がなされたことを示している。この改修溝は、当初段階よりも浅く設定され、掘削されていたことが判る。平坦部では、この改修の痕跡が明瞭ではなかったが、これは覆土の掘削のみで済まされていたことによっている。これは、平坦部の地山が粘土質で締まりがあったのに対し、斜面部では砂層や砂質層と軟質であり、覆土と同様掘削しやすかったことが考えられよう。また、改修段階の溝掘削は、概して荒く、手抜きもしくは緊急時の対応などを考慮する必要がありそうである。

ところで、当該溝を埋めた土砂――覆土は、上層・中層・下層・最下層の大きく４層に区分できる。上層は、本溝を利用した道路跡（旧道）に伴うものである。また、最下層とは、改修前の溝覆土である。中層と下層が、改修溝の覆土となり、上部層と下部層に言い換えることができる。この下部層とは、風化してボソボソとなった地山粒によって充満しており、溝の壁が日焼けによってガサガサとなり、これらが降雨等によって溝内に堆積したものと推察される。また上部層についても、下部層と同じ地山風化土粒が多いが、表土層である褐色土や茶褐色土の含有が多いのが特徴となっている。なお、最下層とした溝底面の土砂は、風化の特徴が見受けられず、粘性を有した地山層本来の性質に近いものであった。なお、本溝内の覆土の状況から、廃棄にあたって埋め戻された形跡はなく、自然堆積による埋没であったと判断した。

本溝内からの出土遺物は、弥生時代後期末頃と推定される土器片が、およそ10点出土している。これらはすべてが細片であり、器形をうかがうことができず、時期等を明確にできない。出土位置は、改修溝の下部層（下層）であった。

ＳＤ－47溝跡（図版８・27）　本溝は、Ｇ－18～19グリッドにおいて尾根筋部を横断する様に設定され

ていた。確認された延長は10.40m、尾根筋部における最深度は0.44mであった。本溝の構造は、中央が一段深くなる2段構成をとっていることに特徴がある。下段をなす中央溝の幅は約1.32mで、上段底面からの深度はおよそ9㎝であった。溝底面の高低差は、西端部が東端部より25㎝高く、西側から東側へ緩く傾斜していた。本溝跡の最大幅は、尾根筋の最頂部にあり、約2.23mであった。覆土は、上層部と下層部に大きく2分できる。上層部は、明褐色・褐色土を主体とし、表土層が流入し自然堆積したものである。下層部は、地山風化土粒が大量に包含されていたもので、埋没過程そのものはＳＤ－38大溝と大きく変わらないものであった。出土遺物は、縄文土器片1点のみで、所属の時期については明らかでない。本溝跡の時期等についても明らかにし得ないが、縄文時代にさかのぼることはないものと思われ、周辺の遺物や遺構分布から勘案すれば弥生時代後期末から中世前期までの間に想定できるのかも知れない。なお、本溝跡の上面を、旧道と呼ぶ道の痕跡が横切っていた。

ＳＤ－14溝跡（図版10・27）　本溝跡は、Ｃ－21グリッド北西コーナーからＣ－20グリッドにかけて検出された。しかし、位置的には調査区域の南端部に相当し、延長およそ4mほどを調査し得たのみである。溝の幅はおおよそ0.7mを測る。深度は、30㎝であった。土層断面を見ると、覆土は大きく2つに大別されるが、これは改修を伴う新旧の溝覆土に相当する。新溝（ＳＤ－14ａ）は、濁った褐色土を覆土とするものである。調査区南壁の土層断面では、新溝上層の土は、溝内へ落ち込んだ表土の土砂そのものであることが確認できる。この新溝の規模は、幅37㎝、深度22㎝を測る小さな溝として復元できる。構築された時期については、極めて新しく、現代の所産である可能性が高い。

これに対する古溝（ＳＤ－14ｂ）は、覆土に風化したような地山粒を大量に含むものであった。このような覆土の特徴は、前述のＳＤ－38大溝やＳＤ－47溝跡と類似していることを指摘できる。しかし、ＳＤ－47溝跡と同様に、遺構に伴う遺物の出土がなく、これら溝跡の関連性について明確にできないことから、本溝跡の時期等も明らかにできない。また、新溝と古溝の関係についても、新溝を古溝の改修とすれば、時期的な隔たりを大きくとることは不可能である。しかし、両者の覆土の相違が大きいことから、一応ここでは、両溝は全く別個のものと考えることとしたい。なお、古溝の規模については、ＳＤ－14として計測した規模におおむね相当するものと考えられる。

Ａ地区溝Ｂ類（図版10・27）　本類に含めた溝跡は、ＳＤ－21・ＳＤ－26・ＳＤ－27の3条の小溝で、Ｄ－19グリッドの南東コーナー付近に集中して検出された。これらの規模は、いずれも幅が20～35㎝と狭く、深度も9～10㎝と共通したものとなっている。ＳＤ－26とＳＤ－27については、連続部分が調査区外にあって確認できないが、覆土の状況や位置から一連の溝である可能性が高い。また、これらとＳＤ－21との関連も、方向性などからかなり高いことが予想できる。このように、3条の小溝が、互いに一連のものと仮定した場合、略Ｓ字状をなすことから、住居跡の壁溝の類とはなり得ない。雰囲気的には、糸魚川市後生山遺跡の1号住居跡の小溝など［糸魚川市教委1986］、玉造に関わる小溝遺構等も想像される。しかし、遺構に伴う遺物がなく、時期も不詳であり、性格等を明らかにすることは現状では不可能である。

ｂ　ピット・土坑（図版10・27）

検出されたピットあるいは土坑の類は、18基である。しかし、埋土を覆土とする一部の土坑に注射器や水銀などが見受けられたため、これらと類似した覆土のもの4基については、調査の対象から除外した。調査したものとしては、土坑2基とピット12基の合計14基となった。これらのピット・土坑群は、ＳＫｐ－16がＣ－20グリッド北西コーナーから検出されている以外は、Ｄ－19グリッド南東部からＤ－20グリッド南西部にかけてに集中する傾向が看取される。当該部分は、今回調査対象となったＡ地区では平坦部中

央部に最も近い箇所であり、A地区遺跡本体がさらに南側にあることを示唆するものといえる。しかし、遺構内から遺物が出土した例は1基もなく、これらからは遺跡の時代などを推定できない。

ピットの規模は、最大のＳＫｐ－16でも直径が40cmに達せず、最少では直径10cmであった。平均的な直径は、25～30cmほどであり、深度をみると最も深いものでＳＫｐ－13の29cm、大半は10～15cmと浅く、柱穴としてしまうには深度が浅いもので占められていた。また、配列についても、住居跡あるいは建物跡として復元することができなかった。ただし、調査区南壁の南西側コーナーを中心に底面を平坦とするやや規模の大きな落ち込みが検出されている。これについては、住居の掘り込みであった可能性があることから、当該ピット群の一部に住居の柱穴が含まれていることは否定できない。

土坑については、穴の中でもピットより相対的に大きいものを意味する。今回の調査ではＳＫ－22とＳＫ－30の2基を検出した。2者は、中心間距離で2.3mほど離れていたが、覆土には木炭片を多量に含むなどの共通性が見られ、特にＳＫ－30の下層からは若干の焼土粒が検出されている。ＳＫ－22は、平面形をほぼ楕円形とし、長軸線はＮ－38°－Ｗを指向するが、長軸方向と南西側に小溝状の張り出しが伴う。本体の規模は、おおよそ52×60cm、小溝を含めた長軸の規模は、1.0mを測る。深度は、17cmであった。ＳＫ－30は、平面形をおおむね楕円形とし、長軸はＮ－33°－Ｅを指向する。規模は、53×65cm、深度は約7cmと浅かった。両者とも出土した遺物はなく、時期及び性格などは明確でない。

c　旧道跡関連遺構（ＳＲ－57・ＳＤ－39・ＳＤ－17・ＳＤ－18）

本項では、旧道の痕跡をなす浅い溝状遺構と、道に沿って掘られたと考えられる溝を一括して述べる。ここで旧道とするＳＲ－57は、Ｄ地区の三叉路から南下する山路であり、かつては両田尻の集落から柏崎の町へ行く道であった。ＳＲ－57のルートは、Ａ地区を南北に縦断し、そのまま尾根先端部を下る。ＳＲ－57の土層断面を見ると、灰色の粘土ブロックが含まれたり、あるいは灰色粘土が薄い互層をなしていたが、これらは路面としてかなり固く締まっていた。ＳＤ－51やＳＤ－17・ＳＤ－18も基本的にはこのルートにあることから、尾根筋を縦断する道に関わるものと考えられる。時期については、遺物がなく明確にできないが、現代まで利用されていたことは確かで、古くは近世後期頃までが考慮する必要がありそうである。これに対し、ＳＤ－39とした箇所は、弥生時代の大溝の痕跡を利用して西側の尾根下へ下りる道との三叉路をなす部分である。溝状を呈した理由は、当該地点で若干の斜面となっていることから、使用によって若干の窪みとなったことが原因と考えられる。覆土には、黒褐色土や明褐色土の堆積が確認でき、この上面を灰色粘土層が覆っていた。これは、この地点から尾根下へ下りる道の利用が少なくなり、尾根を縦断する道の利用へ主体が移ったことを示している。

遺構名	種別	平面形	法量cm	深度cm	備　考	遺構名	種別	平面形	法量cm	深度cm	備　考
ＳＸ－10	根痕	――	――	――		ＳＤ－26	溝	――	25×265	10	
ＳＸ－11	根痕	――	――	――		ＳＤ－27	溝	――	20× 75	9	
ＳＫｐ-12	ピット	円形	20× 22	15		ＳＫｐ-28	ピット	円形	26× 29	14	
ＳＫｐ-13	ピット	円形	23× 25	29		ＳＫｐ-29	ピット	円形	29× 30	10	
ＳＤ－14	溝	――	75×415	30		ＳＫ－30	土坑	楕円形	53× 65	5	
ＳＫｐ-16	ピット	円形	35× 38	10		ＳＫｐ-31	ピット	円形	20× 20	11	
ＳＤ－17	溝	――	25×135	6		ＳＫｐ-32	ピット	円形	25× 27	15	
ＳＤ－18	溝	――	20×195	7		ＳＤ－38	溝	――	152×2400	129	弥生土器
ＳＫｐ-19	ピット	円形	17× 20	14		ＳＤ－39	溝	――	143×840	6	
ＳＫｐ-20	ピット	円形	20× 27	6		ＳＤ－47	溝	――	223×1040	40	縄文土器片1片
ＳＤ－21	溝	――	35×120	9		ＳＤ－51	溝	――	60×640	7	
ＳＫ－22	土坑	楕円形	52× 60	17	小溝張り出しあり	ＳＤ－52	溝	――	65×470	11	
ＳＫｐ-23	ピット	円形	10× 10	2		ＳＲ－57	道路	――	幅60～120	――	
ＳＫｐ-24	ピット	円形	15× 20	11		ＳＸ－58	根痕	――	――	――	
ＳＫｐ-25	ピット	円形	25× 25	9							

第1表　田塚山Ａ地区遺構集計表

3 遺　　物

A地区から出土した遺物は、土器・陶磁器類のほか、石器や鉄滓、礫、瓦などがある。これらのうち、陶磁器や瓦は近代から現代のものであり、山林であった当該地にゴミとして廃棄されたものと考えられる。時期的にも新しく、また遺構に伴うものではないことから、今回の報告からは割愛する。

1）　土　器　類

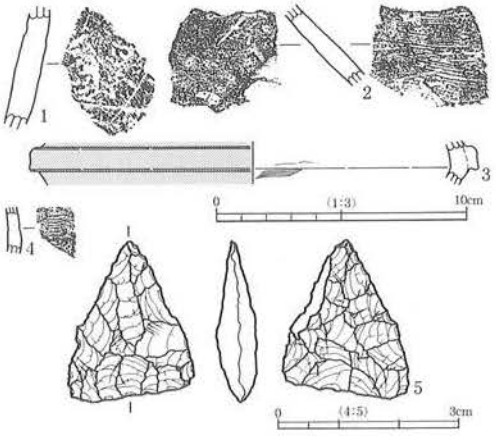
A地区から出土した土器類は、縄文土器と弥生土器があるが、出土量は極めて少なく、またほとんどが細片であった。このため、図示の可能な個体は少なく、大まかな概要を述べるにとどめたい。

縄文土器（第5図1）　ＳＤ－47溝から1点の細片が出土した。器形等は明確ではないが、深鉢の類と考えられる。焼成はおおむね良好で、色調はにぶい橙色を呈する。胎土中における砂粒は少ないが、粘土粒が若干含まれている。文様は、上部に浅い沈線1条がめぐり、下半には無節Ｌの不鮮明な縄文が縦位に施文されている。時期等は明らかでないが、中期から後期頃の所産である可能性が高い。ＳＤ－47から出土しているが、溝内に混入したものと判断される。

弥生土器（第5図2～4）　Ｉ－19・13グリッド包含層と、ＳＤ－38とした大溝内から出土している。2は、装飾壺の胴部破片と考えられるものである。突帯が1条めぐり、外面には赤彩がなされている。胎土は砂質を呈し、極めて微細な砂粒が見受けられるが、よく精選されている。焼成はあまりよくなく、色調は鈍い橙色である。ＳＤ－38溝内出土土器で図示できたのはこの1点であるが、本溝からは細片ながら10片ほどの土器片が下層から出土している。器形としては壺のほか甕や高坏の破片と考えられるものが含まれている。時期的には弥生時代後期後半から終末期に相当し、溝の年代をおおむね示している。3・4はともにＩ－19・13グリッドから出土した。2片とも胎土が緻密で、調整も丁寧なことから器種は壺類と考えられる。色調はともににぶい橙色を基調とするが、3については内面がやや灰色から黒色を帯びている。本グリッドではこの他に4片ほどの細片が出土し、これらの中には甕類の破片が含まれている。

2）　石器類・鉄滓

石器類（第5図5）　石器は、無茎の石鏃1点が出土した。石質は頁岩と考えられ、おおむね白色を呈している。最大長2.53cm、最大幅2.07cmを測り、重さは2.09ｇであった。時期についてはＳＤ－38大溝と同時期の可能性もあるが、遺構に伴っておらず確定できない。ただし、縄文後期後半を主体とする刈羽大平遺跡の石鏃107個の平均重量は、1.06ｇであることから、およそ2倍の重量を持っており、石鏃の部類としては大形に属するようである。



第5図　田塚山A地区出土遺物

鉄　滓　細片2点がＳＤ－38溝の最上層から出土している。鍛冶と製錬のどちらに伴うものであるのかは判断できない。溝に伴うものではなく、ＳＤ－39に関連し、旧道に伴っていたと判断される。近在に製鉄関連遺跡が存在する可能性があり、今後注意が必要なことを示している。

4　田塚山遺跡群Ａ地区のまとめ

Ａ地区から確認された遺構は、溝群とピット・土坑群が主体をなしていたが、これらの中でＳＤ－38とした大溝が弥生時代後期の所産であったことを確認することができた。時期の確定できる遺構は、この大溝１条であるが、これによってＡ地区に存在した遺跡が防御的な集落であったことをほぼ確認することができた。本節では、Ａ地区の調査成果について、特に弥生時代後期末の大溝を中心に、「防御的集落」という視点から述べまとめとしたい。

ＳＤ－38大溝の性格については、本文でも述べたように、配置された位置やその断面形態から、防御を強く意識した「濠」である可能性が最も高い。このような「濠」は防御として台地の縁を環状にめぐらせた事例が多いが、本遺跡例では台地側の尾根筋を断ち切るのみで、いわゆる環濠としては構築されていなかった。当該大溝の年代観は、出土した土器から弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる。

このような断面Ｖ字状を呈することを特徴とした濠をもつ遺跡は、「防御的集落」として、倭国大乱に結びつけられて説明されることが多く、柏崎平野では西谷遺跡［刈羽村教委1992］についで２例目の事例となった。このほかに類似した事例では、西岩野遺跡［柏崎市教委1987］と野附・萱場遺跡［柏崎市教委1990ｃ］が掲げられ、かなり規模の大きな溝が確認されている。いずれも弥生時代の後期後半期から終末期の遺跡であったが、両者とも溝の断面形はＶ字形ではない。また、西岩野例の延長も14mほどしか調査されておらず、野附・萱場例も遺跡東側を直線的に伸びた一部が検出されたのみで、配置の全貌や集落との関わりなどは定かでない。この２例については、大溝の性格が防御を意図したものとするには確証を欠いており、田塚山例との対比は難しいとせざるを得ない。西谷遺跡は鯖石川の支流別山川の中流域に位置し、独立丘をなす丘から延びた尾根筋先端部を中心に沖積地まで広がる遺跡である。濠は、刈羽貝塚遺跡でもある台地の先端部において、その一部（約4.5m）が検出されているが、立地そのものについては田塚山Ａ地区と極めて類似している。ただし、田塚山Ａ例は、尾根先端部を独立させる位置に濠が配置されていたのに対し、西谷遺跡で先端部付近から確認され、両者の地点が反対となっている。このため、両者の防御が同じ構造とすることの是非は確認できないが、独立丘とこれを取り巻く湿地など、立地環境の類似性は注目されよう。

なお、Ａ地区からは、尾根を断ち切る溝跡が断面Ｖ字形の「濠」以外に２条検出されている。覆土の状況には類似性が看取されるこから、「濠」との同時代性は否定できない。これらを弥生時代の溝とした場合、溝群の配置は見附市大平城遺跡［新潟県教委1974］に近似しているように思える。また、ＳＤ－14の溝形態は、新津市八幡山遺跡第１号方形周溝墓の溝（ＳＤ－1a）との類似性も指摘できそうである［渡辺1995］。これらの確認作業は、現状ではかなり難しいが、今後の留意点として注意しておきたい。

今回の発掘調査では、Ａ地区における遺跡主要部のほとんどが調査対象区域外であった。このため、本地区全体の状況を見極めるには充分とすることはできない。また、本遺跡を防御的な集落とした場合、居住区域をなす平坦部は、墓地造成により削平もしくは大幅な攪乱がなされているものと推察され、遺跡主要部の保存状態もあまりよくないことが予想されよう。したがって、当該防御的集落の全体像は、今後明らかにされる可能性は少ないとせざるを得ない。しかし、弥生時代遺跡が空白的な状況を呈していた柏崎平野中央部において、このような防御的な集落が形成されていたことは、当該地一帯が生産や拠点等の重要な役割を担っていたことを示しており、今回の成果は大変意義のあるものとすることができよう。

Ⅴ　田塚山Ｂ地区

1　Ｂ地区の概要

Ｂ地区は、今回発掘調査の対象となった各地区の中では最も広い平坦地を有する調査区である。グリッドでは、Ｉ～Ｏ－16～24に該当する。その面積は、平坦地でおおよそ3,000㎡程に及び、田塚山一帯でも最大級の丘であった。各地区との関係では、南側のＡ地区及び北側のＣ地区に接し、両者とはやや細くなった平坦地で連続する。標高は、Ｃ地区側から19.5ｍの等高線が延び、Ａ地区側へ緩やかに傾斜するが、Ａ地区との境界付近まで19.0ｍの等高線の延長があり、尾根筋部ではほとんど高低差がなかった。Ｂ地区の地形は、Ａ地区・Ｃ地区と接続する西側が本丘陵の尾根筋本体であり、この軸線より東側へ大きく張り出し、全体としては長方形に近似した形状となっている。

調査直前までの現状は、全域が山林であり、雑木等の薮の中に尾根筋を通る旧道が続いていた。ただし、地表面の一部には畑の畝状の痕跡が認められるところがあり、戦前・戦中からその前後には畑として開墾されていた可能性がある。それも、当該地区での平坦地が広いことが前提であったと考えられる。

本地区における遺跡の想定は、試掘調査で検出された土坑（ＳＫ－５）と、その内部上面から出土した特異な形を呈した縄文土器から、後期前葉頃の縄文集落が存在するものと考えられていた。しかし、調査が進む中で、縄文時代の遺構は極めて少ないことが判明した。代わって本地区で主体となった時期は中世、試掘調査ではまったく確認できなかった鎌倉時代の遺構群であった。

検出された遺構は、ピット（柱穴）・土坑・溝および旧道の痕跡で、遺構総数は180基となる。内訳は、土坑40基、ピット122基、区画溝を含む溝跡17条、および旧道の痕跡が１条である。これらの中で、時期等が判明したものは、中世の建物跡や墳墓のほか、縄文時代のピットや土坑などがわずかに存在するだけである。

縄文時代の遺構としては、試掘調査で検出された墓坑と考えられる土坑のほか、ピット等が存在する。ただし、遺物が伴い、時期等が判定できるものは、前述した土坑１基程度であり、これ以外の実態は明確にできなかった。本地区で主体をなす遺構群は、中世前期の仏堂とこれに関連した施設（建物群）や墳墓群である。これら遺構群の分布は、主に西半部にあり、東半部では時期や性格等不詳の土坑やピット群、そして不整形な溝であった。検出された建物群の性格は、柱穴の規模およびその配置から仏堂とそれに伴う庫裡もしくは僧房等の関連施設と考えられるものである。これらの建物群の西側には、墳丘墓があり、北側には墓域を区画した可能性をもつ区画溝と土壙墓１基があり、東側にも土壙墓１基が検出されている。これら遺構群は、方向性や配置などに計画性が見受けられ、全体として一体となっている。当時、仏堂の正面前方となる東半部には、ほとんど遺構はなかったと考えられることから、ある程度の庭や広場的な空間が広がっていた可能性がある。中世以降、当該地区では遺構の構築等はなされなかったようで、旧道とされる尾根道の痕跡が検出された程度である。

当該地区から出土した遺物は概して少なく、縄文時代では試掘調査で出土した異形の土器程度、中世では若干の中世土師器や珠洲焼のほか、土壙墓から出土した刀子などであった。

2 遺　　構

1） 遺構の概略と分布

Ｂ地区から検出された遺構は、ピット・土坑・溝および旧道の痕跡等で、総数180基が検出されている。本地区で主体となる時期は中世前期で、建物群や墳墓あるいは土坑墓と考えられる遺構等が確認された。建物群の性格は、仏堂とそれに伴う庫裡もしくは僧房等の関連施設と考えられるものであった。建物群の西側には墳丘墓、北側には区画溝と土壙墓、そして東側には土壙墓１基が分布し、これらの遺構群の配置からはある程度の計画性が看取される。また、縄文時代に属する土坑やピットも存在すると思われるが、遺物の出土状況等によって時期等が判断されるのは、後期初頭の土坑１基だけで、これ以外については明確に把握できなかった。一方、中世以降の痕跡は、尾根筋の旧道跡が検出された程度で、基本的には遺構の構築はされていない状況であった。

Ｂ地区内で検出された遺構の分布状況をみると、中世の仏堂付近を境とする西半部と東半部で大きく様相が異なり、主要な遺構群の分布は西半部にある。東半部でもピットや土坑あるいは溝等が検出されているが、そのほとんどの時期や性格等が不詳となっている。これは遺物の出土が認められないことや、不整形の遺構が大半を占めていたこと等の要素によるのであるが、直径や深度等から柱穴の可能性が高いものも含まれていた。これらの柱穴は不規則に点在しており、配列から住居跡等の復元を行うことはできず、可能性を残すのみである。

2） 遺 構 各 説

a 縄文時代の遺構

縄文時代に帰属することが明確となった遺構は、ＳＫ－５だけである。Ｂ地区で検出された遺構には、中世遺構との新旧関係や、遺構内覆土の状況等から、縄文時代に営まれたと考えられるものも幾つか存在していた。しかし、遺物の出土がなかったこと等から明確にできず、可能性が示唆されたに過ぎない。

ＳＫ－５（図版23）　本遺構は、Ｌ－20･21グリッドに位置し、長軸93cm、短軸84cmで、深度は22cmの規模である。円形を呈し、長軸の方向はＮ－25°－Ｗであった。規模に比して深度が浅いことや遺構内覆土の堆積状況等から、貯蔵穴とは考え難い。また、縄文時代後期初頭に比定できる異形土器（第10図－１）が、北西隅に埋設されており、これらの要素から、本遺構の性格は後期初頭に属する墓坑と考えられる。

Ｂ地区には同規模の土坑が幾つか見られるが、遺構内覆土はレンズ状の堆積で、ＳＫ－５のように、一時に埋土をした痕跡を示すものは確認されていない。そのため、当該期の墓坑としては、単基のみが築かれたといえる状況である。しかも、埋設されていた土器は異形を呈し、本地区に１基だけ墓坑が存在することの意味を検証することが重要課題といえそうである。

当該期の住居跡等が存在していた可能性は拭い切れず、それに伴うとすることもできるが、集落の痕跡が確認できない以上、明確な判断は下せない。また、かなり想像を逞しくすると、本地区は比較的広い平坦面を有し、集落形成の場としては他地区よりも適していると思われる。しかし、縄文時代はもちろん、Ａ地区において濠が検出された弥生時代においても集落の存在を示す痕跡はなかった。集落の選地性を考える上でも、本地区における墓坑のあり方が内包している問題は多いように思われる。今後は、より多元的な方法によって検証を深めていくことが必要であろう。

b　中世の仏堂と関連施設

中世の仏堂関連の施設とした建物跡は、本遺跡群では最も広い平坦地を持つＢ地区から発見された。グリッドでは、Ｌ～Ｎ－18～20に該当する。

ここでは、仏堂関連とされる建物跡について述べるが、これらは仏堂本堂としたＳＢ－225建物跡、庫裡もしくは僧房などのような施設と考えられるＳＢ－226建物跡、そして両建物跡を結ぶ渡り廊下となるＳＢ－511建物跡の３棟によって構成されていた。これら仏堂関連の建物群において、最も特徴的なことは、柱穴用のピットを大地に穿ち、掘立柱によって建築されていることで、柱すべてに礎石が用いられていないことにある。このような事例は、古代・中世を通じて珍しい。

仏堂関連とした建物群の正面は、内陣の柱の位置が、外陣と一致しないほうが奥と考えられ、墳墓との位置関係からも、東側が正面と考えられる。したがって、庫裡とされる建物跡は本堂の右手に位置することになる。これら建物群の主軸等の方位は、本堂が真北Ｎ－82°－Ｗを、庫裡がＮ－82.5°－Ｗを指向しており、本堂正面からすれば、おおむね真西から北へ８°振れた方位であった。両者の誤差が少ないことから、明確な設計を基に建築された可能性が高い。以下、各個別に概要をまとめるが、本文では、建物の性格をすでに仏堂及びその関連施設として述べるが、検証等については第Ⅸ章にてまとめたい。

境　内

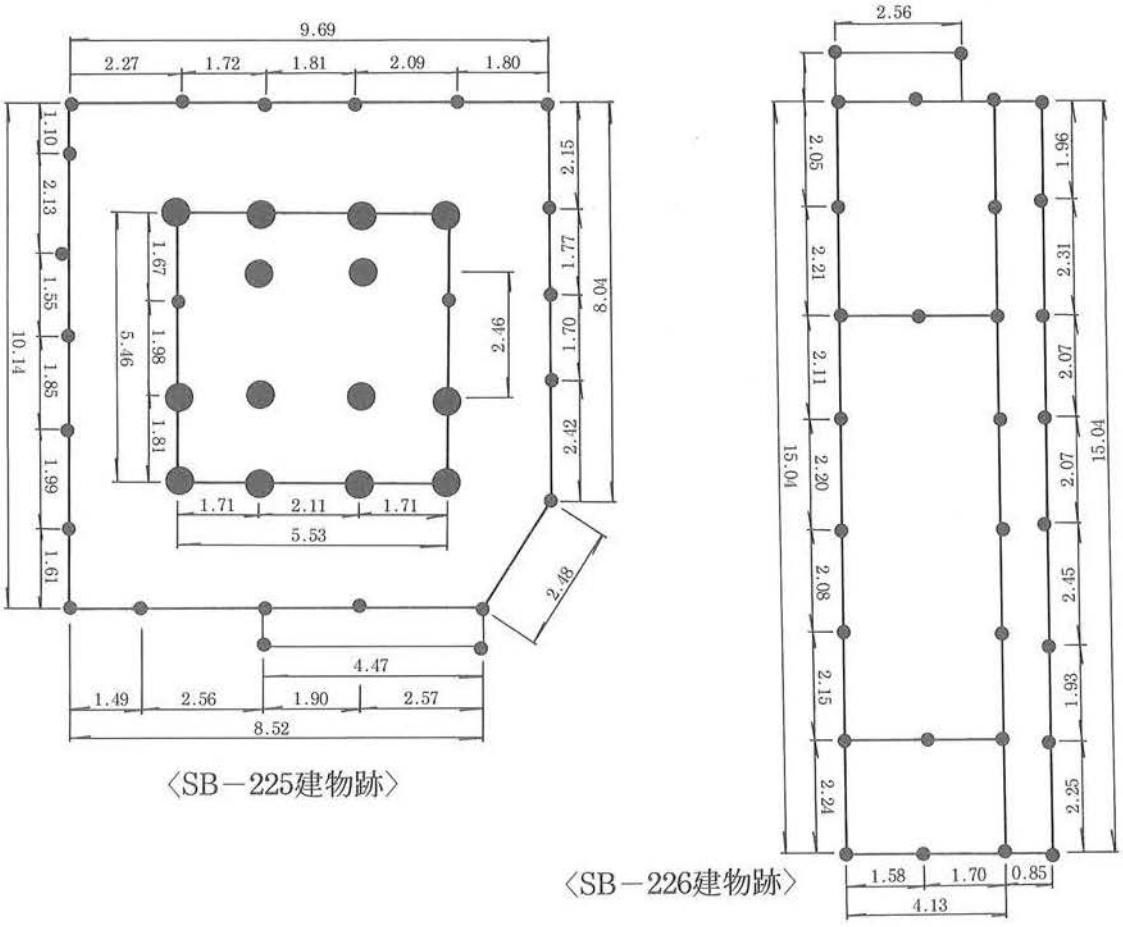
本遺跡群において、中世の遺構として確認されたものは、仏堂関連施設と墳墓関連の溝遺構及び土壙墓のみであり、しかもほぼＢ地区に限定されていた。これ以外では庭園と考えられるような遺構、あるいは境内の内外を示す境界遺構も検出されず、山門の存在も明確にできなかった。しかし、中世の遺構群は、Ｂ地区でも西半部に集中し、東半部では時期不詳の土坑やピット・溝などが検出されているが、中世という時期が確定している遺構としてはほぼ皆無に近い。本堂の正面であるこの空間には、仏堂に関わるなんらかの意味を持っていたことは確かであるが、具体的には明らかにできない。

中世の遺構が分布する西半部では、仏堂等建物群の西側および北側からは溝遺構が検出されている。これらについては、墳墓の区画溝および墓域の境界を示す溝区画であったと推測されるが、建物の配置や主軸方位等とは、一定の規則性が看取されることから、これらは一体の遺構群として理解できる。また、計画的な配置とは、当初から仏堂と墳墓が一体として造営・建立された可能性を示し、両者が密接な関係にあるとすることができよう。また、西側の墳丘墓とは、９ｍ余りの空間が存在する。調査直前までは、この間を両田尻から市内へと至る道のルートとなっていたが、仏堂等が機能している段階では、道が存在する可能性は薄いように見受けられる。さらに、ＳＢ－226にほぼ接するようにしてＳＤ－160溝区画が存在する。位置的にかなり近接するが、両者の関連性が極めて密接なことを意味していると考えられる。この他に、Ｂ地区では、土壙墓２基が検出されている。

ＳＢ－225建物跡（図版15・28・29）

本建物跡は、須弥壇が据えられ、本尊が安置されたと考えられる内陣を中心に、これをめぐる外陣があり、その外側に縁側がめぐる構造となっている。内陣と外陣は、柱穴の規模が特に大きく、本建物跡の中核をなしている。また縁側部分の柱穴は、後述するように、ＳＢ－226建物跡の母屋柱穴より相対的に浅いものとなっていることから、構造物としての重要度は小さく、付属的な意味合いが強いことがわかる。

外　陣　平面形は、正面の桁行３間×側面の梁行３間で、ほぼ正方形を呈する。実寸については、正面5.53m、側面5.46mを計り、正面が若干長くなる。各柱間については、正面では中央の柱間が2.11m、両側が1.71mで、中央が広くなる。側面については、３間とも間隔が異なり、正面側が1.81m、中央が1.98



第６図　中世仏堂関連建物跡柱間計測図

m、後方部が1.67mであった。柱穴の規模は、後方の一列と側面中央の正面側の柱穴が平面規模では大きく、正面の一列はやや小さな規模を呈している。また、側面中央部後ろ寄りの柱穴は、平面規模も縁側の柱穴と大差なく、深度も6.5cmと11.0cmと浅いことから、大引などを支えた支柱の跡と考えられる。この２基以外の深度については、後方の列となるＳＫｐ－138・139・145の３基が相対的に浅く、ＳＫｐ－108・114・144・130・140・147・146の７基は総じて深く、一定していた。

柱穴の覆土断面では、ＳＫｐ－114・144・130・147において柱痕を検出できたものがある。しかし、覆土の特徴としては、全体的に柔らかくて締まりがなく、柱の根固めを意図して地山土を詰め、あるいは柱回りに版築状に固定するといった作法はとられていなかったことから、柱の痕跡そのものが維持されていたかは明確でなく、したがって、正確な柱の太さは示していないようである。柱穴の底面は、概して固く締まっていたが、それ以外特別な造作はとっていない。根固めがしっかりしていなかったことについては、柱を固定する意図がなく、柱穴底面を固くしてその上に柱を置くという建築方法がとられていた可能性と、柱そのものが抜き取られ、根固め土が攪拌されていた可能性の二通りが推定できる。前者の場合は、礎石上に柱を立てて建築することとは、原則において共通することになる。この点は、次の内陣についても同様である。

内　陣　規模としては１間四方であるが、後方の一列は、外陣とは一致せず、0.48mほど後方へずれる。正面の柱間は、外陣の幅とほぼ同じであるが、奥行きは、2.46mを計り長くなっている。このような柱の

配置は、須弥壇の位置や配置によって左右されるものと思われ、当初の設計段階から意図的になされたものと考えられる。同様な事例は、現存する礎石立の寺院例で確認できる（後述）。柱穴の規模は、平面規模では外陣よりもやや小さいが、規模的には４基とも整っている。深度も、外陣より相対的に浅くなり、ＳＢ－225の母屋とほぼ同程度となっている。ただし、やや大型となるＳＫｐ－139の場合、断面には重複関係は見出されなかったが、基本的には２つの柱穴であり、建て替えもしくは建築中における修正等がなされた可能性が考えられる。なお、須弥壇の位置については、もちろん痕跡など残っていないが、現存例でもさまざまな実例があって一定せず、明らかにできなかった。

縁　側　外陣の四周には、柱穴がめぐるが、各辺における柱穴数は、西側が６本、南側が７本、東側が５本、北側が５本と、柱穴数は一定せず、柱間も一律ではない。また、柱穴の深度も、ＳＢ－226建物跡母屋のそれより概して浅いことから、縁束用の柱穴であったと考えられる。鬼門となる北東側については、精査によっても柱穴を確認できず、鬼門を避けた隅切りと判断した。ただし、現存例には、このような隅切りの慣習は認められないようであり、どのような宗教的・信仰的背景があったのかは、当該仏堂の宗派等を見極める端緒となるかも知れない。

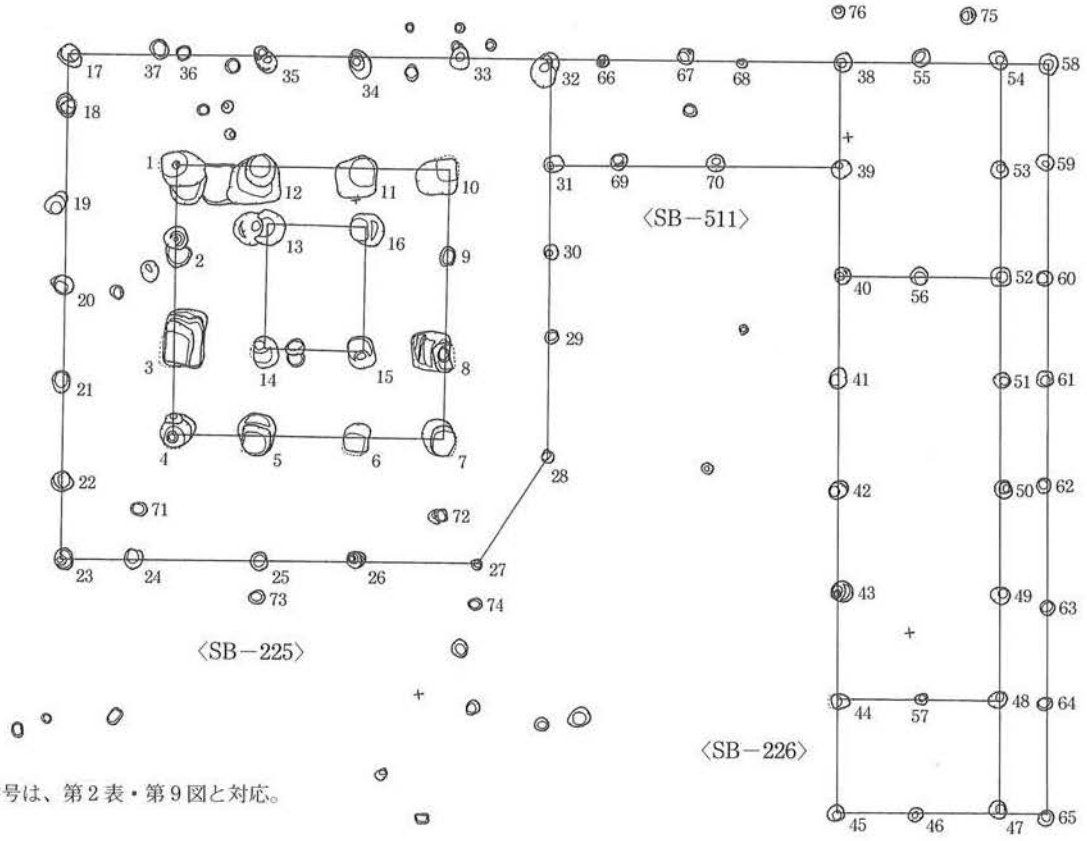
幅は、北側が約2.10mと狭く、正面となる東側が約2.20mとやや広くなり、西側と南側では約2.20mであった。本堂正面をなす東側の北寄りには、沓脱ぎもしくは階段のための柱穴が一対（ＳＫｐ－118・155）検出されている。位置的には正面中央から隅切りまで、幅4.47mである。このような施設は、現存例では正面中央のみに位置するものが通例であり、本例はかなり例外的な存在の可能性がある。ただし、本堂縁側を隅切りした事例がなくて詳細を明らかにできない。

ＳＢ－226建物跡（図版15・28・29）

本建物跡は、本堂正面の右手、北側に位置し、ＳＢ－511の渡り廊下によって連絡する庫裡のような施設とされる建物跡である。建物桁行の方位は、Ｎ－7.5°－Ｗを指向し、若干ながら本堂との差異がある。方位については、本堂を基準にして決定されたと考えられることから、ＳＢ－226建物の建設にあたって、誤差が生じたものと思われる。建物跡全体の規模は、桁行７間15.04m、梁行２間3.28mの母屋に半間（0.85m）ほどの濡縁などと考えられる廂が付く。また、西側には、本堂と同じく沓脱ぎもしくは階段と考えられる張り出しがある。柱穴は一対（ＳＫｐ－84・162）で、幅2.56mである。柱穴は、母屋部分についてはかなり計画的に配されるが、廂もしくは縁束をなす柱穴はやや位置にずれが認められる。深度についても、縁束の柱穴はかなり浅い設定となっている。母屋の間仕切りは、ＳＫｐ－88・509の柱穴によって３部屋に分けられると考えられる。渡り廊下に連絡する部屋は、２間×２間、中央の部屋は４間×２間でもっとも広いことから、母屋の主部屋と考えられる。また、この東側の最も奥まったところには、１間×２間の狭い部屋が設定されている。これら３部屋の意味あるいは機能等についての性格付けは明確でない。なお、主部屋の最も東側から縁に出れば、ＳＤ－160溝区画が途切れた、出入り口の可能性が高い位置と一致している。この事実は、ＳＤ－160溝区画の性格を左右するものと考えられる。

ＳＢ－511渡り廊下（図版15・28・29）

渡り廊下については、独立した建物とするには若干の無理があるが、説明の都合で便宜的に設定した。柱穴は、西側に３基、東側に２基があり、これらによって本堂と庫裡を連絡する。しかし、柱穴の配置に規則性はなく、両建物跡をつなぐため後出的に造られた可能性が高いであろう。それは、柱穴の規模や深度が相対的に軽微であること、本堂側の幅が2.27m、庫裡側が2.05mと差異があることからもうかがわれる。延長は5.8mである。



※遺構番号は、第２表・第９図と対応。

第７図　田塚山仏堂関連建物跡柱穴配置図

柱穴平面規模の検討

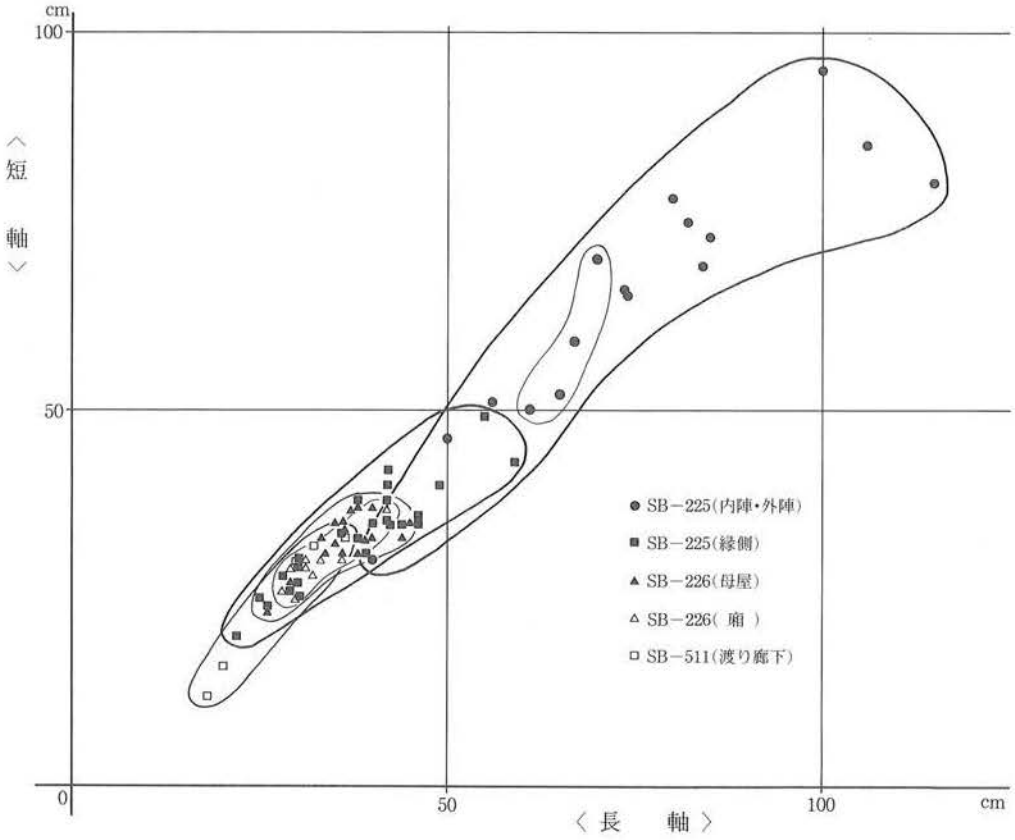
第８図は、仏堂関連とした建物跡の平面規模について、長軸と短軸から図化した分布図である。それぞれの規模について、その差異がいかなるものであるのか見ておきたい。

ＳＢ－225建物跡とした本堂外陣の分布域は、長軸40cm×短軸30cmから、長軸130cm、短軸でも95cmを測る規模まで、かなりの幅を持った分布域を示している。しかし、支柱と考えられる２と９を除けば、短軸でも50cmを超える規模となる。内陣の分布域は、外陣の分布域の中にいずれも含まれ、その規模はおおむね均一となっている。ただし、外陣の規模からすれば小さい部類に集中しており、建築にあたっては外陣が建物の骨格に相当することを端的に示している。縁側の柱穴は、直径20cmほどのものから55cm前後のものまで、かなり幅を持った分布域を示している。このことは、長軸で60cm以内、短軸では50cmを超えないことから、本堂内外陣の支柱を除いた柱穴とは分布域がほとんど重複しせず、本堂内外陣が別格の規模を持っていることを示している。

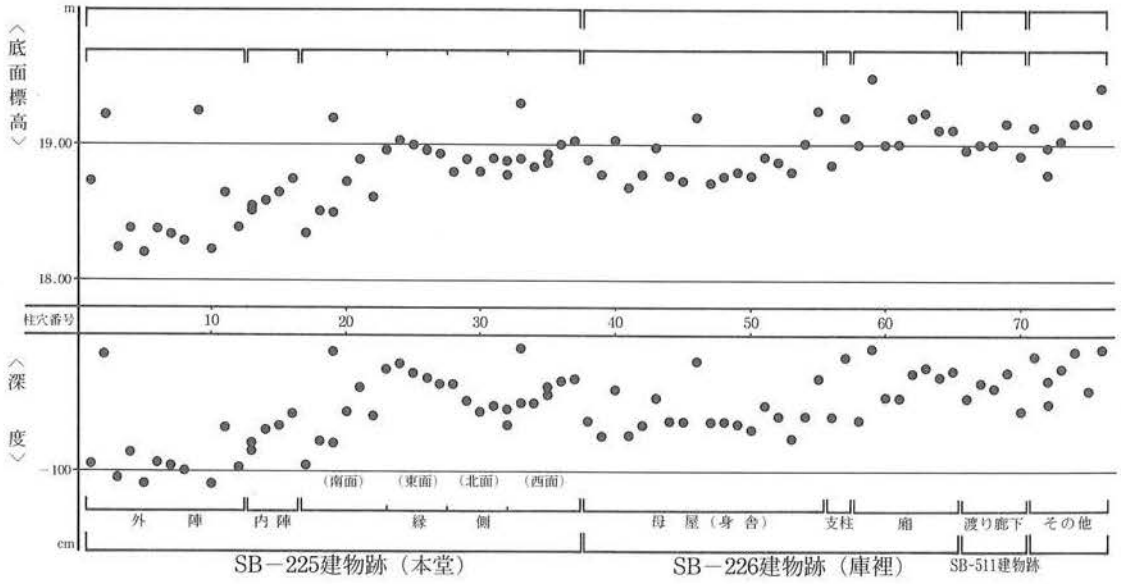
ＳＢ－226建物については、母屋と廂部分に区分して、柱穴規模の分布域の把握を試みた。その結果、両者には規模による差異はほとんどなく、30～40cm前後にほぼ集中していることが判明した。分布域としては、本堂縁側の分布域内にあり、平均的な規模としては同じと判断できる。また、ＳＢ－511とした渡り廊下については、５個の柱穴のうち、２個を除くと直径30cmほどとなりＳＢ－226と同じ分布域にあることが判る。除外した２個の柱穴については、その位置からしても支柱的な存在と考えられる。

番号	建物名称	柱穴番号	平面形態	規模／長軸×短軸 cm	深度／深さ cm	底面標高 m	備考
1	SB－225	137	円形	106×85(小ピット15×15)	95.0	18.74	2段
2	(外陣)	136a	不定形	50×46	11.0	19.24	
3		140	方形	115×80	104.5	18.24	3段
4		130	円形	74×66(小ピット23×22)	87.0	18.39	3段
5		144	隅丸方形	85×73	109.0	18.21	テラスあり
6		114	方形	56×51	93.5	18.375	
7		108	円形	74×65	95.0	18.34	
8		147	方形	80×78	100.0	18.29	テラスあり
9		152	円形	40×30	6.5	19.25	
10		146	隅丸方形	84×69	109.0	18.23	
11		145	隅丸方形	82×75	67.5	18.645	
12		138a	隅丸方形	100×95	97.0	18.39	2段
13	(内陣)	139a	円形	70×70	79.0	18.57	
		139b	円形	65×65	84.5	18.515	
14		142	円形	61×50	70.0	18.59	
15		113	隅丸方形	65×52	65.5	18.65	テラスあり
16		111	隅丸方形	67×59	58.0	18.745	テラスあり
17	(縁側)	123	円形	49×40	95.0	18.35	
18		227	円形	46×35	78.0	18.52	
19		124a	円形	30×25	11.0	19.19	
		124b	円形	40×35	78.5	18.495	
20		125	円形	46×36	57.0	18.73	
21		126	円形	44×35	38.0	18.89	
22		127	円形	42×40	60.0	18.62	
23		128	円形	42×35	24.0	18.97	テラスあり
24		122	円形	38×38	21.0	19.04	
25		117	円形	36×34	28.0	19.00	
26		115	円形	38×33	32.0	18.97	3段
27		154	円形	22×20	36.0	18.93	
28		106	円形	26×24	35.0	18.795	
29		105	円形	29×26	48.0	18.89	
30		104	円形	30×29	56.0	18.81	
31		103	楕円形	39×31	52.0	18.90	
32		156	円形	42×42	54.0	18.89	
		157	円形	55×49	65.0	18.78	
33		107a	楕円形	44×35	50.0	18.90	
		107b	円形	25×25	9.0	19.31	
34		110	楕円形	59×43	50.0	18.84	
35		116a	隅丸方形	42×38	43.0	18.87	テラスあり
		116b	円形	30×30	37.0	18.935	
36		119	円形	30×27	33.0	19.02	
37		120	円形	40×34	31.0	19.03	
38	SB－226	87	円形	40×35	63.0	18.89	
39	(母屋)	89	円形	37×37	74.5	18.775	
40		90	円形	35×32	39.5	19.025	テラスあり
41		91	楕円形	44×33	73.5	18.675	
42		92	円形	40×37	64.5	18.775	
43		93	円形	45×35	46.5	18.975	テラスあり
44		94	円形	38×31	63.0	18.78	
45		95	円形	35×32	62.5	18.735	
46		163	円形	29×27	18.0	19.21	
47		83	円形	36×34	64.0	18.72	
48		82	円形	40×33	64.0	18.77	
49		81	円形	39×33	65.0	18.80	
50		80	円形	35×32	68.5	18.775	2段
51		79	円形	34×31	52.0	18.92	
52		78	隅丸方形	38×37	59.0	18.88	
53		77	円形	34×34	76.0	18.80	
54		497	円形	36×31	58.0	19.02	
55		86	円形	36×35	32.0	19.25	
56	(間仕切り支柱)	88	隅丸方形	35×35	60.0	18.85	
57		509	円形	26×23	16.0	19.21	
58	(廂)	70	円形	42×37	61.5	19.00	
59		71	円形	36×30	9.5	19.48	
60		72	円形	31×30	44.5	18.995	
61		73a	隅丸方形	33×32	45.5	18.995	
62		74a	円形	28×26	27.5	19.20	
63		74b	円形	29×29	24.0	19.24	
64		75	円形	30×25	30.0	19.12	
65		76	円形	32×28	25.0	19.12	
66	SB－511	101	楕円形	18×12	45.5	18.97	テラスあり
67	(渡り廊下)	85	隅丸方形	30×30	34.5	19.095	テラスあり
68		97	円形	20×16	39.0	19.10	
69		102	円形	32×32	27.0	19.17	テラスあり
70		98	円形	36×34	56.0	18.92	
71	その他	121	楕円形	33×24	14.0	19.13	
72		153a	方形	25×25	51.0	18.78	
		153b	円形	30×29	33.0	18.98	
73		118	円形	28×28	23.5	19.03	
74		155	円形	28×25	11.0	19.16	
75		84	円形	31×29	40.0	19.16	
76		162	円形	25×25	10.0	19.42	

第2表　田塚山B地区寺院関連遺構柱穴計測表



第８図　田塚山仏堂関連建物跡の柱穴法量分布図



第９図　田塚山仏堂関連建物跡柱穴の深度分布図

柱穴の平面的な規模については、柱の太さと固定するための根固め的な手法等が関連し、差異が生じるものと考えられる。これを前提にして考えれば、本堂外陣の柱が最も太く、更に最も強固に固定されていたことをうかがうことができる。そして、内陣は外陣に次ぐ太さを持っているものと考えられるが、しかし外陣よりも柱穴の規模に均一性が看取されることから、ほぼ同じ柱が選ばれて建てられたことを指摘できよう。したがって、外陣の柱穴規模のばらつきとは、柱そのものの太さが余り均一ではなかったことを意味しているとすることもできる。また、ＳＢ－226建物（庫裡）やＳＢ－511渡り廊下の柱は、ほぼ同じ太さの柱が使用されていたと考えることができるのではないだろうか。

柱穴深度の検討

第９図は、仏堂関連とした建物跡の柱穴深度について、深度の相対的な関係と、底面の絶対標高について示したものである。これらの深度から読み取れるものについて、若干述べておきたい。

ＳＢ－225建物跡とした仏堂本堂の柱穴深度については、内陣と外陣、そして縁側に区分して検討を試みたい。外陣における柱穴の深度は、おおむね１ｍ前後でほぼ均一である。ただし、２・９は浅く、柱の支えとはなりにくいことから、柱の位置を示す程度の穴であり、中間の支え程度の柱を立てていたものとすることができる。内陣の深度は、均一性に欠けるが、深度はおおむね70㎝程度と、外陣より浅く設定されている。縁側の柱穴は、90㎝余りと深いものから10㎝程度の浅いものまでかなりの差異があり、全体的にはかなり不均一である。しかし、ばらつきが著しいのは南面が特に著しいのであり、東面・西面・北面における柱穴底面の絶対標高を見るとほぼ18.9ｍに集中する。また深度も大まかには40㎝ほどを前後するものが多い傾向をうかがうことができる。したがって、本堂の建築にあたっては、外陣が基本構造をなし、内陣と縁側は付属的な部分であることを示している。なお、縁側の南面だけが、柱穴深度が80㎝と深くなっている理由については分からないが、外陣の深度に匹敵していることから、外陣の柱穴掘削に引き続き、縁側南面の柱穴掘削作業に移行したため、深度を深くしてしまったという見方もでき、作業手順を示しているのかも知れない。

ＳＢ－226とした建物跡については、母屋（身舎）・間仕切りの支柱・廂もしくは濡縁の柱穴に区分して検討してみたい。母屋の柱穴は、おおむね65㎝ほどの深度のものがほとんどを占め、規格性をある程度認めることができる。これらのうち、深度が浅い46・55は梁間の支柱と考えられ、間仕切りの柱穴である56・57の内、57の深度とほぼ同じとなっている。間仕切りの支柱は、57の深度が浅いが、本堂から渡り廊下を経て最初の部屋を間仕切る56は深いことから、この部屋の持つ意味が高いことを暗示している。庫裡など、仏堂本堂に付随した建物と考えられ、一般民家建築とは大きく異ならない建物と考えられる。廂部分については、深度が一定していない。深度の平均も、おおむね30㎝前後と、母屋と比すればかなり簡易な柱穴となっていることが判る。ＳＢ－511とした渡り廊下の柱穴深度も、ＳＢ－226建物跡の廂の柱穴とほぼ同じ傾向をもっている。概して簡易な施設、付属的なものであることを示している。

柱穴の深度から仏堂関連施設の重要度を見ると、まず本堂外陣が建築にあたっての基本構造であり、外陣に守られた内陣の柱穴も概して深く設定されていることは、内陣の重要性を端的に示していると解すことができる。そして庫裡のような施設と考えられるＳＢ－226建物跡の母屋についても、この部分が一つの建物としてみた場合の基本構造であることから、その深度が内陣に次いでいることはうなずける。また、ＳＢ－225本堂の縁側に用いられた柱穴深度が、ＳＢ－226建物跡の廂やＳＢ－511渡り廊下の柱穴よりも、相対的に深く掘られていることは、ＳＢ－225仏堂本堂が最も重要かつ規模の大きな建築物であったことを意味している。

c　中世の墳墓（図版11・14・30～32）

ここでは、B地区で検出された、墳丘墓の溝区画もしくは墓域の区画溝と考えられるＳＤ－１ａ・ｂとＳＤ－160ａ・ｂ、刀子を出土した土壙墓と考えられるＳＫ－229・510について述べる。

ＳＤ－１ａ・ｂ（図版11・30・31）　Ｌ～Ｍ－17グリッドにわたって存在する。平面形はＦ字形の遺構であるが、これは新旧の溝が存在することによる。古段階をＳＤ－１ａ、新段階をＳＤ－１ｂとした。それぞれの溝の幅は、ＳＤ－１ａが1.5mほどで、ＳＤ－１ｂが１ｍ程度である。深度は両者とも40cmほどである。溝の長軸の方向は、ＳＤ－１ａがＮ－８°－Ｅ、ＳＤ－１ｂがＮ－14°－Ｅであるが、肉眼で見る限り、明確なずれは感じられない。当初の遺構確認の段階では、両者とも溝が完結していなかったことから西側に調査区を拡張したが、続きは検出できなかった。遺構確認段階では、ＳＤ－１ａ・ｂの内側に盛土は確認できなかった。しかし、溝が完結していないことから、西側が盛土によって区画されていた可能性もある。遺物は全て溝内からの出土であり、珠洲焼と中世土師器がある。ＳＤ－１ａとＳＤ－１ｂでは出土数や遺物の種類に大きな違いはない。礫や石造物は確認されなかった。

ＳＤ－１ｂは、ＳＤ－１ａの溝の長軸とその方向をほぼ同じくする。土層観察によれば、ＳＤ－１ａがすべて埋没したのち、ＳＤ－１ｂが造成されたものであるが、ＳＤ－１ａの西側に伸びる部分もほぼ同じ方向に重複しており、仏堂の向きに合わせられていたものであろう。これから、造営時期も、仏堂が機能していた時点と考えられる。

ＳＤ－160ａ・ｂ（図版14・32）　ＳＤ－160ａはＮ～Ｏ－19グリッドに存在し、ＳＤ－160ｂはＮ－20グリッドに存在する。ＳＤ－160ａは、平面形がおおよそＬ字形の遺構で、ＳＤ－160ｂはその東側にある溝状の遺構である。幅は１ｍほど、深度は10cmであり、ＳＤ－１ａ・ｂよりも浅い。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。これもＳＤ－１ａ・ｂ同様溝が巡らない。覆土は２層に分けられる。上層は地山土が多く混入するしまりがある暗褐色土で、下層は、上層よりやや地山の混入が多い暗橙褐色土であった。ＳＤ－160ａとＳＤ－160ｂは、覆土の観察から、一連のものと思われる。溝の内部に盛土は確認できず、溝の内部に土壙墓等の埋葬施設も検出されなかった。遺物は、ＳＤ－160ａから出土した中世土師器１点のみであり、礫や石造物は確認されていない。ＳＤ－１ａ・ｂとの方向は、ほぼ同じである。

ＳＤ－１ａ・ｂは、仏堂との間にある程度の空間をおいて築造されており、近接したＳＤ－160ａ・ｂとは性格の異なる埋葬者がいた可能性も指摘できる。それは、仏堂に深いかかわりを持つ僧侶もしくは一族の墓域かとも思われる。ＳＤ－160ａ・ｂが、東側と北側に溝が巡らないことについては、造営当時は、北・東側に盛土がなされていて段を造り出していたか、もしくは現在見られる地形をそのまま段としていた可能性がある。盛土の有無は確認されなかったが、他の中世土壙墓の例から考えても大規模な盛土が存在した時点でＳＫ－510が造営されたとは、深度などから考えても難しいものがあろう。ＳＫ－510が、ＳＤ－160ａ・ｂが存在する以前もしくは廃棄後の造営とすれば、ＳＤ－160ａ・ｂと方向が一致しないことも理解できよう。

ＳＫ－229（図版16・31）　Ｍ－21グリッドに存在する。170cm×70cmの隅丸方形で、深度は約35cmである。覆土は、木炭粒を微かに含む褐色土を主体とする。土坑の主軸は、Ｎ－27°－Ｗである。床直で刀子が出土している。刀子の出土方位は、土坑の主軸とずれており、切先の方向は、Ｅ－44°－Ｓとなる。土層観察面全面で、土壌サンプリングを行なった。骨片等は検出されていない。造営時期は不明である。

ＳＫ－510（図版14・31）　Ｎ－20グリッドに存在する。法面から検出された。上部がななめに失われているため、正確な深さは不明であるが、遺存部分で30cmと確認された。平面形は約170cm×50cmの隅丸

方形を呈する。覆土はしまりがある黒色土層と、しまりのある黒色土と地山土の混合層であった。刀子が床直で出土している。土坑の主軸はN－18°－Wであり、刀子の出土方位もこれと同一である。ＳＤ－160ａ・ｂの内側にあるが、両者の関係は判然としない。土層観察面において、土壌サンプリングを行なった。骨片等は検出されていない。造営時期は不明である。

ＳＫ－229・510は、平面形態および深度、副葬品などの類似から、造営者階層の類似および造営時期の近接が考えられる。

小児石遺跡においては、土壙墓への埋葬及び溝区画を有する墳丘墓の消失は14世紀中葉～後半頃とされている［柏崎市教委1991ｂ］。ＳＤ－１ａ・ｂおよび仏堂のピットから出土した中世土師器は13世紀代とされているが、ＳＫ－229・510は、仏堂や溝区画と方向があっていない。このため、土壙墓はこれらの仏堂や溝区画が成立する以前か以後のものと考えられる。仏堂や溝区画成立以前のものとすれば、２基のみ先行して、後に小児石遺跡の営まれる丘上ではなく、田塚山に造営されたということになる。仏堂等廃絶以後の造営とすると、時期的には小児石遺跡に併行する時期に、区別されて田塚山に埋葬されたということになる。小児石遺跡では、刀子が出土した土壙墓は確認されておらず、いずれにしても、「在地の小領主層を中心とした被葬者」［品田1994］が埋葬されたと考えられる小児石遺跡との性格の違いが考えられる。現段階で田塚山遺跡群の土壙墓の造営時期を確定することはできない。しかし、第Ⅸ章第２項で述べられている中世土師器の編年観から、仏堂成立以前の造営とすると12世紀代まで遡る可能性も存在する。

ｄ　そのほかの遺構（第３表）

ここでは、縄文時代および中世に帰属することが明確なもの以外の、時期および性格のはっきりしないピット・土坑・溝等について述べることとする。Ｂ地区における縄文時代の遺構としては、縄文時代後期の土器を出土した墓坑と思われるＳＫ－５が明確になっており、中世に属する遺構は仏堂と墳墓が明らかになっている。この他のピットや土坑の中には、縄文時代に所属するものが存在すると思われるものの、明らかではない。しかし、Ｅ地区のように多数のピット群が存在しないことは、長期間の集落形成の場として選定されなかったと思われる。Ｅ地区より平坦面が大きいＢ地区が集落形成の場に選定されなかったことは、何らかの意識的な選択がなされたものと考えられるが、その理由は判然としない。

①　ピット

ピットは、Ｂ地区の平坦面に分布する。Ｂ地区は縄文時代と中世の遺構が存在しているが、第３表に掲載されているものは、いずれも遺物が出土しておらず、時代は明言できない。分布は平坦面に限られており、遺構密度は希薄である。径は20cm～30cmのものが最も多く、次いで30cm～40cmのものが多い。40cmを超えるものは１個に過ぎない。深度は10cm～19cmのものが一番多い。覆土は地山が若干含まれる暗褐色土主体のものが多く、木炭粒を含むものは概して少ないが、ＳＫｐ－38・ＳＫｐ－304に木炭粒が多く含まれる。住居跡は確認できなかった。

②　土坑（図版11～17・33）

ここで言う土坑とは、平面の直径がピットより相対的に大きいものを意味する。

分布は、大きく分けると、ＳＢ－225・226・511を境にして、平坦面が東部に大きく張り出した部分を中心に分布する土坑群と、ＳＢ－225・226・511の西側に点在する土坑群とに分かれる。西側に存在するものはさらに、ＳＤ－１ａ・ｂ付近に存在するものと、Ａ地区寄りに存在するものがある。径は１ｍ以下のものが最も多い。一番径が大きな土坑は、ＳＫ－６で、250cm×200cmである。深度は10cm～19cmのものが14個と最も多く、次いで20cm～29cmが７個、30cm～39cmが６個である。これら土坑は、径および平面形

第３表　Ｂ地区遺構観察表（単位はcm。第２表でも番号が無いものは欠番。木炭粒：多◎、やや多○、少々△、記載無し－）

遺構名	グリッド	平面形	径(長軸×短軸)	深度	覆　土／木炭粒		出土遺物	備　　考
ＳＤ－１ａ	N~M-17	Ｔ字形	長さ260、幅40	40	図版30・31		中世土師器・珠洲焼	ＳＤ－１ｂより古
ＳＤ－１ｂ	N~M-17	コの字形	長さ300、幅20	30	図版30・31		中世土師器・珠洲焼	ＳＤ－１ａより新
ＳＫ－２	M－17	楕円形	88×60	34	図版30・31			ＳＤ－１ａより古
ＳＫ－３	M－17	楕円形	27×12	31	暗褐色土	－		ＳＤ－１ａより新
ＳＤ－４	N~M-18	溝状	長さ100、幅14	15	図版33			
ＳＫ－５	L-20~21	円形	93×84	22	図版33		縄文土器	
ＳＫ－６	N－18	円形	250×200	40	暗黒褐色土	－		
ＳＫｐ－10	M－17	円形	30×24	7	暗褐色土	－		
ＳＫ－11	M－18	不定形	98×76	22	暗褐色土	－		
ＳＫ－12	M－18	不定形	60×38	5	暗褐色土	－		
ＳＫ－13	M－18	円形	39×34	5	暗褐色土、しまりあり	○		
ＳＤ－15	M－17	溝状	長さ300、幅100	10	図版33			
ＳＤ－19	L－17	溝状	長さ350、幅100	20	図版33			
ＳＤ－20ａ	L－17	溝状	長さ300、幅100	20	図版33		石器	ＳＫ－20ｂより古
ＳＫ－20ｂ	L－17	不定形	50×40	25	図版33			ＳＤ－20ａより新
ＳＤ－24ａ	K－16	溝状	長さ480、幅110	20	図版34			ＳＫ－24ｂより古
ＳＫ－24ｂ	K－16	円形	70×40	15	図版34			ＳＤ－24ａより新
ＳＫ－28	K－18	円形	83×74	20	黒褐色土	△		
ＳＫ－30	K－18	円形	52×52	15	黒褐色土	△		
ＳＫｐ－31	K－18	円形	30×28	12	黒褐色土	△		
ＳＫ－33	K－18	不定形	230×208	73	暗褐色土、しまりあり	○		
ＳＫｐ－38	K－18	円形	36×31	8	暗褐色土	◎		
ＳＫｐ－39	M－18	円形	40×24	7	暗褐色土	－		ＳＫｐ－40より古
ＳＫｐ－40	M－18	円形	28×23	9	暗褐色土	－		ＳＫｐ－39より新
ＳＫｐ－41	M－18	円形	23×21	14	暗褐色土	△		
ＳＤ－42	N－18	溝状	長さ215、幅75	11	暗褐色土	－		
ＳＤ－45	O－18	溝状	長さ500、幅40	11	図版34			
ＳＤ－47	N－18	溝状	長さ236、幅79	12	暗褐色土	－		
ＳＤ－48	N－18	溝状	長さ319、幅67	12	褐色土	－		
ＳＤ－49	N-18・19	溝状	長さ184、幅88	16	褐色土	－		
ＳＲ－50ａ～ｅ	K~O-18	溝状	図版11・12	図版34	図版34			旧道跡
ＳＤ－51	M－18	溝状	長さ185、幅115	12	褐色土	－		
ＳＫｐ－52	N－18	円形	45×34	16	暗褐色土	－		
ＳＫ－53a	M－18	円形	50×40	10	暗褐色土、しまりあり	－		ＳＫ－53ｂより新
ＳＫ－53b	M－18	円形	130×110	20	暗褐色土、しまりあり	－		ＳＫ－53ａより古
ＳＫ－54	M－18	円形	71×30	10	黒褐色土、しまりあり	○		ＳＲ－50ｃより新
ＳＫ－55	M－18	円形	90×70	10	暗褐色土、しまりあり	－		ＳＲ－50ｃより新
ＳＫｐ－57	M－18	円形	35×32	8	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－59	M－18	円形	21×20	37	黒褐色土	－		
ＳＫｐ－60	M－18	円形	19×19	15	褐色土	－		
ＳＫｐ－61	M－18	円形	19×17	13	暗褐色土	－		
ＳＫ－63	L－18	円形	40×30	15	褐色土	－		ＳＲ－50ｂより新
ＳＫ－64	L－18	不定形	60×60	16	暗褐色土	－		ＳＲ－50ｂより古
ＳＫ－66	K－18	不定形	75×55	18	図版34			ＳＲ－50ａより古
ＳＸ－67	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－68	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－99	M－19	円形	20×17	7	褐色土	－		
ＳＫｐ－100	M－18	円形	26×24	26	黒褐色土	－		
ＳＫｐ－109	M－18	円形	31×26	19	黒褐色土	－		
ＳＸ－129	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－131	L－19	円形	27×27	12	暗褐色土、しまりなし	－		
ＳＸ－133	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－136b	L－19	円形	49×45	38	暗褐色土、ややしまり	－		
ＳＸ－158	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＤ－160ａ	N~O-19	溝状	長さ135、幅100	20	図版32		中世土師器	
ＳＤ－160ｂ	N－20	溝状	長さ30、幅60	18	図版32			
ＳＫ－164	M－20	円形	44×36	18	褐色土、しまりあり	△		
ＳＫｐ－165	M－20	円形	27×27	8	褐色土、しまりあり	△		
ＳＫｐ－166	M－20	円形	30×27	14	褐色土、しまりあり	△		
ＳＸ－167	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－171	L－20	円形	25×22	13	褐色土、しまりあり	△		
ＳＫｐ－177	M－20	円形	21×20	12	暗褐色土、しまりあり	△		
ＳＫｐ－189	L－20	円形	27×22	10	褐色土、しまりあり	－		
ＳＫｐ－204	M－20	円形	23×21	12	褐色土、しまりあり	△		

遺構名	グリッド	平面形	径(長軸×短軸)	深度	覆　土／木炭粒		出土遺物	備　　考
ＳＫｐ－208	Ｍ－20	円形	30×18	8	褐色土	－		
ＳＫ－228	Ｍ－17	円形	140×130	50	図版33			
ＳＫ－229	Ｍ－21	隅丸方形	170×70	35	図版31		刀子	土壙墓
ＳＫ－230	Ｍ－21	円形	92×91	37	図版33			
ＳＫ－231	Ｌ－21	円形	137×123	32	図版33			
ＳＫ－232	Ｌ－22	円形	112×100	21	図版33			
ＳＸ－242	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫ－243	Ｌ－21	円形	73×63	24	図版33			
ＳＫｐ－244	Ｌ－21	円形	31×22	23	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－245	Ｋ－20	円形	23×22	14	褐色土、しまりあり	○		
ＳＫ－249	Ｋ－22	不定形	289×152	34	図版33			
ＳＫ－250	Ｋ－22	楕円形	61×40	12	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－252	Ｌ－21	円形	26×24	14	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－258	Ｌ－22	円形	23×21	18	暗褐色土、しまりあり	△		
ＳＫｐ－259	Ｌ－22	円形	27×24	9	褐色土、しまりあり	－		
ＳＫ－264	Ｌ－22	円形	78×72	10	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－272	Ｌ－22	円形	27×25	15	暗褐色土、しまりあり	－		
ＳＫｐ－273	Ｋ－22	円形	22×19	7	褐色土、しまりあり	－		
ＳＫ－277	Ｊ～Ｋ-22	円形	138×132	33	褐色土	－		
ＳＸ－279	－	－	－	－	－	－		根痕
ＳＤ－280	Ｌ－23	溝状	長さ600、幅120	30	図版34		縄文土器	
ＳＫｐ－281	Ｋ－23	円形	24×20	8	褐色土、しまりあり	－		
ＳＫｐ－284	Ｌ－23	円形	22×21	16	暗褐色土、しまりあり	－		
ＳＫｐ－285	Ｌ－23	円形	26×18	16	褐色土、しまりあり	－		
ＳＫ－288	Ｌ－23	円形	96×93	18	黒褐色土	－		
ＳＫ－289	Ｌ－23	円形	143×142	33	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－299	Ｋ－22	円形	22×20	6	暗褐色土、しまりあり	－		
ＳＸ－300	－	－	－	－	－	－		
ＳＫ－303	Ｊ－23	円形	40×36	11	褐色土	－		
ＳＫｐ－304	Ｌ－20	円形	15×15	10	褐色土、しまりあり	◎		
ＳＫ－305	Ｌ－20	楕円形	35×21	12	暗褐色土	－		
ＳＫ－489	Ｍ－18	円形	36×28	16	暗褐色土	－		
ＳＸ－490	－	－	－	－	－	－		根痕
ＳＫｐ－491	Ｋ－22	円形	28×22	11	暗黒褐色土	－		
ＳＫｐ－493	Ｌ－18	円形	28×28	15	黒褐色土	－		
ＳＫｐ－494	Ｌ－18	円形	24×23	22	黒褐色土	－		
ＳＫｐ－495	Ｌ－18	円形	24×22	9	褐色土	－		
ＳＫｐ－496	Ｌ－18	円形	21×21	20	黒褐色土	－		
ＳＫ－499a	Ｏ～Ｎ	不定形	150×105	22	図版33			ＳＫ－499bより新
ＳＫ－499b	－17	不定形	180×130	12	図版33			ＳＫ－499aより古
ＳＤ－500	Ｎ－17	溝状	長さ500、幅150	5	図版34			
ＳＫ－501	Ｎ－17	円形	70×70	25	図版34			ＳＤ－500より新
ＳＫ－502	Ｎ－17	不定形	55×30	15	暗褐色土	－		ＳＤ－500より古
ＳＫ－510	Ｏ－20	隅丸方形	170×50	30	図版31		刀子	土壙墓

から４つに分類される。平面形の径が１ｍ以下でほぼ円形のもの（Ａ類）と、径が１ｍ～1.5ｍ前後のもの（Ｂ類）、２ｍ前後で平面形が円形のもの（Ｃ類）と溝状を呈するもの（Ｄ類）が存在する。また、覆土に大量の焼土を含み、下部に火床面が認められるＳＫ－499ａ・501は、ＳＤ－１ａ・ｂの西側にのみ存在している。

Ｂ地区土坑Ａ類　該当する土坑は、ＳＫ－２・３・11～13・24ｂ・28・30・53ａ・54・55・66・164・243・250・264・288・303・305・489・501と、ほとんどの土坑がこれにあたる。平面形はＳＫ－232が不定形となるほかは円形である。深度は５～20㎝前後のものが多い。覆土は、多くが暗褐色土を主体とするが、黒褐色土を主体とする土坑もある。覆土に木炭粒を含む土坑もあるが、ＳＫ－243・501を除くと殆どは量が多くない。特にＳＫ－501は最下層に火床面があり、覆土に炭・焼土を多量に含む。いずれも遺物は出土していない。ＳＫ－501については、ＳＤ－１ａ・ｂと近接した焼土遺構であるが、骨片等は検出され

ていない。ＳＫ－243は、平坦面のほぼ中央に存在する。

Ｂ地区土坑Ｂ類　ＳＫ－53ｂ・228・230・231・232・277・289・499ａが該当する。深度はＳＫ－228が50cmと最も深く、その他はおよそ20cm～40cmほどである。覆土は、しまりがある暗褐色土を主体とするＳＫ－53ｂ・228・230・232・289と、暗黒褐色土を主体とし、木炭粒がやや多く見られるＳＫ－231、褐色土を主体とするＳＫ－277に分けられる。ＳＫ－499ａでは、下部で火床面が認められ、下層に黒褐色土が堆積する。ＳＫ－289はＢ地区でも最も東端の斜面部に位置する。いずれも遺物は出土していない。

Ｂ地区土坑Ｃ類　ＳＫ－６・33が該当する。ＳＫ－６は、Ｎ－18グリッドに存在する、径250cm×200cm、深度40cmである。覆土は暗黒褐色土を主体とし、有機質を埋めたものと思われるが、遺物は出土していない。ＳＤ－１より新しく、ＳＫ－229等と平面形態も異なるため、同時期のものとは考え難い。ＳＫ－33はしまりがある暗褐色土を主体とし、木炭粒がやや多く混入する。

Ｂ地区土坑Ｄ類　ＳＫ－249が該当する。長さ約３ｍ、幅約1.5ｍ、深度約30cmで、覆土は褐色土を主体とする。木炭粒を微量含む。

③　溝　跡（図版11～17・33・34）

Ｂ地区では、15列の溝跡が確認されたが、これから、ＳＤ－１ａ・ｂ等の中世と考えられる溝を除くと、13列になる。分布は、ＳＤ－280を除けば西側に偏っている。この分布は、その多くが中世もしくはそれ以降の所産とも考えられる。本項では「溝」として取り上げたが、これらの中には、道跡であるものも存在すると思われる。深度は、ＳＤ－280が30cmとなるほかは、大部分が10cm～20cmである。出土遺物は、ＳＤ－20ａから混入と思われる縄文時代の剝片が出土したのみで、いずれも構築時期およびその目的は不明である。これらは長さが３ｍ前後で、幅が１ｍ程度のものがもっとも多い。ここでは、幅が１ｍ程度のものをＡ類、それ以下のものをＢ類として記述する。

Ｂ地区溝Ａ類　ＳＤ－15・19・20ａ・24ａ・51・280・500が該当する。長さは３～５ｍで、深度はいずれも10cm～20cmである。覆土はしまりがない黒褐色土を主体とするＳＤ－20と、しまりがある褐色土を主体とするＳＤ－19・51・500、しまりがある暗黒褐色土を主体とするＳＤ－15に分けられる。ＳＤ－15の覆土はしまりがある暗黒褐色土で、ＳＤ－160ａ・ｂの覆土に類似している。溝の平面形は、ＳＤ－280がおおよそコンターラインに沿ってゆるく弧を描くほかは、ほぼ直線である。これから、ＳＤ－280は、Ｂ地区の東側を通る道跡である可能性も存在する。ＳＤ－500は、ＳＤ－１と方向が異なるため、ＳＤ－１の続きである可能性は存在しないと考えられるが、ＳＤ－１の内部に盛土がなされていたと考えると、それ以前の造営もしくは盛土崩壊後ということになる。

Ｂ地区溝Ｂ類　ＳＤ－４・42・45・47～49である。深度は10cm～20cmと浅い。覆土はしまりがある暗褐色土を主体とするＳＤ－42・45・47、褐色土を主体とするＳＤ－48・49、黒褐色土を主体とするＳＤ－４に分かれる。平面形はほぼ直線であるが、ＳＤ－４・42がゆるく弧を描いている。ＳＤ－４がＳＤ－１ａ・ｂの手前でその方向を変えることは、ＳＤ－４がＳＤ－１ａ・ｂを意識した結果とも考えられる。ＳＤ－47～49は、仏堂と方向が一致しないため、これらとの直接的関係は存在しないと思われる。

④　旧道跡（図版11・12）

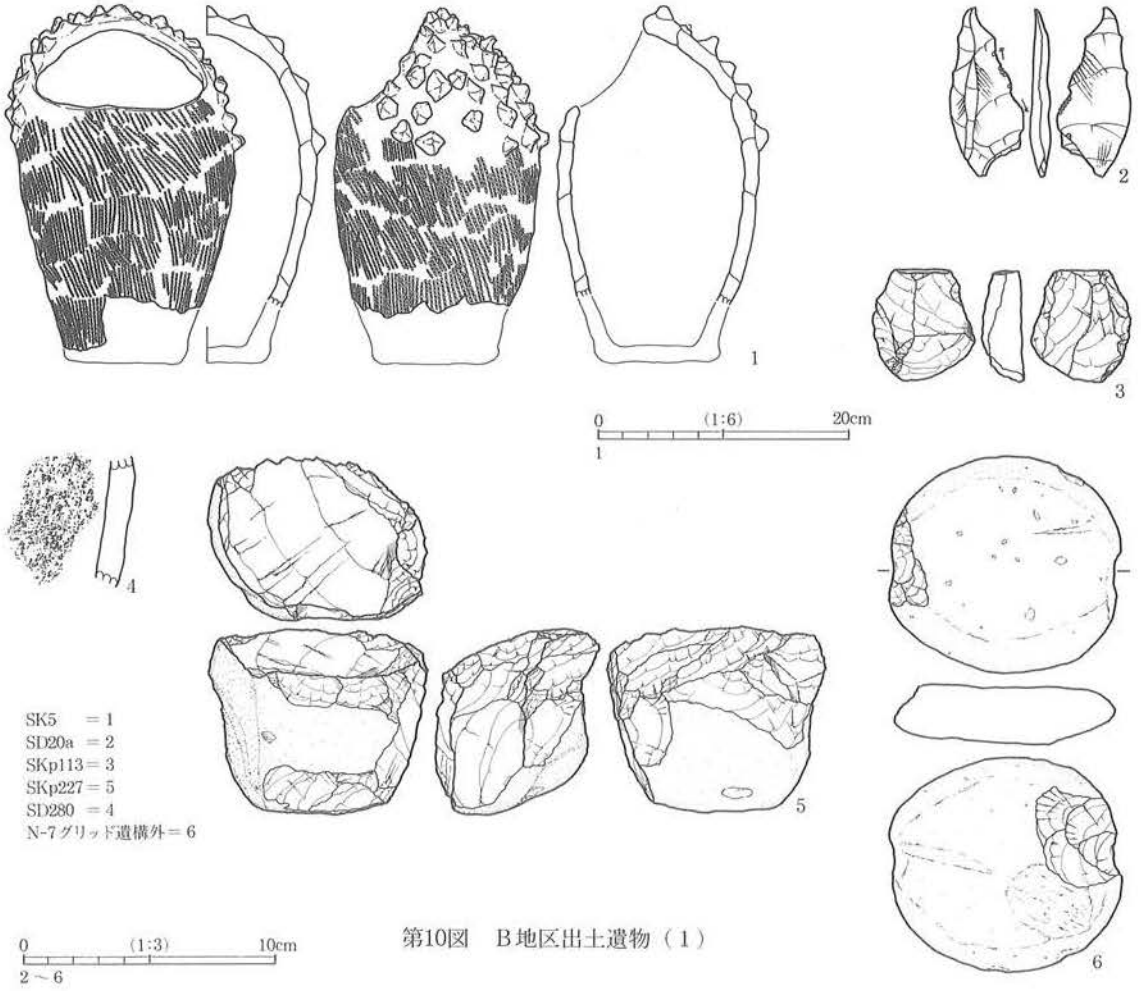
Ｂ地区で検出されたＳＲ－50a・b・c・d・e は、Ａ地区のＳＲ－57からＣ地区のＳＲ－57に続く近年の旧道跡と思われる。位置は平坦面の西側、Ｋ～Ｏ－18グリッドにわたって断続的に検出されている。遺物は出土していない。覆土は２層に分けられ、上層はしまりがある褐色土、下層がしまりがある暗橙褐色土である。

3 遺　　物

1） 縄文時代の遺物（第10図）

土 器 類　B地区から出土した縄文時代の土器類は概して少なく、今回図示した2点以外は細片で占められていた。1はＳＫ－５の埋設土器である。土坑の北西隅から、ほぼ原形のまま、開口部分が真天を指向した状態で出土した。胴上部に最大径をもち、口縁部はやや内弯しているが、片側がドーム状に伸びている。その結果、強い正面性が示唆される。また、底部は欠損し、埋設以前に抜かれている可能性が高い。器高は残存27.9cm、胴部最大径は19.2cm、底部径は推定約10cmである。ドーム状部分には凸瘤文がランダムに施され、開口部以下には縦位撚糸文（R）が施文されている。器面は丁寧に調整され、凸瘤の貼付時にも丁寧な調整がなされているが、撚糸文は概して雑然と施されている。機能は煮沸用と思われ、炭化物付着範囲や二次焼成痕跡の範囲から、正立もしくは出土状況と同様の斜位状態で使用されたと考えられる。文様の特徴から、縄文時代後期初頭に比定できよう［中野1994］。4は深鉢形土器の胴部片である。無文で、橙色を呈している。ＳＤ－280から出土したが、混入と考えられる。

石 器 類　2は瑪瑙製の不定形剥片石器で、押圧剥離によって刃部を作出している。3は凝灰岩の剥片資料で、上部に平坦面を作出し、両面を剥離している。5は軟質頁岩製の石核である。自然面を多く残しているが、上部に平坦面を作出した後、剥離を行っている。6は安山岩製の石錘で、片面ずつから剥離をして、抉り部を作出している。6以外は遺構内からの出土であるが、いずれも混入品と思われる。



第10図　B地区出土遺物（1）

2）中世の遺物

a　中世土師器（第11図１～10）

中世土師器は、ＳＤ－１ａ・ｂとその周囲、ＳＤ－160a、ＳＢ－225・226の各ピットから出土している。出土したものは、すべて非ロクロ成形によるもので、「刈羽・三島型」と呼ばれるものである。これらの年代観については、第Ⅸ章第２項に詳しいが、13世紀にほぼおさまるものとみられる。

皿　類（１～５）　形態的には、口縁部に２段の横ナデが施されるもの（１～３）と、底部と口縁部の境に細い沈線が認められるもの（４・５）に分けられる。概して１～３は焼成が良く、４・５は不良であり器面が摩滅している。焼成はいずれもやや良好で、明るい橙色を呈する。胎土は0.5㎜～１㎜程度の砂粒が若干混入するものである。

小皿類（６～10）　いずれも口縁部に比較的強い横ナデが施される。10は、強い横ナデにより沈線状になるものである。色調はいずれも明るい橙色を呈するが、焼成は、７・８以外は良好である。胎土は0.5㎜～１㎜程度の砂粒が若干混入する。

b　珠洲焼（第12図１～７）

器種は、甕・片口鉢・壺類の三器種が確認される。出土は、Ｎ－19グリッド（ＳＤ－160付近）とＳＤ－１に限られる。編年については、『中世須恵器の研究』［吉岡1994］に、対応させた。

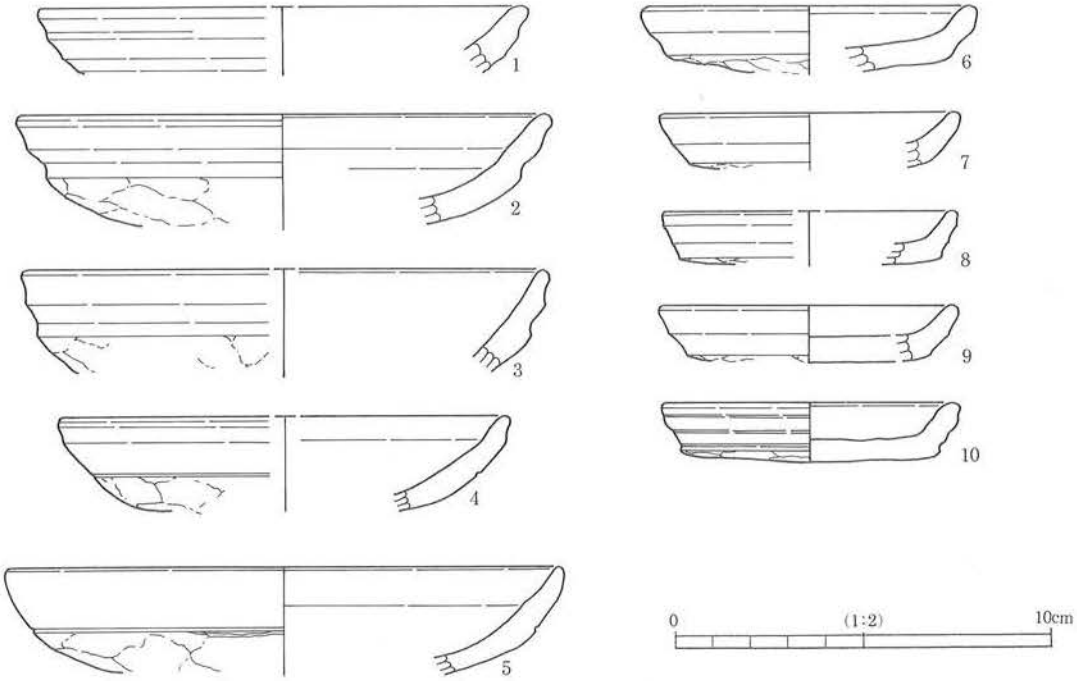
甕　類（１）　１は大甕の胴部片である。焼成は良く、暗青灰色を呈する。

壺　類（２～５）　２～５はともに壺の肩部である。ともに右隅に櫛目文が描かれており、５は耳がついていた跡が残っている。６は５条の櫛目で波状文をつくり、菊花文をその上に配している。菊花文は途中で破損しているが、15弁であったと思われる。Ⅰ$_2$期～Ⅱ期の所産と思われる。７は壺の底部と思われるもので、底に糸切り痕が残る。焼成は堅固で青灰色を呈するが、胎土に１㎝程度の礫石粒が多く混入している。

片口鉢類（６・７）　６は胎土も緻密で、焼成も青灰色を呈する。珠洲編年のⅠ$_3$期～Ⅱ期に該当するものと思われる。７は胎土は緻密だが焼成があまり良くない。色調は灰白色を呈する。12条の卸し目が確認できる。

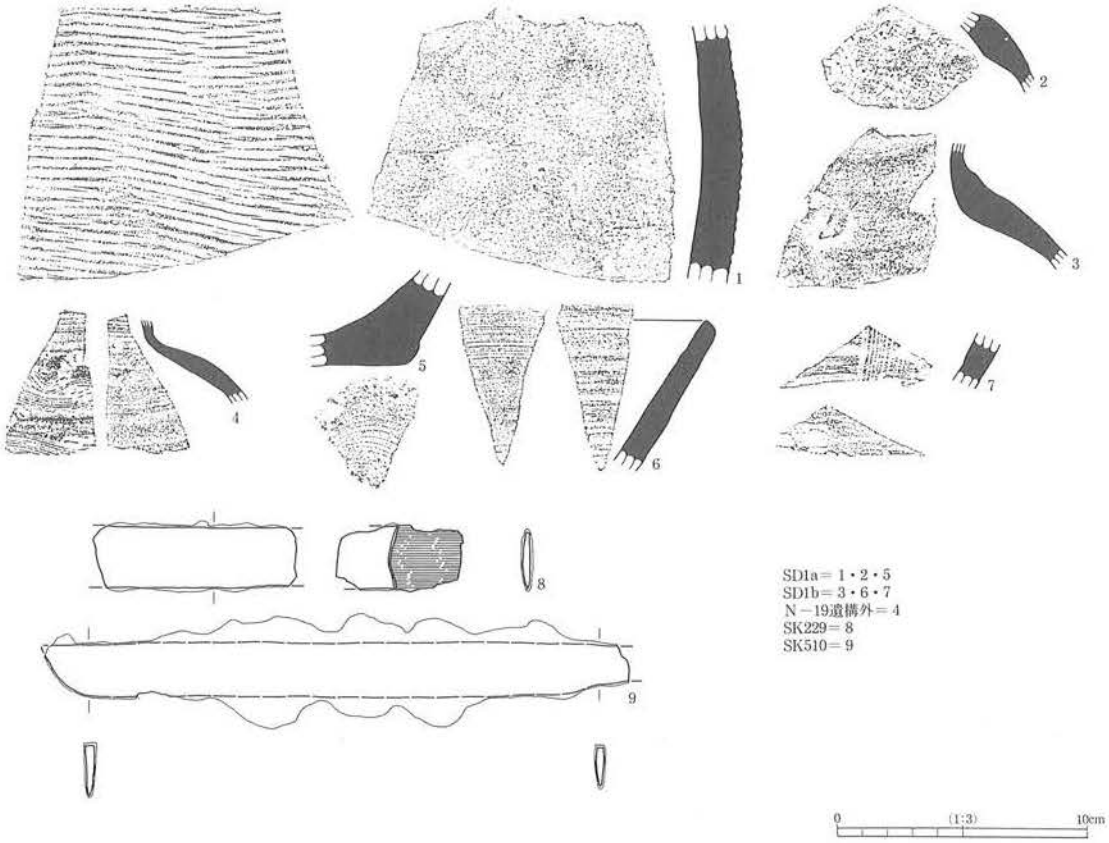
c　その他の遺物（第12図８・９）

刀子（８・９）　ＳＫ－229、ＳＫ－510から出土している。どちらも時期は不明である。８はＳＫ－229から出土したもので、刀身に木製の柄がついた状態で出土した。刀身は２つに破損している。現存する法量は、刀身部分のみの長さ８㎝、幅1.2㎝、厚さ0.2㎝で、柄と接続している部分の刀身の長さ２㎝、幅1.2㎝、厚さ0.2㎝で、柄の部分は長さ2.9㎝、幅1.2㎝、厚さ0.3㎝である。９はＳＫ－510から出土したもので、刀身のみの出土である。現存する法量は、刀身は長さ23㎝、幅11㎝、厚さ0.3㎝である。いずれもひどい錆に覆われ、刀身表面の観察はできなかった。



SD1b＝1・7～8　SD160a＝2　N－19遺構外＝3・9　SKp118＝4　SKp140＝5
SD1a＝6　SKp104＝10

第11図　B地区出土遺物（2）



第12図　B地区出土遺物（3）

Ⅵ　田塚山Ｃ地区

1　Ｃ地区の概要と調査区

1）　Ｃ地区の概要

Ｃ地区は、丘陵のほぼ中央に位置し、田塚山遺跡群では２番目に広い平坦面を持つ地区である。

試掘調査で確認された遺構は、ピット４基と落ち込み２基であり、本調査も平坦面を中心に行われた。これらの遺構は縄文時代のものとは断定できなかったが、表採などによって検出された土器は縄文時代中期前半に位置づけられるものである。また、この時は、玦状耳飾りが遺構内から出土している。

この結果、平坦面に縄文時代の遺跡が存在する可能性が強くなったため、本調査も台地上の平坦面を中心に進めることとなった。Ｃ地区の最終的な調査面積は、2096.3㎡である。

2）　遺構の概略と分布

本調査のさい、Ｃ地区で検出された遺構は、ピット、土坑、トラップピット、根痕等である。

ピット群は、Ｃ地区の中央部にややまとまって点在しており、平坦面が一番広い部分を選地している。トラップピットは、このピット群から離れた、Ｄ地区に続く北西部の尾根筋に存在した。形態的にはＤ地区で検出されたトラップピットと同一であり、遺物は出土していないが、形態から縄文時代と考えられる。ピットについては、遺物が出土したのはＳＫｐ－７・27だけで、他からは何も出土していない。縄文土器は表採されたものが多いが、その地点はピット群の位置とほぼ重なっている。土坑は縄文土器や土師器が出土したものもあるが、その多くは性格及び所属時期が不明である。ＳＫ－３ｂは焼土が多く堆積していた。本地区では特に、特異な平面形態を持つＳＸ－２が存在するが、その性格は不明である。土師器・須恵器の出土は、ＳＫ－１、ＳＸ－２、ＳＫ－３ａ・ｂ、ＳＫｐ－27で見られ、表採地点もＳＫ－１とＳＸ－２の周辺に偏っている。ピット群に時期差があるとすれば、縄文時代と古代ではピットの地点は重複するが、その他のＳＫ－１、ＳＸ－２、ＳＫ－３ａ・ｂなど、古代の土器を出土した土坑は台地縁辺部に造営されている。この他には、台地の南縁部にＳＲ－57ａ・ｂが検出されているが、これはＢ地区からＤ地区に続く、他の地区でも検出されている近代まで使用されていた旧道跡と思われる。

2　遺　　構

ａ　ピット

各ピットの観察は、第４表に示したとおりである。分布としては、平坦面の中央部から西部にかけて点在し、遺構密度は希薄である。径は30㎝前後のものが最も多い。深度は10㎝～19㎝のものが多く、次いで20㎝～29㎝のものが多い。覆土は、多くが褐色土を主体としたものであるが、ＳＫｐ－17・28・90の覆土には、焼土を含んでいる。ＳＫｐ－17・28は、ＳＸ－２の南側に近接するピットであるが、ＳＸ－２との関係、もしくはＳＸ－２と切り合っているピット群との関係は、判然としない。

第４表　Ｃ地区遺構観察表（単位はcm、番号がないものは欠番。木炭粒　多◎、やや多○、少々△、記載無し－）

遺構名	グリッド	平面形	径(長軸×短軸)	深度	覆土／木炭粒		出土遺物	備考
ＳＫ－１	Ｒ－21	不整円形	110×90	４～20	図版37		土師器・須恵器・縄文土器	
ＳＸ－２	Ｓ-20・21	不定形	最大550×450	４～25	図版35		土師器・須恵器・縄文土器	
ＳＫ－３ａ	Ｔ-19・20	隅丸方形	200×200	16	図版36		縄文土器	新
ＳＫ－３ｂ	Ｔ-19・20	円形	50×50	22	図版36		土師器	古
ＳＫ－４	Ｔ-19・20	円形	100×100	6	図版36			
ＳＫｐ－７	Ｔ－21	円形	30×30	14	褐色土、しまり有	○	縄文土器	
ＳＫｐ－９	Ｔ－21	円形	40×40	13	褐色土	△		
ＳＸ－10	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－12	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－13	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－14	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－15	Ｔ－20	円形	20×20	11	褐色土	△		
ＳＫｐ－16	Ｔ－20	円形	20×20	８	褐色土	△		
ＳＫｐ－17	Ｔ－20	円形	20×20	19	褐色土、焼土有	○		
ＳＸ－18	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－19	Ｓ－19	円形	30×30	13	褐色土	△		ＳＩ－113
ＳＸ－21	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－23	Ｓ－20	楕円形	30×20	27	褐色土	○		
ＳＫｐ－24	Ｓ－20	円形	30×30	20	褐色土	○		
ＳＫｐ－25	Ｓ－20	円形	20×20	28	褐色土	○		
ＳＫｐ－26	Ｓ－20	円形	30×28	10	褐色土	○		
ＳＫｐ－27	Ｓ－20	楕円形	30×20	９	褐色土	△	土師器	
ＳＫｐ－28	Ｓ－20	楕円形	30×20	10	褐色土、焼土塊	－		
ＳＫｐ－29	Ｓ－20	円形	30×30	43	褐色土	○		
ＳＸ－32	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－34	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－37	Ｒ－20	円形	30×30	49	明褐色土	△		
ＳＫｐ－40	Ｒ-19・20	楕円形	40×30	18	褐色土	△		
ＳＸ－42	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫ－47	Ｑ・Ｒ-19	楕円形	170×150	36	図版37			
ＳＸ－48	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－50	Ｒ－19	円形	30×30	10	褐色土	△		
ＳＫｐ－51	Ｒ－19	楕円形	30×20	10	褐色土	△		
ＳＫｐ－52	Ｒ－19	楕円形	30×20	10	褐色土	－		
ＳＫ－53	Ｓ－19	隅丸方形	80×70	23	図版37			
ＳＫ－54	Ｓ－19	円形	20×20	２	図版37			
ＳＫｐ－56	Ｓ－19	円形	20×20	５	褐色土	△		ＳＩ－113
ＳＲ－57a	Ｔ－16	溝状	長さ650					
			幅130～50	４～６	図版37			旧道跡
ＳＲ－57b	Ｑ－18	溝状	長さ600					
			幅150	４～６	図版37			旧道跡
ＳＫｐ－58	Ｓ－19	円形	30×30	15	褐色土	○		ＳＩ－113
ＳＫｐ－59	Ｓ－19	円形	20×20	３	褐色土	○		ＳＩ－113
ＳＸ－60	－	－	－	－	－	－	縄文土器	根痕
ＳＫ－64	Ｓ-18・19	隅丸方形	80×60	23	図版37			
ＳＫ－66	Ｓ－18	隅丸方形	80×60	13	図版37		縄文土器	
ＳＫｐ－67	Ｓ－18	円形	30×30	17	褐色土	△		ＳＩ－113
ＳＫｐ－68	－	円形	30×30	15	褐色土	－		ＳＩ－113
ＳＸ－73	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－74	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－78	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－79	Ｓ－18	楕円形	40×30	21	褐色土	△		ＳＩ－114
ＳＫｐ－80	Ｒ－18	楕円形	40×30	40	褐色土、しまり無	－		ＳＩ－114
ＳＫｐ－81	Ｒ－18	楕円形	50×40	40	褐色土	－		
ＳＸｐ－82	Ｒ－18	円形	30×30	６	暗褐色土	△		
ＳＤ－84	Ｒ－18	溝状	長さ190、幅85	20	褐色土、ややしまりなし		縄文土器	
ＳＫｐ－90	Ｒ－18	円形	40×40	20	褐色土、焼土有	○		ＳＩ－114
ＳＸ－91	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－92	Ｒ－18	楕円形	50×40	45	褐色土	△		ＳＩ－114
ＳＫｐ－94	Ｓ－18	楕円形	30×20	23	褐色土	△		ＳＩ－114
ＳＫｐ－95	Ｓ－18	円形	30×30	17	暗褐色土	△		ＳＩ－114
ＳＸ－96	－	－	－	－	－	－	縄文土器	根痕
ＳＸ－97	－	－	－	－	－	－	縄文土器	根痕
ＳＸ－99	－	－	－	－	－	－	－	根痕

遺構名	グリッド	平面形	径(長軸×短軸)	深度	覆　土／木炭粒		出土遺物	備　　考
ＳＫ－104	Ｕ－15	円形	70×70	30	図版37			
ＳＫ－105	Ｕ－15	円形	150×150	30	図版37			
ＳＫｐ－107	Ｓ－18	楕円形	70×50	27	褐色土	△		ＳＩ－114
ＳＸ－109	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－115	－	－	－	－	－	－	－	根痕

遺物を出土したピットはＳＫｐ－７・27のみである。Ｃ地区では、縄文時代と古代の遺物が出土しているため、少なくともその時期に所属するものと思われるが、各ピット個別の明確な時期比定はできない。

b　住居跡（図版18・36）

住居跡と考えられるものは、ＳＩ－113とＳＢ－114である。ＳＩ－113が縄文時代の住居跡、ＳＢ－114は古代の住居跡と推定される。床面や炉跡、住居跡に伴う掘り込みや溝等が確認されていないため、この柱穴配置は推測の域を出るものではない。ＳＩ－113は、Ｓ－18～19グリッドに位置する、ピット数６つの住居跡である。径はいずれも20cm～30cmであり、深度は５cm～17cmとばらつきがある。長軸は3.6m、短軸は2.0mである。ＳＢ－114は、Ｒ～Ｓ－18に位置する、ピット数７つの住居跡である。径はいずれも30cm～50cmの比較的大きなものである。深度は浅いもので17cm、深いもので45cmとばらつきがある。長軸は4.2m、短軸は1.9mである。

c　土坑（図版18～21・36・37）

各土坑の観察は、第４表に記したとおりである。分布については、ピット群とほぼ重なり合う地点に存在するもの、縁辺部にあるものの二通りがある。縁辺部に存在するものの中には、古代の遺物が出土したＳＫ－１・３ａ・３ｂ・４が存在するが、中央付近に存在するものが縄文時代に属し、縁辺部に存在するものが古代に属するという位置付けはできない。しかし、その分布には、時期差もしくは機能差が考えられるため、以下はその分布ごとに詳細を述べたい。

平坦面のほぼ中央、Ｓ－18～19グリッドに点在するＳＫ－53・54・64・66は、いずれも平面形態が隅丸方形を呈し、径が80cm×80cm程度と、大きさもほぼ同じである。深度はＳＫ－54が２cmと極端に浅いほかは、いずれも10cm～20cm程度となる。覆土は褐色土を主体としており、木炭粒の含有は少量である。ほぼピット群の密集地と重なり、覆土や平面形態が類似していることから、これらのほぼ同一の機能を有していたものと考えられる。

ピット群と重複しない地点に存在する土坑は、ＳＫ－１・３ａ・３ｂ・４・47・104・105が挙げられる。出土遺物等から、ＳＫ－１・３ａ・３ｂ・４とＳＫ－47・104・105は時期を異にするものと考えられる。

ＳＫ－１は、本地区の東端の斜面にかかるところに位置する。径は110cm×90cm、深度は最深で20cmとなる。覆土は上層が木炭粒を若干含む褐色土であり、下層が明褐色土である。出土遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・鉄滓であり、土師器・須恵器は遺構内からの出土であるが、縄文土器・鉄滓は表採である。その性格は判然としない。ＳＫ－３ａ・３ｂ・４は、平坦面の北端、Ｔ－19～20グリッドに位置する。覆土は、ＳＫ－４が褐色土主体で、ＳＫ－３ａは木炭粒および焼土の若干交じる褐色土を主体としている。ＳＫ－３ｂの覆土は、焼土が多量に混入するものであるが、床面は焼けておらず、この焼土は廃棄されたものと思われる。出土遺物は、土師器である。

Ｑ～Ｒ－20グリッドに存在するＳＫ－47は、Ｃ地区では最も平面形が大きい遺構である。径は170cm×150cm、深度は36cmであり、覆土はしまりのない暗褐色土である。Ｄ地区に向かう尾根上、トラップピット

の存在する付近にＳＫ－104・105が存在する。ＳＫ－104は、Ｕ－16グリッドに位置するもので、径は70㎝×70㎝、深度は30㎝である。覆土は明褐色土である。ＳＫ－105は径が150㎝×150㎝と大きい。覆土は、上層が木炭粒を若干含む褐色土を主体とし、下層が地山土の含有が多い明褐色土である。出土遺物はない。ＳＫ－47・105は、平面形態等も類似しており、機能的にも何らかの類似が考えられる。

d　その他の遺構

この他の遺構としては、ＳＸ－２、ＳＲ－57ａ・ｂ、ＳＤ－84が検出されている。ＳＸ－２の所属時期は、出土した土器から平安時代と考えられるが、特異な平面形態を持ち、その性格は明らかではない。ＳＲ－57ａ・ｂは、旧道跡と考えられる。なお、Ｃ地区で検出されたトラップピットについては、Ｄ地区のものとともに第Ⅶ章で記述することとする。

ＳＸ－２（図版19・35）　Ｓ－20～21グリッドに位置する。最大約4.5m×5.5m、深度は最深で10㎝である。北・西・南側を幅10㎝～20㎝、深度は最深で10㎝の溝ａが巡り、さらにその内側に溝ｂが巡る。島状になった中心部の方形部分にピット③・④がある。外側の溝ａに囲まれていない部分に、内側の溝ｂの２角からそれぞれ幅20㎝～30㎝の溝が北東・南東方向に約２ｍほど伸びている。中心部の方形部分は約1.5m×1.8mである。ピット①・⑤・⑦、土坑②・⑧は溝ｂと切り合っている。

以下は覆土について述べる。第１層は、土師器を伴うややしまりがある褐色土層である。第２・３層はしまりがある明褐色土層であるが、第３層は径５㎜～７㎜程度の木炭と焼土を含む。第４層はピット③・④の覆土で、しまりがある暗褐色土層である。第５層はしまりがある褐色土でピット⑤の覆土である。第６・７層は土坑②の覆土であり、特に第６層は焼土が多く混入する。第７層はしまりがある褐色土で、焼土をわずかに含む。

平面的な遺物の出土状況については、特に土坑②のすぐ北側の溝ｂから多く出土しており、層位は第１層である。出土遺物は土師器の破片が大部分で、須恵器坏の破片や内面に黒色処理を施した土師器椀の破片が存在する。時期は平安時代と考えられる。

この遺構については、溝ａ・ｂともに斜面に向かって伸びていて完結していないことから、平坦面の縁という立地条件を活かした遺構であるとも考えられるが、中心部の方形部分が約1.5m×1.8mと狭く、切り合っているピット群の方向とも異なることから、どのような構築物が伴っていたのかは不明である。２重に巡る溝については、溝ａはコの字型に巡り、溝ｂは端部が斜めに伸びるなど、平面形態に相違が認められることから、溝ａは溝ｂの造営後、溝ｂのみでは不十分なために付け加えられたものと考えることもできる。溝自体の深度は、溝ａが溝ｂより若干浅い程度で大きな違いはなく、遺構確認面から10㎝ほどである。溝ｂの端部が斜めに伸びることについては、構築物がＳＸ－２の東側にも存在していたとの見方もできるが、東側はまもなく傾斜のきつい斜面がはじまるところであり、ピット等も検出されていないことから、これらは推測の域を出ない。

ＳＲ－57ａ・ｂ（図版20・21・37）　Ｂ地区からＣ地区を通ってＤ地区へ向かう旧道跡と思われる。平坦面の南縁部に存在する。ＳＲ－57ａはＴ－16グリッドに存在し、ＳＲ－57ｂはＱ－18グリッドに位置する。ＳＲ－57ａは幅約0.2m～1.6mで長さは約6.5m、深度は約５㎝である。ＳＲ－57ｂは幅約0.4m～1.5mで長さは約6.5m、深度は約４㎝である。覆土はＳＲ－57ａ・ｂともに１層で、やや砂質でしまりがある褐色土であった。

ＳＤ－84　Ｒ－18グリッドに位置する。縄文土器が出土している。覆土はややしまりに欠ける褐色土であった。

3 遺　　物

遺物は、縄文時代の土器・石器類と平安時代の須恵器・土師器が出土している。遺構から出土したものは少なく、多くが表採によるものである。表採地点については、前述のように、ピット群の存在する中央付近に縄文土器が多く、平坦面の縁辺部に古代の遺物が多く採取されている。

1）縄文土器（第13図1～26）

1は、幅8㎜程度の半截竹管による半隆起線を二条施したのち、刺突による爪型文を施している。その下部にはＲＬ斜行縄文が施されている。胎土は1㎜程度の砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は暗褐色を呈する。4は、幅5㎜程度の半隆起線を縦に引いたのち、Ｂ字状文を施している。胎土には1㎜程度の砂粒を若干含み、焼成は良好で、暗褐色を呈する。時期は中期前葉と思われる。9はＳＫｐ－7から出土したものである。5㎜程度の半截竹管による半隆起線ののち、小三角形彫刻の連続で蓮弁を表出し、その下部に同じ5㎜程度の半截竹管で再び半隆起線を引いている。胎土は1㎜程度の砂粒を多く含み、焼成はやや良で、色調は黒褐色を呈する。新保Ⅲ式［寺崎1995］と思われる。19はＬＲの地文に鎖状隆帯を施している。焼成は良く、暗褐色を呈する。胎土には1㎜程度の砂粒を多く含む。

このほかの土器片は、無文のものが3・10で、器面にＬＲ斜行縄文が施されるものが5・7・8・14・17・18・20・22・23、ＲＬ斜行縄文が施されるものが2・11・12・13・15・16・21・24・25・26である。色調は暗褐色あるいは褐色を呈し、焼成はいずれもあまり良くない。胎土には1㎜～2㎜程度の砂粒が多く含まれる。

2）石器類（第13図27～29）

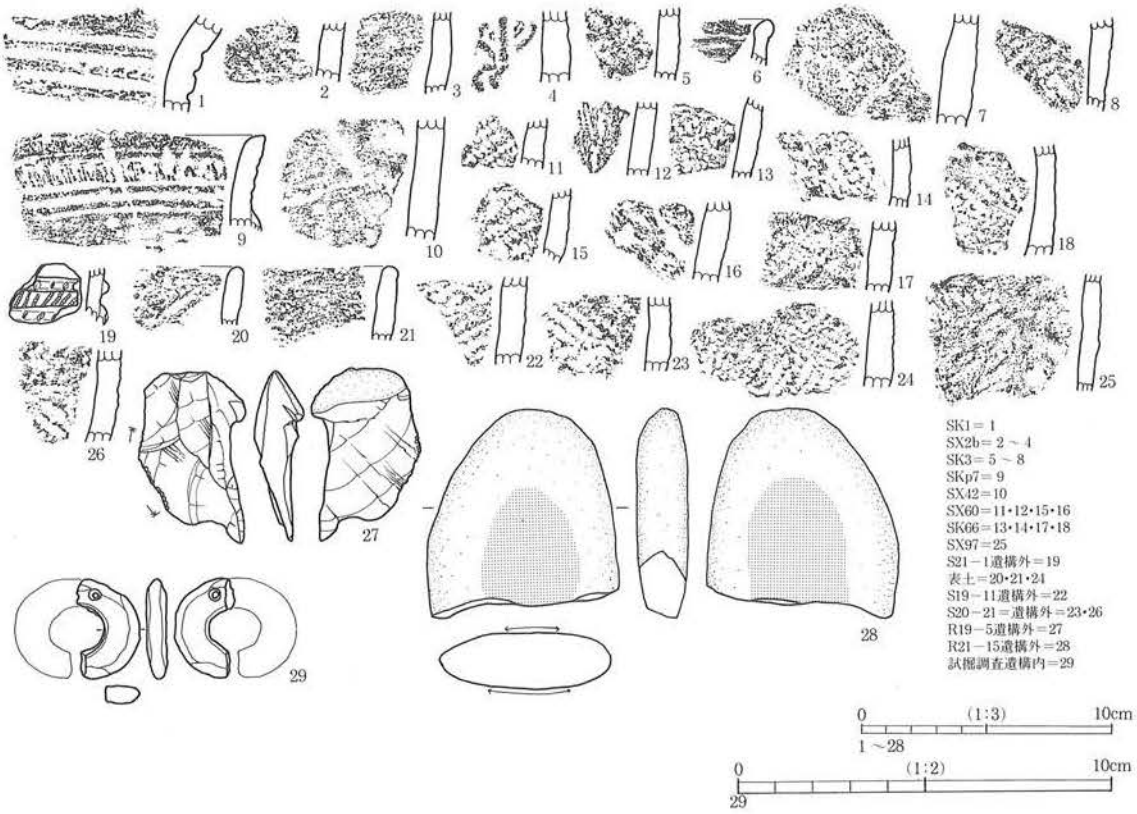
27は遺構外で出土した凝灰岩製の不定形剝片石器である。28は欠損しているが、安山岩製の磨石である。磨り痕は両面に見られる。29は試掘調査時に出土した滑石製の玦状耳飾りの破片である。補修孔が穿孔されている。なお、この耳飾りは、『柏崎市の遺跡Ⅲ』［柏崎市教委1994］で勾玉として報告されたものであるが、今回これを訂正し、玦状耳飾りとして報告するものである。

3）須恵器（第14図1・2）

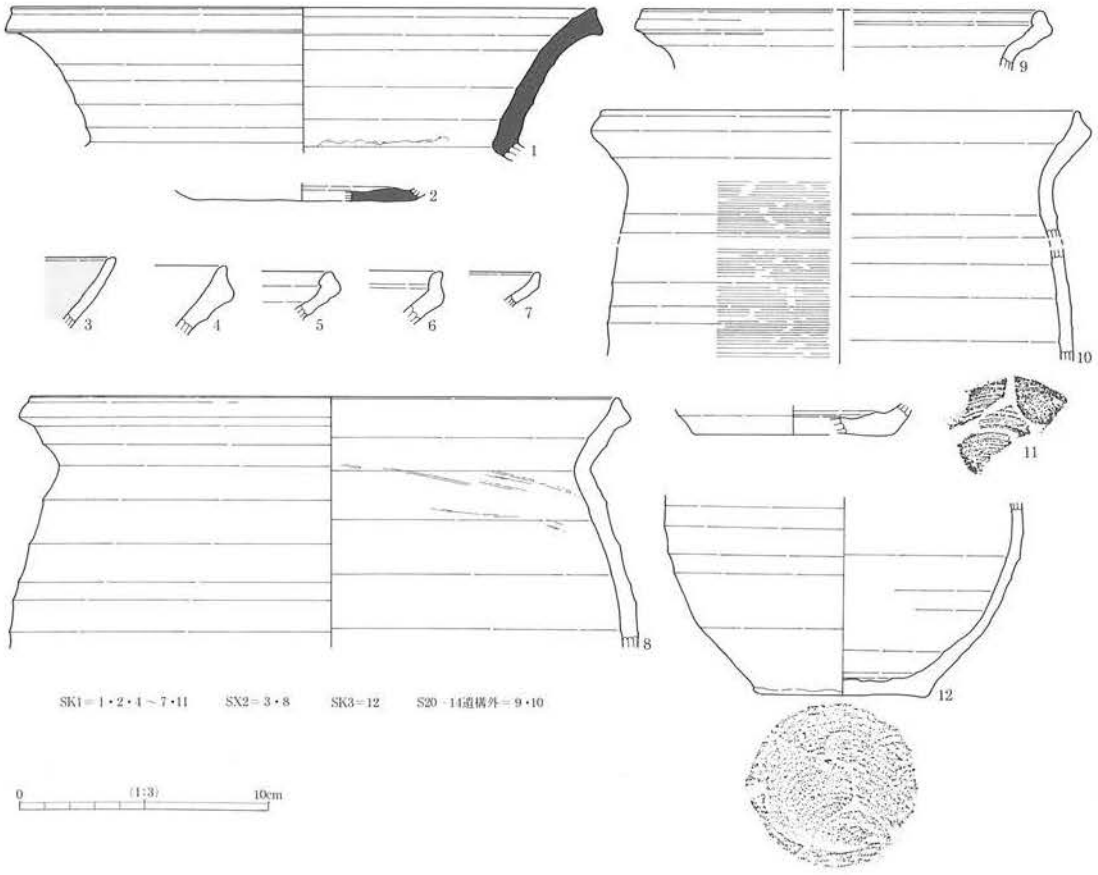
1は、ＳＫ－1から出土した大甕の口縁部～頸部片である。焼成は堅固で暗青灰色を呈する。胎土に1㎜～2㎜程度の砂粒を多く含む。2は同じくＳＫ－1から出土した無台坏の底部片である。ロクロヘラ切りののちナデ調整を行っている。焼成は良好で暗青灰色を呈する。胎土に1㎜程度の砂粒を多く含む。

4）土師器（第14図3～12）

3はＳＸ－2から出土した、内面および外面口縁部端部に黒色処理を施した土師器の口縁部片である。胎土は密で焼成は良好である。色調は明るい橙色を呈する。4～7はＳＫ－1から出土したロクロ成形の甕の口縁部片である。いずれも小片である。胎土は1㎜程度の砂粒が多く混入し、焼成は堅固で、色調はにぶい褐色を呈する。7は口縁部から胴部へむかう部分にススが付着している。8～10は甕の口縁部から胴部の破片である。いずれもロクロ成形である。8はＳＸ－2から出土したもので、胎土に1㎜程度の砂粒、特に石英が多く混入し、焼成は堅固である。色調は内外面とも明るい橙色を呈する。9・10は遺構外で表採されたものである。9は、焼成が良好で、にぶい橙色を呈する。胎土に1㎜程度の石英が多く混入する。10は焼成が不良で、明るい橙色を呈する。胎土に1㎜程度の砂粒が混入する。外面にカキ目が残る。11はＳＫ－1から出土した小甕の底部片である。ロクロ成形である。底部は糸切りで、調整は行われてい



第13図　C地区出土遺物（1）



第14図　C地区出土遺物（2）

ない。胎土に１㎜程度の砂粒が多く混入する。焼成は良好で明るい橙色を呈する。12はＳＫ－３から出土した小甕の底部～胴部片である。胎土は密で焼成は良好、色調は明るい橙色を呈する。底面は糸切りで、調整は行われていない。これらの土師器は平安時代に属するものと思われる。

4　Ｃ地区のまとめ

Ｃ地区では、ピット群、土坑や旧道跡などの遺構が検出されている。当初は縄文時代の遺跡を想定して調査が進められたが、古代の遺跡も存在することが明らかになった。

縄文時代の遺物は、中期前葉の土器が出土しており、Ｃ地区で縄文時代に生活が営まれたのが中期前葉の段階であることが判明している。ピットの個別の時期が判然としないことと、炉跡等が確認されていないため、住居の復元はあくまで試案の段階である。この他に、Ｄ地区に続く尾根上の平坦面でトラップピットが検出されている。詳細は第Ⅶ章で述べるが、Ｄ地区で検出されたものと同一形態であり、所属時期は縄文時代前期前葉～後期後半期の時期に合致するものと思われる。土坑群は遺物が出土しておらず、いずれの時期とも決めがたいが、その検出地点により何らかの機能差を有していたと考えられる。

古代は平安時代の遺物が出土している。点数は多くないが、土師器の甕・小甕や内黒椀、須恵器無台坏の破片等が表採・発掘されている。古代の遺物が出土した遺構は、ＳＫ－１、ＳＸ－２、ＳＫ－３であるが、いずれも平坦面の縁に位置している。これらは、性格が不明の遺構で、縄文時代のピット等が平坦面の中央部分に存在するとすれば、縄文時代とは異なった土地利用がなされていたと考えられる。平坦面中央部分には、試案の域を出ないものの、ＳＢ－114が復元されている。

柏崎平野の古代の集落跡と考えられる遺跡は、多くが沖積地に立地している。この時期の集落は、耕地との一体化により沖積地に成立したと考えられている［柏崎市教委1990ｃ］ため、Ｃ地区は、自ずとそれら沖積地に位置する遺跡とは違った性格が考えられよう。丘陵地帯に存在する古代の遺跡というと、藤橋東遺跡群［柏崎市教委1995］に代表される製鉄遺跡やそれに伴う木炭窯、鍛冶遺構であるが、このＣ地区ではそのような生産の痕跡は見受けられない。Ｃ地区にどの程度の規模の古代の「集落」が形成されていたかどうかは不明である。しかし、ピットの数から考えても、住居跡は多くはないものと思われる。一方、出土遺物は煮炊き用と食膳具が少量ながら出土している。このことは、ここで行われたことが、少人数の人間が何日かの滞在を必要とした用事であることが推測できるが、では、それは何であろうか。

古代における田塚山周辺の景観は不明瞭な部分が多いが、奈良時代末から平安時代にかけて鉄生産が行なわれていた柏崎平野南部丘陵一帯とは異なり、海岸からは近いが木材資源も限られた場所ではそのような工業生産には向いておらず、ごく小規模な利用のされかたがなされていたものであろう。それは、少ない人数が一定期間山にいれば事足りる「杣」のようなものであったかも知れない。

このような「田塚山の開発・利用」の実態がどのようなものであったのか、また利用していた人々が柏崎平野のどの地域の人々なのかを考えるための遺構・遺物が出土しているわけではなく、想像の域を出るものではない。田塚山遺跡群の近隣に位置する古代の遺跡は、不退寺遺跡があるのみで、多くは別山川流域に存在する。今後、資料の蓄積を待って、古代の田塚山の利用のされ方を考えていきたい。

Ⅶ　田塚山Ｄ地区

1　Ｄ地区の概要と遺構の分布

1）　Ｄ地区の概要

Ｄ地区は田塚山のなかでも最も北側に位置し、南側のＣ地区とはやや広い平坦面のある尾根で連結し、南西側のＥ地区とは細い尾根で連結している。本地区は、本遺跡群では３番目に広い平坦面を持つ。そのため、当初から縄文時代の遺跡が想定されていた。試掘調査時およびその後の補足調査では、台地上の平坦部から、焼土坑や、土器片を伴うピット複数と根痕が検出されている。この結果から、遺跡の範囲は、斜面部まで広がらず、平坦部に限られると考えられた。このため、調査区も平坦面を中心として進めることとなった。確認された遺構の詳細は後述するが、縄文時代と思われるものが多い。Ｄ地区の最終的な調査面積は1607.8㎡である。

2）　遺構の概略と分布

Ｄ地区では、本調査のさいにピット、土坑、トラップピット、木炭窯、旧道跡等が検出されている。

ピットの分布は、現在の平坦面からやや東側に偏っている。遺構密度は希薄であり、ピット自体は切り合っていない。南西側のＥ地区の遺構密度とは非常な違いである。これらのピットから出土した縄文土器の多くは小片の粗製土器であるが、表採された遺物の中に、縄文時代中期前葉に属する土器片があったことから、本地区は、縄文時代中期前葉に属すると考えられる。形態からトラップピットと考えられる遺構は、Ｄ地区のＴＰ－64と、Ｃ地区のＴＰ－102・103・106の４基確認されている。ピットとトラップピットの時期的関係は、土器が出土していないことから明らかではない。いずれもＣ地区へ続くやや広い尾根上に存在する。土坑は、覆土の観察から、ＳＫ－66が旧道跡より新しいことが判明しているのみで、時期および性格不詳のものが殆どである。本地区の北西端で検出された木炭窯は、遺物は存在しないが、その形態から近世以降のものと判断した。このほかに近年まで使用されていたという旧道跡が確認されている。

2　遺　　構

a　ピット・土坑（図版22・23・39）

遺構確認の段階で検出したピット数は66であったが、発掘調査の結果、根痕であるものを除外するとピット数は32基となった。これらピットの詳細は、第５表に記載した。いずれも径は30㎝前後で、深度は10㎝～50㎝である。深度が30㎝以上となるものは４基ほどしかなく、多くは20㎝以下である。直径の平均が24.63㎝で、深度の平均は16.41㎝である。出土した遺物は、縄文土器の小片が殆どであり、他に磨石が出土したＳＫｐ－31や，蛇紋岩の原石が出土したＳＫｐ－38が存在する。覆土に大量の木炭粒を含むＳＫｐ－35・31・35・36もあるが、多くはしまりのある褐色土を主体とする。柱痕は観察されていない。

土坑はピットよりも相対的に大きいものとした。土坑としたものは３基である。ＳＫ－43・47はピット群の近くに存在する、いずれも平面形が楕円形の遺構であるが、ＳＫ－66はピット群と離れた場所にある

第５表　Ｄ地区遺構観察表（単位はcm、番号がないものは欠番。木炭粒　多◎、やや多○、少々△、記載無し－）

遺構名	グリッド	平面形	径(長軸×短軸)	深度	覆　土／木炭粒		出土遺物	備　　考
ＳＸ－１	Ｘ－11	隅丸方形	150×100	10	図版37			炭窯
ＳＸ－３	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－６	Ｗ－12	円形	20×17	11	暗青灰白色、しまり有	△		
ＳＫｐ－７	Ｗ－12	円形	22×17	21	褐色土	△		
ＳＫｐ－８	Ｗ－12	円形	20×19	22	暗青灰白色土	－	縄文土器	ＳＩ－60
ＳＫｐ－９	Ｗ－12	円形	22×20	18	暗青灰白色土	－		ＳＩ－60
ＳＫｐ－10	Ｗ－12	円形	20×19	15	褐色土	－	縄文土器	ＳＩ－60
ＳＫｐ－12	Ｗ－12	円形	23×22	20	青灰白色土	－	縄文土器	ＳＩ－60
ＳＸ－13	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－14	Ｗ－12	円形	26×25	20	明青灰白色土	－		ＳＩ－60
ＳＸ－15	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－16	Ｗ－12	円形	19×18	11	褐色土	－		
ＳＫｐ－19	Ｗ－12	円形	21×18	14	褐色土	－	縄文土器	
ＳＫｐ－20	Ｗ－12	円形	25×24	9	明青灰白色土	－	縄文土器	
ＳＫｐ－21	Ｗ－12	楕円形	23×19	31	暗青灰白色土	－		
ＳＫｐ－22	Ｗ－12	楕円形	23×18	16	暗青灰白色土	－		ＳＩ－60
ＳＸ－23	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－24	Ｗ－12	円形	29×29	9	暗黒褐色土	－	縄文土器	
ＳＸ－26	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－28	Ｘ－12	円形	26×25	10	暗褐色土	－		ＳＩ－61
ＳＫｐ－29	Ｘ－12	円形	23×22	8	褐色土	－		ＳＩ－61
ＳＫｐ－30	Ｘ－13	楕円形	26×23	48	褐色土	◎		
ＳＫｐ－31	Ｘ－13	円形	30×29	34	暗青灰白色土	◎	縄文土器・磨石	ＳＩ－62
ＳＫｐ－32	Ｘ－13	円形	25×25	29	褐色土	－	縄文土器	ＳＩ－62
ＳＫｐ－33	Ｘ－13	円形	24×23	11	暗青灰白色土	－	ＳＩ－62	
ＳＫｐ－34	Ｘ－13	円形	20×19	2	褐色土	－		ＳＩ－61
ＳＫｐ－35	Ｗ－13	円形	30×28	11	暗青灰白色土	◎		ＳＩ－61
ＳＫｐ－36	Ｗ－12	円形	19×18	7	褐色土	◎		ＳＩ－61
ＳＸ－37	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－38	Ｘ－13	円形	26×24	15	褐色土	－	蛇紋岩	ＳＩ－61
ＳＫｐ－39	Ｘ－13	円形	30×30	39	褐色土	△	縄文土器	ＳＩ－62
ＳＸ－40	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－41	Ｘ－13	楕円形	19×16	7	褐色土	△		
ＳＫｐ－42	Ｘ－13	楕円形	18×14	5	暗青灰白色土	△		
ＳＫ－43	Ｗ－13	楕円形	51×50	9	暗褐色土	－		
ＳＫｐ－44	Ｗ－13	楕円形	30×24	27	暗青灰白色土	－		ＳＩ－63
ＳＫｐ－45	Ｗ－13	楕円形	28×21	16	暗褐色土	◎	縄文土器	ＳＩ－63
ＳＫ－47	Ｗ－13	楕円形	56×38	3	青灰白色土、ポソポソ	－		
ＳＫｐ－48	Ｗ－13	楕円形	36×29	7	褐色土	－		
ＳＫｐ－49	Ｗ－13	楕円形	25×21	5	褐色土	－		
ＳＸ－50	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＫｐ－52	Ｗ－13	円形	20×18	10	褐色土	－		ＳＩ－63
ＳＫｐ－53	Ｗ－13	楕円形	40×37	17	暗青灰白色土	◎	縄文土器	ＳＩ－63
ＳＸ－55	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－56	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＲ－57	Ｗ－11～ Ｖ-11~13	溝状	長さ2600 幅150～250	33	図版39		円礫多数	旧道跡
ＳＸ－58	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＴＰ－64	Ｖ－13	－	長さ273、幅42	80	図版39			トラップピット
ＳＫ－66	Ｖ－13	不定形	310×140	32	図版39		縄文土器	ＳＲ－57より新
ＳＸ－68	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－69	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＳＸ－70	－	－	－	－	－	－	－	根痕
ＴＰ－102	Ｕ－16	溝状	長さ343、幅56	48	図版39			トラップピット
ＴＰ－103	Ｕ－15	溝状	長さ216、幅36	44	図版39			トラップピット
ＴＰ－106	Ｕ－14	溝状	長さ342、幅62	98	図版39			トラップピット

不定形の土坑である。ＳＫ－43はしまりがある暗褐色土を主体とした覆土で、深度は９cmである。ＳＫ－47はしまりのない青灰白色土を主体とした覆土で、深度は３cmと浅い。いずれも出土遺物はない。墓坑や貯蔵穴であると考えるには、深度や覆土に問題がある。ＳＫ－66は、ＳＲ－57より新しく、覆土は２層に

分けられる。上層のしまりがある褐色土は土坑の北側に偏って埋められたものである。下層は木炭粒を若干含むしまりがある褐色土である。出土した縄文土器はいずれも流れ込みと考えられ、この土坑の造成時期及び性格は不明である。

b　住居跡（図版22・38）

ピット群の中で、深度や覆土等の観察から、住居跡と考えられるものを図版22・38に示した。本地区では、炉跡や、住居跡に伴う掘り込み等は検出されておらず、柱穴配置には不確定な要素も持つため、この復元はあくまで試案の域を出ない。この中には、検出できなかったピットが存在すると考えられる住居跡もあるが、多くは５本から６本のピットで構成される住居であると思われる。いずれも床面と思われる面は検出されていない。以下、個別に報告していくこととする。

ＳＩ－60　Ｗ－12グリッドに位置する、径が20cm前後、深度が10cm～30cmのピット６本で構成される住居跡である。長軸は４ｍ、短軸は2.4ｍである。本地区では最も中央部に位置する。ＳＫｐ－８・10・12からは縄文土器の小片が出土している。

ＳＩ－61　Ｗ－12～13～Ｘ－12～13グリッドにわたって存在し、径が25cm前後で、深度が比較的浅い20cm以下のピット６本で構成される、本地区では最も大きな住居跡である。東側にもう１本柱穴が存在するかとも思われるが、検出されていない。長軸は5.2ｍ、短軸は4.2ｍである。ＳＫｐ－38から蛇紋岩の原石が出土している。

ＳＩ－62　Ｘ－13グリッドに位置する住居跡で、他の住居跡に比べ深度が20cm以上の深めのピット５本で構成されている。ピットの径は20cm～30cmである。ＳＫｐ－30は48cmと、Ｄ地区ではもっとも深い。長軸は3.5ｍ、短軸は2.5ｍである。ＳＫｐ－31・32から縄文土器の小片が出土、ＳＫｐ－31から磨石が出土している。

ＳＩ－63　Ｗ－13グリッドに存在する住居跡で、深度が10cm～30cm、径がやや大きめの30cm前後のものが４本のうち３本存在する。東側にピットが１本存在するかとも思われるが、検出されていない。長軸は4.7ｍ、短軸は3.7ｍである。本地区では最も東側、台地の際に位置する住居跡となる。ＳＫｐ－45・53では縄文土器の破片が出土している。

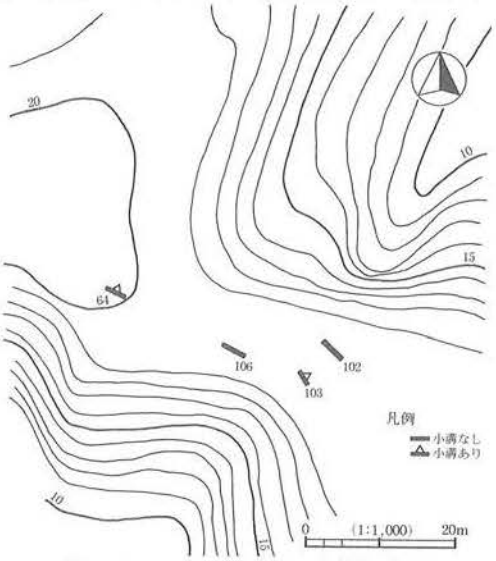
c　トラップピット（図版21・23・39）

溝状土坑あるいはＴピット等と呼ばれる細長い形態の陥穴で、田塚山遺跡群では４基が確認されている。ＴＰ－102・ＴＰ－103・ＴＰ－106は、調査当初に設定した区分ではＣ地区に含まれるが、調査過程で最初に確認されたＤ地区ＴＰ－64との関連性が強いため、Ｄ地区に含めたものである。遺構番号については、Ｃ地区において当初設定したままとし、混乱を避けるため、その後の変更はしていない。

ＴＰ－64はＶ－13グリッドに位置する。長軸の方向はＮ－65°－Ｗで、等高線に平行して配置されている。遺構確認面での規模は273×42cmで、深度は80cm、遺構底面は規模264×32cmである。遺構底面にも小溝の掘り込みが認められ、小溝の壁面ラインに沿って堆積する土層も確認されたことから、何らかの仕掛けの存在が想定される。この小溝の規模は上部が248×20cmで、底部が207×８cm。遺構底面からの深度は８cmである。遺物の出土はなく、時期不詳である。ＴＰ－102はＵ－16グリッドに位置し、ＴＰ－103とともに等高線に沿った列をなしている。長軸はＮ－47°－Ｗを指向し、遺構確認面での規模は343×56cmで、深度は48cmを計測する。遺構底面の規模は316×16cmで、小溝あるいは小穴の穿たれた痕跡は認められない。ＴＰ－103はＵ－15グリッドに位置し、遺構確認面での規模は216×36cm、深度は44cmを測る。遺構底面の規模は、204×15cmである。長軸はＮ－38°－Ｗを指向し、遺構底部にも小溝の掘り込みが認められる。

小溝は上部の規模が168×13cm、底部が168×12cm、遺構底面からの深度が14cmで、垂直に掘り込まれている。遺構覆土は単一層の堆積であったが、底面の小溝の存在から、ＴＰ－64と同様の仕掛けのあったことが示唆される。ＴＰ－106はＵ－14グリッドに位置し、等高線に平行して配置されている。遺構確認面における規模は342×62cm、深度は98cmで、遺構底面の規模は330×20cmである。長軸の方向はＮ－60°－Ｗで、遺構底面の小溝や小穴は検出されていない。なお、遺構壁面と地山土との境に暗褐色土の堆積が認められたため、サブ・トレンチを設定して調査を行ったが、結局この土層は旧地下水路等の痕跡であり、切り合い関係から本遺構よりも古いものと分かった。

今回の調査で検出されたトラップピットは、溝状を呈する陥穴としては、新潟県内で最も海岸に近い例となろう。４基ともに細い尾根筋の平坦面に配置され、等高線に平行している。列として把握できるのは、ＴＰ－102＝103ラインだけである。通常の検出例では数十基が配列されているが、本遺跡例は配置されている場所が地形的に細い尾根上であるため、台地を横切るには２基だけでも充分であろう。形態的には五丁歩遺跡例［新潟県教委1992］や岩原Ｉ遺跡のＦ類［新潟県教委1990］等と近似している。この類型には、各地での調査例から縄文時代前期前葉～後期後半期までの時期が与えられており、本遺跡例もこの範疇に比定できよう。土坑状陥穴や岩原Ｉ遺跡Ｅ類に含まれる陥穴状土坑には、底面に小穴のある例がみられるが、岩原Ｉ遺跡Ｆ類に相当するものには管見資料中に認められなかった。本遺跡例では、遺構底面に小溝が確認され、土坑状陥穴とＴピットにおける仕掛けの相違が示唆された。本例からは、獲物を転倒させるための仕掛けの存在が連想され、墜落した獲物を逆茂木等で負傷させる土坑状陥穴とは異なるものである。これは「罠」としての両者の性格を端的に示すものであろう。本例では巻狩式に獲物を追い込み、罠によって転倒したところを捕獲した可能性が高いと思われる。そのため、周辺の性格不明遺構の中に柵や垣等が存在している可能性も否定できない。



第15図　トラップピット分布概略図

d　その他の遺構（図版22・23・37・39）

その他の遺構として、ここではＳＸ－１、ＳＲ－57について述べることとする。

ＳＸ－１　Ｄ地区北西端、Ｘ－11グリッドに位置する木炭窯である。上端1.5m×１m、下端1.2m×0.7mの長方形で、深度約10cmである。覆土は、第１層が、窯の天井が崩落したもので地山土と第３層が混合した暗褐色土である。第２層は基本的に第１層と同じ暗褐色土であるが、第１層より木炭の量が多い。第３層は黒褐色土で、窯内部に残された木炭屑である。火照面はない。遺物は発見されていないが、形態から近世以降と思われる。

ＳＲ－57　Ｄ地区の南側の縁、Ｖ－11～13～Ｗ－11グリッドに存在する旧道跡である。覆土は基本的に２層に分けられる。第１層はしまりがある褐色土、第２層がしまりがある明褐色土である。１回目に道を平坦にしたときの土は第２層で、２回目に相当するのが第１層と考えられる。いずれの造成時期も明らかではない。道内の主に西側で円礫が数点出土しているが、いずれも浮いた状態での出土であった。これら円礫の使用目的は不明である。東端の二股になった部分で、Ｃ地区へと続く道と、道が機能していた時点では存在していた、東方の尾根続きの平坦面に続く道とに別れていたものであろう。

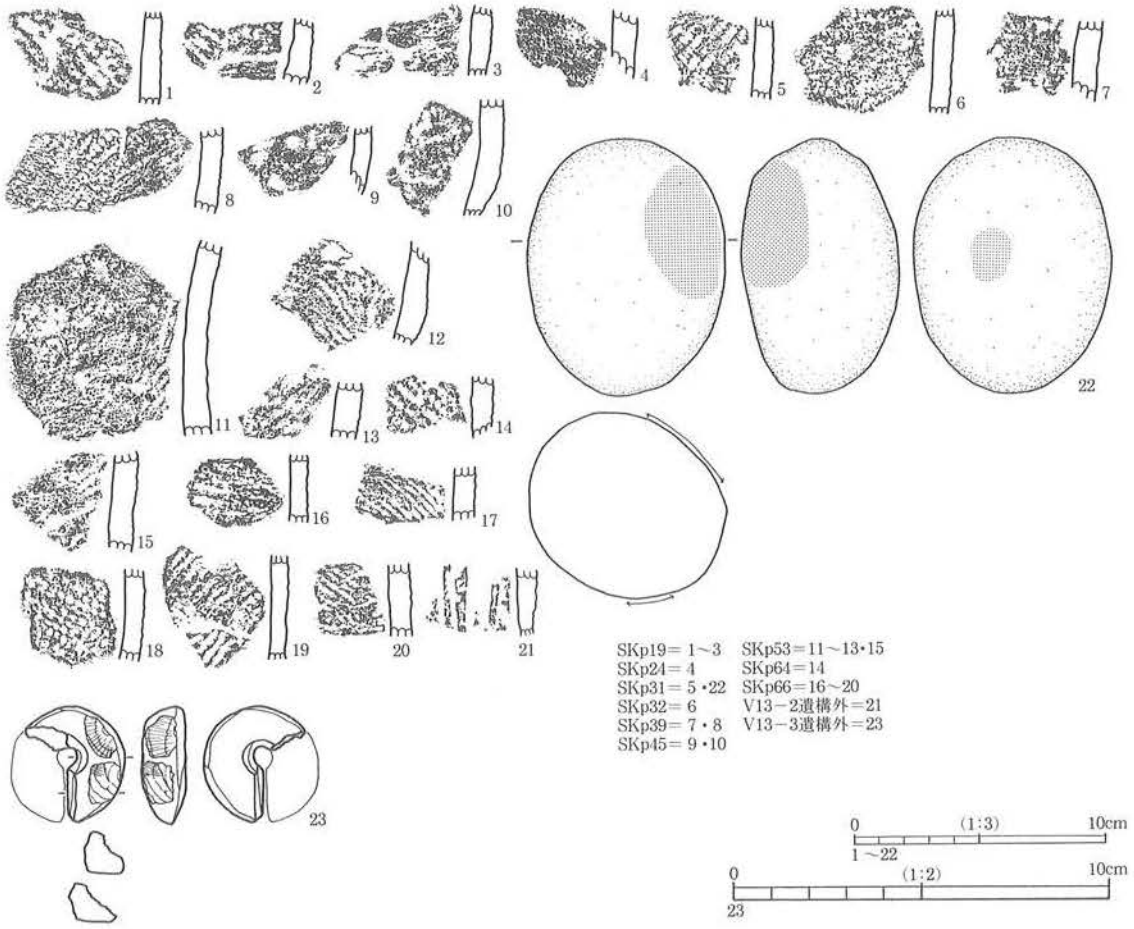
3 遺　　物

D地区の主な出土遺物は、縄文土器と石器類である。ピット・土坑から出土したものと、表採されたものがある。出土土器の多くは図示が困難な小片であり、器面の摩耗が著しいものであった。石器は、磨石と玦状耳飾りの破片が１点づつ出土したのみである。

縄文土器（第16図１～21）　胎土中には直径１㎜前後の砂粒を多く含み、石英が顕著な破片が多い。色調は概して褐色～にぶい褐色を呈し、焼成はやや不良である。無文のものが３・４・６・７・９、ＬＲ斜行縄文が施されているものが２・８・10・12・13・15・16・18・19、ＲＬ斜行縄文の施されているものが１・５・11・14・17・20である。19は内面に炭化物の付着がみられる。

21は、胎土中に１㎜前後の砂粒を若干含み、色調が黒色を呈する深鉢の胴部片である。焼成は良好である。調整隆起線技法による縦位下垂文の上に、竹管技法の刺突による爪形文を施している。新崎式併行期と思われる。

石器類（第16図22・23）　22は安山岩製の磨石である。磨痕は両面に残る。23は滑石製の玦状耳飾りの破片である。大きく２ケ所が欠損している。断面を見ると、片面のみが隆起しているもので、もう片面は筋状に研磨の痕跡が残るものの、平滑に仕上げられている。穿孔は両面から行なわれている。切れ目の部分は、隆起している面からは面に直角に平滑に研磨されているが、片面からは斜めに研磨されており、研磨痕が残る。



第16図　D地区出土遺物

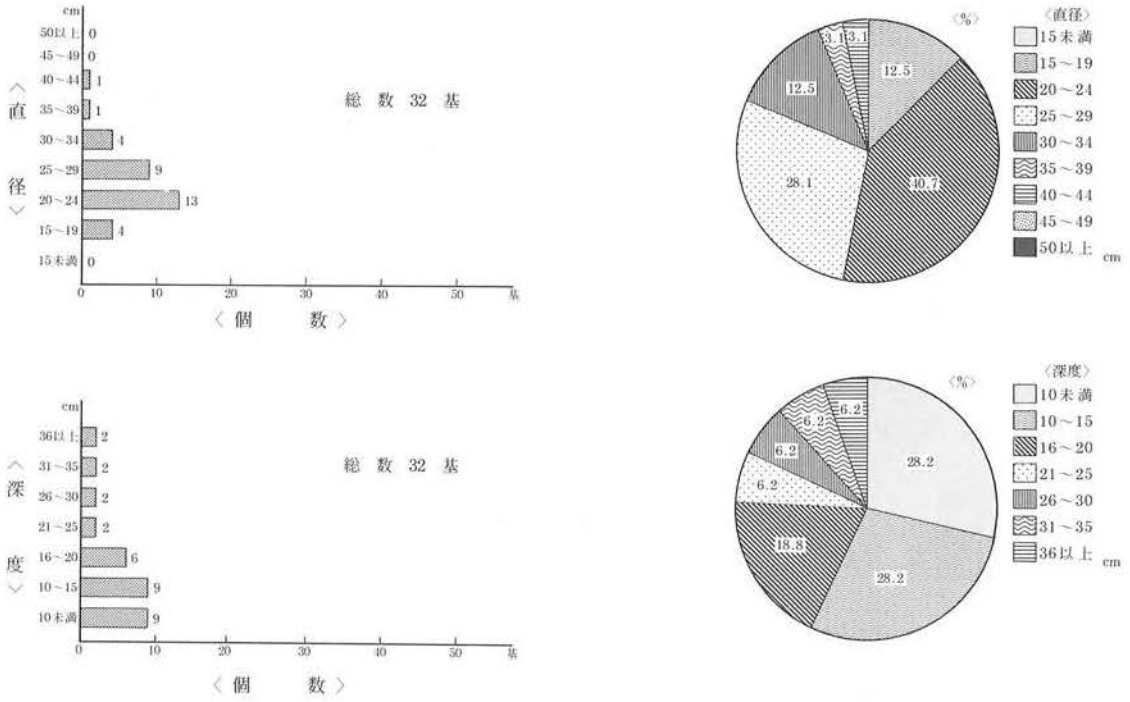
4　D地区のまとめ

本地区では、縄文時代の集落跡、トラッピット、旧道跡、木炭窯などが確認された。縄文時代の集落は、土器から、新崎式併行期と考えられる。遺構の分布は概して散漫である。復元できた住居跡は4棟であるが、ピットの配列等によったもので、炉跡等が確認されていないため、試案の域を出ない。

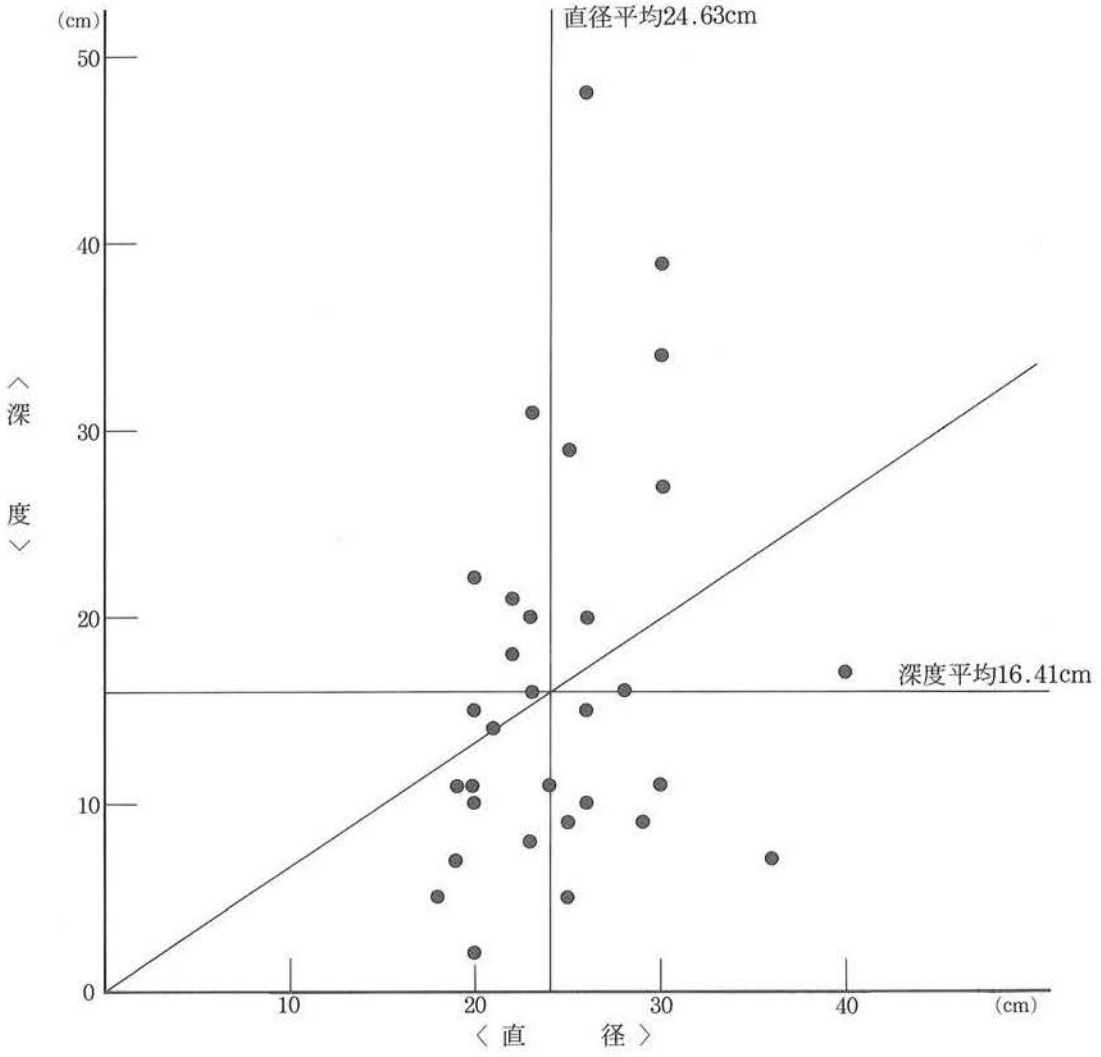
本地区およびC地区で確認された4基のトラッピットは、出土遺物はないが、その形態から縄文時代前期前葉～後期後半期と考えられる。本遺跡群のトラッピットは海岸線から約3㎞と、県内の分布例では最も海岸に近い遺跡例となるものと思われる。市内では他に、小児石遺跡・呑作A遺跡・京ケ峰遺跡・千古塚遺跡で陥し穴が確認されているが、平面形は隅丸方形、平底を呈する底面には中央に小孔が穿たれているものが多く、本遺跡群のように溝状を呈するものは検出されていない。

D地区のピットは、E地区に比較すると、深度の平均が若干深い（第18図）。しかし直径と深度の比率から考えると、1：5であり、径からすると深度が非常に浅い結果となる。これはE地区のピット群でも類似の結果が出されている（第Ⅸ章参照）。『屁振坂遺跡』［品田1996］によれば、この地域の縄文時代前期後半～中期前葉期は、遺跡の数が増加する時期であり、それは単に同じ類型の遺跡が増加する訳ではなく、第Ⅰ類型と第Ⅱ類型の大きく2つに分類され、第Ⅱ類型は越冬用の備えが確認できないことから、夏の集落として捉えられている。これにあてはめるならば、D地区は、柱穴の規模および深度や遺物等から、第Ⅱ類型、夏の集落と考えられよう。

周辺の中期前葉の代表的な遺跡としては、大規模な環状集落が想定される十三仏塚遺跡［柏崎市教委1992］、鵜川左岸の丘陵上に位置し、大規模な集落跡が想定される剣野B遺跡［柏崎市教委1990b］、小規



第17図　D地区ピット類法量分布図（1）



第18図　D地区ピット類法量分布図（2）

模ながら広場と廃棄場を持つ集落跡である京ケ峰遺跡・呑作A遺跡［柏崎市教委1995］、広場の存在が確認された大沢遺跡、炉跡を持つ平地式の住居が確認されている雨池遺跡がある。これらの遺跡とD地区がどのような集団関係にあったのかは現在のところ明らかではない。

また、D地区で復元された住居跡は、E地区で復元されたものと平面形態が異なる（第Ⅶ章参照）。この復元はあくまで試案の域を出るものではなく、E地区は刈羽式併行期の遺跡で、D地区に先行する時期であり、2つの地区は時期的に異なる。平面形態の違いが時期的なものなのか、集団の違いなのかは、にわかに判断できない。ただ、ピット数からも明らかなように、D地区は、E地区ほど建て替えを重ねておらず、少なくとも2時期程度の建て替えしか行われていないと思われる。E地区の集団のように回数を重ねることなく、短期間でD地区から離れたということは、この単位集団が解体したか、居住する土地を新たに開発したということになろうと考えられるが、それがどこであるのかは現段階では確認できない。

D地区は、集落の規模は小さいものであったが、夏の集落と考えることによって対応する冬の集落や、D地区の集団と同じように夏期に分散していると考えられる小集団の存在を想定することができる。今後はその検証を通じて、D地区のような小規模の遺跡の形態を考えていきたい。

Ⅷ 田塚山E地区

1 遺　　構

1） 遺構の概略と分布（図版６）

E地区は、今回の調査対象区域の中では最西端に位置する。東側に位置するD地区とは細い尾根筋により区分される。他地区との連続性にはやや乏しく、地形的には本地区のみである程度のまとまった広がりをみせる。現況は山林で、E地区の西側にも尾根筋が広がり、遺跡の延長が想定されるが、ここは緑地帯として保存されることが決定されていたため、今回の調査対象地からは除外した。

E地区から検出された遺構は、大半がピット類と土坑類であった。遺構から出土した遺物は概して少なく、出土したものも小破片や時期判断の困難なもので占められていたが、時期判断の可能な数点の土器片は縄文時代前期後半に比定できるものであった。このことから、遺物の出土しなかったピット類・土坑類も縄文時代前期後半期の所産として捉えたのであるが、他時期あるいは他時代に属する遺構が含まれている可能性は否定できない。また、縄文時代前期以外には、近世以降の所産である尾根道の痕跡や時期不明の溝跡等も検出されている。なお、遺構の発掘にあたっては、旧道の痕跡は部分的な発掘、倒木痕については縄文土器片の出土が認められたため、いくつかを完掘したが、全ては発掘していない。

今回の調査対象区域内におけるE地区の遺構分布は、標高18.5m以上の平坦部に密集しており、斜面部には全く認められなかった。標高が18.5m以上であっても、微傾斜となっている北部や東部、南東部にも遺構はみられず、極微傾斜地のみを選択していたことが窺え、その結果約23m×19mの範囲内に総数215基の遺構が集中して営まれたと考えられる。また、検出されたピット類の中には直径や深度から柱穴の可能性が高いものが多くみられ、本地区の性格は、縄文時代前期後半期に営まれた比較的小規模な集落跡であると考えられる。

2） 遺 構 各 説（図版24・25・40・41）

a 住　居　跡

今回の調査で把握できた住居跡は４基である。竪穴住居跡としての壁面は検出されず、把握した４基は柱穴の配列等からの復元案である。197基ものピット群の中からの抽出であり、炉の痕跡を示す焼土も検出されていないことから、復元作業は困難を極めた。そのため、ピット数からは、数段階の建て替えにより少なくとも20前後の住居跡が存在していた可能性が考えられるが、今回は把握することができなかった。また、把握したとする４基についても試案であることを明記しておきたい。

ＳＩ－401　本住居跡は、Ｒ－５・Ｓ－５グリッドに位置し、ＳＫｐ－135・ＳＫｐ－146・ＳＫｐ－156・ＳＫｐ－189・ＳＫｐ－196の５本柱で構成され、非対称となっている。柱穴の配置から不整楕円形と考えられ、規模は415cm×350cmである。柱穴の掘り方は直径26～50cm、深度22～49cmとやや均一性に欠けている。床面と考えられる硬い面は認められなかったが、遺構確認面においては地形的にほぼ平坦であった。ＳＫｐ－146とＳＫｐ－147が重複していたが、ＳＫｐ－147の方が新しいものであった。なお、ＳＫｐ－135からは口頸部に貼付隆帯を施した土器が出土しており、刈羽式土器併行期に比定できると考えられる。

ＳＩ－402　Ｒ－５グリッドに位置し、ＳＫｐ－４・ＳＫｐ－８・ＳＫｐ－10・ＳＫｐ－15で構成される。本住居跡の西半部は調査区外に存在すると考えられる。そのため、実際に調査を行った柱は４本のみであったが、おそらく６～８本の柱によって構成されていたと推定する。調査区域内から検出された柱の配置から推定して不整楕円形と考えられる。調査部分の規模は360cm×230cmである。柱穴は直径30～70cm、深度31～50cmと比較的大きくて深い掘り込みなのが特徴である。床と考えられる面は認められないが、地形的にはほぼ平坦であった。ＳＫｐ－10から出土した土器は、繊維を含まない非結束羽状縄文の施文されたもので、刈羽式土器併行期に属すると思われる。

ＳＩ－403　Ｓ－６グリッドに位置し、ＳＫｐ－211・ＳＫｐ－322・ＳＫｐ－334・ＳＫｐ－337で構成される。本住居跡の北半部はＳＸ－336倒木痕によって攪乱、あるいは確認できない状態となっていた。そのため、５～６本柱で構成されていたと推定されるが、柱は４本を確認できただけである。平面形は、柱穴の配置から不整楕円形と考えられる。確認できた範囲の規模は355cm×230cmである。柱穴は直径33～41cm、深度17～33cmでと比較的大きくて深いのが特徴である。床面は検出されなかったが、ほぼ平坦な地形上に立地している。本住居跡を構成する柱穴からは、時期判断の可能な遺物は出土せず、斜縄文の施文された土器や無文土器が数点認められただけである。

ＳＩ－404　Ｓ－４・Ｓ－５グリッドに位置し、ＳＫｐ－79・ＳＫｐ－92・ＳＫｐ－103・ＳＫｐ－111・ＳＫｐ－256の５本柱で構成される。左右対称の長五角形で、他の住居跡３基とは異なる平面形である。規模は355cm×210cmで、柱穴の直径は22～39cm、深度は16～35cmで、やや均一性に欠けている。床面は認められなかったが、遺構確認面は地形的にほぼ平坦であった。本住居跡を構成する柱穴から出土した土器は、斜縄文のみの施されたものや無文のもので、詳細な時期を判断するのには困難なものであった。しかし、ＳＫｐ－92からは三角形状の形態を呈する玦状耳飾りの未成品が検出され、概ね縄文時代前期後半期に比定できるものと考えられる。

ｂ　土　坑　類

Ｅ地区から検出された土坑類の実数は、15基である。遺構総数215基に占める割合は、約7.0％と低い。規模が１ｍ近く、かつ深度が20cmを超えるもの（Ｅ地区土坑Ａ類）と、規模・深度ともにＡ類よりも小さいもの（Ｅ地区土坑Ｂ類）とに大別が可能である。Ａ類の規模は平均109.4×100.4cm、深度の平均は31.4cmであるが、Ｂ類は規模の平均71.4×56.7cm、深度の平均9.9cmとなり、特に深度において両類の相違が顕著に現れている。

Ｅ地区土坑Ａ類　ＳＫ－６・ＳＫ－70・ＳＫ－116・ＳＫ－137・ＳＫ－261の５基が本類に該当する。調査区西壁に沿うように弧状に分布しており、遺跡範囲の西側への延長を考慮すれば、縄文時代前期後半期の集落のほぼ中心部分に相当すると思われる。しかし、それぞれの土坑の間隔に規則性は見出せない。本類の土坑群には貯蔵穴や墓坑等の性格が考えられるが、概して深度が浅く、食料の貯蔵に適していたとは考え難い。また、出土遺物が乏しく、明確な時期判断のできないものが多かった。

ＳＫ－６はＲ－５グリッドに位置し、楕円形を呈する。規模は120×105cmであるが、確認面からの深度は22cmと本類中最も浅い。ＳＩ－402の範囲内にあるが、遺構同士に切り合いは認められず、新旧関係は不明である。出土遺物もなく、詳細な時期は不明である。

ＳＫ－70はＳ－４・Ｓ－５グリッドに位置する。平面形は円形で、真円に近い整った形態を呈する。規模は103×96cm、深度は33cmで、確認面からの深さとしては本類中最も深い。ＳＩ－404の南側に位置するが、他の遺構との新旧関係は不明で、出土遺物もない。

ＳＫ－116はＳ－４グリッドに位置し、平面形は方形である。規模が119×113cm、深度が32cmであるが、遺構の一部が調査区外にまで延長しているため、規模は広がるものと思われる。遺物は出土していない。土層観察の結果からＳＲ－260よりも古い掘り込みであることが確認されたが、ＳＲ－260は近世以降の尾根道跡であるため、本土坑と縄文集落との重複関係は不明である。しかし、調査中の所見では、土層の堆積状況等から、少なくとも中世以降の所産であるように感じられた。

ＳＫ－137はＲ－５グリッドに位置し、ＳＩ－401とＳＩ－402の間にある。平面形は隅丸方形を呈し、規模は110×105cm、深度は30cmである。しかし、北半は木根痕による攪乱を受けていたため、平面形、規模ともに推定である。縄文土器の小破片が出土したが、出土状況から後の混入である可能性が高い。他の遺構との重複も認められなかったことから、詳細な所属時期は不明である。なお、本土坑は黒褐色土の覆土を有しており、出土遺物等から縄文時代前期後半期に所属することが明らかな他の遺構覆土に比べて異質なものであった。そのため、調査時の所見では近世以降～近年の掘り込みであるように感じられた。

ＳＫ－261はＳ－４グリッドに位置している。楕円形を呈し、規模は95×83cmである。深度は現表土からが40cm、遺構確認面からが32cmである。当初、調査区の壁にかかって検出されたため、本土坑部分を拡張して調査を行った。近世以降の尾根道跡であるＳＲ－260の掘り込みにより、土坑上部が失われていた。出土遺物は概して多く、10数点の縄文土器片とともにフレークが１点包含されていた。口縁部に竹管状工具による爪形文列を横位２条に施し、地文に斜縄文が施文されている資料や、非結束羽状縄文が施されている資料等が本土坑から出土した縄文土器片中に見られることから、本土坑は刈羽式土器併行期に所属するものであろう。本土坑の性格は、墓坑あるいは貯蔵穴であったと思われる。

Ｅ地区土坑Ｂ類　ＳＫ－26・ＳＫ－44・ＳＫ－165・ＳＫ－166・ＳＫ－167・ＳＫ－173ａ・ＳＫ－180・ＳＫ－182・ＳＫ－194・ＳＫ－236の10基が本類に含まれる。今回の調査対象区域内での遺構分布域の中心部分に多く位置しているが、分布状況に規則性は認められない。Ａ類と同様に出土遺物に乏しく、確実な所属時期の検証は行えなかったため、他時期・他時代に属するものが含まれている可能性は否めない。

ＳＫ－26はＲ－５グリッドに位置する。規模は135×135cmとやや大きいが、深度は15cmと規模に比して浅い。平面形は不整形であり、他の遺構との切り合いも認められない。遺物も出土していないことから所属時期は不詳で、自然現象に起因する落ち込みの可能性も考えられる。

ＳＫ－44はＳ－５グリッドに位置し、円形を呈する。木根痕による攪乱が著しく、推定規模65×53cm、推定深度15.5cmである。ＳＫｐ－46との重複が認められ、ＳＫｐ－46よりも古い所産であることが判明している。本土坑からは遺物が出土しなかったが、ＳＫｐ－46からは胎土等から縄文時代前期後半～中期前半に属すると考えられる斜縄文の施された土器片が出土していることから、本土坑は少なくともそれと同時期かより古いものであろう。

ＳＫ－165・ＳＫ－166・ＳＫ－167はＳ－５グリッドに位置し、ＳＫ－165とＳＫ－166、ＳＫ－165とＳＫ－167が重複し、さらにＳＫ－165とＳＫｐ－163に切り合い関係が認められる。新旧関係はＳＫ－165がＳＫ－166およびＳＫ－167より新しく、ＳＫ－166はＳＫｐ－163よりも古いものであった。ＳＫ－165とＳＫｐ－163から縄文土器片が出土し、詳細な時期判断の困難なものであるが、胎土等からは縄文時代前期後半～中期前半に比定できると思われる。ＳＫｐ－163を含めて４基が重複しているため、平面形や規模は推定であるが、ＳＫ－165は楕円形を呈し、規模は59×55cm、深度は15cmであった。ＳＫ－166は規模66×46cm、深度 8cmで、楕円形。ＳＫ－167は規模86×58cm、深度11.5cmで、平面形は楕円形である。

ＳＫ－173aはＳ－５グリッドに位置し、楕円形を呈する。ＳＤ－173bよりも古いことが切り合いから確

認されたが、ＳＤ－173bは自然現象による落ち込みである可能性も否定できないものである。規模は54×44cmであるが、深度は６cmと規模に比べて浅い。縄文土器片が１点出土したが、無文の土器であった。

ＳＫ－180はＳ－５グリッドに位置し、隅丸方形を呈する。規模が54×42cmなのに対し、深度は６cmと比較的浅い。他の遺構との切り合いは認められず、遺物の出土もなかったため、所属時期は不詳である。

ＳＫ－182はＳ－５グリッドに位置している。平面形は楕円形を呈し、ＳＫｐ－183と切り合っている。新旧関係は、ＳＫ－182の方が新しい。規模は72×48cmであるが、深度は10cmであり、規模に比して浅い。遺物の出土は認められず、重複するＳＫｐ－183からも遺物は出土していない。

ＳＫ－194はＲ－６グリッド、ＳＩ－401の東側に位置する。楕円形を呈し、規模は62×47cm、深度は５cmである。本類の他の土坑と同様に、規模の大きさと比較して掘り込みが浅い。他の遺構との切り合いはなく、遺物の出土も認められなかった。

ＳＫ－236はＳ－５グリッドに位置しており、楕円形を呈する。規模61×39cm、深度７cmで、規模に比べて深度が浅い。他の遺構との切り合いは認められず、遺物も出土しなかった。

Ｃ　ピ　ッ　ト　類

Ｅ地区において今回の調査対象区域内から検出されたピット類の実数は、197基にものぼる。遺構全体数に占める割合は約91.6％であり、本地区から検出された遺構のほとんどがこの部類に含まれる。大半が縄文時代前期後半期に営まれた柱穴であると考えられ、土層観察によって柱痕の確認されたものも６基あったが、性格不明のものも含まれている。また、土坑類同様に出土遺物が概して乏しいことから、他時期・他時代に属するものも含んでいる可能性もある。

本地区から検出されたピット類は、概して小さく、浅い。総数197基のピット類のうち、遺構確認面からの深度が15cm以下のものは132基で、全体の67％の割合を占めている。また、平面規模が30cm未満のものは130基であり、全体の66％に相当する。これらのピット類が旧表土面からの掘り込みであったことを考慮しても、現表土面から遺構確認面までが、本地区では10～20cm程度であったため、比較的小規模なピット類が密集して穿たれたことが窺える。これらのピット類が住居跡に伴う柱穴であったとすると、概して細い柱によって構成される住居跡であったとすることができる。ピット類から想定される住居跡の規模、あるいは強度や炉の痕跡を遺していないこと、あるいは出土遺物から看取される時間幅等から、本地区に営まれた集落は比較的存続期間の短いものであったと考えられる。

一方、本地区から検出されたピット類で最大のものは、Ｒ－５グリッドに位置するＳＫｐ－10で、楕円形を呈し、規模が70×55cm、深度が50cmにもなる。この規模はＥ地区のピット群の中にあっては異質なものということが可能で、土坑類として分類したものに近い。しかし、土層観察の結果、ピットの中央部分に柱痕が認められ、直径約20cmの柱が建てられていたと考えられるため、柱穴としての性格を有するピットとした。今回の調査ではＳＩ－402の主柱穴として捉えた。調査区内からは本遺構に対応する規模、深度の柱穴は検出されなかったが、調査範囲外に存在すると推測したい。なお、ＳＫｐ－10からは刈羽式土器併行期に比定することが可能な土器片も出土しており、所属時期の判断基準となった。

土層観察によって柱痕が確認されたものは、ＳＫ－10の他に、ＳＫｐ－４・ＳＫｐ－７・ＳＫｐ－24・ＳＫｐ－92・ＳＫｐ－181の５基がある。土層断面の観察から推測される柱の太さは、最大が20cmで、最小のものが８cm、６基の平均は約13.7cmである。

ＳＫｐ－４はＲ－５グリッドに位置し、ＳＩ－402の柱穴と考えたものである。円形で、平面規模44×40cm、深度36cmに対し、土層観察により推定された柱の太さは直径約14cmである。縄文土器片が出土したが、

時期判断の困難な細片であった。ＳＫｐ－７はＲ－５グリッドにあり、27×21cmの規模である。深度は17cm。平面形は楕円形である。土層観察による柱痕の直径は、約10cmであった。遺物は出土していない。ＳＫｐ－24はＲ－５グリッドに位置し、平面規模は46×35cm、深度は17.5cmである。平面形は楕円形を呈し、土層観察による柱痕の直径は約８cmであった。縄文土器片が出土したが、明確な時期を判断することはできなかった。ＳＫｐ－92はＳ－５グリッドに位置し、円形を呈している。ＳＩ－404を構成する柱穴として捉えたものである。平面規模は34×34cmで、深度は28cm。土層観察の結果から推定される柱の直径は、約18cmであった。斜縄文の施された土器小片が出土しているが、詳細な時期は判断できない。また、柱痕部に相当する覆土（第１層）中からは、蛇紋岩製の玦状耳飾り未成品が出土している。そのため、柱穴としての本遺構の廃絶時期は、少なくとも縄文時代前期後半期以前であったことが窺える。ＳＫｐ－181はＳ－５グリッドに位置し、円形を呈している。規模は31×27cm、深度33.5cmである。本地区のピットとしては比較的深いが、遺構の掘り方は約24cmで、柱や上屋の重さ等による圧によって、10cm近くも遺構底面が押し下げられていたことによる。土層観察による柱痕の直径は、約12cmであった。遺物は出土せず、他の遺構との切り合いも認められなかった。

ｄ　その他の遺構

ここでは、Ｅ地区から検出された住居跡、土坑類、ピット類以外を便宜的に一括する。具体的には、溝跡類と尾根筋の旧道跡が確認されている。

溝　跡　類　本地区から検出された溝跡類は、ＳＤ－89・ＳＤ－173ｂの２基である。ＳＤ－89はＳ－５グリッドに位置し、平面形は不整形を呈している。規模は81×26cmで、溝跡としての延長は比較的短い。深度は４cmである。他の遺構との切り合いはなく、遺物の出土も認められないことから、所属時期は不明である。覆土は暗褐色土であったが、締まりに欠けており、縄文時代の遺構とは考え難いものであった。ＳＤ－173ｂはＳ－５グリッドに位置しており、不整形を呈する。平面規模は127×51cmであるが、深度は２cmであり、概して浅い。ＳＫ－173ａと切り合っており、ＳＫ－173ａよりも新しいことが確認されている。遺物の出土はない。覆土は褐色土で、木炭粒を少量含むものの、色調的には地山土との判別が困難であった。自然現象に起因する落ち込みである可能性も考えられるものである。

旧　道　跡　本地区から検出された、旧道の痕跡を遺す溝状の遺構はＳＲ－260の１基である。この旧道は、Ｅ地区の西側にある茨目の集落からＤ地区の三叉路を経由して、両田尻の集落に向かって南下する尾根筋の山路であった。かつては両田尻の集落から柏崎の町へ行くための道であったと考えられる。

今回の調査対象区域内からは、直線での延長が約33ｍに及ぶ旧道跡が検出された。調査区の西側から延び、Ｄ地区のＳＲ－57へと続いていたと考えられるものであった。このＳＲ－260はＳ－４からＵ－７に位置しており、調査区を東西方向に走るが、Ｔ－５グリッド以東で緩いカーブを描きながら北東方向へ向かっている。Ｔ－５グリッドにおいて一部窪みが確認できずに途絶えており、実際に発掘を行ったのは途絶えた地点よりも西側部分だけで、残りの部分はプランを検出しただけである。覆土は褐色土で、木炭粒を少量含み、かなり締まっていた。これは、道路の使用によって路面の窪みが著しくなると、周辺の土を盛って補修し、その後の再使用で固く締まったものと考えられる。遺構の切り合いから、少なくとも縄文時代前期後半期の遺構であるＳＫｐ－113・ＳＫ－116よりも新しいことが確認されたが、時間差は著しいであろう。遺物の出土はなく、明確な時期は判断できないが、現代に至るまで利用されていたことは確実である。上限は近世後期頃までを想定する必要があると思われる。

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
1	R－5	ピット	円形	27×25	9	褐色土	・		
2	R－5	ピット	円形	22×14	8	褐色土	－		3より古
3	R－5	ピット	円形	24×20	10	褐色土	－		2より新
4	R－5	ピット	円形	44×40	36	図版40	△	土器	S I －402・柱痕約14cm
5	R－5	ピット	円形	35×30	10	暗褐色土	△	土器	
6	R－5	土坑	楕円形	120×105	22	暗褐色土	・		
7	R－5	ピット	楕円形	27×21	17	図版40	△		柱痕約10cm
8	R－5	ピット	楕円形	34×28	31	暗灰色土	△		SI－402
9	R－5	ピット	円形	26×22	14	暗灰色土	・		
10	R－5	ピット	楕円形	70×55	50	図版40	△	土器	SI－402・柱痕約20cm
11	R－5	ピット	楕円形	47×40	7	褐色土	－		
12	R－5	ピット	楕円形	22×19	9	褐色土	・		
13	R－5	ピット	円形	25×20	5	暗褐色土	・		
14	R－5	ピット	楕円形	24×17	18	褐色土	・		15より古
15	R－5	ピット	円形	30×20	32	暗褐色土	○	土器	14より新・SI－402
16	R－5	ピット	円形	19×19	14	褐色土	・	土器	
17	R－5	ピット	隅丸方形	28×22	5	明褐色土	－		18より古
18	R－5	ピット	円形	30×28	8	暗灰色土	・		17より新
19	R－5	ピット	楕円形	29×23	13	暗灰色土	・	土器	
20	R－5	ピット	楕円形	38×30	14	暗灰色土	○	土器	
21	R－5	ピット	楕円形	28×21	15	褐色土	・		
22	R－5	ピット	円形	36×34	12	褐色土	・		
23	R－5	ピット	円形	31×30	3	暗褐色土	・		
24	R－5	ピット	楕円形	46×35	17.5	図版40	△	土器	柱痕約8cm
25	R－5	ピット	楕円形	41×27	17	褐色土	・	土器	
26	R－5	土坑	不整形	135×135	15	褐色土	・		
27		攪乱	——	———	－	———			
28		攪乱	——	———	－	———			
29		攪乱	——	———	－	———			
30	R－5	ピット	円形	38×32	10	暗褐色土	○	土器	
31	R－5	ピット	円形	21×19	14	褐色土	－		
32	R－5	ピット	楕円形	34×30	15	褐色土	－		33より古
33	R－5	ピット	円形	44×41	32	暗灰色土	・	土器	32・34より新、35より古
34	R－5	ピット	不整形	35×28	17	暗灰色土	・		33・35より古
35	R－5	ピット	楕円形	45×15	10	褐色土	・		33・34より新
36	R－5	ピット	円形	22×21	11	褐色土	－		
37	S－5	ピット	楕円形	39×30	36	暗褐色土	△	土器	
38	S－5	ピット	円形	24×24	11	褐色土	・		
39	S－5	ピット	円形	25×15	15	褐色土	・		40より古
40	S－5	ピット	円形	27×24	6	褐色土	・		39より新
41	S－5	ピット	楕円形	22×16	15	暗褐色土	○		
42	S－4・5	ピット	円形	19×19	7	暗褐色土	△		
43	S－5	ピット	円形	15×15	10	暗灰色土	・		
44	S－5	土坑	円形	65×53	15.5	褐色土	－		46より古
45		——							欠番
46	S－5	ピット	楕円形	36×29	20	暗灰色土	・	土器	44より新
47	S－5	ピット	円形	22×20	5	暗灰色土	－		
48	S－5	ピット	円形	30×27	11.5	暗褐色土	・		
49	S－5	ピット	楕円形	47×35	12	褐色土	・	土器	
50	S－5	ピット	楕円形	41×26	11	暗褐色土	△		
51	S－5	ピット	楕円形	36×31	24	図版40	△		
52	S－5	ピット	円形	23×21	11	暗褐色土	・		
53	S－5	ピット	円形	24×20	18	褐色土	・		
54	S－5	ピット	円形	24×24	9	暗褐色土	○		
55	S－5	ピット	楕円形	32×26	10	暗褐色土	△	土器	
56	S－5	ピット	楕円形	35×28	9	暗灰色土	△	石器	
57		攪乱	——	———	－	———		石器	
58		攪乱	——	———	－	———			
59		攪乱	——	———	－	———			
60	S－4	ピット	円形	20×17	7	暗褐色土	・		
61	S－4	ピット	楕円形	22×17	25	暗灰色土	－		

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第6表　田塚山遺跡群E地区遺構計測表（1）

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
62		木根痕	——	———	—	———			
63		木根痕	——	———	—	———			
64	S－5	ピット	楕円形	23×19	10	暗褐色土	○		
65	S－5	ピット	円形	16×14	6	暗褐色土	○		
66	S－5	ピット	円形	30×27	11	暗灰色土	△		
67	S－5	ピット	円形	28×25	12	暗褐色土	◎		
68		攪乱	——	———	—	———			
69	S－5	ピット	楕円形	25×21	10	暗灰色土	—		
70	S-4•5	土坑	円形	103×96	33	褐色土	—		
71		攪乱	——	———	—	———			
72		攪乱	——	———	—	———			
73		攪乱	——	———	—	———			
74	S－4	ピット	円形	25×22	6	暗褐色土	○		
75	S－4	ピット	円形	23×18	7	暗褐色土	•		
76	S－4	ピット	楕円形	28×20	9	暗褐色土	△		
77	S－4	ピット	円形	33×32	13	暗褐色土	△	土器	
78	S－4	ピット	楕円形	25×19	10	褐色土	•		
79	S－4	ピット	円形	39×33	25	暗灰色土	•	土器	SI－404
80		攪乱	——	———	—	———			
81		攪乱	——	———	—	———			
82		攪乱	——	———	—	———			
83	S-4•5	ピット	楕円形	29×20	5	褐色土	—		
84	S－5	ピット	楕円形	20×15	4.5	褐色土	•		
85		攪乱	——	———	—	———			
86	S－5	ピット	隅丸方形	21×16	4	褐色土	•		
87		攪乱	——	———	—	———			
88		攪乱	——	———	—	———			
89	S－5	溝	不整形	81×26	4	暗褐色土	•		
90	S－5	ピット	円形	21×18	5	暗褐色土	•		
91		木根痕	——	———	—	———			
92	S－5	ピット	円形	34×34	28	図版40	○	土器・石器	SI－404・柱痕約18cm
93	S－5	ピット	円形	19×19	7	暗褐色土	△		
94	S－5	ピット	楕円形	17×13	5	暗褐色土	△		
95	S－5	ピット	円形	24×22	11	暗褐色土	○	土器	
96	S－5	ピット	円形	36×34	4	黒褐色土	•		
97		攪乱	——	———	—	———			
98		攪乱	——	———	—	———			
99		攪乱	——	———	—	———			
100		攪乱	——	———	—	———			
101		攪乱	——	———	—	———			
102	S－4	ピット	楕円形	35×30	13	褐色土	•	土器	
103	S－4	ピット	楕円形	35×29	35	暗灰色土	△	土器	SI－404
104		木根痕	——	———	—	———			
105		木根痕	——	———	—	———			
106		攪乱	——	———	—	———			
107		攪乱	——	———	—	———			
108	S－4	ピット	楕円形	17×13	15	暗灰色土	—		
109		攪乱	——	———	—	———			
110	S－4	ピット	円形	21×18	11	暗灰色土	△		
111	S－4	ピット	楕円形	28×21	16	暗灰白色土	—		SI－404
112	S－4	ピット	円形	16×14	25	暗褐色土	•		
113	S－4	ピット	楕円形	38×28	16	暗青灰色土	◎	土器	260より古
114		攪乱	——	———	—	———		土器	
115		攪乱	——	———	—	———			
116	S－4	土坑	方形	119×113	32	図版40	—		260より古
117		木根痕	——	———	—	———			
118		木根痕	——	———	—	———			
119		木根痕	——	———	—	———			
120	S－5	ピット	隅丸方形	60×50	13.5	褐色土	—		
121		攪乱	——	———	—	———			
122		攪乱	——	———	—	———			

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　ーなし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第７表　田塚山遺跡群Ｅ地区遺構計測表（２）

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
123		攪乱	——	———	—	———			
124		攪乱	——	———	—	———			
125	R－5	ピット	円形	20×20	9	暗灰色土	△		
126		攪乱	——	———	—	———		土器	
127		攪乱	——	———	—	———			
128	S－5	ピット	楕円形	47×35	17	暗褐色土	・		
129	S－5	ピット	楕円形	20×14	7	暗褐色土	・		
130		攪乱	——	———	—	———			
131	S－5	ピット	円形	12×12	3	暗褐色土	△		
132	S－5	ピット	円形	18×17	15	暗褐色土	○		
133	R－5	ピット	楕円形	28×20	16	褐色土	△		
134	R－5	ピット	円形	19×18	11	褐色土	△		
135	R－5	ピット	楕円形	50×38	48	暗褐色土	◎	土器・石器	SI－401
136	R－5	ピット	円形	21×21	11	暗褐色土	△		
137	R－5	土坑	隅丸方形	110×105	30	黒褐色土	○		
138	R－5	ピット	円形	19×18	7	褐色土	・		
139	R－5	ピット	円形	35×31	9	褐色土	・		
140	R－5	ピット	円形	27×25	5	黒褐色土	△		
141	R－5	ピット	円形	27×26	3	褐色土	・		
142	R－5	ピット	円形	25×24	7	褐色土	△		
143	R－5	ピット	円形	33×30	39	暗褐色土	△		
144	R－5	ピット	楕円形	32×24	10	褐色土	—		145より古
145	R－5	ピット	楕円形	28×27	13.5	褐色土	・		144より新
146	R－5	ピット	円形	45×43	49	図版40	△	土器	147より古・SI－401
147	R－5	ピット	楕円形	43×39	17	暗灰色土	・		146より新
148	R－5	ピット	円形	34×34	40	褐色土	△	土器	149より古
149	R－5	ピット	円形	20×20	4	暗褐色土	・		148より新
150	R－5	ピット	円形	18×16	5	暗褐色土	△		
151	R－5	ピット	円形	25×23	5	暗茶褐色土	△		
152	R－5	ピット	円形	22×20	7	暗褐色土	△		
153	R－5	ピット	円形	25×22	9	褐色土	△		
154		木根痕	——	———	—	———			
155	R－5	ピット	円形	25×25	12	褐色土	・		
156	S－5	ピット	円形	28×28	23	暗褐色土	○		SI－401
157	S－5	ピット	円形	17×15	12	褐色土	・		
158	S－5	ピット	楕円形	22×17	7	暗褐色土	○		
159	S－5	ピット	円形	14×14	7	暗灰色土	△		
160	S－5	ピット	円形	23×21	19	暗褐色土	—	土器	
161	S－5	ピット	円形	15×13	8	暗褐色土	△		162より新
162	S－5	ピット	楕円形	33×29	14	暗灰色土	△		161より古
163	S－5	ピット	楕円形	38×28	13.5	暗褐色土	△	土器	166より新
164		攪乱	——	———	—	———			
165	S－5	土坑	楕円形	59×55	15	褐色土	・	土器	166・167より新
166	S－5	土坑	楕円形	66×46	8	暗灰色土	・		163・165より古
167	S－5	土坑	楕円形	86×58	11.5	褐色土	・		165より古
168		木根痕	——	———	—	———			
169	S－5	ピット	楕円形	30×25	8	黒褐色土	○		
170	S－5	ピット	楕円形	26×22	6	暗茶褐色土	・		
171		木根痕	——	———	—	———			
172		木根痕	——	———	—	———			
173a	S－5	土坑	楕円形	54×44	6	暗褐色土	・	土器	173bより古
173b	S－5	溝	不整形	127×51	2	褐色土	—		173aより新
174		——							欠番
175	S－5	ピット	方形	18×15	8	暗褐色土	◎		
176	S－5	ピット	円形	18×17	18	暗褐色土	△	土器	
177	S－5	ピット	楕円形	29×24	9	暗褐色土	○		
178	S－5	ピット	円形	39×35	31	暗褐色土	○		
179		攪乱	——	———	—	———			
180	S－5	土坑	隅丸方形	54×42	6	褐色土	・		
181	S－5	ピット	円形	31×27	33.5	図版40	△		柱痕約12cm
182	S－5	土坑	楕円形	72×48	10	褐色土	△		183より新

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第8表　田塚山遺跡群E地区遺構計測表（3）

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
183	S－5	ピット	円形	35×23	7	暗褐色土	○		182より古
184	S－5	ピット	円形	18×17	4	黒褐色土	△		
185		攪乱	——	———	—	———			
186		攪乱	——	———	—	———			
187		木根痕	——	———	—	———		土器	
188	S－5	ピット	円形	12×12	6	暗灰色土	△	土器	
189	S－5	ピット	円形	26×23	22	暗褐色土	○		SI－401
190	S－5	ピット	円形	18×18	5	暗褐色土	○		
191	S－6	ピット	円形	15×15	5	暗褐色土	・		
192	R－5	ピット	楕円形	43×31	18	褐色土	・		193より新
193	R－5	ピット	円形	41×26	13	暗褐色土	△		192より古
194	R－6	土坑	楕円形	62×47	5	褐色土	・		
195	R－6	ピット	円形	23×21	16	褐色土	・		
196	R－5	ピット	円形	32×30	29	褐色土	△	土器・石器	SI－401
197	R－6	ピット	楕円形	30×20	30	暗褐色土	△	土器	
198	S－6	ピット	円形	28×24	13	暗灰色土	△		
199	S－6	ピット	円形	18×18	8	黒褐色土	・		
200	S－6	ピット	円形	40×40	26	暗灰色土	△	土器	
201	S－6	ピット	円形	23×20	6	褐色土	○		202より古
202	S－6	ピット	円形	19×17	2	褐色土	△		201より新
203	S－6	ピット	円形	17×16	10	褐色土	△		
204	S－6	ピット	円形	20×19	18	暗褐色土	・	土器	
205	S－6	ピット	円形	20×20	9	暗褐色土	○	土器	
206		木根痕	——	———	—	———			
207		——							欠番
208	S－5	ピット	方形	35×30	23	褐色土	△		
209	S－5	ピット	楕円形	35×30	29	暗褐色土	○		
210	S－6	ピット	円形	30×27	35	暗褐色土	△	土器	
211	S－6	ピット	楕円形	33×26	17	暗褐色土	△	土器	SI－403
212		木根痕	——	———	—	———			
213		木根痕	——	———	—	———			
214		木根痕	——	———	—	———		土器	
215		木根痕	——	———	—	———			
216	S－5	ピット	円形	19×19	22	暗褐色土	△		
217		木根痕	——	———	—	———			
218	S－5	ピット	円形	16×15	11	褐色土	・		
219	S－5	ピット	円形	12×11	12	暗褐色土	△		
220		攪乱	——	———	—	———			
221		攪乱	——	———	—	———			
222		攪乱	——	———	—	———			
223		攪乱	——	———	—	———			
224		攪乱	——	———	—	———			
225	S－5	ピット	円形	26×26	31	褐色土	△	土器	
226	S－5	ピット	円形	18×18	15	暗褐色土	・		
227		攪乱	——	———	—	———			
228		攪乱	——	———	—	———			
229		攪乱	——	———	—	———			
230	S－5	ピット	楕円形	31×21	18	暗褐色土	△		231より新
231	S－5	ピット	円形	27×25	15	暗褐色土	◎	土器	230より古
232	S－5	ピット	円形	18×17	19	暗褐色土	△		
233		木根痕	——	———	—	———			
234	S－5	ピット	円形	20×18	21	暗褐色土	・		
235		——							欠番
236	S－5	土坑	楕円形	61×39	7	暗褐色土	△		
237		攪乱	——	———	—	———			
238		攪乱	——	———	—	———			
239		攪乱	——	———	—	———			
240		攪乱	——	———	—	———			
241		攪乱	——	———	—	———			
242	S－5	ピット	楕円形	20×15	5	暗褐色土	・		
243		木根痕	——	———	—	———			

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第9表　田塚山遺跡群E地区遺構計測表（4）

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
244	S－5	ピット	楕円形	26×20	13	暗褐色土	○	土器	
245	S－5	ピット	円形	14×12	10	暗褐色土	・		
246	S－5	ピット	楕円形	23×18	7	褐色土	－		
247	S－5	ピット	円形	23×22	21.5	暗褐色土	△		
248	S－5	ピット	円形	20×18	15	暗褐色土	△		
249	S－5	ピット	円形	25×24	13	褐色土	・		
250	S－5	ピット	円形	20×18	27	暗褐色土	△		
251		木根痕	——	———	－	———			
252	S－5	ピット	円形	18×18	11	暗褐色土	○		
253	S－5	ピット	円形	20×19	5	暗灰白色土	△		254より古
254	S－5	ピット	円形	26×20	10	暗灰色土	△		243より新
255	S－5	ピット	円形	22×18	7	褐色土	・		
256	S－5	ピット	円形	22×21	21	暗褐色土	○	土器	SI－404
257	S－5	ピット	円形	21×19	13	暗灰色土	△		
258	S－5	ピット	円形	22×18	7	暗灰色土	－		
259		木根痕	——	———	－	———			
260	———	道路跡	——	———	－	図版40	△		113・116より新
261	S－4	土坑	楕円形	95×83	40	図版40	○	土器・石器	
262		木根痕	——	———	－	———			
263		木根痕	——	———	－	———			
264	S－4	ピット	円形	25×23	12	暗褐色土	△	土器	
265		攪乱	——	———	－	———			
266	T－4	ピット	楕円形	19×19	16	暗褐色土	・		
267		攪乱	——	———	－	———			
268		攪乱	——	———	－	———			
269		攪乱	——	———	－	———			
270		攪乱	——	———	－	———			
271	T－4	ピット	円形	30×27	9	暗褐色土	△	土器	
272	T－4	ピット	円形	23×22	14	暗灰色土	△		
273		木根痕	——	———	－	———			
274		木根痕	——	———	－	———			
275		攪乱	——	———	－	———			
276		木根痕	——	———	－	———			
277		木根痕	——	———	－	———			
278		攪乱	——	———	－	———			
279		攪乱	——	———	－	———			
280		攪乱	——	———	－	———			
281		攪乱	——	———	－	———			
282		攪乱	——	———	－	———		土器	
283		攪乱	——	———	－	———			
284	T－5	ピット	楕円形	32×21	13	暗褐色土	△		
285		木根痕	——	———	－	———			
286		攪乱	——	———	－	———			
287		攪乱	——	———	－	———			
288		木根痕	——	———	－	———			
289		木根痕	——	———	－	———			
290		木根痕	——	———	－	———			
291		木根痕	——	———	－	———			
292		木根痕	——	———	－	———		土器・石器	
293		木根痕	——	———	－	———		土器・石器	
294		木根痕	——	———	－	———			
295		攪乱	——	———	－	———			
296		攪乱	——	———	－	———			
297	T－5	ピット	円形	28×27	13	暗褐色土	・		
298	T－5	ピット	楕円形	35×25	20	暗褐色土	○		
299		攪乱	——	———	－	———			
300		攪乱	——	———	－	———			
301		攪乱	——	———	－	———			
302		攪乱	——	———	－	———			
303	T－6	ピット	円形	17×14	22	暗褐色土	△		
304		攪乱	——	———	－	———			

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第10表　田塚山遺跡群E地区遺構計測表（5）

番号	グリッド	種別	平面形	規模／長軸×短軸	深度 cm	覆土／木炭粒		遺物	備考
305	S－6	ピット	楕円形	22×16	3	暗褐色土	・		
306		木根痕	——	———	—	———			
307		木根痕	——	———	—	———			
308		木根痕	——	———	—	———			
309	S－5	ピット	円形	24×22	11	暗褐色土	△	土器	
310		攪乱	——	———	—	———			
311		攪乱	——	———	—	———			
312		攪乱	——	———	—	———		石器	
313		攪乱	——	———	—	———			
314	S－6	ピット	楕円形	19×8	12	暗灰色土	・		315より新
315	S－6	ピット	円形	21×9	2	褐色土	・		314より古
316		攪乱	——	———	—	———			
317		攪乱	——	———	—	———			
318	S－5	ピット	円形	30×28	20	暗褐色土	△	土器	
319	S－5	ピット	円形	26×26	20	暗褐色土	○	土器	
320		攪乱	——	———	—	———			
321	S－6	ピット	円形	33×30	21	暗褐色土	◎		
322	S－6	ピット	楕円形	40×30	20	暗褐色土	△	土器	SI－403
323	S－5・6	ピット	円形	18×16	8	暗褐色土	△		
324	S－6	ピット	円形	24×22	15	褐色土	△		
325		木根痕	——	———	—	———			
326		攪乱	——	———	—	———			
327		攪乱	——	———	—	———		土器	
328	S－6	ピット	円形	25×24	13	暗褐色土	△		
329		木根痕	——	———	—	———			
330	S－6	ピット	楕円形	24×16	16	褐色土	・		
331	S－6	ピット	楕円形	21×15	8	暗褐色土	△		
332		木根痕	——	———	—	———			
333	S－6	ピット	円形	29×28	38	暗褐色土	△	土器	
334	S－6	ピット	楕円形	41×30	24.5	暗灰色土	△	土器	SI－403
335	S－6	ピット	円形	19×16	11	暗褐色土	・		
336	S－6	倒木痕	——	———	—	暗褐色土	◎	土器	
337	S－6	ピット	円形	36×32	33	暗褐色土	△	土器	SI－403
338		攪乱	——	———	—	———			
339		攪乱	——	———	—	———			
340		木根痕	——	———	—	———			
341		木根痕	——	———	—	———			
342	S－6	倒木痕	——	———	—	暗褐色土	○	土器	
	T－6							石器	
343	S－6	ピット	楕円形	22×16	8	暗褐色土	△		
	T－6								
344		木根痕	——	———	—	———		土器	
345		木根痕	——	———	—	———		土器	
346		木根痕	——	———	—	———		土器	
347	T－6	ピット	楕円形	23×18	18	暗褐色土	△		
348	T－6	ピット	不整形	49×46	24	褐色土	—		
349		木根痕	——	———	—	———			
350	S－6	倒木痕	——	———	—	暗褐色土	○	土器	
	T－6							石器	
351	S－6	ピット	円形	24×22	15	暗褐色土	・		
352	T－6	ピット	円形	22×19	11	褐色土	・		
401	R－5	住居跡	5本柱	415×350	—	SKp－135・146・156・189・196			図版41
	S－5								
402	R－5	住居跡	4本柱以上	360×230以上	—	SKp－4・8・10・15			図版41
403	S－6	住居跡	4本柱以上	355×230以上	—	SKp－211・322・334・337			図版41
404	S-4・5	住居跡	5本柱	355×210	—	SKp－79・92・103・111・256			図版41

※木炭粒：　◎非常に多い　○多い　△少ない　・若干　－なし
※※遺　物：　土器＝土器類　　石器＝石器類（含フレーク・装身具・礫）

第11表　田塚山遺跡群E地区遺構計測表（6）

2 遺　　物

1） 土　器　類（第19図）

E地区から出土した土器類は、全て縄文土器であった。出土数は概して少なく、大半が細片であったため、図示可能な資料は限られている。時期判断の可能な土器片は、刈羽式土器併行期に比定できるものであった。刈羽式土器については、概ね関東地方の諸磯ａ式土器～諸磯ｂ式土器に対比できる時期と考える。時期の判断が困難な土器片も、胎土や焼成等が本地区から出土した刈羽式土器併行期の資料に近似していること、明らかに他時期のものと判断できる土器片の出土が認められなかったこと等から、本地区から出土した土器類の大半はこの時期に属するものであろう。なお、出土した土器片は細片に至るまで観察を行ったが、胎土中に繊維の混入が認められる土器片は皆無であった。

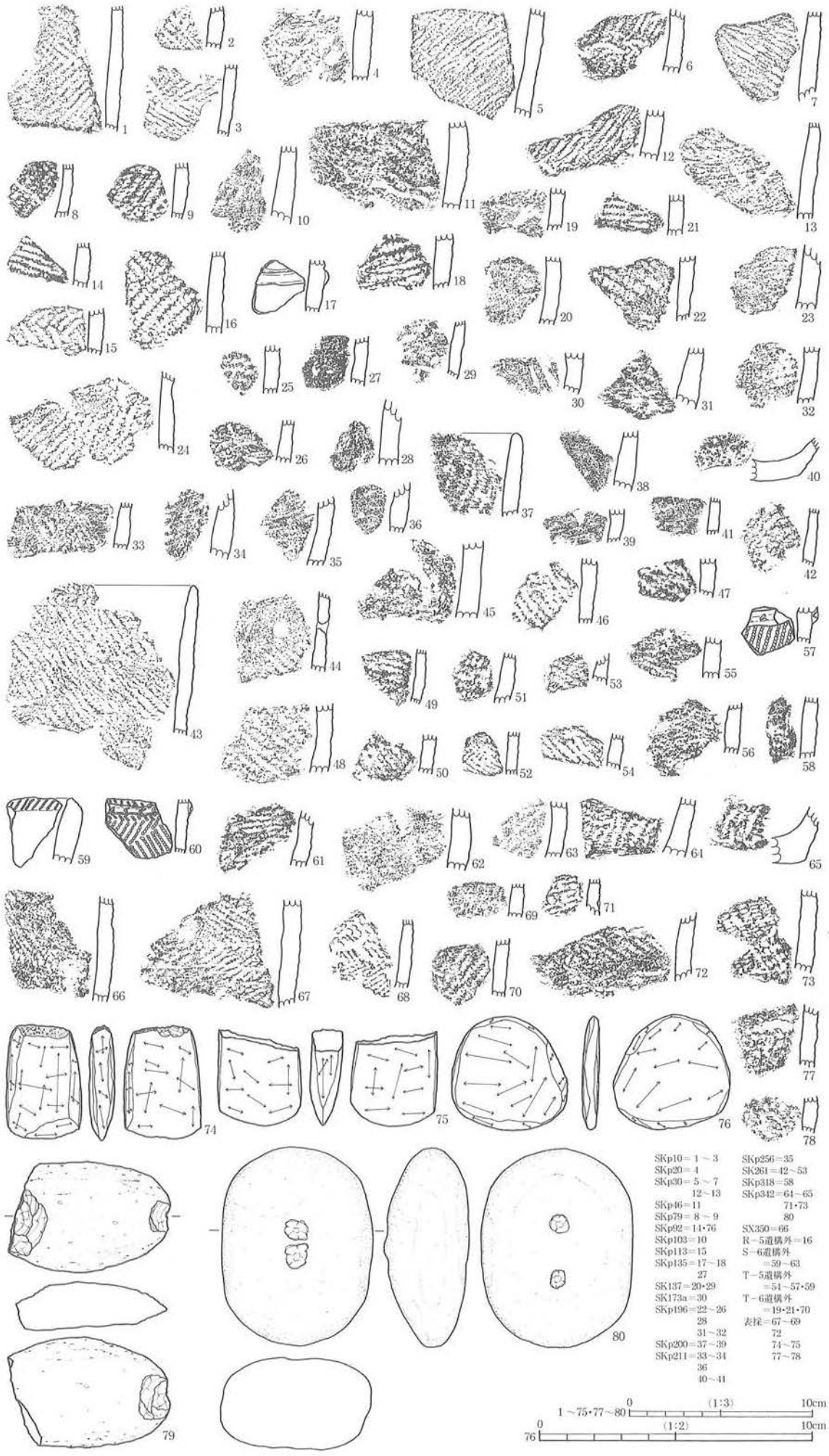
今回の調査では、施文されている文様から、出土土器を大きく第１類～第４類に分類した。さらに、第３類については、ａ～ｃの３つに細分を行った。

第 1 類　頸部に隆帯が施される資料を本類とした。第19図－17・57・60が相当する。本類は３点のみの出土であったが、隆帯上に刺突をもたず地文が無文のものと、隆帯上に竹管状工具による爪形刺突をもち地文に縄文が施文されるものとに細分が可能である。刈羽貝塚[八幡1958]から出土した該期の類似資料では、隆帯上に刺突をもつものは棒状工具によって施文されているのが大半を占めているのに対し、本地区から出土した資料は、同一技法ながらも竹管状工具を使用して爪形文を描出している点が特徴的である。

17はＳＫｐ－135から出土し、色調は暗橙色を呈する。頸部に隆帯を施し、隆帯上端には沈線を１条施文する。この沈線は隆帯の調整のために施されたとも考えられ、下端は隆帯が未調整のままである。隆帯上に刺突は認められず、地文は無文である。57はＴ－５グリッドの遺構外から検出された。にぶい橙色を呈し、頸部に隆帯が施されている。隆帯両端の調整は粗雑で、隆帯上には竹管状工具による爪形の刺突が施される。地文はＬＲの斜行縄文である。60はＳ－６グリッド遺構外から出土したものである。本地区から出土した土器の大半は暗橙色～にぶい橙色～橙色を呈するのに対し、本資料の色調は明赤褐色である。頸部に隆帯を巡らせ、隆帯上には竹管状工具による爪形の刺突文が施されている。また、隆帯は未調整のままであるが、隆帯の両端には棒状工具による列点文が施されている。隆帯下端の列点文は隆帯上の爪形刺突の下に施文されるが、隆帯上端のものは爪形刺突の中間に施されており、隆帯を挟んでの交互刺突となっている。隆帯下端の列点文は深く施されているが、上端のものは浅く施文されている。地文には非結束の羽状縄文が施文されている。この羽状縄文は、ＬＲ単節縄文を縦位と横位に交互に回転させることによって描出したものである。

第 2 類　口縁部～頸部に竹管状工具による爪形の刺突文が施される資料を本類とした。第19図－43・71の２点が本類に含まれる。刈羽貝塚出土の該期の類似資料は、棒状工具による列点文や指頭圧痕状の列点文を施しているものが大半であるが、本地区のものは竹管状工具を用いて爪形刺突を施文して、刈羽貝塚の資料と同様の文様効果を獲得しており、第１類と同じ特徴が認められる。

43はＳＫ－261から出土した口縁部の資料である。口縁端部から竹管状工具による爪形刺突文列が横位２条施され、その下位にはＲＬ斜行縄文が施文され、頸部以下にまで至っている。色調は暗橙色を呈する。71はＳＸ－342倒木痕から出土したもので、小片であるため部位は明確でないが、口縁部下半～頸部の資料と考えられる。本資料中では竹管状工具による爪形の刺突文が、横位２条施されていることが認められ



第19図　E地区出土遺物

る。刺突文はやや円形に近いが、これは竹管状工具を多截せず、半截もしくは円形のまま施文したことに起因するものであろう。地文には刺突を施す以前の段階で、ＬＲ斜行縄文が施文されている。色調は暗橙色を呈している。

第３ａ類　器面に縄文のみが認められるものを第３類とし、さらに施文されている縄文が、非結束羽状縄文・結節縄文・斜行縄文に分類できることから第３類をａ～ｃに細分した。本類は、器面に非結束の羽状縄文が施されるものである。ＲＬとＬＲの単節縄文を交互に回転施文することで羽状に描出しているものが大半を占めるが、ＲＬあるいはＬＲの１種類を縦位と横位に交互に施すものも認められた。色調は暗橙色～にぶい橙色～橙色を呈している。

第３ｂ類　結節縄文が施される資料を本類とした。第19図－５・６の２点が出土している。ともにＳＫｐ－10からの出土で、結節のあるＬＲ単節縄文を回転施文したものである。色調は暗橙色を呈する。

第３ｃ類　斜行縄文が施される資料で、本地区から出土した土器の大半は本類に含まれる。ＲＬとＬＲがあるが、比率的にはＲＬのものが多い。色調は暗橙色～にぶい橙色～橙色を呈するが、第19図－66は明赤褐色を呈し、本地区出土土器の中では異質である。

第４類　無文のものを本類とした。第３ｃ類に次いで、本地区出土土器中多くの割合を占める。色調は暗橙色～にぶい橙色～橙色のものが標準的であるが、明赤褐色や淡黄色を呈する資料が他の類に比べて多いのが特徴である。

２）　石　　器　　類（第19図）

Ｅ地区から出土した石器類は極めて少なく、種類も限られたものである。図示したもの以外には剝片類があるだけで、それらも全てが細片であった。また、出土状況も調査着手当初に表面採集されたり、倒木痕中や遺構外からの出土であり、剝片以外では唯一遺構内からの出土である玦状耳飾りの未成品も、第３ｃ類の土器片を伴うだけで、詳細な時期判断が困難である。

第19図－74・75は蛇紋岩製の磨製石斧である。ともに表面採集されたもので、74は基端部に敲打痕が認められ、75は基部を欠損している。79は安山岩製の石錘で、片側を欠損している。抉り部は数次の剝離によって作出されている。80は安山岩製の凹石である。風化が著しく、磨痕は不明である。表裏両面に２カ所の凹痕が認められる。76は蛇紋岩製の玦状耳飾り未成品である。ＳＫｐ－92の第１層中からの出土である。成形途中であったと考えられ、穿孔や切れ目を入れようとした痕跡は認められない。三角形状を呈し、ほぼ刈羽式土器併行期頃に比定できると考えられる。

番号	分　類	出　土　地　点	器　種	部　位	文　　様	色　調	備　　考
1	第３ａ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－10	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ）	にぶい橙色	
2	第３ａ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－10	深　鉢	胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	暗橙色	
3	第３ａ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－10	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	暗橙色	
4	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－20	深　鉢	頸部～胴部	ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
5	第３ｂ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－30	深　鉢	頸部～胴部	結節斜行縄文（ＬＲ）	暗橙色	
6	第３ｂ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－30	深　鉢	頸部～胴部	結節斜行縄文（ＬＲ）	暗橙色	
7	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－30	深　鉢	頸部～胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
8	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫｐ－79	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
9	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫｐ－79	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
10	第４類	Ｓ－４・ＳＫｐ－103	深　鉢	胴部	無文	暗橙色	
11	第３ｃ類	Ｓ－５・ＳＫｐ－46	深　鉢	頸部～胴部	ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
12	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－30	深　鉢	頸部～胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	

第12表　田塚山遺跡群Ｅ地区縄文土器観察表（１）

番号	分　類	出　土　地　点	器　種	部　位	文　　様	色　調	備　　考
13	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－30	深　鉢	頸部～胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
14	第３ｃ類	Ｓ－５・ＳＫｐ－92	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
15	第３ａ類	Ｓ－４・ＳＫｐ－113	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	にぶい橙色	
16	第３ａ類	Ｒ－５グリッド遺構外	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＬＲ）	暗橙色	
17	第１類	Ｒ－５・ＳＫｐ－135	深　鉢	頸部	隆帯・隆帯上端に沈線	暗橙色	
18	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－135	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
19	第３ｃ類	Ｔ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
20	第４類	Ｒ－５・ＳＫ－137	深　鉢	胴部	無文	橙色	
21	第３ｃ類	Ｔ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
22	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
23	第４類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	無文	橙色	
24	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
25	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
26	第３ａ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＬＲ）	暗橙色	
27	第４類	Ｒ－５・ＳＫｐ－135	深　鉢	胴部	無文	にぶい橙色	
28	第４類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	無文	明赤褐色	
29	第４類	Ｒ－５・ＳＫ－137	深　鉢	胴部	無文	橙色	
30	第４類	Ｓ－５・ＳＫ－173ａ	深　鉢	胴部	無文	暗橙色	
31	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	にぶい橙色	
32	第３ｃ類	Ｒ－５・ＳＫｐ－196	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
33	第３ａ類	Ｓ－６・ＳＫｐ－211	深　鉢	胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	暗橙色	
34	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－211	深　鉢	胴部	無文	橙色	
35	第３ｃ類	Ｓ－５・ＳＫｐ－256	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
36	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－211	深　鉢	胴部	無文	にぶい橙色	
37	第３ｃ類	Ｓ－６・ＳＫｐ－200	深　鉢	口縁部	ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
38	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－200	深　鉢	頸部～胴部	無文	淡黄色	
39	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－200	深　鉢	胴部	無文	にぶい橙色	
40	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－211	深　鉢	胴部～底部	無文	明赤褐色	
41	第４類	Ｓ－６・ＳＫｐ－211	深　鉢	胴部	無文	にぶい橙色	
42	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
43	第２類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	口縁～頸部	口縁に爪形刺突・ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
44	第３ａ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	橙色	
45	第４類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	無文	にぶい橙色	
46	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
47	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	にぶい橙色	
48	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
49	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
50	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	にぶい橙色	
51	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
52	第３ａ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	暗橙色	
53	第３ｃ類	Ｓ－４・ＳＫ－261	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
54	第３ｃ類	Ｔ－５グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
55	第３ｃ類	Ｔ－５グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	暗橙色	
56	第３ｃ類	Ｔ－５グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	にぶい橙色	
57	第１類	Ｔ－５グリッド遺構外	深　鉢	頸部	隆帯＋爪形刺突・ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
58	第３ｃ類	Ｓ－５・ＳＫｐ－318	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	にぶい橙色	補修孔あり
59	第３ｃ類	Ｓ－６グリッド遺構外	深　鉢	口縁部	口縁にのみＬＲ斜行縄文	橙色	
60	第１類	Ｓ－６グリッド遺構外	深　鉢	頸部	隆帯＋爪形刺突・非結束羽状縄文(LR+LR)	明赤褐色	
61	第３ｃ類	Ｓ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
62	第４類	Ｓ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	無文	橙色	
63	第３ｃ類	Ｓ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
64	第３ａ類	Ｓ－６・ＳＸ－342	深　鉢	胴部～底部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＬＲ）	にぶい橙色	
65	第３ｃ類	Ｓ－６・ＳＸ－342	深　鉢	胴部～底部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
66	第３ｃ類	Ｓ－６・ＳＸ－350	深　鉢	頸部～胴部	ＲＬ斜行縄文	明赤褐色	
67	第３ａ類	表面採集	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＲＬ）	にぶい橙色	
68	第３ａ類	表面採集	深　鉢	頸部～胴部	非結束羽状縄文（ＲＬ＋ＬＲ）	にぶい橙色	
69	第３ｃ類	表面採集	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
70	第３ｃ類	Ｔ－６グリッド遺構外	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	にぶい橙色	
71	第２類	Ｓ－６・ＳＸ－342	深　鉢	口縁～頸部	爪形刺突２列・ＬＲ斜行縄文	暗橙色	
72	第３ｃ類	表面採集	深　鉢	胴部	ＲＬ斜行縄文	橙色	
73	第３ａ類	Ｓ－６・ＳＸ－342	深　鉢	胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＲＬ）	にぶい橙色	
77	第３ｃ類	表面採集	深　鉢	胴部	ＬＲ斜行縄文	橙色	
78	第３ａ類	表面採集	深　鉢	胴部	非結束羽状縄文（ＬＲ＋ＬＲ）	暗橙色	

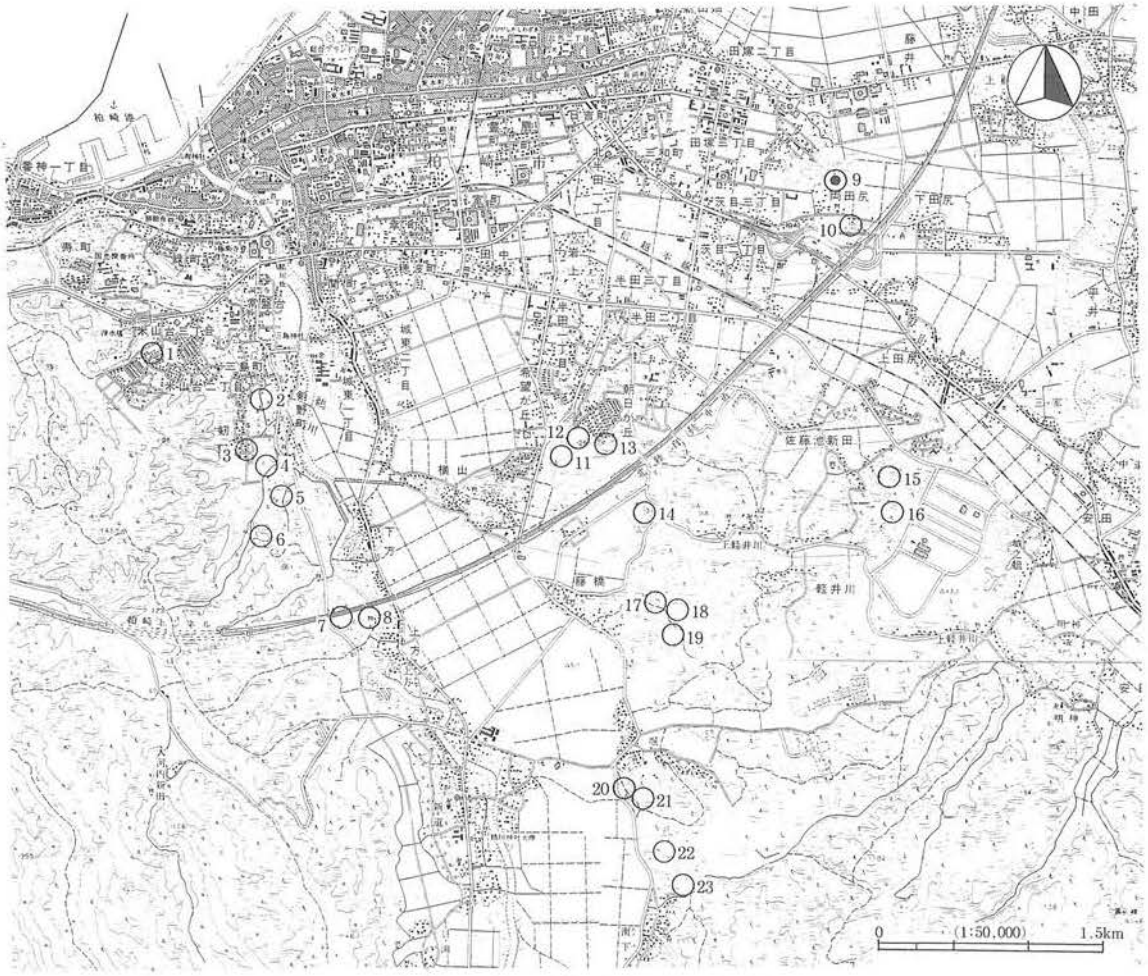
第13表　田塚山遺跡群Ｅ地区縄文土器観察表（２）

Ⅸ　考　　察

1　田塚山遺跡群Ｅ地区の縄文集落

1）　はじめに

田塚山遺跡群は、柏崎平野の中央部に浮かぶ最大の独立丘「田塚山」に立地している。かつては田尻山を経て上田尻で南部丘陵に接続する尾根の一部であったが、柏崎平野の主要河川の１つである鯖石川の侵蝕あるいは沖積作用によって、標高約20mの独立丘となったものである。周囲は標高約10mの沖積地に取り囲まれ、尾根筋での他との連絡を断たれた小さな「島」となっているのが、地形的な特徴である。今回の調査では、縄文時代の遺構群が検出されているが、このような地形からは、森林に囲まれていたという旧景観はやや想像し難いと感じる。「田塚山」自体が山林であったとしても、そこで得られる食料等は決して豊富とはいえない程度であっただろう。では、「田塚山」に営まれた縄文時代の遺跡とは、どのようなものであり、当時の人々はどのような生活を営んでいたのであろうか。今ここで、それを詳らかにする術はないが、本節では特にＥ地区から検出された縄文時代の集落を主眼に若干の考察を行い、「田塚山」に営まれた縄文遺跡を理解するための一助としたい。



第20図　田塚山遺跡群周辺縄文時代遺跡

No.	遺跡の名称	立　地　等	種　別	主要土器等（土器型式名または併行期）	備　考
1	剣野E遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	集　落？	剣野E（新保）	遺物は表採
2	剣野A遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	集　落？	花積下層・諸磯a・鍋屋町・剣野E・大木8a	戦後、一部調査
3	剣野沢遺跡	米山丘陵の沢内微高地	集　落？	大洞C_2～A	昭63、確認調査
4	剣野B遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	集　落	新保～新崎	平元、確認調査
5	剣野D遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	集　落	三十稲場～南三十稲場・三仏生	遺物は表採
6	剣野C遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	集　落	大洞C_2	遺物は表採
7	桐山遺跡	鵜川左岸の独立丘陵	集　落？	新保～新崎	昭54、発掘調査
8	宮山遺跡	鵜川左岸の米山丘陵	遺物包蔵地	新保～新崎	昭54、発掘調査
9	田塚山遺跡群	鯖石川左岸の独立丘陵	集　落	刈羽・新保～新崎・大木10～三十稲場	平6、発掘調査
10	小児石遺跡	鯖石川左岸の独立丘陵		刈羽～鍋屋町・新崎	平2、発掘調査
11	大宮遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落	刈羽（諸磯a～b）	平6、発掘調査
12	大沢遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落	新崎	平4、発掘調査
13	雨池遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落	新崎	平4、発掘調査
14	屁振坂遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落	鍋屋町～新保	平7、発掘調査
15	十三本塚北遺跡	鯖石川左岸の黒姫支陵	集　落	三十稲場～南三十稲場	平7、発掘調査
16	十三仏塚遺跡	鯖石川左岸の黒姫支陵	集　落	新崎・大木8a～8b	平2、確認調査
17	京ヶ峰遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集落・狩猟場	新崎	平5、発掘調査
18	呑作D遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落	三仏生	平5、発掘調査
19	呑作A遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集落・狩猟場	新保～新崎	平5、発掘調査
20	原遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落？	新崎・大木8a	遺物は表採
21	辻の内遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落？	刈羽？・鍋屋町・新崎・大木8a～8b	遺物は表採
22	大原遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集　落？	前期中葉（羽状縄文の繊維土器）、丸鑿形石斧	遺物は表採
23	千古塚遺跡	鵜川右岸の黒姫支陵	集落・狩猟場	新崎	平元、一部調査

第14表　田塚山遺跡群周辺の縄文時代遺跡表

2）　周辺の縄文時代遺跡概観

田塚山遺跡群の周辺地域における縄文遺跡は、本遺跡群を含めて23件を数える[1]（第20図・第14表）。縄文時代草創期～前期前半期の遺跡は極めて稀薄で、柏崎平野全体を見てもわずか5カ所が知られているだけであるが、前期後半期以降になると、遺跡数が増加し始める。当該地域においても、前期後半から中期前葉期にかけて遺跡数の増加が顕著となり、この時期の遺跡は16カ所が知られている。これは23遺跡中の約70%にも相当し、全ての遺跡が明らかでないため確定的な数字ではないが、該期遺跡の増加傾向を端的に示している。一方、中期中葉以降になると、遺跡数は再び減少する。柏崎平野全体では遺跡の増加傾向は後期前葉期まで持続されるため、中期中葉以降の減少は本地域特有のものと読み取ることができる。

当該地域において、田塚山遺跡群と同様に独立丘陵上に立地する遺跡には、小児石遺跡（10）と桐山遺跡（7）がある。小児石遺跡は田塚山遺跡群の南側に位置し、「田塚山」の「離島」的な小丘である。中世の墓地と塚群が主体を為す遺跡で、縄文時代の遺構としては、陥穴状土坑2基と性格不明のピットが1基検出されただけである［柏崎市教委1991b］。桐山遺跡は鵜川左岸の米山丘陵の先端に位置し、鵜川の侵蝕等により独立丘状となった支丘上に立地する。北陸自動車道建設に伴い、新潟県教委によって発掘調査が実施されたが、ピット群が9基検出されただけであった［新潟県教委1988b］。2遺跡ともに中世の遺構あるいは戦前・戦後の開墾等によって攪乱されていたと考えられ、調査によってその内容を把握することはできず、田塚山遺跡群との対比は困難な状況である。

刈羽式土器併行期に属する田塚山遺跡群E地区との同時期性が看取されるのは、小児石遺跡、大宮遺跡

(11) および辻の内遺跡 (21) である。辻の内遺跡は未調査であるため内容等については明らかでないが、平成6年に市教委が発掘調査を行った大宮遺跡[2] からは、本地域における当該期の中核となり得る大規模な集落跡が検出されている［柏崎市教委1994ａ］。大宮遺跡は、柏崎平野の南部地域に所在する黒姫山の支陵上に立地し、比較的広い平坦面を有している。丘陵上の沢を取り囲むように馬蹄形状に居住区が展開され、中心に遺構分布の稀薄な地点があり、広場と思われる。居住区の外側には3カ所の廃棄場が確認され、刈羽式土器併行期を主体とする遺物群が出土している。竪穴住居跡は2基検出されているが、その一方で、ピット群は約3,000基にものぼり、少なくとも20棟以上の住居が建てられていたと考えられる。この柱穴群から想定される住居形態は平地式であるが、出土土器からの推定では竪穴住居との時期差はほとんどなく、同時併存していた可能性が高い。

田塚山遺跡群Ｄ地区は新崎式土器併行期に対比できると思われるが、当該期の周辺の遺跡は、本遺跡群を含め13カ所が知られ、周辺地域における遺跡数の約56.5%を占める。このうち大沢遺跡 (12) ・雨池遺跡 (13) ・京ヶ峰遺跡 (17) ・呑作Ａ遺跡 (19) において、集落のほぼ全域が調査されている[3]。また、剣野Ｂ遺跡（４）では確認調査が実施され、本地域の中核となる環状集落の存在が示唆されており［柏崎市教委1990ｂ］、十三仏塚遺跡も大規模な環状集落である可能性が高い［柏崎市教委1992］。大沢遺跡と雨池遺跡では、竪穴住居跡は確認されなかったが、雨池遺跡では炉跡をもつ平地式と思われる住居跡が複数検出され、大沢遺跡では広場の存在が明確にされている。また、京ヶ峰遺跡でも広場と考えられるエリアの存在が確認され、竪穴住居も存在していた。住居エリアの外側には廃棄場の形成も認められた。呑作Ａ遺跡も同様に、遺構群が中央の広場を取り囲んで遺構が配置され、竪穴住居跡や廃棄場も検出されている［柏崎市教委1995］。

田塚山遺跡群Ｄ地区とＥ地区には時間的空白期が認められるが、その間を埋める時期に相当する本地域の遺跡としては屁振坂遺跡 (14) がある［柏崎市教委1996］。遺構群の配置には特に規則性は感じられず、遺構も土坑やピット類が点在しているだけである。しかし、柱穴と考えられるピット類の配置から、少なくとも9棟以上の平地式住居の存在が示唆されている。時期差や遺構密度の差違はあるものの、調査が実施された本地域の縄文遺跡の中では、遺構のあり方等が最も田塚山遺跡群に近似した内容といえる。

3）　Ｅ地区の縄文遺跡

遺構分布の概要　田塚山遺跡群Ｅ地区から検出された縄文時代に帰属すると思われる遺構群は、ピット類197基、土坑類15基であり、約92.9%がピット類であった。規模や深度等から柱穴と考えられるものも多く存在し、土層観察によって柱痕の確認されたものも6基ある。これらの配置等から平地式住居の存在が想定され、復元案を4例示したが、住居があったことを端的に示す炉跡や床面等の物証はなく、推定の域を脱し得ない。土坑類は比較的稀薄であった。墓坑や貯蔵穴の可能性があるが、比較的深度が浅く、食料の貯蔵には適さないと考えられる。そのため、特にＳＫ－261については墓坑の可能性が高く、墓坑は存在するが貯蔵穴と考えられる遺構は確認されなかったことになる。調査面積約1,105㎡の約23ｍ×19ｍという450㎡にも満たない狭い範囲に遺構が密集し、広場と目される場所も存在しない。なお、Ｅ地区は全域の調査が行われていないが、残りの西半についても、今回の調査区域と同様の傾向であると想定される。

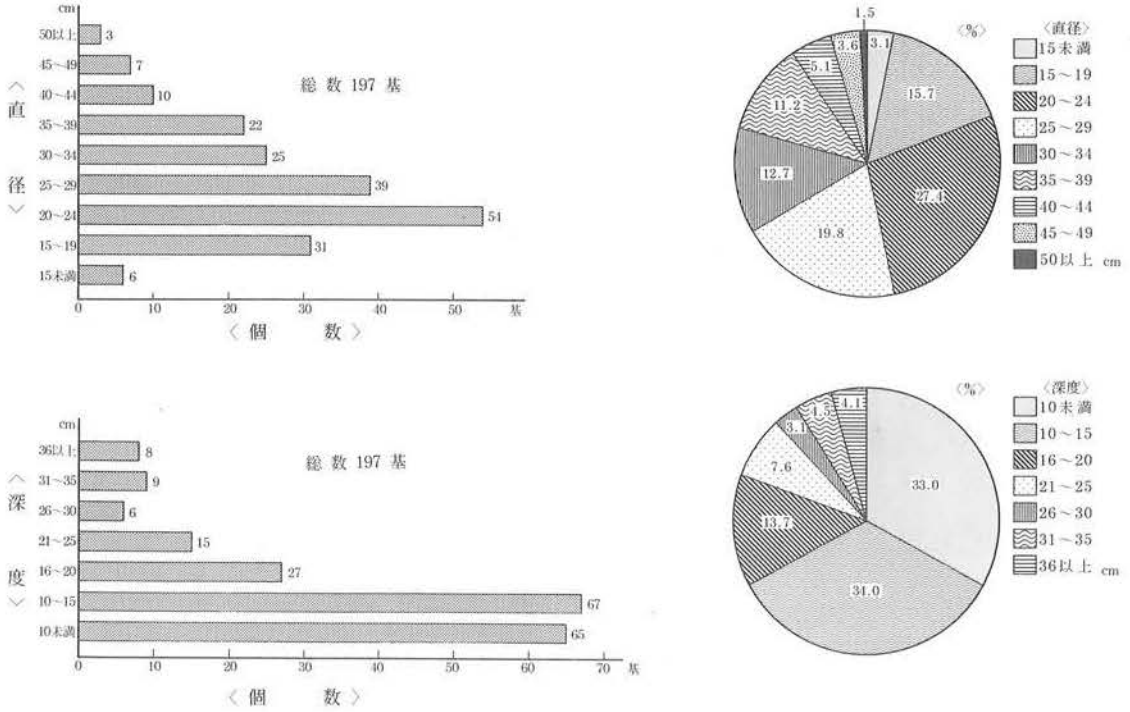
Ｅ地区の遺構密集地は、標高約18.5ｍ以上の平坦地に限られる。「田塚山」にはより広い平坦面を有するＢ地区等があり、集落形成の場としてより適しているように思われるが、Ｂ地区では住居跡が想定可能

な痕跡は確認されていない。E地区では最大3段階の遺構の切り合いが認められ、この場所で住居等の補修や新築あるいは増改築は行っても、B地区に移動することはなかったのである。このことは、同一丘陵上においても、微地形や微環境等が生活環境として適する地点を確実に選択していたことを示し、その選択基準は単純に平坦地の広狭だけではなかったことを示唆する事例であろう。

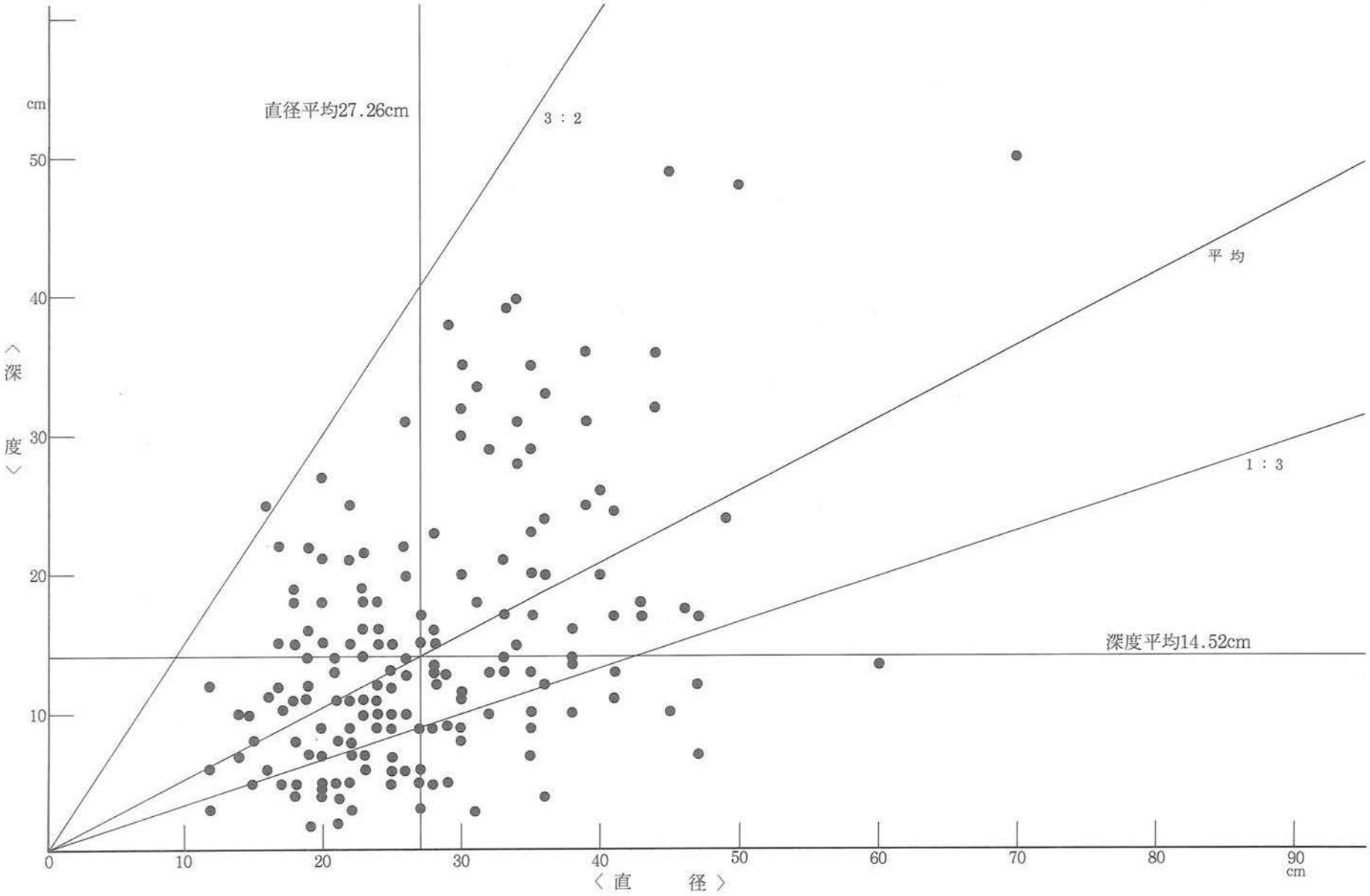
住居跡とピット類　今回の調査によって、E地区から検出されたピット類の配置等から推定復元された住居跡は4棟である。住居跡の形態をみると、調査区外への延長が想定されるＳＩ－402は6本程度の柱で構成されていた可能性が高いが、ＳＩ－401とＳＩ－404はともに5本柱で、倒木痕による攪乱を受けていたＳＩ－403も残存している柱穴の配置から5本柱であったと考えられる。このことから、本地区における住居跡の基本形は、5本柱であったとすることができ、一定の規定・規格のもとに住居が構築されていたことが窺える。遺構確認面に達する掘り込みがないことから平面形は不明とせざるを得ないが、柱を結んだ図形からは、円形もしくは楕円形のものが想像できる。なお、今回の復元案で用いられなかった残り179基のピット類が全て柱穴であったと仮定すると、調査区内には5本柱の住居が概ね35棟も建てられていたことになり、その広がりは未調査の西半部にまで至ると思われる。

ピット類の規模は、最大のもので直径70cmであったが、長軸が50cmを超えるものは3基で、全体の1.5％に過ぎない（第21図・第22図）。直径20～29cmのものが93基と最も多く、約47.2％を占めている。全体の平均は27.26cmであった。柱痕が確認されたものは6基で、土による根固めの痕跡も確認されている。この6基の柱痕径と直径の比率は、ＳＫｐ－24が1：6と柱穴の規模に対して柱がかなり細いが、残りの5基はほぼ2：3～1：3の辺りに分布している（第22図）。柱痕径の平均は13.7cmで、直径平均が42.0cmであることから、平均値同士の比率はおよそ1：3である。したがって、柱痕の確認されなかったピット類にこの数値を当てはめると、直径10cm未満の柱が大半を占めていたことになり、住居の強度等をある程度想像する手掛かりとなろう。

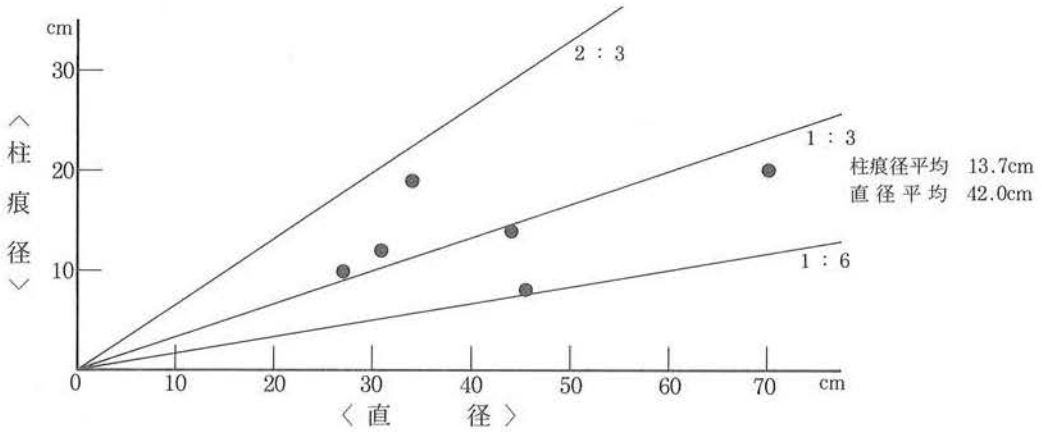
一方、深度は最深のもので50cmであるが、深度が40cmを超えるものは4基しか存在しない。深度15cm以



第21図　E地区ピット類法量分布図（1）



第22図　E地区ピット類法量分布図（2）



第23図　E地区ピット類の直径と柱痕径

下のものが132基と大半で、全体の67.0%の割合を占める。深度の全体平均は14.52cmである。深度と直径の関係は規則性が不明瞭で、3：2～1：3の間にほとんどが分布している。しかし、1：1～1：5の範囲に最も多いことから、直径の規模よりも深度の方が小さい傾向がある。また、深度の平均は14.52cmで、直径の平均値27.26cmとの比率はおよそ1：2となり、この付近が分布の中心となっている。このことから、本地区に遺されたピット類は、直径の半分の深度しかない、大きくて浅いものが多いということができよう。ただし、この数値は遺構確認面からのものであり、縄文時代の旧表土からのものではないため、当時は若干深度が深かったと思われる。そのため、本地区では現表土から確認面までがほぼ10cm程度で、深い部分でも20cm程であったことを参考にして、修正を加える必要はあるが、比率的にはそれほどの変化はないであろう。なお、柱痕の確認されたものは、全て遺構底面まで柱痕が至っており、SKp－181は柱や上屋等からの重圧によって、柱痕部分の遺構底面が凹んでいた。

さて、以上のことを要約すると、本地区に建てられていた柱の大半は直径10cm未満で、その柱の埋められていた深さは、旧表土分を考慮しても15cm～20cmに満たないものが多かったということになる。このような柱穴の特徴は、そこに存在していた住居の上屋構造の程度あるいは規模が反映された結果であろう。ここで得られた数値からは、柱の強度が概して弱く、上屋についても構造が簡易で、重量が軽く、強固な柱を必要としないものが想定できるのである。当時の本地域の気候等は明確でないが、冬の風雪に耐え得る構造の住居とは思えない。また、E地区は明確に貯蔵穴と判断される遺構をもたない集落であるが、従来述べられているような貯蔵施設としての大形建物跡もなく、炉の痕跡や冬の主要生業である狩猟［小林1991］に係わる遺物も出土していない。つまり、憶測となってしまうのであろうが、住居跡の構造や暖房施設、あるいは食料確保の問題等、本地区で得られた状況証拠からは、この集落で越冬をした痕跡は見出せないのである。

周辺遺跡との対比　E地区においては越冬の痕跡が確認できなかったが、このことについて本地域に分布する他の遺跡と対比することによって、更に検討を進めたい。対比する周辺遺跡としては、同時期の集落跡である大宮遺跡、時期差が認められるが遺構のあり方が近似した屁振坂遺跡を抽出した。

大宮遺跡は、本地域における該期の中核的集落となり得るものである［柏崎市教委1994a］。竪穴住居跡2基の他に、約3,000基のピット群が検出された。時期的には刈羽式土器併行期、すなわち諸磯a～b式土器に対比できる時期にほぼ限定され、若干諸磯c式土器併行期にも及ぶことが推定される。中核的集落であるにも係わらず、関東地方の土器型式に対比しても、せいぜい3型式5～6段階の時期幅しか認められず、集落の継続期間は概して短いといえよう[4]。このような時間幅と、検出された遺構群の状況から、

竪穴住居跡と平地式住居跡が併用されていたことが想定可能となる。貯蔵穴となる土坑は少ないが、６本柱の長方形建物跡が確認されている。また、石錘等の漁撈具や石鏃等の狩猟具も出土しており、通年に及ぶ生業道具がみられる。田塚山遺跡群Ｅ地区とは、遺構・遺物ともに様相を異にしており、大宮遺跡は夏冬兼用の集落であったと捉えることが可能であろう。なお、大宮遺跡で特筆すべきことは、蛇紋岩の多さである。出土した磨製石斧や玦状耳飾りは、１集落でも消費量を大きく上回っていると考えられ、未成品も含まれていた。蛇紋岩の剥片や原石に近い石核、あるいは砂岩質の砥石類も多量に出土しており、この集落で蛇紋岩製の石器類を製作し、供給していたことが示唆される。田塚山遺跡群Ｅ地区からも蛇紋岩製の玦状耳飾り未成品が出土しているが、その製作を裏付けるような痕跡は皆無であった。両遺跡間における製作痕跡のあり方には隔たりが大きく、そのため、Ｅ地区で出土した資料は、偏平に成形された段階で製品として搬入され、穿孔や溝の加工は自ら行おうとしたものと類推できる。柏崎地域は蛇紋岩の原産地ではない。従来の原産地（生産地）遺跡と消費地遺跡という２元的アプローチだけでは、大宮遺跡とＥ地区の相違は理解できず、より多元的な要素を視野にいれる必要があろう。

屁振坂遺跡は、1,000㎡程の範囲内に82基のピット類や土坑類が分布する、いわゆる小規模集落である。柱穴と思われるピット類の配置から12棟の住居跡が推定復元され、平地式住居が想定されている。床面や炉跡の検出はなく、貯蔵穴と思われる遺構も確認されていない。ピット類の規模は、直径の平均が26㎝で、25～35㎝の間に大半が分布している。深度は平均17.8㎝で、５㎝から25㎝の間に集中している。推定復元された住居跡は、５本柱を基本形とし、柱穴の規模や住居の形態的にもＥ地区との共通項は多い。また、遺物の出土は概して稀薄で、石器類は打製石斧や磨製石斧、あるいは磨石類や不定形剥片石器が検出されているだけである。特殊なものとしては、半分を欠損した矩形の玦状耳飾りがみられるが、製作をしていた痕跡はない。このように、時期差や密度等を無視すれば、屁振坂遺跡と田塚山遺跡群Ｅ地区は、遺構あるいは遺物のあり方が近似した内容となっているのである。

本地域における縄文時代前期後半～中期前葉期の集落は、大きく第Ⅰ類型と第Ⅱ類型に２大別されて論じられ、第Ⅱ類型からは越冬に備えていた痕跡が確認されないことから、夏の集落として捉えられている［品田1996］。これに当てはめると、大宮遺跡は第Ⅰ類型の、Ｅ地区及び屁振坂遺跡は第Ⅱ類型のそれぞれ典型とすることができる。特に冬期間の生活を主眼にした場合、両類型の遺構・遺物のあり方には隔たりが大きく、第Ⅱ類型に相当するＥ地区と屁振坂遺跡で厳冬期を過ごしていたとは確かに考え難い。逆にこの類型を単なるキャンプ・サイトとするには、玦状耳飾りが出土しているという事実や、Ｅ地区における遺構の密集度が示す状況を説明できないであろう。つまり、大宮遺跡のように通年にわたって営まれた集落がある一方で、少なくとも厳冬期を過ごさなかった集落の存在が想定されるのである。本拠地として通年を過ごした中核的集落と、避暑地あるいは冬以外の生業に係わる前線施設としての集落があり、年間の生活を補完していたのかもしれない。このような視点の上に立脚し、田塚山遺跡群Ｅ地区に形成された縄文集落は、いわゆる夏の集落として営まれていたと捉えることが妥当と考える。

４）　まとめ

Ｅ地区に営まれた集落を夏の集落として捉えた上で、想像を豊かにしてみると、本節において当初設定した自問に対する回答が幾つか説明可能となる。「田塚山」は周辺を沖積地に囲まれているが、ここが当時湖沼群であったとすれば、漁撈の前線施設等として最適であったのかもしれない。縄文人たちは、木々の木陰に、簡易で風通しの良い住居を建て、暑い夏を過ごしていたのである。その際、住居等の施設を建

築するためのスペースで、伐採や抜根等、最低限の造成を行う必要はあった。しかし、彼らは無駄な乱開発はしない。B地区のような広大な平坦地は不要で、E地区で充分だったのである。むしろ、日本海からの風が直接当たるE地区の方が、避暑地としては適していたのかもしれない。彼らにとってここは居心地の良い場所で、遺構数や出土土器からの推定では、5～10年にわたって、毎年のようにここで夏を過ごしたのである。

以上は全くの想像による余談であったが、ここで夏冬集落についてもう1度述べ、終わりとしたい。いわゆる夏の集落とした遺跡については、越冬用の施設等や冬の生業に係わるとされる遺物が見られないことから、「不在の論理」によって越冬をしなかったと考えるのが妥当であろう。夏の集落という概念を導入することによって、本地域における縄文集落のあり方や、時期的に偏った分布状況等をある程度理解することも可能となる［品田1996］。しかし、一方では大宮遺跡のように、通年にわたる生活痕跡が認められる事例があり、なぜ一部の人間が夏だけ移動をする必要があったのかという疑問は残る。夏期においては疫病蔓延の予防策や人口の集中による食料資源の困窮化、冬期には食料の確保や雪害に対する労働力の必要性等、夏と冬の住み分けを行っていたことの理由は幾つか推測される。また、気候変化等の自然現象と連動させて考えることもできよう［品田1996］。しかし、おそらくは多くの人間が介在していた問題であり、自然面とともに総合的な社会的背景を理解しなければ、季節による移動の理由を実証することは難しいであろう。

ところで、夏期になると中核的拠点集落から分散して、各々で小規模な集落を形成していたとすると、その背後には「人間集団」の影が見え隠れするように思われる。縄文土器研究では、型式に人間集団の概念を与えようとする方法は、学史的にも古くから試みられている［中野1992］。夏期に少人数毎の中小単位集団に分かれて住み分けたとすると、それは比較的多人数で構成された大単位集団における共同生活の場での強い規制から逃れ、ある程度の自由が許容されたということになる。そのため、夏集落における住居形態や集落構造等に、中小単位集団毎の自由が反映されたと推定することは充分に可能であろう。田塚山遺跡群D地区も夏集落と解される内容であったが、E地区→屁振坂→D地区という変遷過程の中で、D地区で推定復元された住居形態は5本柱を基本とせず、他の2例とは異なっている。これは時期差によるのか、あるいは集団表象に起因するものなのか。今後は、その意味も熟慮する必要がありそうである。

いずれにしても、夏冬集落を論じるには、そのデータ不足等による検証の不十分さが否めない。また、床面や炉跡のない平地式住居跡という性質上、推定復元されたデータの信頼度も問題となろう。特にE地区のように、ピット類が密集した中からの推定復元では、調査担当者の主観的要素が多分に入り込む余地があり、客観的データとはなり難い。今後はデータの蓄積が急務であるとともに、その信頼度についても再考し、更に検証を深めていくことが課題となろう。

註

1）第14表中の記載については、各調査報告書の他、［柏崎市史編さん委1987ａ］を基にした。そのため、特に土器型式の名称等については、不統一なものとなってしまった。また、大宮遺跡・大沢遺跡・雨池遺跡、および京ヶ峰遺跡・呑作D遺跡・呑作Aは、現在調査報告書の刊行に向けて整理作業中であるため、出土遺物等の詳細な検討はなされていない。

2）大宮遺跡については、現在調査報告書刊行のための整理作業が進行中であり、遺構や遺物の詳細な内容については十分な検討がなされていない状況である。そのため、報告書刊行時には、若干の変更もあり得ることを断っておきたい。

3）ここに掲げた5遺跡は、大宮遺跡同様に正式報告されておらず、今後若干の変更があり得る。

4）いわゆる小規模集落はもちろん、大宮遺跡のように大規模な集落においても、土器型式にして2～3型式の存続期間しか認められない状況は、本地域に分布する縄文遺跡の大半に共通した特徴といえる（第14表）。もちろん、全ての遺跡を調査して確定したことではないが、これは前期後半期に限られる現象ではないようである。例えば、平成7年度に発掘調査が実施された十三本塚北遺跡においても、三十稲場式～南三十稲場式土器の時間幅に限定される内容と考えられるものであった。剣野A遺跡等のようにやや継続期間に幅のある集落についても、出土遺物からは2～3型式毎に断続的に営まれていた様子が看取できる。

2　田塚山の中世仏堂と墳墓

1）　はじめに

田塚山遺跡群が所在する一帯は、元来黒姫山などに連なる丘陵の一部であったが、主に鯖石川による浸食と、長い年月による沢などの開析作用によって周囲を削られ、広い沖積地の中に浮かぶ島状の独立丘となった。この結果、周囲の視界を遮るものはなくなり、低いながらも眺望が極めて利くという柏崎平野でも特異な立地となったのである。また、当該地は、柏崎平野に所在したとされる鵜川荘・佐橋荘・比角荘の３荘が境界を接していた可能性が高い地であり、近在に小児石中世墓地や寺院関連と目される不退寺遺跡などが存在し、宗教的・信仰的な地名が多く残されている。さらに、本遺跡群の名称とした「田塚山」とは、大字下田尻字「田ノ塚山」であるが、この小字名の範囲とは、Ｂ地区を中心にＡ地区とＣ地区、それに試掘調査段階でＦ地区とした東側に長く延びる尾根筋までで、これら以外は大字が異なり、またほかの大字には「田ノ塚山」の小字名は残されていない。このような地理的・歴史的な環境を持つところに占地し、かつ独立丘の中では平坦地が最も広い場を選び建設された建物群が、中世前期の仏堂であったとしてもなんら不思議なことではない。

本節では、当該遺跡群から発見された中世前期の仏堂と墳墓・墓地について若干の考察を試みるものである。しかし、中世前期でも古く遡る本例と対比できる事例は、全国レベルでも乏しいことからすれば、課題の多くを将来に残さざるを得ない。ここでは主に、内陣と外陣における柱の配置から、仏堂の上屋構造について若干の類例を紹介し、中世仏堂の景観等について絵巻物に描かれた当時の姿から垣間見ることとしたい。そして、当該仏堂の建立された時期や存続期間等について検討を試み、本地域での中世史理解への一助として、当該仏堂の発見から展開する歴史的な意義について考えてみたい。

2）　仏堂の復元と景観

さて、田塚山遺跡群Ｂ地区から発見された中世前期の建物群は、柱穴を掘り、そこに柱を建てたいわゆる掘立柱建物であった。しかし、特徴的な柱穴の配置は、現存する礎石立の寺院本堂のそれと極めて類似し、いくつかの類例が見出される。本建物群の性格について、これを直ちに寺院とするには寺号の存在が不明確であって早計と言わざるを得ないが、柱穴の配置は明らかに仏堂本堂のそれである。そして、本堂右手の建物跡は、僧房もしくは現代の庫裡（本稿では便宜的に「庫裡」と呼称しておきたい）と同じ機能を持つものとして捉えることができる。また、建物群の西側と北側には、墳墓や墓域を画したと考えられる区画溝が確認されている。中世において、仏堂本堂と庫裡そして墳墓・墓地がセットとして純粋な形で確認された事例は、全国的に見ても極めて少ない。また、本建物群が、一つの寺院・寺庵であるとすれば、現代の村々に点在する寺院と共通する点が見い出される。田塚山から発見された仏堂関連の建物群とは、その規模からしても在地に密着した寺院・寺庵の極めて典型的な事例となり得ると考える。しかし、この田塚山には、どのような仏堂が建立されていたのであろうか。

柱穴配列の類例　田塚山における仏堂は、１間四方の４本柱によって内陣とし、その回りを３間四方の外陣が取り巻く一重構造をとる。さらに内陣のうち、前列は外陣と左右一線に並ぶが、後列は後方へずれているという特徴がある。このような柱の配列は、多分に須弥壇の位置と関連するが、柱の位置によって上屋構造への影響も大きいことが予想される。田塚山例と同一パターンの柱配列を呈する寺院としては、

重要文化財に指定されたものの中から検索すれば、第24図に提示したような7例が見い出される［毎日新聞社編1073］。これらの事例は、兵庫県如意寺阿弥陀堂が鎌倉時代とされている以外はすべて室町時代とされ、時代的な関係では如意寺の事例が近い。しかし、兵庫県の1例を除くと、千葉県4例、長野県2例と、関東甲信越方面に事例が多いようである。ところで、以上7例は、内陣と外陣の配列から抽出したが、田塚山例では外陣を小規模な柱穴列が四方をめぐっていた。これらは、規模や深度からも、本体やせりだした屋根を支えると言うような構造上の重要性はなく、付属的な意味合いが強いものと判断され、この場合は縁側部分の縁束が想定される。このような事例は、兵庫県の如意寺例のほか、千葉県の西願寺阿弥陀堂、大聖寺不動堂、宝珠院観音堂の3例となる。屋根は、如意寺阿弥陀堂の1例が入母屋造である以外は、千葉県の3例とも寄棟造である。少ない事例からではあるが、寄棟造りの屋根構造の可能性が高いのかも知れない。また、内陣前列がその左右の外陣の柱と結ばれて間仕切ることにより外陣とする事例が、松尾寺本堂や大聖寺不動堂・盛蓮寺観音堂など7例中5例認められる。田塚山の仏堂については、柱穴配列だけのため判断できないが、外陣中央列後ろ寄りの左右2基の柱穴が、ほかとはまったく異なって小規模で浅いことから、外陣前方が間仕切られていた可能性は考えられる。

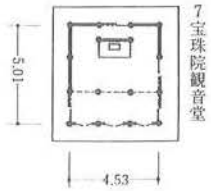
なお、田塚山例の場合、柱穴が掘立柱であったこと、瓦類がいっさい出土していないことから、茅葺もしくは板葺の可能性が高いであろう。また、須弥壇の位置については、さまざまな事例があって特定は困難なようである。

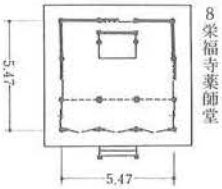
寺庵の景観・イメージ　第25図は、『日本常民生活絵引』［渋沢ほか編1984］（以下『絵引』と略記）に掲載されている『一遍聖絵』に描かれた寺院や庵堂、庫裡についていくつか抽出してみた。『一遍聖絵』の成立は13世紀末であり、描かれている情景は、おおむね13世紀後半頃と考えて差し支えないものと思われる。したがって、田塚山の仏堂関連の建物群をイメージする場合、時期的な問題は少ない。ただし、事例のほとんどが四国・九州地方であり、冬の強い季節風や積雪がかなり多い越後の事例との直接的な対比は難しいが、大まかなイメージは描けるであろう。

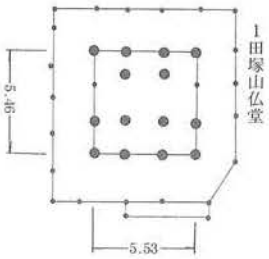
1は、『絵引』において「田舎の寺」と紹介されている播磨（兵庫県）の教信寺である。この寺には、3や4と同様に回廊や楼門・塔がなく、古代の伽藍配置の規制がやぶられ、寺そのものが民衆のために建てられはじめた様子を示す例として興味深いとされている。田塚山例と対比すると、庫裡が本堂正面から左手にあって続いておらず、築泥塀や鐘楼が存在し、墳墓・墓地が見られないなどかなり相違している様子がうかがえる。宗派もしくは寺庵建立の経緯に差異があるものと判断される。2は、伊予の窪寺である。本堂の右手にほぼ接して庫裡が建てられており、イメージ的にはかなり田塚山例に近い。周囲には間垣がめぐらされ、簡易な門柱が建てられているが、これらが遺構としてどの程度残されてくるのであろうか。また、門柱が必ずしも正面には存在しないことを意味しているが、田塚山では間垣も門柱も遺構としては見極められなかった。3は、太宰府の聖達上人の庵室である。建物は、三間四方に廻り縁がめぐっている。屋根の形については判らないが、その他は田塚山例に近いのではないだろうか。ただし、田塚山が本堂とは別に庫裡を建てていることからすれば、単なる庵室ではなかったことがうかがわれる。本例は、庵室であって、仏像を安置するとともに居住することを意図したものであり、田塚山の仏堂とは大きく意味を違えている。4は筑紫の清水寺である。これも築泥塀をめぐらせるが、境内には仏堂と宿坊と考えられる建物しか描かれていない。5・6は、前者が善光寺裏の庵室、後者は伊予桜井の庵室である。また、7は、伊予の一遍の郷里近くの寺と考えられるが、絵には僧房が描かれている。5・6の庵室は、桁行3間、梁行は2間もしくは1間と小さなものとなっている。これに対し、7の僧房は、桁行5間、梁行2間、後側

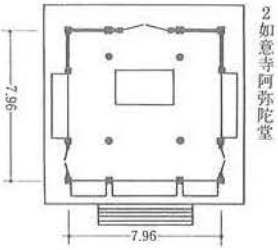
5 大聖寺不動堂　千葉県

室町時代







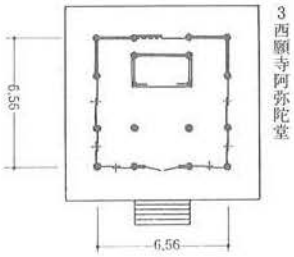


6 盛蓮寺観音堂　長野県

室町時代(1470)

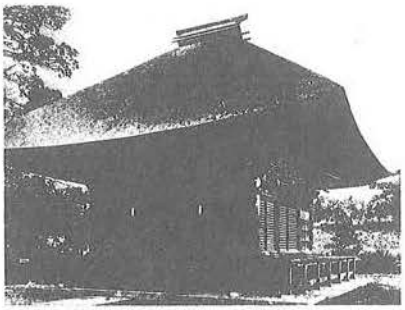
2 如意寺阿弥陀堂　兵庫県

鎌倉時代



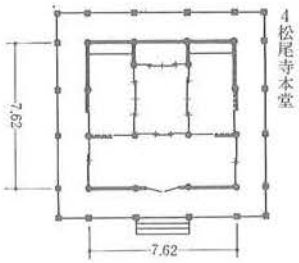
7 宝珠院観音堂　千葉県

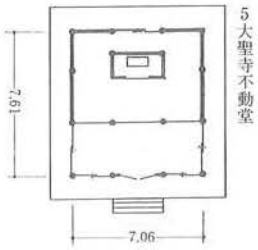
室町時代(1563)

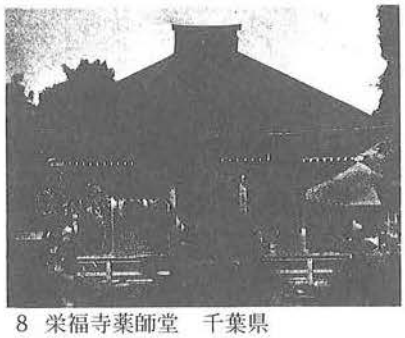


3 西願寺阿弥陀堂　千葉県

室町時代(1495)





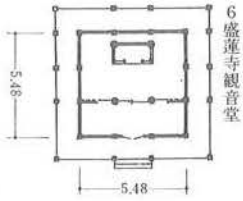


8 栄福寺薬師堂　千葉県

室町時代(1472)

4 松尾寺本堂(薬師堂)　長野県

室町時代(1528)



※2～8：毎日新聞社　1973から抜粋して転載

第24図　田塚山仏堂本堂の類例

は不明であるが、少なくとも正面と左右には縁が巡らされている。田塚山例で庫裡もしくは僧房としている建物は、梁行が2間であることでは同じであり、桁行7間はやや大きい。しかし、全体の構造は、左右の縁を除けばイメージ的にかなり近い事例となりそうである。

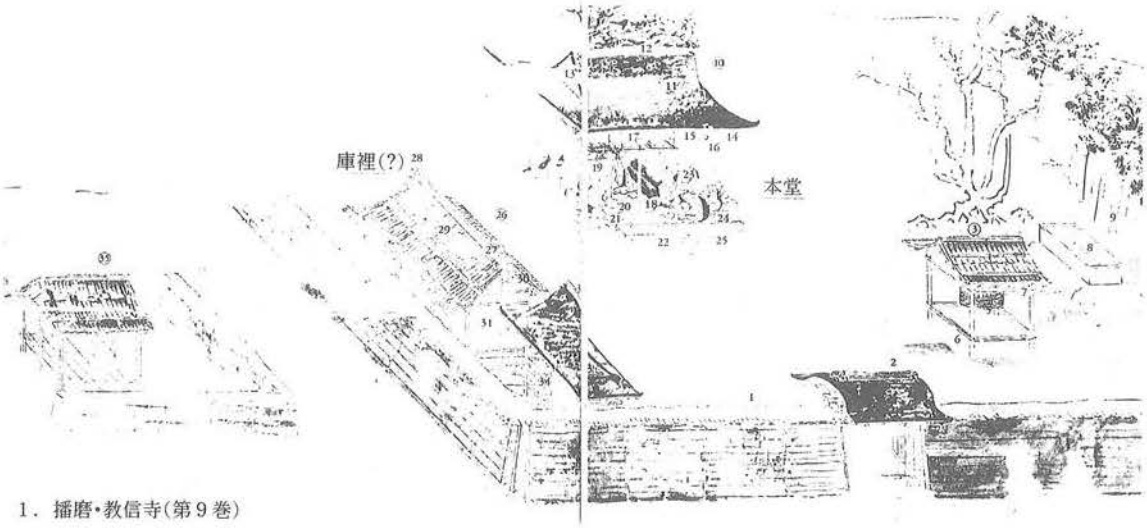
3） 中世土師器の編年的位置付けと仏堂の年代観

田塚山遺跡群から出土した中世の遺物は、仏堂等が検出されたB地区にほぼ集中し、ほかの地区ではほとんど確認されなかった。このことは、中世寺院の境内地がB地区にほぼ限定され、A・C両地区へわずかに広がる程度であったことを示している。出土遺物の種別としては、仏具はいっさいなく、中世土師器・珠洲の土器類と墓坑内に副葬されていた刀子などであった。しかし、出土量においては極めて少なく、また遺構内から一括として把握できる資料等には恵まれなかった。本項では、田塚山の仏堂について、その時期的な問題を明らかにするため、他遺跡出土資料とともに中世土師器の編年を試み、珠洲編年との関連からその年代観を検討してみたい。

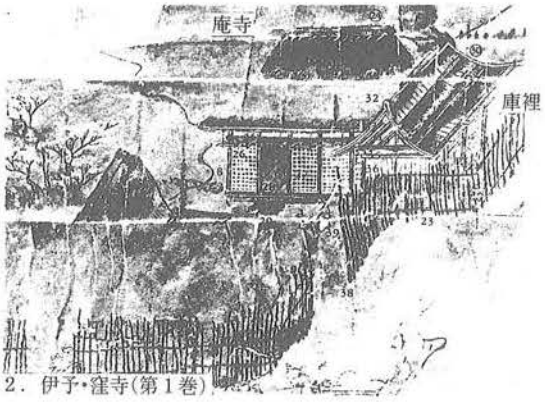
田塚山遺跡群における中世土師器は、墳丘墓の区画溝であるＳＤ－１ａ溝と、その拡張・改修溝であるＳＤ－１ｂ溝のほか、墓域の区画溝と想定されているＳＤ－160溝およびその周辺、そして仏堂や庫裡の柱穴などの遺構から出土している。出土量は、各遺構に1片ないし小破片数片程度である。これらの土器群のみでは、編年的な検討まで試みるには極めて困難であることから、近在する遺跡として小児石中世墓地［柏崎市教委1990ｂ］および関野遺跡出土の土器群［坂井・宇佐美1987］と、当該中世土師器と同じく「刈羽・三島型」の分布域と目される三島郡出雲崎町の番場遺跡［新潟県教委1987］の資料を合わせて検討を試みたい。ただし、ここで用いる遺跡数は4カ所、資料数は極めて少なく、暫定的な試案であることをお断りしておきたい。

中世土師器の形態分類　ここで対象とする中世土師器は、以前に類型化した中世土師器のうち［品田1990ｃ］、製作技法を手ずくね成形としたＡ類が対象となる。時期的には、京都系Ａ類と在地形態とした「刈羽・三島型」の中世土師器である。資料の絶対数が少ないことから、大まかな分類を行っておきたい。まず、皿類については、大きく4類に区分できる。第1類は、口縁部の横ナデ調整が極めて強く、指の形が写されたような2段の凹凸が顕著な一群である。これらの細分は、当該資料だけでは不備が多くなるが、2段のうち下段が相対的に強くなるものと（1・2）、上下とも均一なものとが認められ（3～5）、時期的な差異の可能性が高い。第2類は、口縁部の横ナデが概して緩くなった一群で、全体に厚手のものが多い。第3類は、第1類と同様に口縁部の横ナデがかなり強く行われるが、2段というより平板に平均的に横ナデされ、かつ胴下半部との間の稜線を強くするものである。これらの中には、稜線の表現において小さな段を強く造出する場合と（20・23～24）、細く鋭い沈線を意図的に描出する場合があり（21～22・25～26）、後者にはさらに太くて明瞭な沈線を施す場合がある（32）。第4類としては、稜線が明瞭でなくなり、全体的に厚手となるものである。これらの類については、今のところ小皿類に顕著であるが（34～37）、皿類では市内馬場・天神腰遺跡で量的なまとまりを示している。小皿類の分類については、形態そのものが小さく、その変化もまた少ない。基本的には皿類と同じと考えられるが、同じ系統を長く引き摺っているようである。法量等については、皿類及び小皿類に、それぞれ大小が見受けられる。しかし、時期的な変遷等までは明らかにし得ず、今後の解題として残しておきたい。

編年試案　4遺跡の資料だけでは如何ともしがたいが、大きく4期に区分してみた。第Ｉａ期には、第1類の資料を掲げたが、前述のごとく、今後において少なくとも2期以上は細分可能と考えられる。第Ｉ

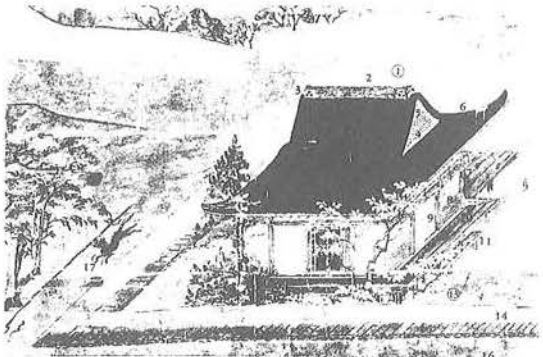


1．播磨・教信寺(第９巻)

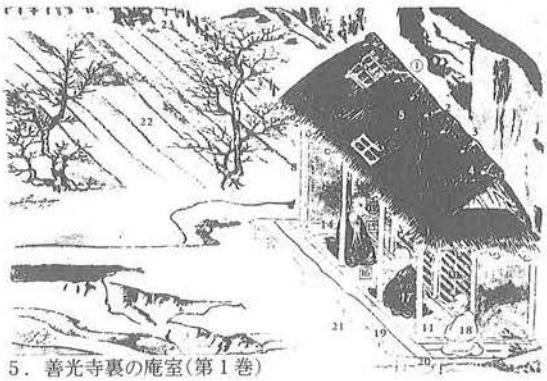


2．伊予・窪寺(第１巻)

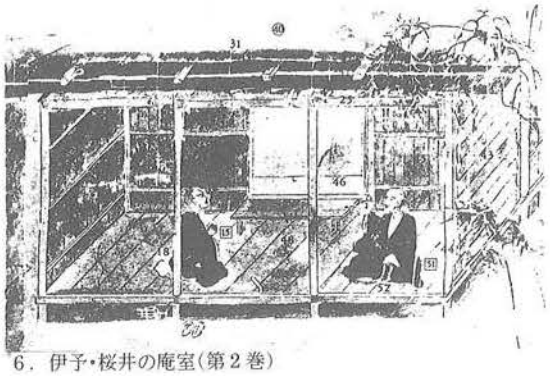
3．大宰府・聖達上人の庵室(第１巻)



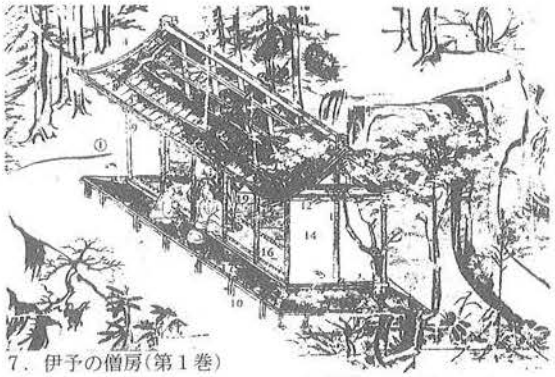
4．筑紫・清水寺(第１巻)



5．善光寺裏の庵室(第１巻)



6．伊予・桜井の庵室(第２巻)



7．伊予の僧房(第１巻)

(澁澤敬三ほか編　1984
「一遍聖絵」から転載)

第25図　絵巻物にあらわれた仏堂と庫裡僧房

b期は、第2類の土器群により設定したい。横ナデの技法からすれば、第Ⅰa期からの伝統を残す時期であり、スムーズな変遷がなされた可能性が高い。

第Ⅱ期は、第3類をもって構成する。当該期が「刈羽・三島型」の前期に属するものである。ただし、第Ⅰb期と第Ⅱ期の課題として、関野遺跡出土土器群の問題がある。今回、当該遺跡の資料を前後2期に分かち、第Ⅰb期と第Ⅱ期に区分した。本資料の出土状況はいっさい不明であり、一括資料という保証はないが、現在本資料の所在が不明となって、確認できないことから前後2期に細分できるかという問題も明確ではない。場合によっては、第Ⅰb期末に入り込み、第Ⅱ期に大きく影響を与えた可能性もあり、本資料の時期的な問題については留保しておきたい。また、32の資料については、小児石遺跡の墳丘墓溝から出土したものであるが、墳丘の反対側に位置する溝内から出土した土器として、第Ⅲ期に含めた35・36がある。このため、その所属が不明確な資料であることをお断りしておきたい。その第Ⅲ期については、稜線の不明確となる第4類の土器群をもって設定しておきたい。しかし、この時期についても、馬場・天神腰遺跡で改めて検討する必要があるが、小皿に示されるような変化は存在しており、これらを「刈羽・三島型」の後期に位置付けておきたい。

各期の画期については、第Ⅰa期以前の様相が把握できないが、基本的には第Ⅰa期が、京都系A類の波及期もしくはその前後に時期に相当し、それが形骸化を呈した時期が第Ⅰb期と考えたい。この第Ⅰb期の末もしくは第Ⅱ期に至って、同じ京都系A類であっても鎌倉など別のフィルターを経た土師器が流入した可能性が高い。したがって、「刈羽・三島型」成立期を意味する第Ⅱ期の始まりは大きな画期となる可能性が高い。また、第Ⅲ期については、全体に簡素化が著しい。この変化とは、新たな系譜の流入による影響か、あるいは在地の独立化傾向が強くなった結果であるのかなどの背景が不明確であるが、在地の動向をうかがうには大きな画期をなしているものと考えられる。

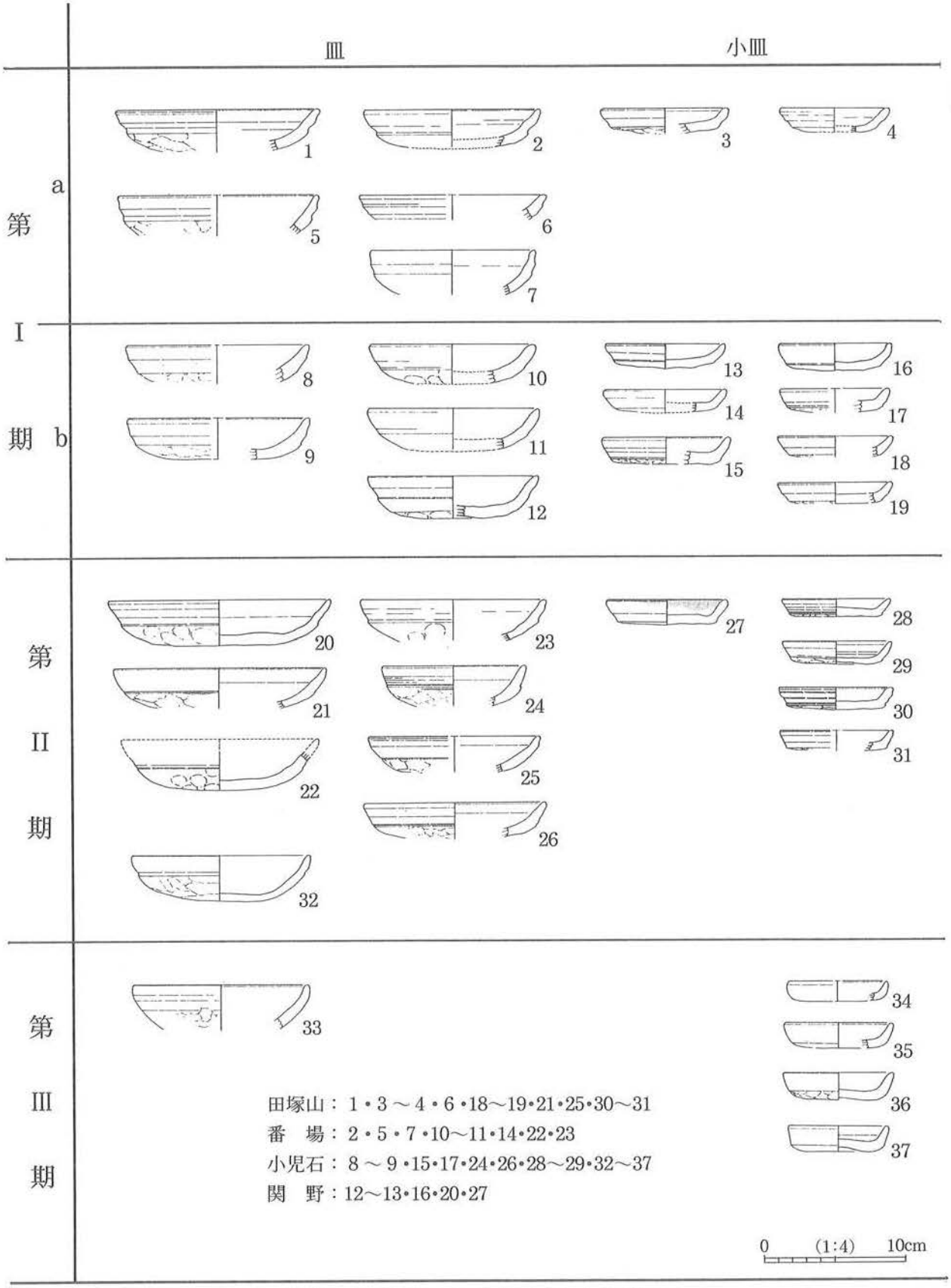
各期の絶対年代の推定　今回試案を提示した各期の年代観を示せる資料は、ほとんど無いに等しい。ここでは、若干ながら供伴した珠洲の破片などから大まかな年代観［吉岡1994］について推定を試みたい。

田塚山遺跡群での事例としては、まず重複関係が明らかなSD－1区画溝についてみておきたい。本区画溝については、SD－1b溝がSD－1a溝の拡張・改修溝であり、したがって1a溝→1b溝という順が確かめられている。中世土師器の編年では、第Ⅰa期に属する資料が両者から出土しているが、SD－1b溝では第Ⅱ期の破片も出土しており、時期的には第Ⅰb期から第Ⅱ期の所産とせざるを得ない。SD－1a溝にともなった珠洲破片は、細片がほとんどで時期の判定はかなり難しい。強いて時期を考慮すると、糸切りの壺を珠洲編年の第Ⅰ期から第$Ⅱ_1$期に比定すれば、12世紀末から13世紀初頭頃が想定できよう。SD－1b溝の場合では、珠洲第Ⅰ期末以降の資料が主体であるが、珠洲第Ⅱ期もしくは第Ⅲ期を考慮せざるを得ないものが含まれていることから、大まかには13世紀前半から後半代頃を想定しておきたい。

以上のことから、本稿の中世土師器編年の各時期を類推すれば、第Ⅰa期は12世紀末から13世紀初頭頃、第Ⅰb期は13世紀前半頃、第Ⅱ期は13世紀後半頃の時期に比定できよう。この他では、小児石中世墓地の事例として、32・36～37と供伴した珠洲小鉢がおおむね珠洲第Ⅱ～Ⅲ期に比定できる。このことから、第Ⅱ期はおおむね13世紀代の幅の中で理解し得る可能性が高いであろう。ただし、第Ⅲ期については、13世紀代を含むも、14世紀まで幅を持っている可能性は残されている。

仏堂関連遺構の推移　田塚山から検出された仏堂関連の建物や墳墓・墓地の区画溝の時期についてまとめ、両者の推移について若干述べておきたい。

上述の年代観からすれば、SD－1a溝およびSD－160区画溝は第Ⅰa期:12世紀末から13世紀初頭頃、



第26図　刈羽・三島型中世土師器の編年試案

ＳＤ－１ｂ溝は、第Ｉｂ期から第II期と考え、主に第II期に機能していたとすれば、第II期はおおむね13世紀後半頃が想定される。本堂及び庫裡の柱穴から出土した中世土師器は、いずれも第II期に属している。

ところで、ＳＤ－１ａ溝は、墳丘墓の区画溝と考えられ、ＳＤ－160区画溝は墓域を示すものである可能性が高い。中世土師器の編年観では、この両者とも第Ｉａ期の所産となる。両者の位置関係は、明らかに本堂を意識して設定されており、これらが当初から計画的に配置され、造営されたことを示している。また、庫裡とＳＤ－160区画溝との関係について、両者が極めて近接して不自然さもあるが、溝区画の出入り口の存在と、ＳＤ－１ａ溝区画による墳丘墓の位置が本堂と庫裡を合わせた幅の中で、ほぼセンター上を意識して配置されていることからすれば、本堂及び庫裡もこれらと同時期の第Ｉａ期から存在していた可能性が極めて高い。しかし、本堂及び庫裡の柱穴からは、第II期の中世土師器しか出土していないことも事実である。これは、開放された溝ではなく、埋め戻される柱穴という特性から見ても、建て替えもしくは移転のための解体作業に際し混入した遺物の可能性が高い。建て替えについては、当該建物群が掘立柱による建築物であって、その耐久性から考えても長い期間は維持できないことからも想定できる。しかし、移転に伴う解体作業が行われたとした場合も、結果的には同じ状況となり、にわかに判断できない。しかし、どちらにしても、第III期までは存続していないことは確実であり、第II期：13世紀後半には廃絶もしくは移転したものと考えることができよう。

このように見てくると、仏堂と墳墓、特にＳＤ－１ａ溝によって区画される墳丘墓とは、かなり密接な関係を認めないわけには行かない。両者の位置関係は、仏堂・庫裡の背後にあって正面から見れば西側に位置する。本堂の主軸方位は、真西より若干北に振れているが、ほぼ真西から真東を指向している。このことは、本堂の正面に向かって拝めば、夕方においては夕日が逆光で差し込み、後光が指したように見えるよう配慮されていたことが判る。つまり日想観に従い、計画的に配されていたことがうかがえるのである。このような配置を意図して仏堂が造営されたということは、ＳＤ－１ａ溝によって区画されていた墳丘墓のため、仏堂が建立されたと考えることが妥当である。墳丘墓を造営した階層とは、当時においては武士階級などの有力者以外にはなく、在地に展開した領主層であったと考えられる。さらに墳丘墓の溝には改修の跡が見られ、拡張がなされていること、仏堂関連施設も第Ｉａ期から第II期までの期間にわたって機能していた。以上のことから、当該仏堂とは、墳丘墓に埋葬された被葬者を供養するために建立され、かつ祖先を祀るため、菩提所として機能していたと考えることができるであろう。

4）　安田条「下方（仮称）」と中世遺跡群

さて、中世土師器の年代観から、当該地には12世紀末から13世紀初頭頃すでに領主的な勢力の存在が想定可能となった。その発端が仏堂の発見であるが、極めて希有な事例である事からしてもその意味は大きい。しかし、この発見が、地域の歴史の中でどのように理解・解釈され、意義付けられるのか、これが今後の課題として科せられてくる。本項では、田塚山遺跡群とほぼ同一地域内に所在する中世遺跡として、小児石中世墓地と不退寺遺跡を取り上げ、これらの遺跡群の関連を検討するとともに、これら遺跡群が所在する地域の意味についてもあわせて検討を試み、現在把握されている遺跡群から地域史的な意味合いについて仮説的な試案を述べてみたい。

安田条の上方と下方　まず、田塚山の仏堂等を含む中世遺跡群が所在する地域とは、中世の中でどのように位置付けられるのか、特に鵜川荘安田条としてこの問題を考えてみたい。

当該地は、越後毛利氏が安田条地頭職を得て、その後安田毛利氏の根拠地となる。その具体的な時期に

ついては詳らかでないが、応安７年（1374）４月27日付けの「安田道幸譲状」［柏崎市史編さん委1987ｂ（№41）］からすれば、この譲状以前に得ていたことは明らかである。この安田条の範囲については、これを示す文書がないことから、現状から推定せざるを得ないが、この問題では天和３年（1683）年の「苅羽郡村々石盛帳」［柏崎市史編さん委1984ａ（2－2－1－№24）］が参考となりそうである。この中で「鏡郷」と一括された村々とは18カ村におよび、安田村・下田尻村・茨目村・上田尻村・両田尻新田村・軽井川村・下方村・半田村・大窪村・剣野村・新田畑村・比角村・横山村・上方村・岩神村・長浜村・中浜村・下宿村の村名を掲げることができる［新沢1990］。これらの分布を見ると、鵜川筋では、柏崎町と琵琶島村を除く新道－藤橋ラインの北側全てと鯖石川下流の左岸域に広がっている。これら18カ村が「鏡郷」として一括されて記載されている理由としては、前代における支配関係の名残りとされ、鏡郷の場合、安田毛利氏が支配した地域であったとされている［新沢1990］。鏡郷の範囲とは、戦国末もしくは近世初期の実態の反映であることから、鏡郷の範囲には安田条以外の村が含まれているが、しかしほぼ重複することになる。安田条に接する荘として、佐橋荘と比角荘がある。また鵜川荘には、安田条のほかに上条があり、また文書では確認されていないが上条の対語から下条の存在が推測される。上記「苅羽郡村々石盛帳」には、柏崎町と琵琶島村が鵜川荘とされていることがその名残りで、鏡郷の一部がこれに加わるものと考えられる。支配の関係でも、上条は上条上杉氏が、下条は琵琶島城に拠る宇佐美氏が支配した経緯が想定される。両条と安田条との関係を地理的な観点から区分すれば、岩上村と半田村は安田村から一連の地形で連続し、これより西側が低湿地となっていることから、この両村までが安田条の可能性が高く、下方村・大窪村・剣野村・横山村・上方村・中浜村・下宿村は、大半が下条に属するものと考えられる。また、上条との関係については、藤橋村域が西側の鵜川流域の沖積地へ広がっていることからすれば、丘陵部を占める軽井川村の境までと理解できそうである。また、比角荘域については、『師守記』貞治３年（1364）６月18日条に「越後国比角庄等事」［柏崎市史編さん委1987ｂ（№40）］という記載があることから、毛利氏が安田条の地頭職を得た時期においてもほぼ存続していた可能性が高い。比角荘域と推測される村とは、鏡郷に「田塚」が含まれていないこと、田塚山から新田畑に至る間は低湿地が広がっていることから、比角村・長浜村など新田畑村以北が地形的に分離可能である。これらから、鵜川荘安田条の条域を推定すれば、現在の安田地区から田尻地区・半田地区に及ぶ安田村・下田尻村・茨目村・上田尻村・両田尻新田村・軽井川村・半田村・岩上村の８カ村となる。ただし、嘉吉２年（1442）の銘をもつ「岩船神社鰐口」に鵜川荘と記された「藤井」については、位置的にこれらと隣接することから、藤井村も含まれる可能性がある［柏崎市史編さん委1987ｂ（№74）］。しかし、下田尻と藤井間には鯖石川の旧河道の痕跡があり、現在北鯖石地区とされる藤井については、ひとまず保留し、今回は安田条に含めないこととする。

ところで、安田条内における地域区分の呼称として「上方」がある。「鵜川庄安田条上方」とは、暦応４年（1341）４月13日付けの上杉朝定寄進状によって安国寺に寄進された土地である［柏崎市史編さん委1987ｂ（№31）］。しかし、この「上方」の地は、安田条の地頭職を持つ安田毛利氏が要害を築き、本拠地としていた地である。このため、安国寺の支配・介入を拒み続け、そのためたびたび文書に登場している［柏崎市史編さん委1987ｂ（№35・42・43・45・46・48・49・50・56）］。「上方」が、土地の区域を示す名称であるのか、漠然とした地理的な範囲を意味するものであったのかについてはうかがい知れないが、その対語として「下方」的な区域が存在しそうである。両者の範囲や境界などはまったく不明であるが、地形的な状況からすれば、安田・軽井川は上方に、下田尻・両田尻・茨目・半田・岩上が下方に相当し、上田尻はその境界付近、場合によっては上方に含まれていた可能性が高いであろう。このようなことを前

提にすれば、田塚山遺跡群などが所在する地域は、中世では鵜川荘安田条にあり、その中でも「下方」であったとすることができる。

田塚山仏堂と小児石中世墓地と不退寺遺跡　田塚山における仏堂と庫裡、そして墳墓等の時期は、12世紀末～13世紀初頭頃に造営され、13世紀後葉頃まで、少なくとも50年、およそ70～80年間ほどは、仏堂として機能していたと考えられる。小児石中世墓地は、田塚山の墳丘墓より１段階ほど遅れた第Ⅱ期から墳墓の造営がはじまり、15世紀後半もしくは16世紀の前半頃まで、途切れることなく連続して造営されていた。その変遷は、大きく３期に区分されている［品田1991ｂ］。２期に細分された第Ⅰ期は、墳丘墓が造営された13～14世紀頃とされ、第Ⅱ期は墳丘墓から土壙墓への過渡期で、おおむね14世紀頃とされている。第Ⅲ期は、14世紀の後半頃から16世紀頃までとされ、３期に細分されるが、土壙墓が大きく展開する時期である。特に第Ⅲｃ期とした15世紀後半頃に至って被葬者が格段に多くなる。特に複数の火葬骨が埋葬されたＳＸ－46墳墓内では、土葬された頭骨のみの遺骨が確認されるなど極めて異常な状況を示していた。

不退寺遺跡は、田塚山の仏堂正面から東へ約900ｍのところに位置する寺院跡が想定可能な遺跡である。本調査等はなされていないが、採集された遺物には、平安時代後期とともに中世後期の遺物が主体的であった。不退寺は、15世紀後半に要害の際にある山の帰属を安田毛利氏と争論し、『白河風土記』に「七堂伽藍の大地［寺カ］」とまで記載されるほどの寺院であった。しかし、近世初期に境内地の大半が水田に開発されるまで荒廃し、縁起には文明年間（1469～1487）の戦乱により焼失したとも記されている。この記載は、縁起の性格上直ちに歴史的な事実とすることはできないが、安田毛利氏との争論に関わる文書が文明年間の前半までで途切れそうなこと、小児石中世墓地における被葬者の激増とは年代観において矛盾がないことも事実であり、興味深い記述とすることができる。また、不退寺遺跡の主体的な時期あるいは寺院跡としての確認は、現状での特定が困難としても、田塚山の仏堂と重複する可能性は薄い。これらのことは、田塚山の仏堂が、後に福寿山不退寺と称された寺院となり、田塚山の仏堂が15世紀の後半まで氏寺等として存続していた可能性を意味することになる。

以上のことからまとめを行うと、氏寺を建立できるほどの領主層が、毛利氏進出以前の12世紀末～13世紀初頭頃、すでに安田条の下方に存在していたことになる。そして、小児石中世墓地と不退寺遺跡等と密接に関連するとすれば、毛利氏の安田条進出後も、早くても15世紀後半頃までは途絶えることが無かったことになる。この勢力とは、田塚山の仏堂を領主層における氏寺として想定したが、墳丘墓の造営からすれば、僧侶というより俗世の有力者である可能性が高いであろう。この安田条「下方」に存在した領主層の実態は不明であるが、今回の仏堂発見は、これを証明するものといえよう。

５）　おわりに

今回の田塚山遺跡群の調査により発見された仏堂から、ほとんど実態が明らかにされていない当該地域の中世について、かなりの憶測を交えて述べてみた。もとより、史料が少なく、発掘調査事例に乏しいことから、これらを積極的に指示できる根拠がほとんど無いことも事実である。したがって、具体的な史料の抽出や検証などはすべて今後の課題とせざるを得ない。しかし、文書のみでは明らかにしえなかった事実が、田塚山の仏堂の存在であり、小児石における集団墓地の形成という事実である。これらがどのような歴史的な経緯、背景とともにあったのか、現在明らかにされたことから何が想定できるのか、ここでは一つの解釈として述べてきた。一つの史料には、幾通りかの解釈が可能であり、一つの叩き台としてご理解いただければと思う次第である。

X　総　　括

1）　はじめに

今回の発掘調査において、田塚山遺跡群から検出された遺構・遺物は、縄文時代、弥生時代、平安時代、鎌倉時代の大きく4時代にわたり、各時代における「田塚山」への人々の係わりを示すものであった。人々の係わり方も時代によって様々であるが、これは各時代における「田塚山」に対する観念や土地利用といったものが反映された結果であろう。本章では、調査成果のまとめとして、田塚山遺跡群に遺された痕跡を時代別あるいは時期別に概観し、統括としたい。

2）　田塚山遺跡群の概観と時期区分

「田塚山」に営まれていた遺跡の時代は、縄文時代から鎌倉時代にまで断続的におよぶが、旧石器時代から縄文時代前期中葉までの痕跡は遺されていない。縄文時代前期後葉に至り初めて集落の形成が行われたが、中期前葉以降は一時断絶する。後期初頭になると、B地区から検出された墓坑が営まれるが、この時期に所属することが明確な遺構・遺物はこの1基だけであった。弥生時代後期後半から終末期には、濠が尾根を断ち切るように配され、防御的集落の存在が示唆された。また、平安時代に至ると、性格不明の遺構等が営まれ、須恵器や土師器等が確認されるようになる。鎌倉時代には、仏堂に関連する遺構がB地区に造営される。これは、本堂や庫裡等の付属建物、そして墳墓で構成されるものであった。このように、田塚山遺跡群は縄文時代前期後葉から鎌倉時代まで営まれていたのであるが、空白期間が多く認められ、各時代・時期毎の継続期間そのものが比較的短いのも特徴的である。また、古墳時代や奈良時代等の痕跡が全く認められないことも、当該地に対する観念等の変遷の一端を示しているといえよう。

縄文時代と鎌倉時代では、その社会的背景や思想的理念、あるいは経済的活動等に大きな隔たりがあることは当然であり、遺跡の立地が重複していても、「田塚山」に対する観念等を同一視することはできない。このような観点から、当該地における人々の係わりについて、遺跡の動態等から便宜的な時期区分を試みれば、第Ⅰ期：縄文時代早期以前、第Ⅱ期：縄文時代前期～中期、第Ⅲ期：縄文時代後期、第Ⅳ期：縄文時代晩期～弥生時代中期、第Ⅴ期：弥生時代後期、第Ⅵ期：古墳時代～奈良時代、第Ⅶ期：平安時代、第Ⅷ期：鎌倉時代、第Ⅸ期：中世中期～後期、第Ⅹ期：近世～現代の10期に区分することができる。

3）　田塚山遺跡群の変遷

第Ⅰ期には、人間活動の痕跡が全く遺されない。第Ⅱ期になると集落が形成されるようになる。集落の継続期間は概して短く、比較的小規模である。出土土器からE地区→C地区→D地区という変遷の可能性が推測されるが、連続的ではなく、空白期間が認められる。また、集落形成の場として、より適していると思われるB地区には本期の遺構は営まれない。遺構や遺物の状況、あるいは集落としての規模等から本期には「夏の集落」が形成されていたことが示唆される。このことから、「田塚山」に遺された最初の痕跡からは、居住を目的とした土地利用が行われていたことが窺える。

その後、厳密にいうと中期中葉から末葉までの期間が空白期となるが、第Ⅲ期になると墓坑が営まれる。これは、B地区において所属時期が明確になったものとしては最古の例となる。墓坑に伴う集落の痕跡、

あるいは墓域として墓坑群を形成した痕跡は認められず、墓坑が単基のみ営まれていた可能性が高い。直接の対比はできないが、中世におけるＢ地区の動態を顧みると、最初に遺された痕跡も仏堂や墳墓等であったという点は興味深い。したがって、本期の動態はやや不明瞭ではあるが、「田塚山」に対する観念の変遷を辿る上での問題点が多く内在する時期であろう。また、詳細な時期は不明であるが、この頃にはＤ地区にトラップピットも形成され、狩猟の場としての土地利用も行われていた。

第Ⅳ期には、再び空白の期間が訪れる。第Ⅴ期になるとＡ地区に溝が遺されるが、これは防衛的性格が強い濠と考えられるものであった。濠の内側には集落の存在が想定可能で、溝の配置状況や遺跡としての立地等から、集落を防御する目的で構築されたとするのが自然であろう。このことから、本期における「田塚山」は、地域間あるいは集落同士の抗争から身を守るために土地利用されたと捉えられる。

第Ⅵ期には３度目の空白期を迎えるが、第Ⅶ期になるとＣ地区に焼土痕を伴う溝状の遺構等が営まれる。本期に属する遺物が出土した遺構はいずれも尾根の縁に位置し、偏った分布となっている。そのため、「田塚山」に対する土地利用の痕跡としても、他期におけるものとは違った傾向が看取される。遺構の性格は不明であるが、住居数も少なかったと思われ、極めて小規模な利用のされ方であったと推測される。

第Ⅷ期になるとＢ地区に仏堂とその関連施設が築造される。本堂や庫裡等の建物群と、それらを繋ぐ渡り廊下、および建築物の周囲に配された墳墓等である。本堂の方向はＷ－8.0°－Ｎを指向し、内陣が西に偏って配置されていること等から、西方を意識していると考えられる。一方、田塚山遺跡群の周辺には不退寺遺跡がある。田塚山遺跡群と不退寺遺跡の関係は不明な点が多いが、不退寺遺跡は中世にその存在が確認できる。『白河風土記』に記載されている不退寺の縁日は旧暦の３月18日であるが、田塚山遺跡群から見ると、新暦の４月７日と９月８日にＢ地区の仏堂が指向する方向、Ｗ－8.0°－Ｎが日没地点となる。これを1,200年前に当てはめると、新暦の４月８日と９月16日にはＷ－8.052°－Ｎの方向が日没地点であったと推定される。なお、これは日没の地点であり、Ｂ地区の仏堂の背後に夕日が位置する日時とは若干異なるものである。今回は新暦とＢ地区の仏堂が存続していた当時の旧暦とを対比できず、明確な判断はできないが、不退寺の縁日に前後する日時にＢ地区の仏堂が夕日を背にするように指向して築造された可能性は否定できないであろう。本期には、周囲の動向に呼応した当該地に対する観念等によって、土地利用がされていたと思われる。

第Ⅸ期は４度目の空白期間となる。第Ⅹ期においては尾根筋の旧道跡が確認され、両田尻の集落から柏崎の町へ行くために利用されていたと考えられる。すなわち、経由地としての土地利用がされただけで、第Ⅷ期以降は「田塚山」に対する積極的な観念等に基づく土地利用の痕跡は遺されていないといえよう。

４）　おわりに

「田塚山」に対する観念等は、当初は居住地としてであった。この集落で厳冬期を過ごしたとは考えられず、「夏の集落」として利用が始まったと思われる。その後、縄文時代後期初頭の墓坑が見られるが、不明な点が多い。弥生時代後期には防御的集落が形成されたと思われる。縄文時代の集落と目的は異なるが、巨視的には居住地としての土地利用であった。平安時代も不明瞭であるが、鎌倉時代には仏堂が築造され、宗教的な「場」としての観念が付与されたと推測できる。各期の継続期間は概して短く、痕跡の断絶する期間も多いが、各時代・時期毎の動向を端的に示す利用のされ方といえよう。時代的背景や社会的欲求等により、人々の「田塚山」に対する観念等は変遷し、この地を土地利用したのではなかろうか。

《引用・参考文献》

糸魚川市教育委員会　1986『後生山遺跡－新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報－』（糸魚川市埋蔵文化財報告第13輯）
荻野正博　1986「荘園と国衙領」『新潟県史　通史編　原始・古代』　新潟県
柏崎市教育委員会　1980『岩野遺跡』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第２）
柏崎市教育委員会　1987『西岩野』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第７）
柏崎市教育委員会　1990ａ『千古塚』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11）
柏崎市教育委員会　1990ｂ『剣野山縄文遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第12）
柏崎市教育委員会　1990ｃ『吉井遺跡群Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13）
柏崎市教育委員会　1991ａ『十三本塚遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第14）
柏崎市教育委員会　1991ｂ『小児石』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15）
柏崎市教育委員会　1992「十三本塚遺跡群北地区－試掘調査概要報告書－」
柏崎市教育委員会　1993「十三本塚北遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第18）
柏崎市教育委員会　1994ａ「横山東遺跡群現地説明会資料」
柏崎市教育委員会　1994ｂ「田塚山遺跡群」『柏崎市の遺跡Ⅲ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集）
柏崎市教育委員会　1995『藤橋東遺跡群－写真でつづる発掘調査の概要－』（柏崎市埋蔵文化財調査図録第１集）
柏崎市教育委員会　1996『屁振坂』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23集）
柏崎市遺跡調査室編　1994「田塚山遺跡群現地説明会資料」　柏崎市教育委員会
柏崎市史編さん委員会編　1982『柏崎市史資料集考古篇２考古資料（写真図版）』　柏崎市
柏崎市史編さん委員会編　1984ａ『柏崎市史資料集近世篇１上』　柏崎市
柏崎市史編さん委員会編　1984ｂ『柏崎市史資料集近世篇１下』　柏崎市
柏崎市史編さん委員会編　1987ａ『柏崎市史資料集考古篇１－考古資料（図・拓本・説明）－』　柏崎市
柏崎市史編さん委員会編　1987ｂ『柏崎市史資料集古代中世篇』　柏崎市
刈羽村教育委員会　1992『西谷遺跡』（刈羽村埋蔵文化財調査報告書第１集）
小林茂美　1988『一遍上人絵伝』（日本の絵巻20）　中央公論社
小林達雄　1991「縄文カレンダー」『日本全史（ジャパン・クロニック）』　講談社
酒井薫風　1975　『田尻村のはなし』
坂井秀弥・宇佐美篤美　1987「関野遺跡」『柏崎市史資料集考古篇１』　柏崎市史編さん委員会編
品田高志　1990「２　歴史的環境と遺跡群」『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市教育委員会
品田高志　1991ａ「小児石中世墓地における墳墓群とその変遷」『小児石』　柏崎市教育委員会
品田高志　1991ｂ「『十三本塚』の理解に向けて」『十三本塚遺跡群』　柏崎市教育委員会
品田高志　1991ｃ「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会
品田高志　1994「越後における中世墳墓・墓地」『中世北陸の寺院と墓地』北陸中世土器研究会
品田高志　1996「屁振坂遺跡の縄文集落とその性格」『屁振坂』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23集）　柏崎市教育委員会
澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編　1984『新版絵巻物による日本常民生活絵引』（第２巻）　平凡社
新沢佳大　1990「近世郷村と柏崎町の成立」『柏崎市史』中巻　柏崎市
寺崎裕助　1995「新潟県における中期初頭の土器」『中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
中野　純　1992「『型式』に関する一般理論とその展望」『新潟考古学談話会会報』第９号　新潟考古学談話会
中野　純　1994「田塚山遺跡群Ｂ地区ＳＫ－５出土の異形土器について」『柏崎市の遺跡Ⅲ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集）　柏崎市教育委員会
中野　純　1995「鯨波地区東部における縄文遺跡の立地」『柏崎市の遺跡Ⅳ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集）　柏崎市教育委員会
新潟県　1987　『新潟県史　資料篇４　中世二』　新潟県
新潟県教育委員会　1974「大平城跡・牛ケ沢二ツ塚調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（埋蔵文化財緊急調査報告書第３）
新潟県教育委員会　1987『国道116号線埋蔵文化財調査報告書　三島郡出雲崎町番場遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集）
新潟県教育委員会　1988ａ「（仮称）宮山遺跡」『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　西田・鶴巻田遺跡群』（新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27）
新潟県教育委員会　1988ｂ「桐山遺跡」『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　西田・鶴巻田遺跡群』（新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27）
新潟県教育委員会　1990『関越自動車道関係発掘調査報告書　岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集）新潟県教育委員会　1992『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集）
毎日新聞社「重要文化財」委員会事務局編　1973『重要文化財』12　建造物Ⅰ　毎日新聞社
八幡一郎　1958『刈羽貝塚』（新潟県文化財調査報告書第５）　新潟県教育委員会
米沢　康　1980「大宝２年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32－６　信濃史学会

報告書抄録

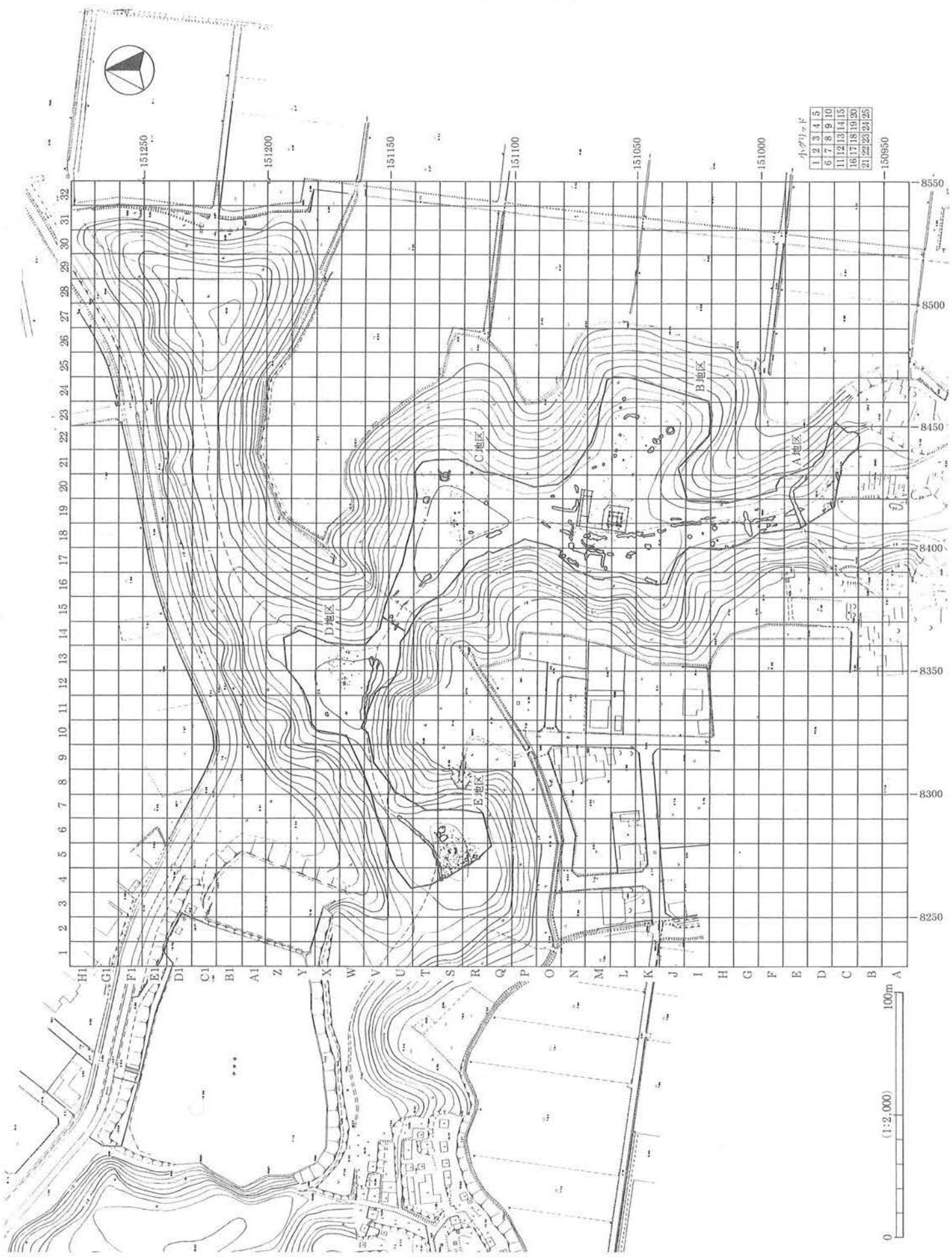
ふりがな	たつかやまいせきぐん
書　　名	田塚山遺跡群
副 書 名	新潟県柏崎市田塚山遺跡群発掘調査報告書
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	品田高志・中野　純・斎藤幸恵
編集機関	柏崎市教育委員会　社会教育課　遺跡調査室
発 行 者	柏崎市教育委員会
所 在 地	〒945　新潟県柏崎市中央町5－50　TEL.0257－21－2364
発行年月日	西暦　1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たつかやまいせきぐん 田塚山遺跡群	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 ふじい　いばらめ 藤井・茨目・ しもたじり 下田尻	15205	645	37度 21分 44秒	138度 35分 44秒	19940912～ 19941130	9961㎡	宅地造成に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田塚山遺跡群	集落跡	縄文時代前期後半 ・中期前葉 ・後期前葉	ピット・土坑	縄文土器・石器	
	集落跡	古代	ピット・土坑	土師器・須恵器	
	仏堂・墓地	中世	仏堂・溝・土壙墓	中世土師器・珠洲焼・刀子	
	道　跡	近代	道		

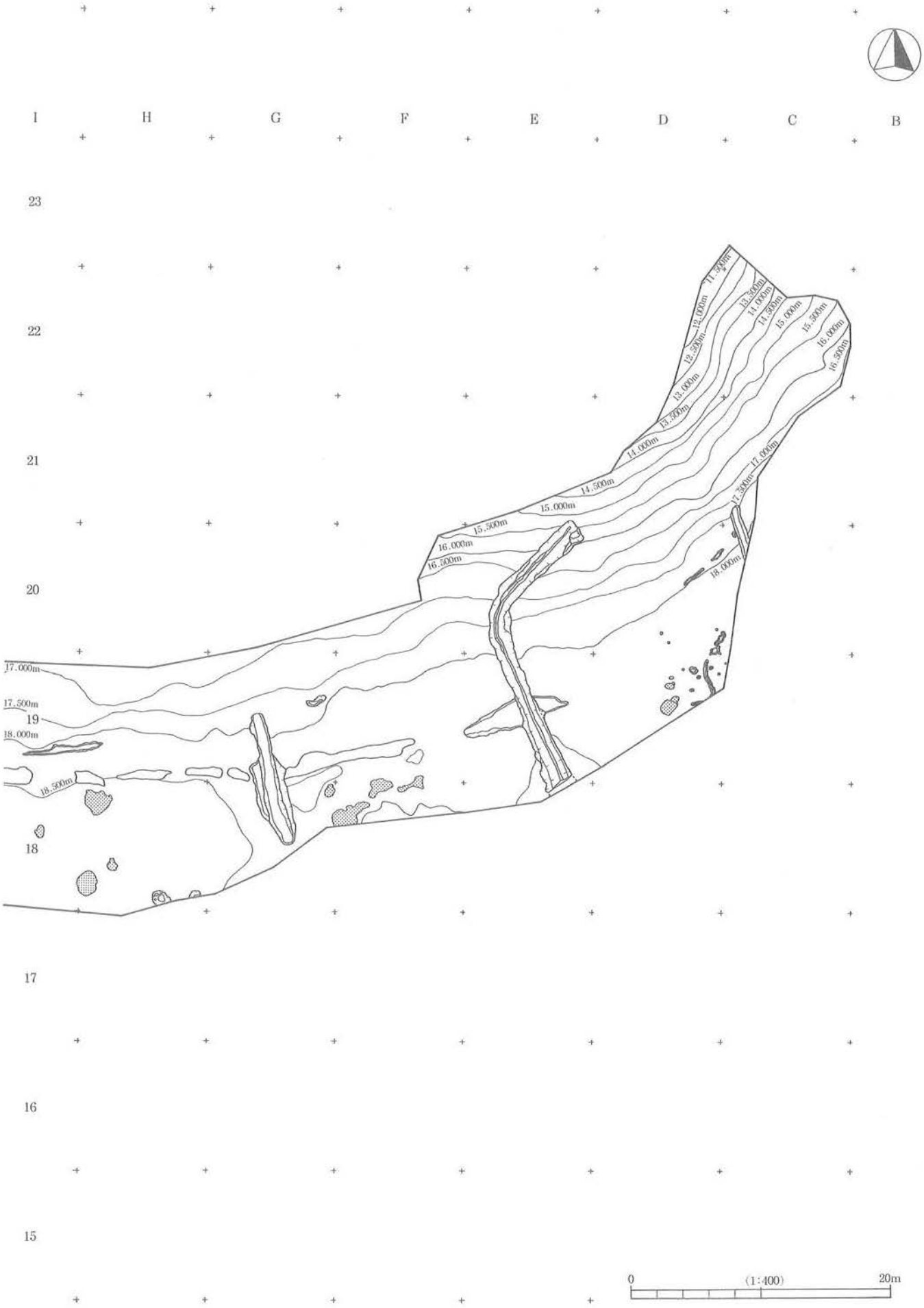
図　　版

田塚山遺跡群グリッド図



図版 2

A 地区 全体図


I
H
G
F
E
D
C
B
23
22
21
20
19
18
17
16
15
11.500m
12.000m
12.500m
13.000m
13.500m
14.000m
14.500m
15.000m
15.500m
16.000m
16.500m
17.000m
17.500m
18.000m
18.500m
0
(1:400)
20m

B 地区 全体図

O
N
M
L
K
J
I
24
23
22
21
20
19
18
17
16
16.000m
16.500m
17.000m
17.500m
18.000m
18.500m
19.000m
19.500m
0
(1:400)
20m

図版 4

C 地 区 全 体 図

16
17
18
19
20
21
V
U
T
S
R
Q
P
O
N
19.500m
19.000m
18.500m
19.500m
19.500m
19.000m
18.500m
0
(1:400)
20m

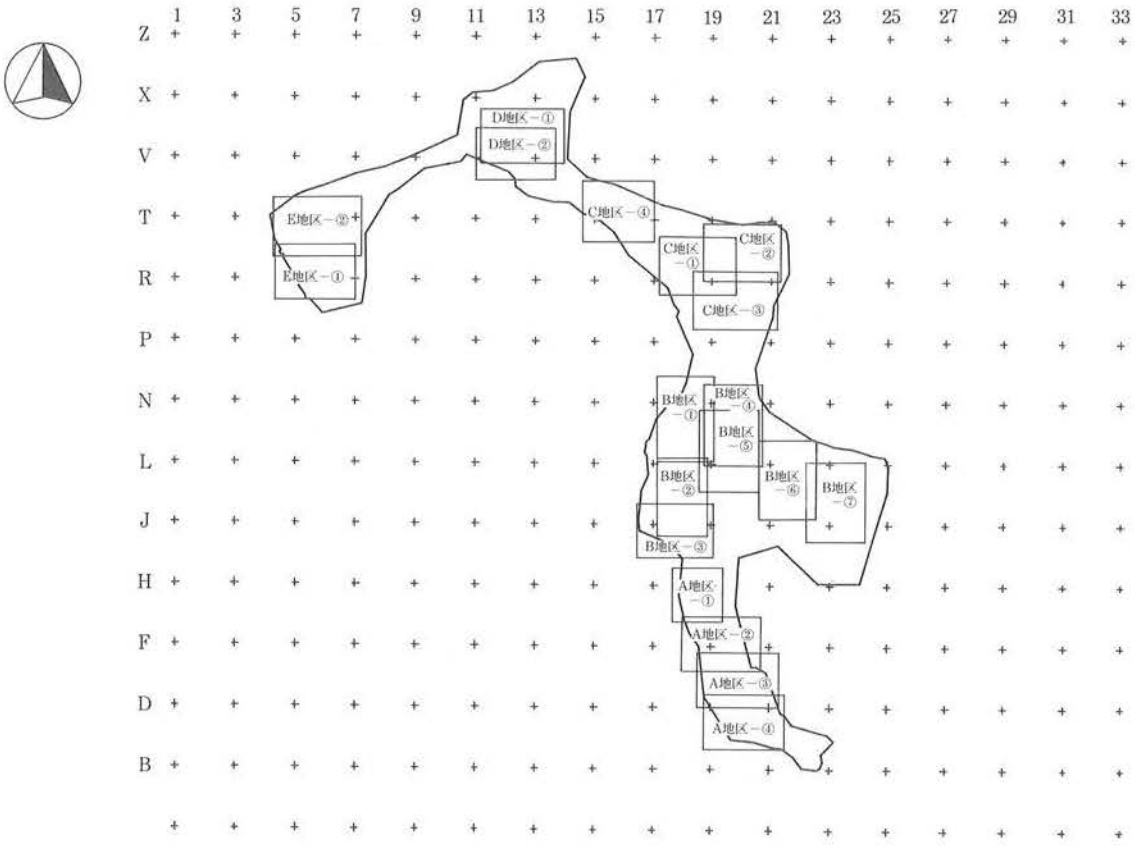
D 地区 全体図

10
11
12
13
14
15
16
Z
Y
X
W
V
U
T
S
R
19.500m
19.500m
19.500m
19.500m
0
(1:400)
20m

図版6

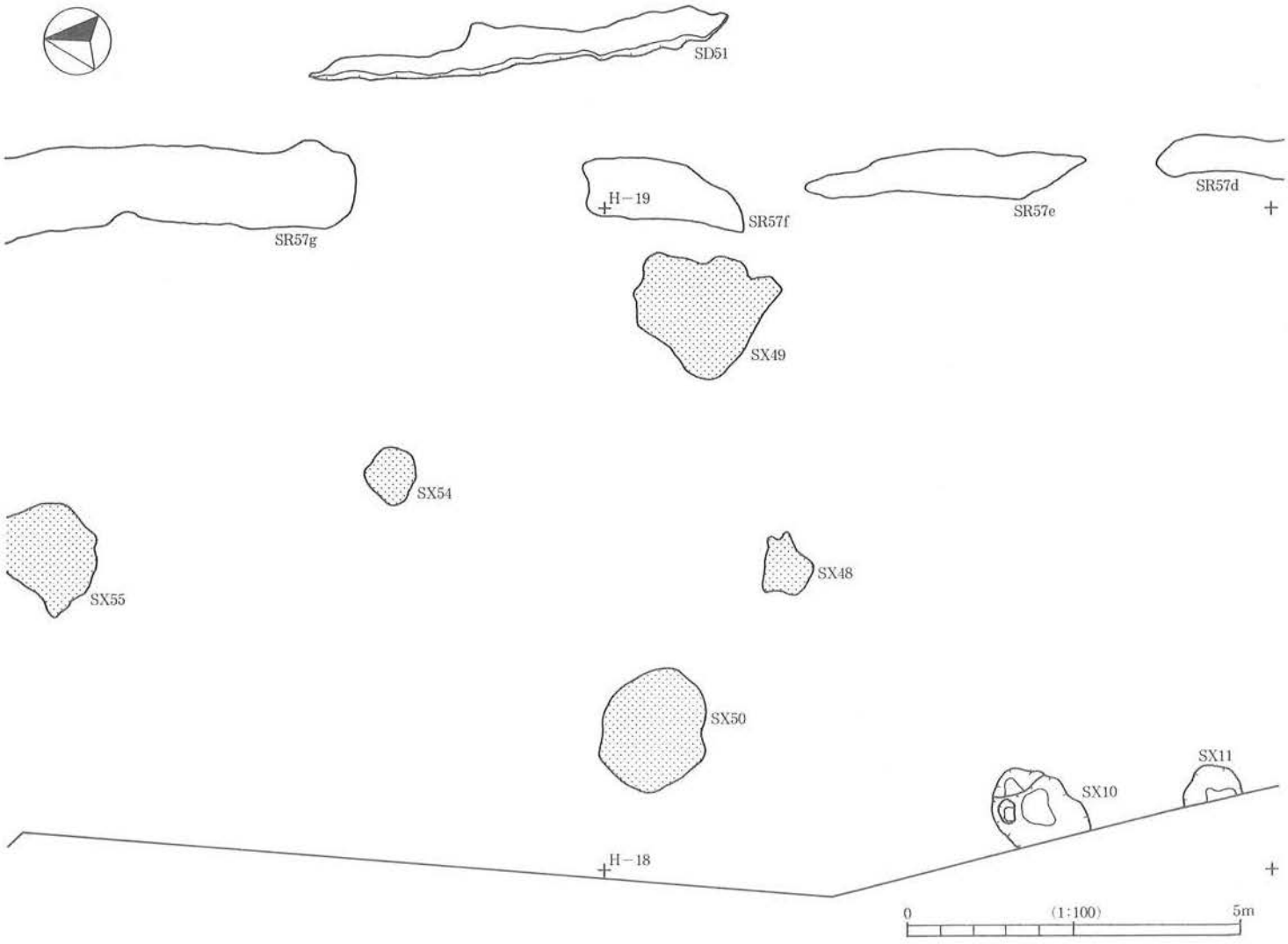
E 地区 全体図

遺構全体図の割付図



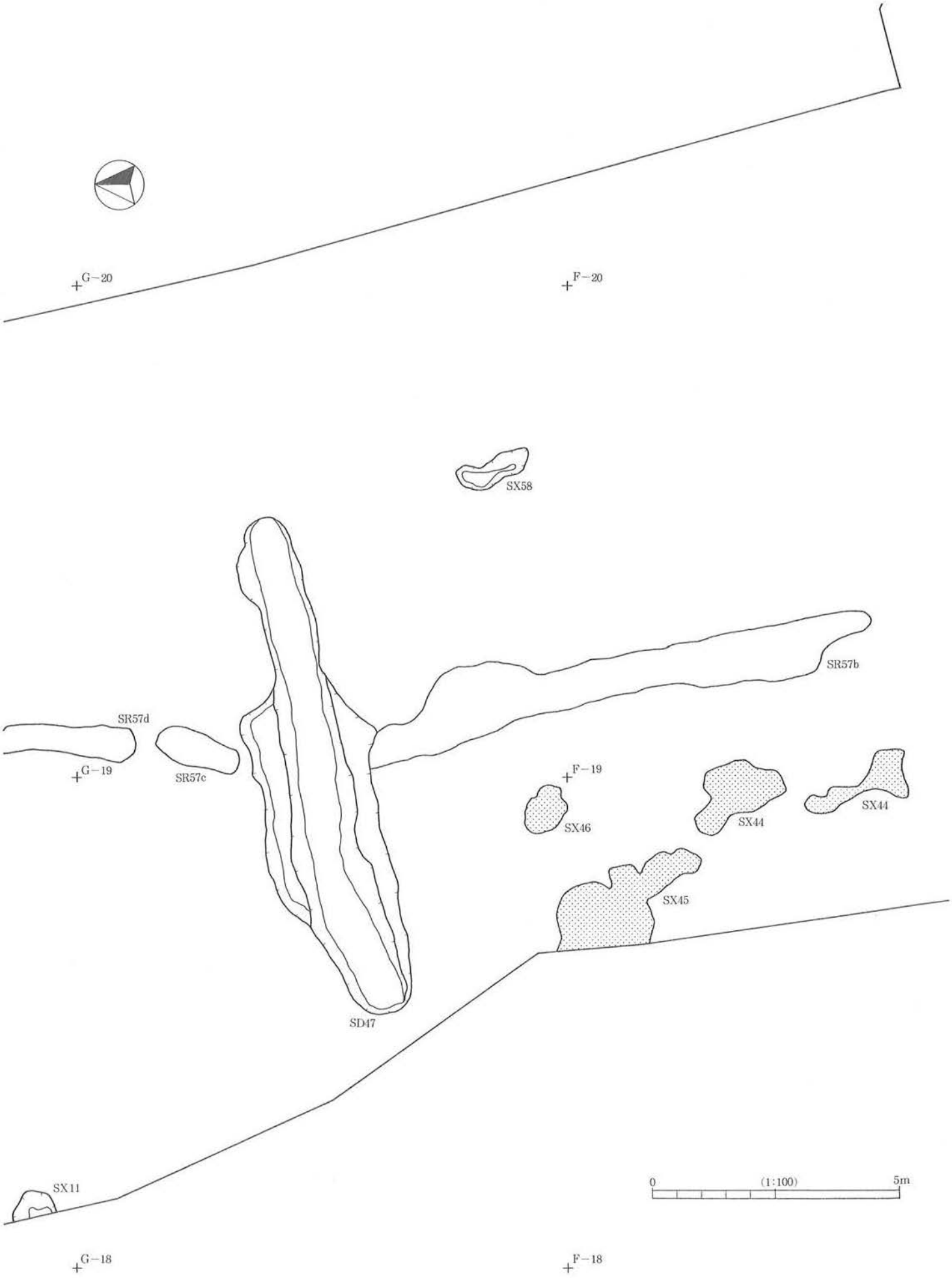
遺構全体図　A地区－①

0 (1:2,500) 150m



図版 8

遺構全体図　A 地区－②

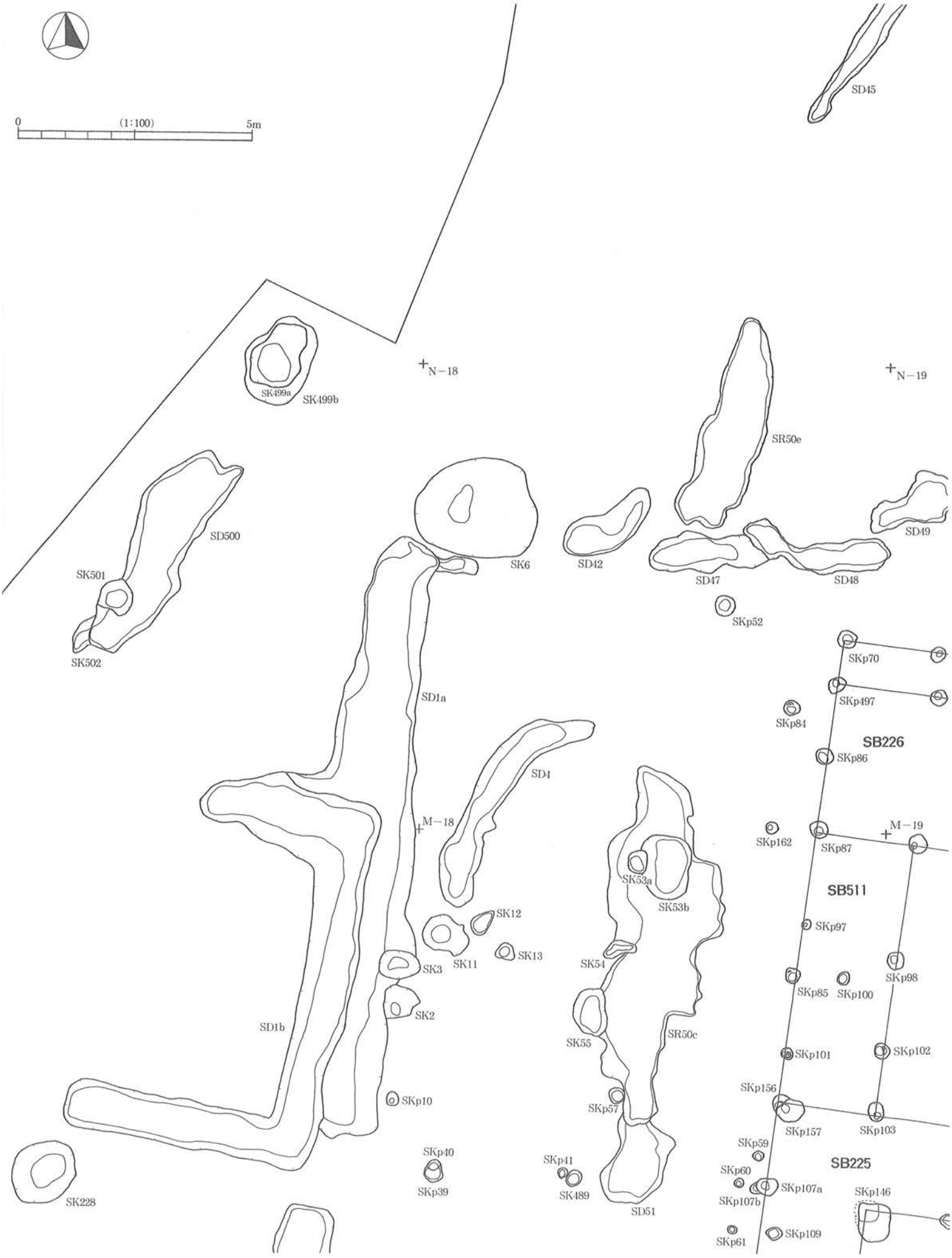


遺構全体図　A 地区－③

図版10

遺構全体図　A地区－④

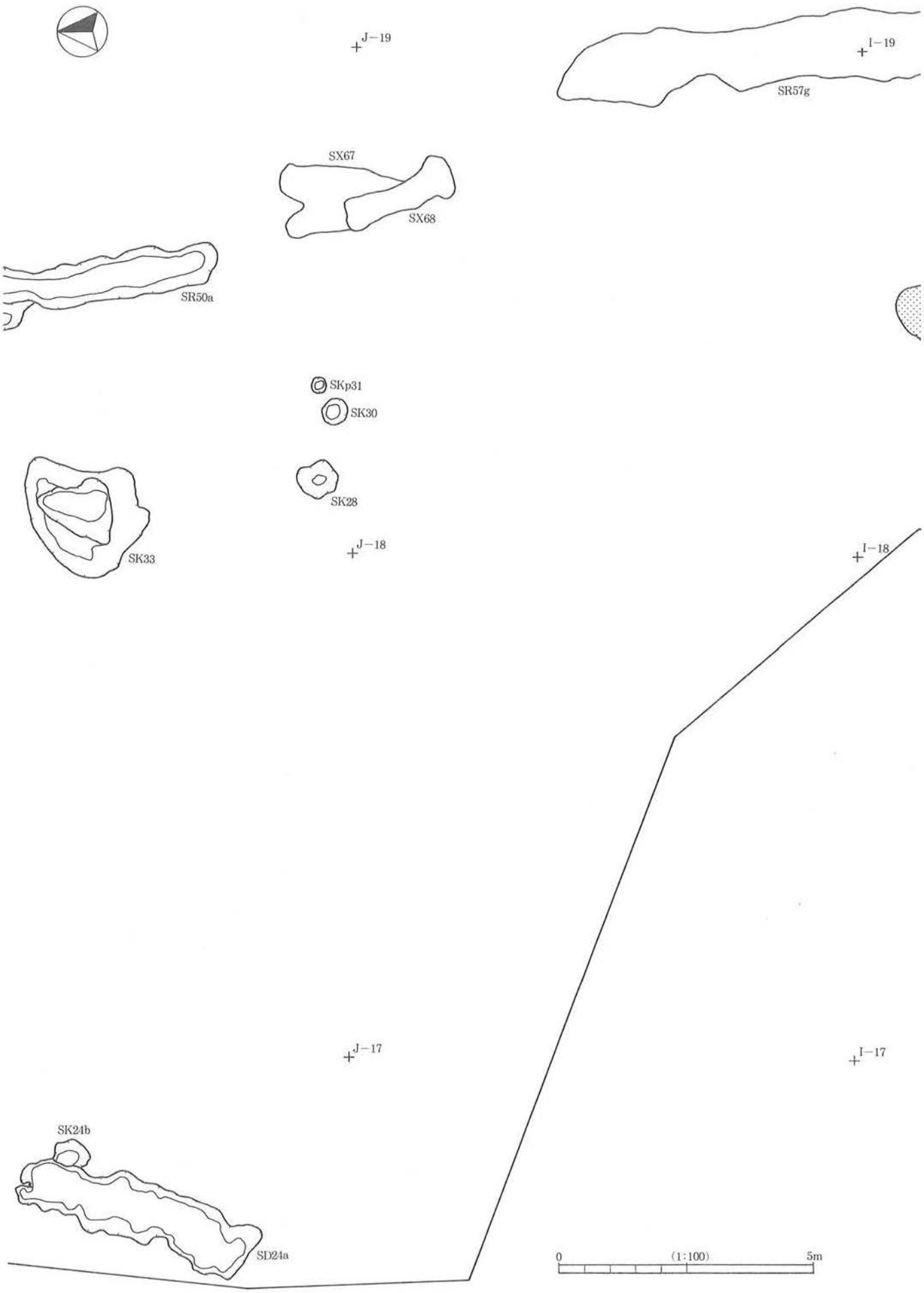
遺構全体図　B地区－①


0
(1:100)
5m
SD45
N－18
N－19
SK499a
SK499b
SR50e
SD500
SK501
SK502
SK6
SD42
SD47
SD48
SD49
SKp52
SKp70
SKp497
SKp84
SB226
SKp86
SD1a
SD4
M－18
M－19
SKp162
SKp87
SK53a
SK53b
SB511
SK12
SK11
SK13
SK3
SK54
SKp97
SKp98
SKp85
SKp100
SK2
SD1b
SK55
SR50c
SKp101
SKp102
SKp156
SKp10
SKp57
SKp157
SKp103
SKp59
SKp40
SKp41
SB225
SKp60
SKp39
SK489
SKp107a
SKp107b
SKp146
SK228
SD51
SKp61
SKp109

図版12

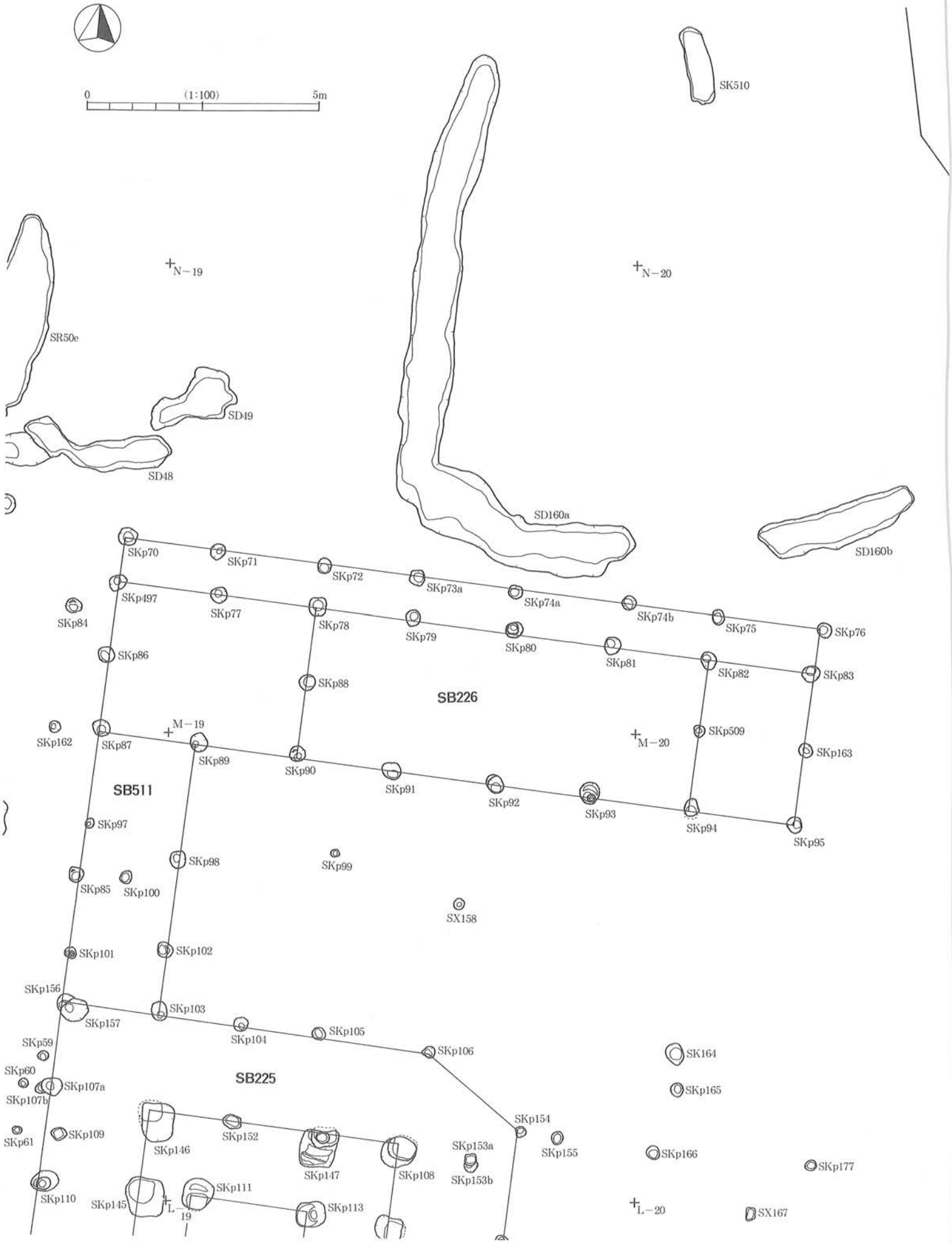
遺構全体図　B地区－②

遺構全体図　B地区－③

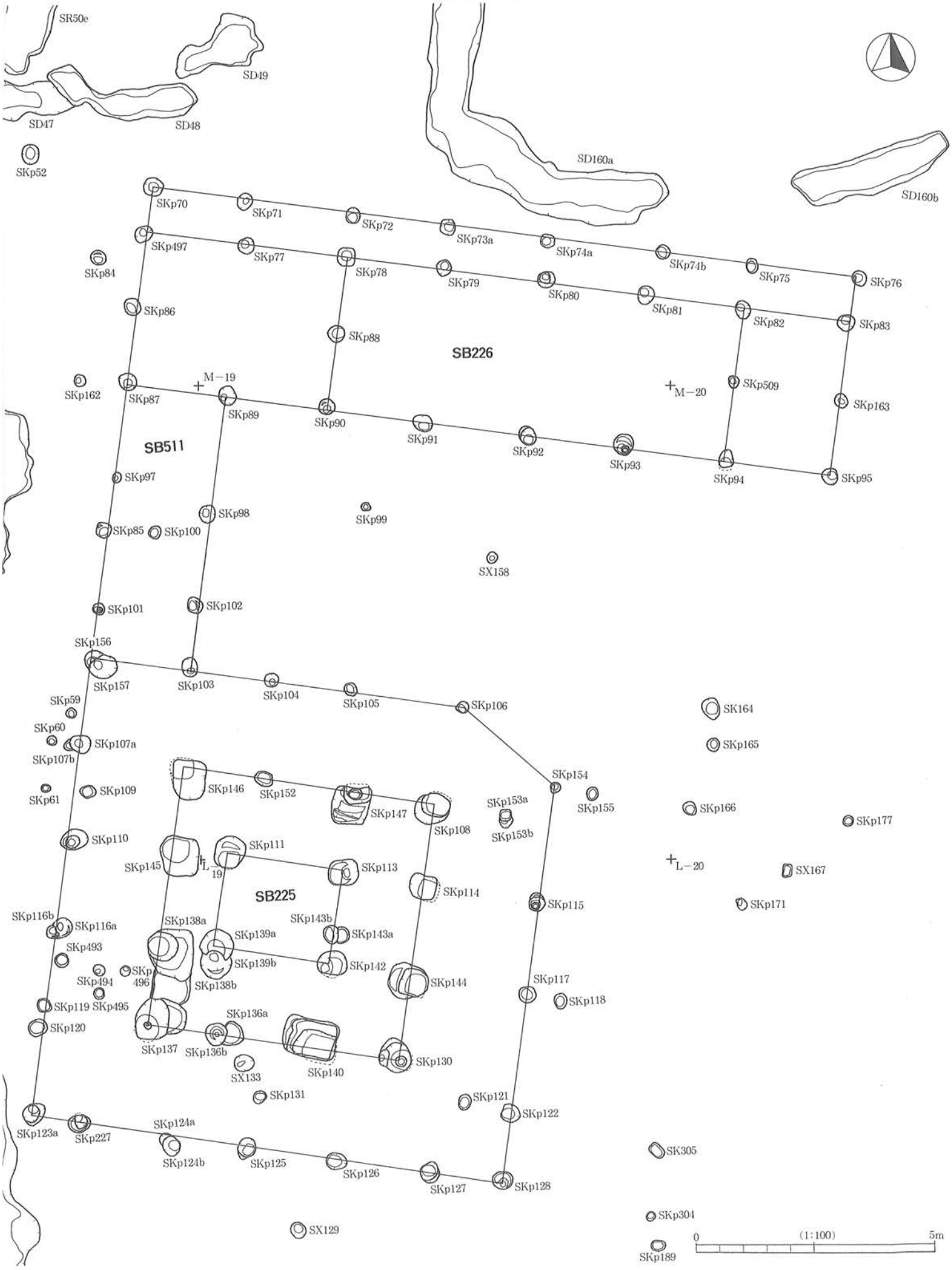

J－19
I－19
SR57g
SX67
SX68
SR50a
SKp31
SK30
SK28
SK33
J－18
I－18
J－17
I－17
SK24b
SD24a
0
(1:100)
5m

図版14

遺構全体図　B地区－④

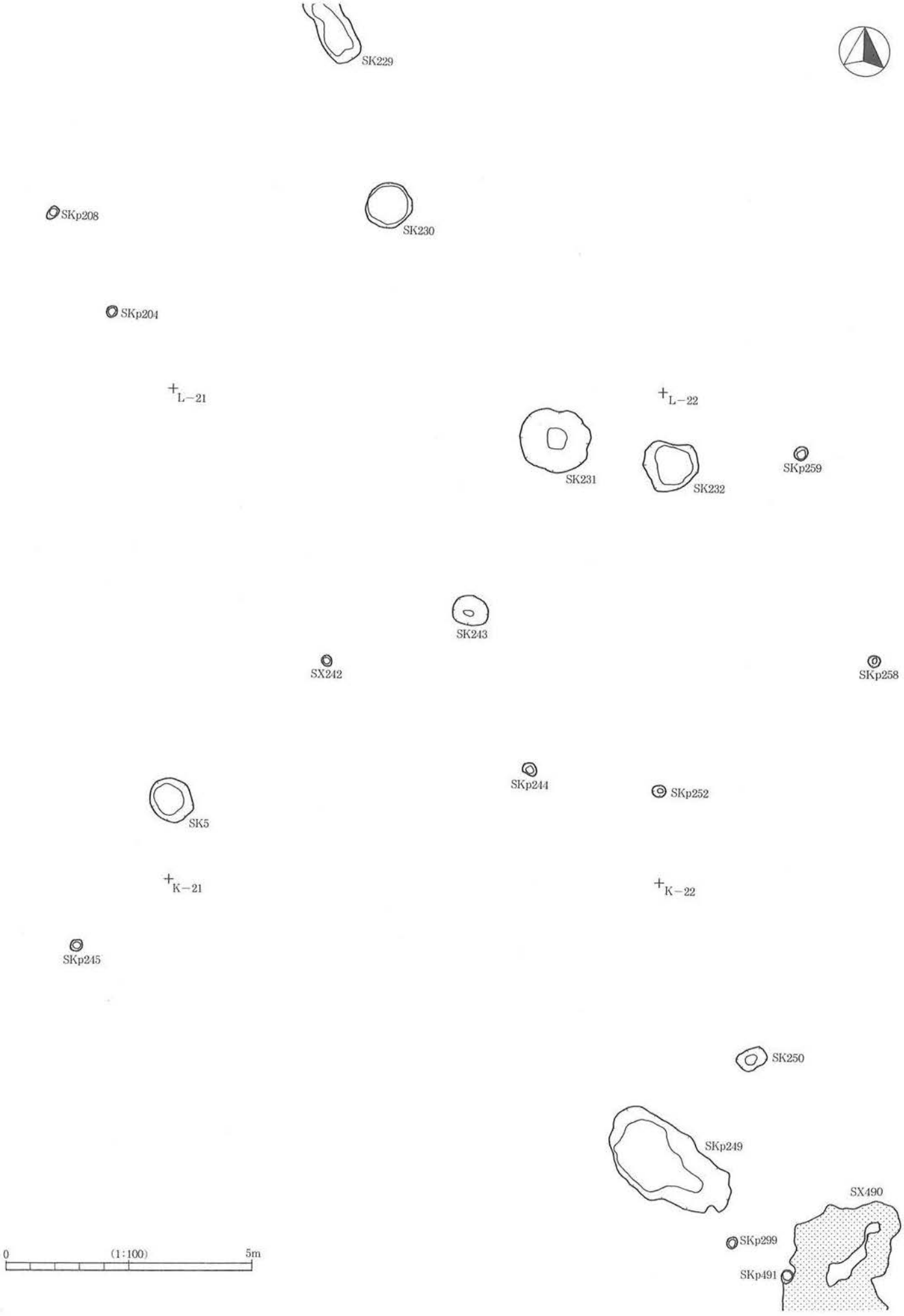


遺構全体図　B地区－⑤


SR50e
SD49
SD47
SD48
SD160a
SD160b
SKp52
SKp70
SKp71
SKp72
SKp73a
SKp74a
SKp74b
SKp75
SKp76
SKp497
SKp77
SKp78
SKp79
SKp80
SKp81
SKp82
SKp83
SKp84
SKp86
SKp88
SB226
SKp509
SKp163
SKp162
SKp87
M－19
SKp89
SKp90
SKp91
SKp92
SKp93
SKp94
SKp95
M－20
SB511
SKp97
SKp98
SKp99
SKp85
SKp100
SX158
SKp101
SKp102
SKp156
SKp157
SKp103
SKp104
SKp105
SKp106
SK164
SKp165
SKp59
SKp60
SKp107a
SKp107b
SKp154
SKp61
SKp109
SKp146
SKp152
SKp147
SKp153a
SKp155
SKp166
SKp177
SKp108
SKp153b
SKp110
SKp111
SKp145
L－19
SKp113
L－20
SX167
SKp114
SB225
SKp115
SKp171
SKp116b
SKp116a
SKp138a
SKp143b
SKp139a
SKp143a
SKp493
SKp494
SKp496
SKp139b
SKp142
SKp138b
SKp144
SKp117
SKp118
SKp119
SKp495
SKp136a
SKp120
SKp137
SKp136b
SKp130
SX133
SKp140
SKp131
SKp121
SKp122
SKp123a
SKp227
SKp124a
SKp124b
SKp125
SKp126
SKp127
SKp128
SK305
SKp304
SX129
SKp189
0
(1:100)
5m

図版16

遺構全体図　B地区－⑥

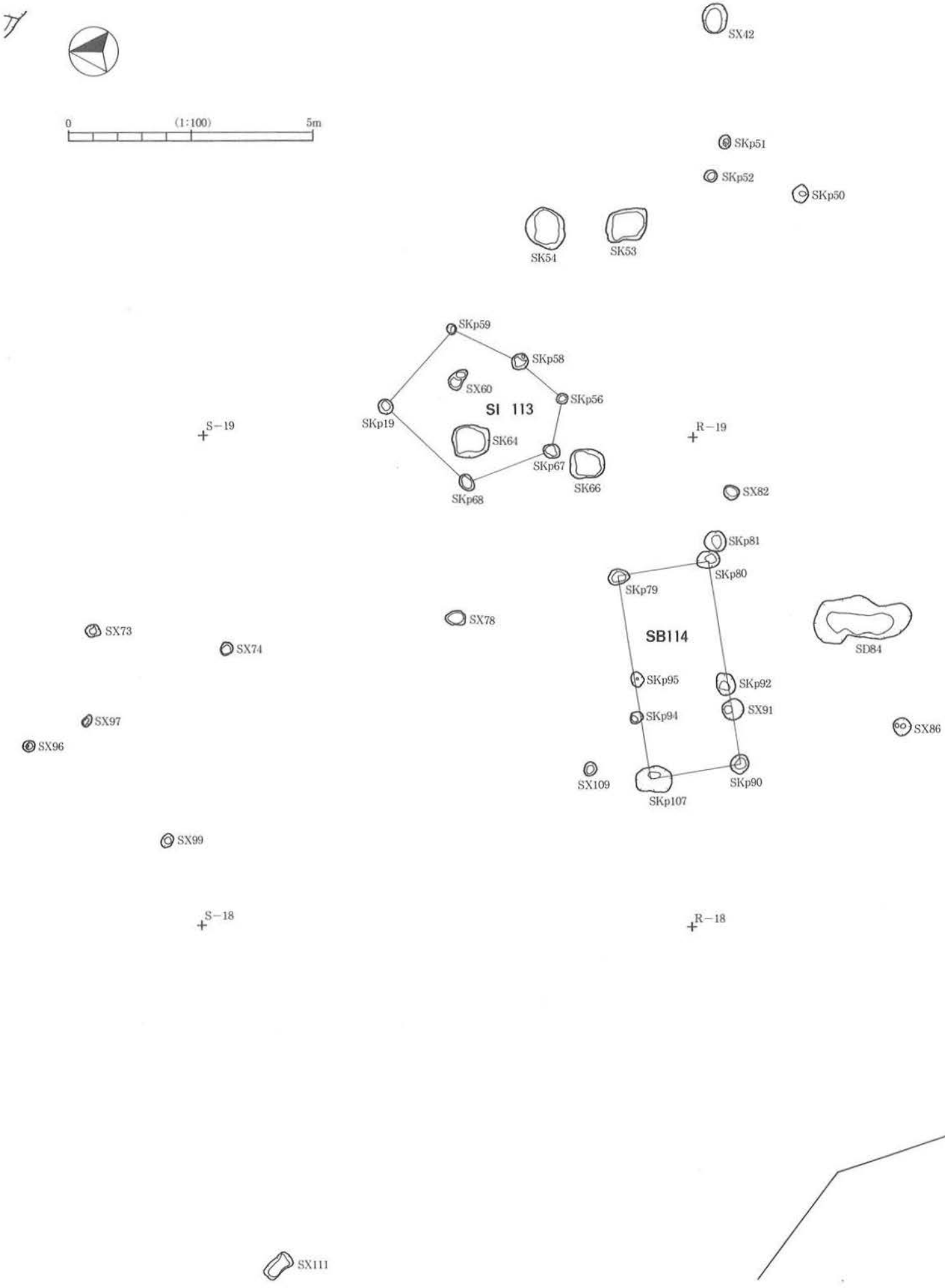


遺構全体図　B地区－⑦

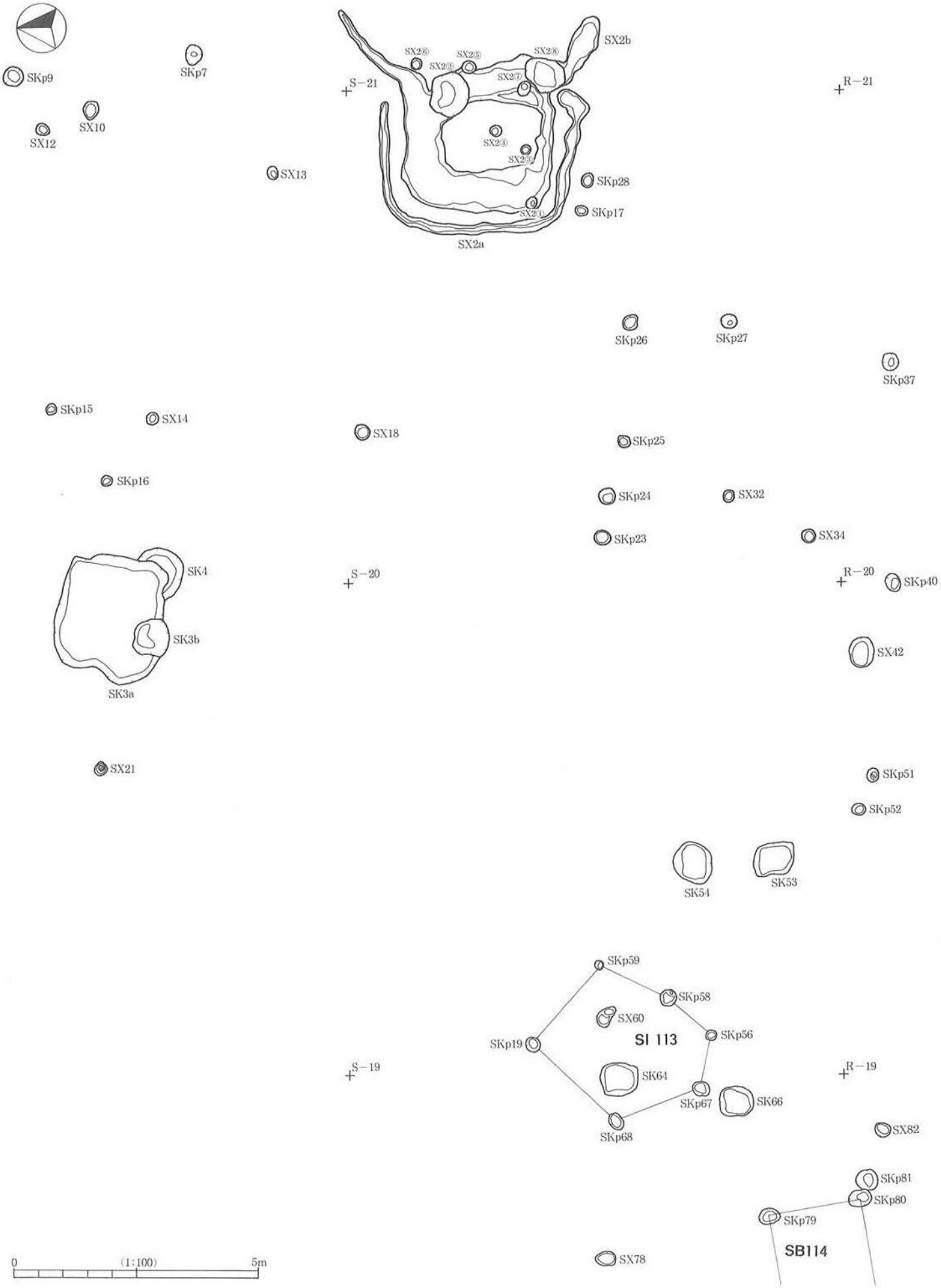
L－23
L－24
SKp259
SKp285
SK264
SKp284
SK288
SK289
SKp266
SKp258
SD280
SKp272
K－23
K－24
SKp273
SKp281
SX279
SKp491
SX490
SK277
J－23
J－24
SK303
SX300
0
(1:100)
5m

図版18

遺構全体図　C地区－①

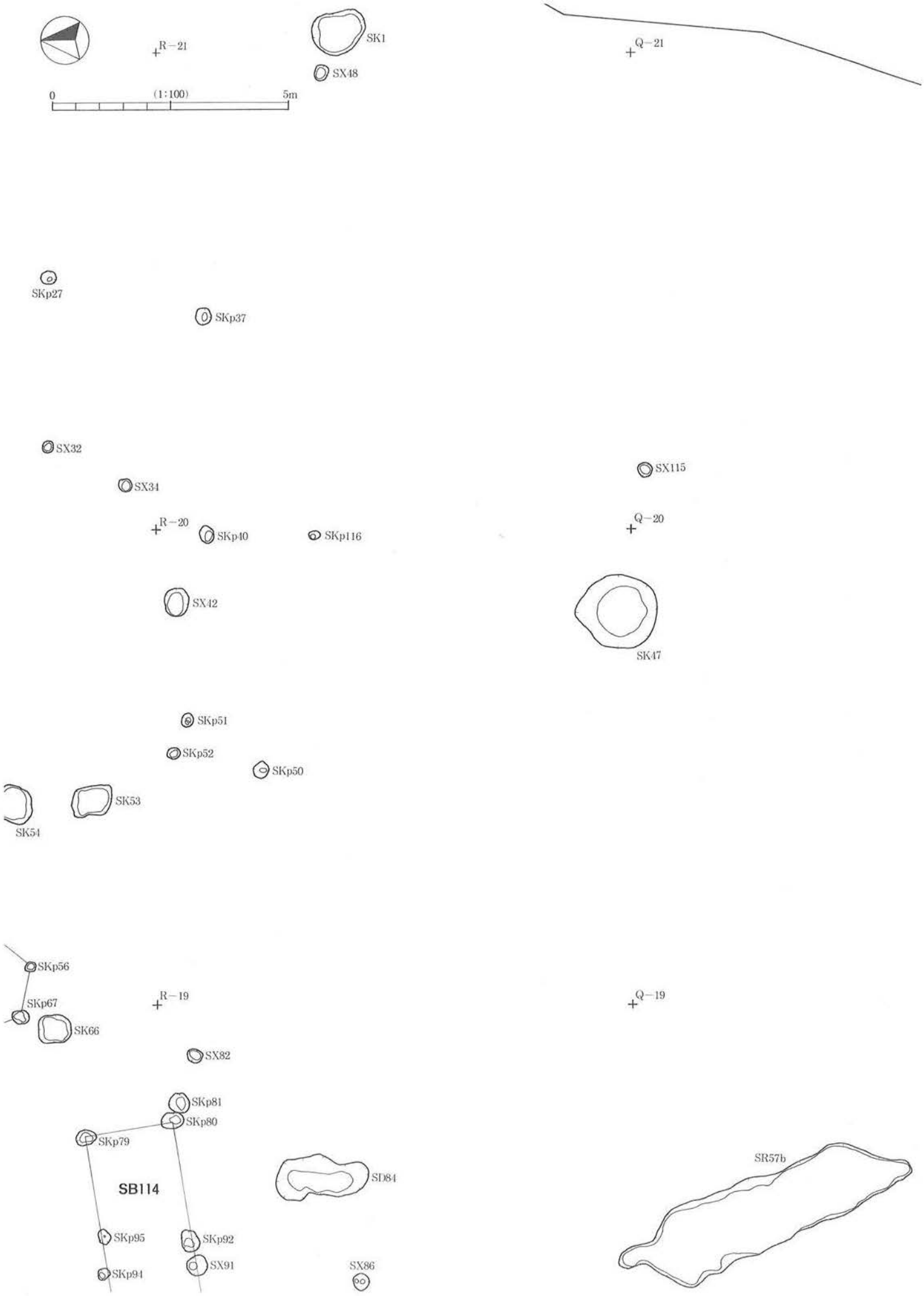


遺構全体図　C地区－②

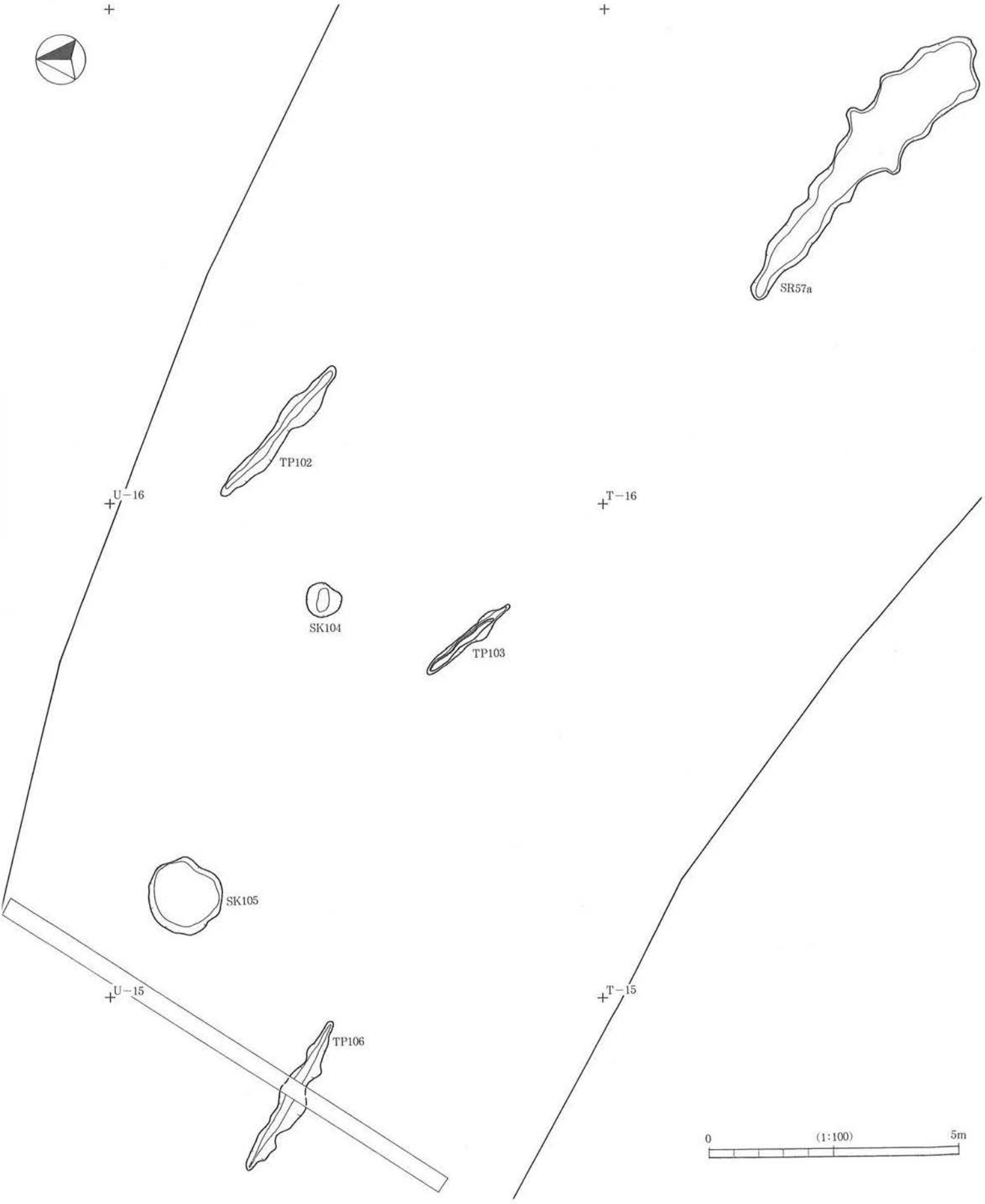

SKp9
SKp7
SX10
SX12
SX13
S－21
SX2⑥
SX2②
SX2⑤
SX2⑧
SX2⑦
SX2b
SX2④
SX2③
SX2①
SX2a
SKp28
SKp17
R－21
SKp26
SKp27
SKp37
SKp15
SX14
SX18
SKp25
SKp16
SKp24
SX32
SKp23
SX34
SK4
S－20
R－20
SKp40
SK3b
SX42
SK3a
SX21
SKp51
SKp52
SK54
SK53
SKp59
SKp58
SX60
SKp56
SKp19
SI 113
S－19
SK64
R－19
SKp67
SK66
SKp68
SX82
SKp81
SKp80
SKp79
SB114
SX78
0
(1:100)
5m

図版20

遺構全体図　C地区－③

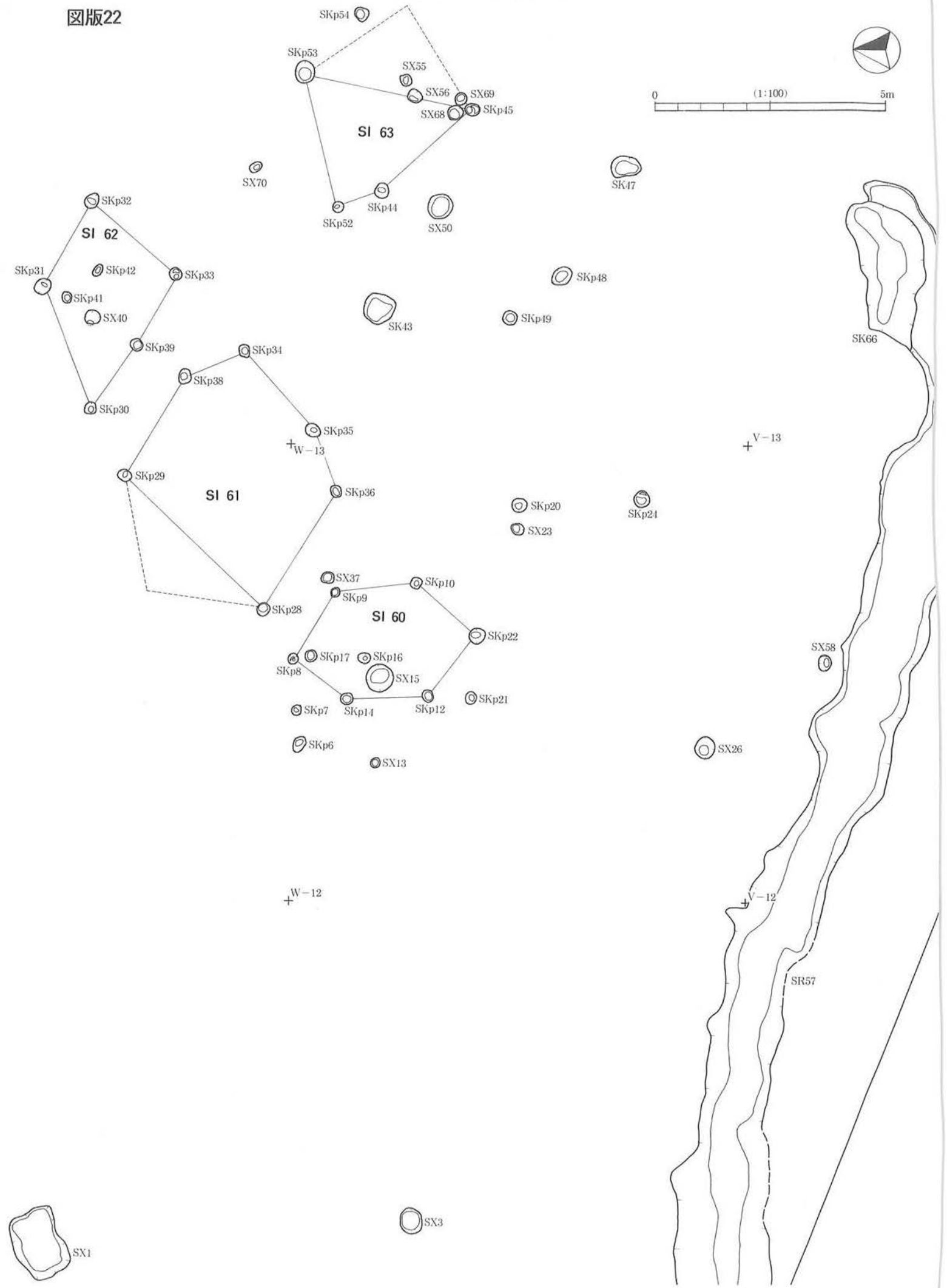


遺構全体図　C地区－④

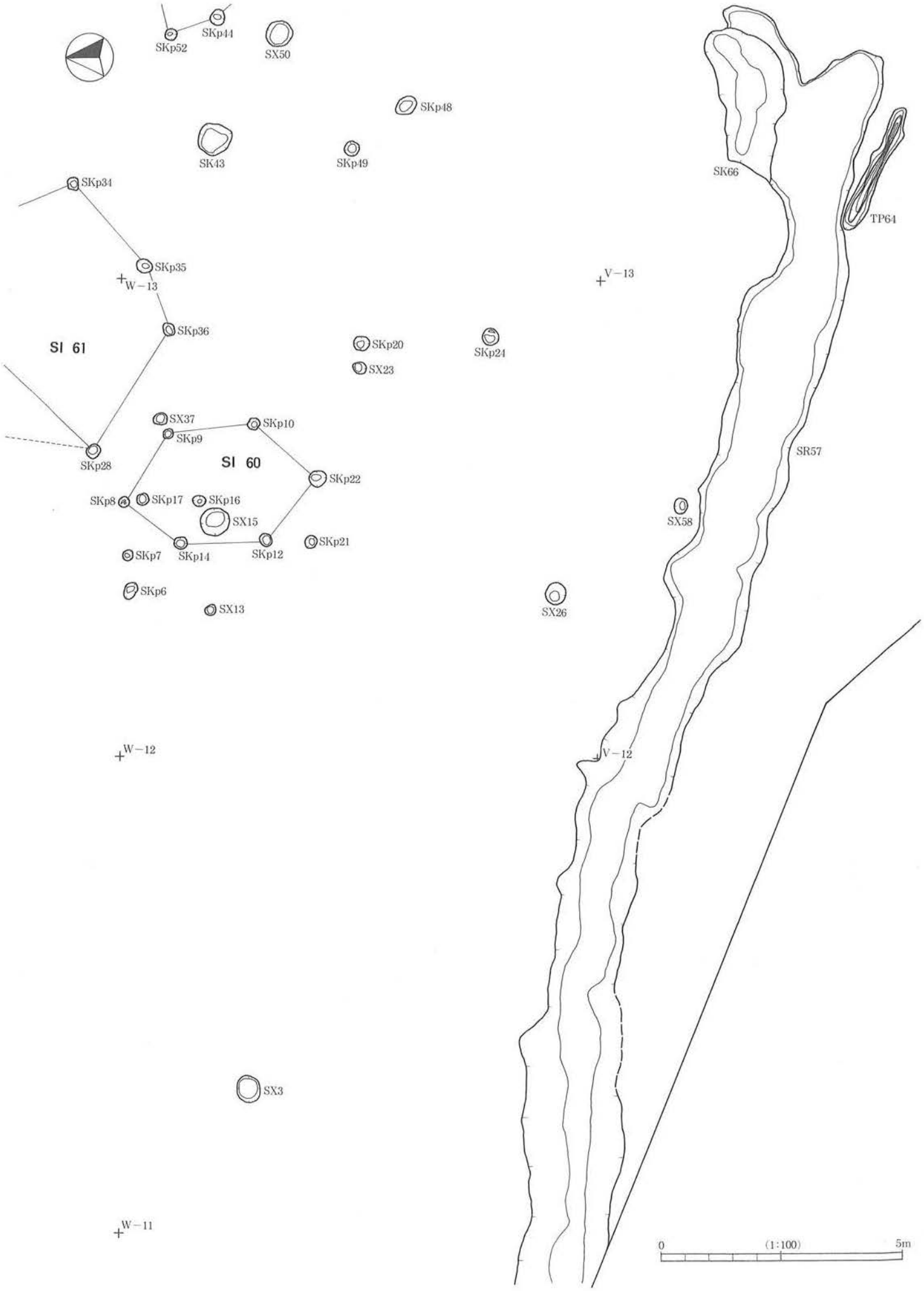


遺構全体図　D地区－①

図版22



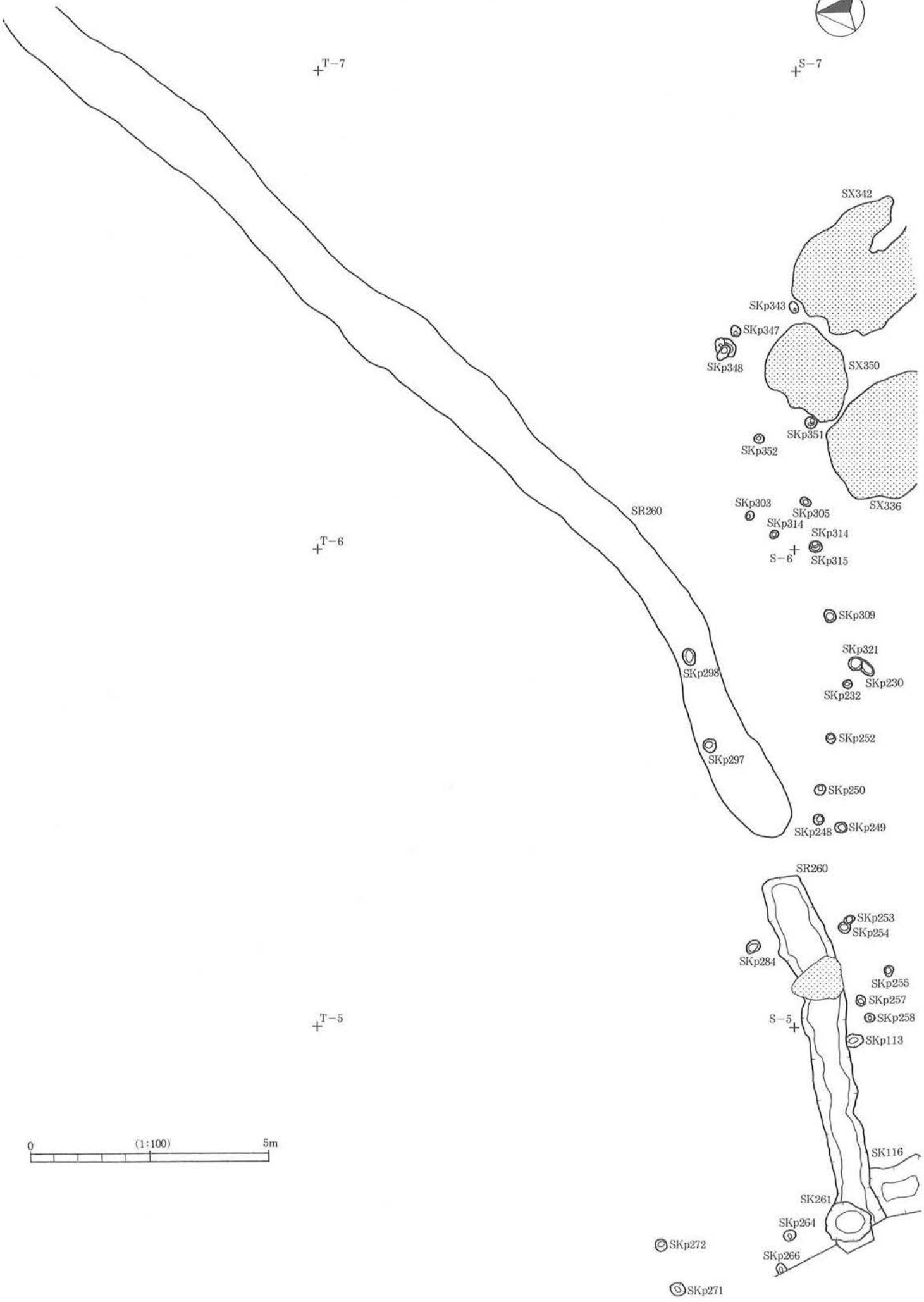
遺構全体図　D地区－②


SKp52
SKp44
SX50
SKp48
SK43
SKp49
SKp34
SKp35
W－13
SKp36
SI 61
SKp20
SKp24
SX23
SX37
SKp10
SKp9
SKp28
SI 60
SKp22
SKp8
SKp17
SKp16
SX15
SKp21
SKp7
SKp14
SKp12
SKp6
SX13
W－12
SX3
W－11
SK66
TP64
V－13
SR57
SX58
SX26
V－12
0
(1:100)
5m

図版24

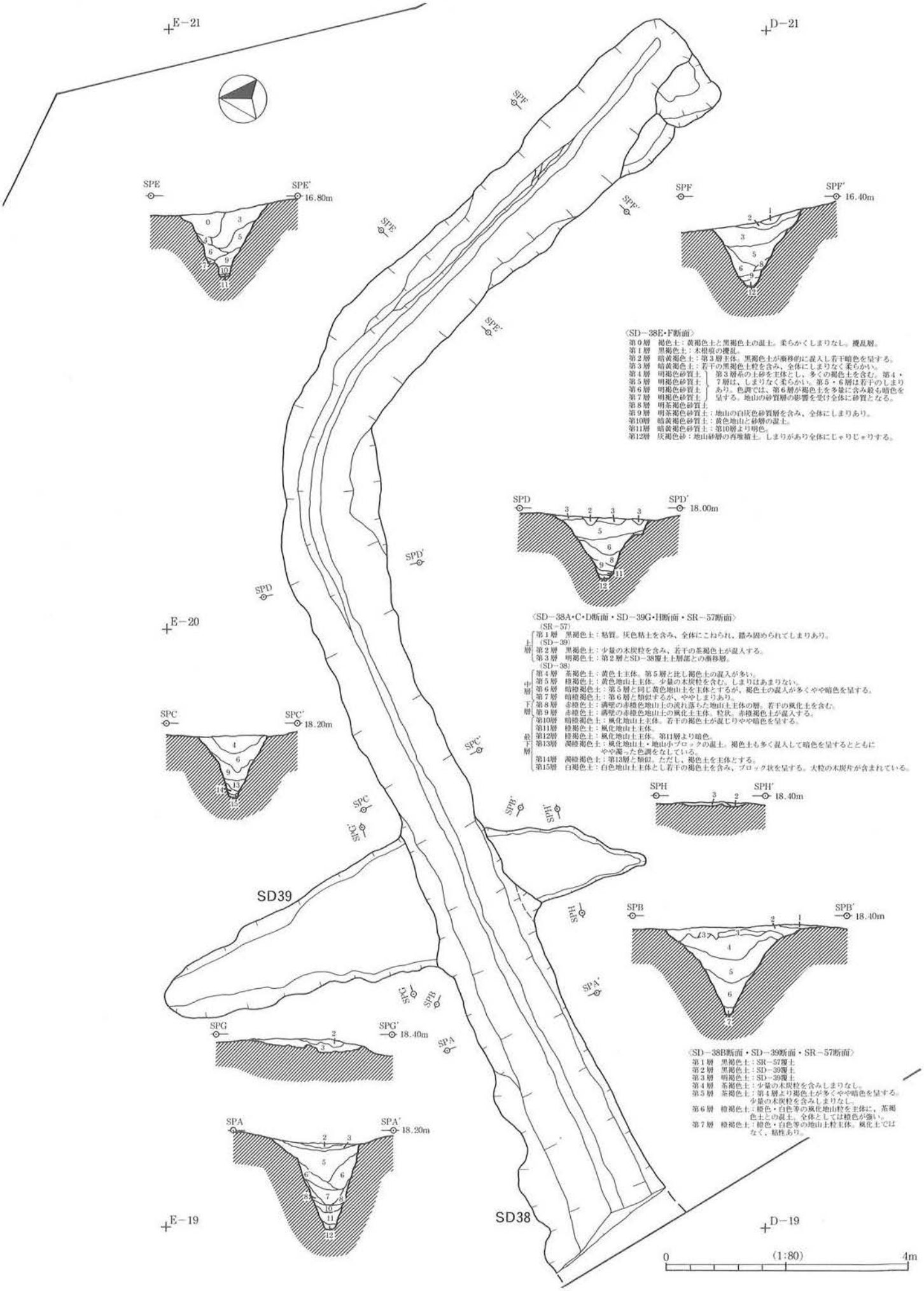
遺構全体図　E地区－①

遺構全体図　E地区－②


T−7
S−7
SX342
SKp343
SKp347
SKp348
SX350
SKp351
SKp352
SX336
SR260
SKp303
SKp305
SKp314
SKp314
S−6
SKp315
T−6
SKp309
SKp321
SKp298
SKp230
SKp232
SKp252
SKp297
SKp250
SKp248
SKp249
SR260
SKp253
SKp254
SKp284
SKp255
SKp257
SKp258
S−5
SKp113
T−5
0
(1:100)
5m
SK116
SK261
SKp264
SKp272
SKp266
SKp271

図版26

A地区　濠（大溝）・溝・道路跡

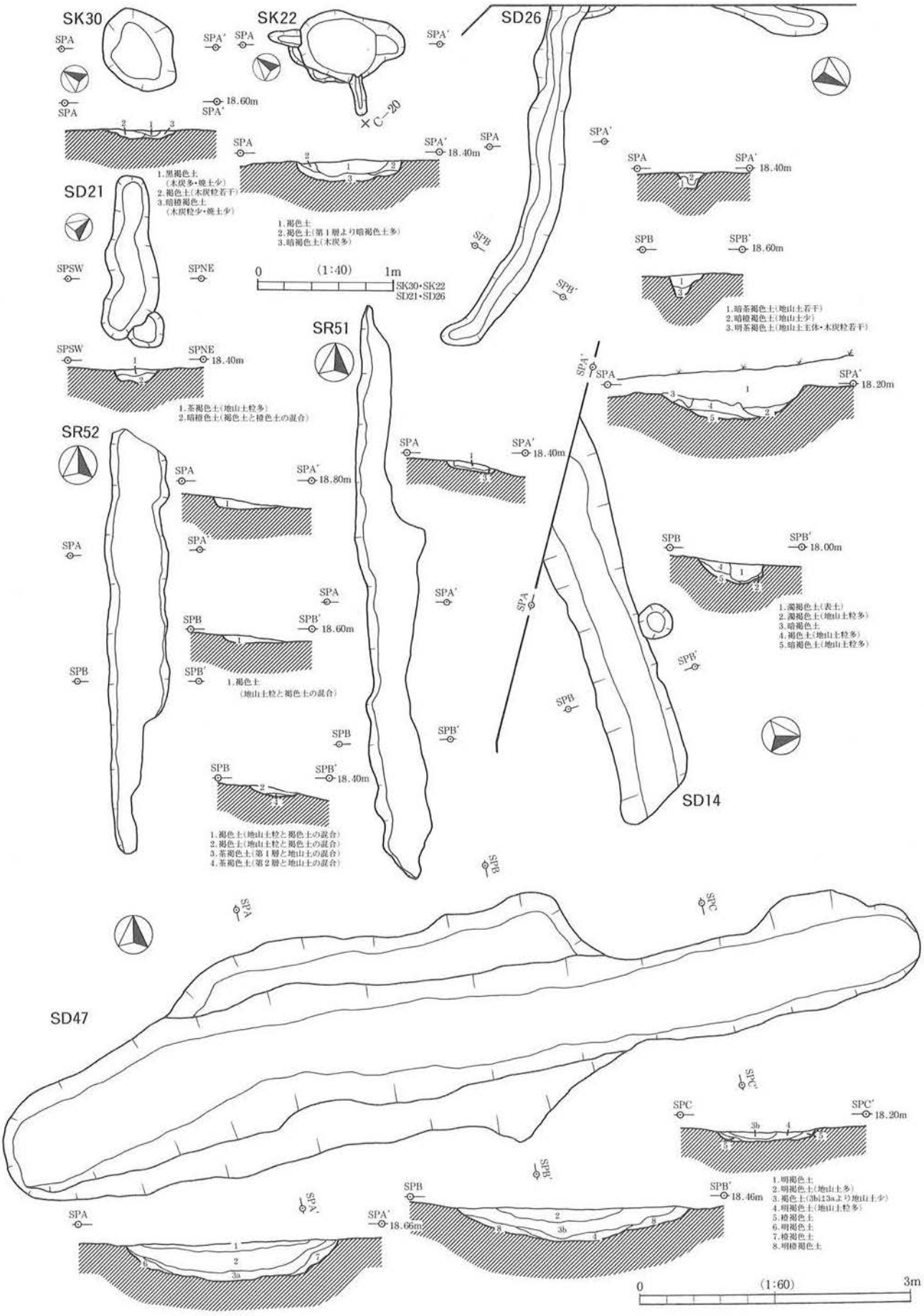


〈SD−38E・F断面〉
第0層　褐色土：黄褐色土と黒褐色土の混土。柔らかくしまりなし。攪乱層。
第1層　黒褐色土：木根痕の攪乱。
第2層　暗黄褐色土：第3層主体。黒褐色土が漸移的に混入し若干暗色を呈する。
第3層　暗黄褐色土：若干の黒褐色土粒を含み、全体にしまりなく柔らかい。
第4層　明褐色砂質土
第5層　明褐色砂質土
第6層　明褐色砂質土
第7層　明褐色砂質土
第3層系の土砂を主体とし、多くの褐色土を含む。第4・7層は、しまりなく柔らかい。第5・6層は若干のしまりあり。色調では、第6層が褐色土を多量に含み最も暗色を呈する。地山の砂質層の影響を受け全体に砂質となる。
第8層　明茶褐色砂質土
第9層　明茶褐色砂質土：地山の白灰色砂質層を含み、全体にしまりあり。
第10層　暗黄褐色砂質土：黄色地山と砂層の混土。
第11層　暗黄褐色砂質土：第10層より明色。
第12層　灰褐色砂：地山砂層の再堆積土。しまりがあり全体にじゃりじゃりする。

〈SD−38A・C・D断面・SD−39G・H断面・SR−57断面〉
（SR−57）
上層
第1層　黒褐色土：粘質。灰色粘土を含み、全体にこねられ、踏み固められてしまりあり。
（SD−39）
第2層　黒褐色土：少量の木炭粒を含み、若干の茶褐色土が混入する。
第3層　明褐色土：第2層とSD−38覆土上層部との漸移層。
（SD−38）
中層
第4層　茶褐色土：褐色土主体。第5層と比し褐色土の混入が多い。
第5層　橙褐色土：黄色地山土主体。少量の木炭粒を含む。しまりはあまりない。
第6層　暗橙褐色土：第5層と同じ黄色地山土を主体とするが、褐色土の混入が多くやや暗色を呈する。
第7層　暗橙褐色土：第6層と類似するが、ややしまりあり。
下層
第8層　赤橙色土：満壁の赤橙色地山土の流れ落ちた地山土主体の層。若干の風化土を含む。
第9層　赤橙色土：満壁の赤橙色地山土の風化土主体。粒状。赤橙褐色土が混入する。
最下層
第10層　暗橙褐色土：風化地山土主体。若干の褐色土が混じりやや暗色を呈する。
第11層　橙褐色土：風化地山土主体。
第12層　橙褐色土：風化地山土主体。第11層より暗色。
第13層　濁橙褐色土：風化地山土・地山小ブロックの混土。褐色土も多く混入して暗色を呈するとともにやや濁った色調をなしている。
第14層　濁橙褐色土：第13層と類似。ただし、褐色土を主体とする。
第15層　白褐色土：白色地山土主体とし若干の褐色土を含み、ブロック状を呈する。大粒の木炭片が含まれている。

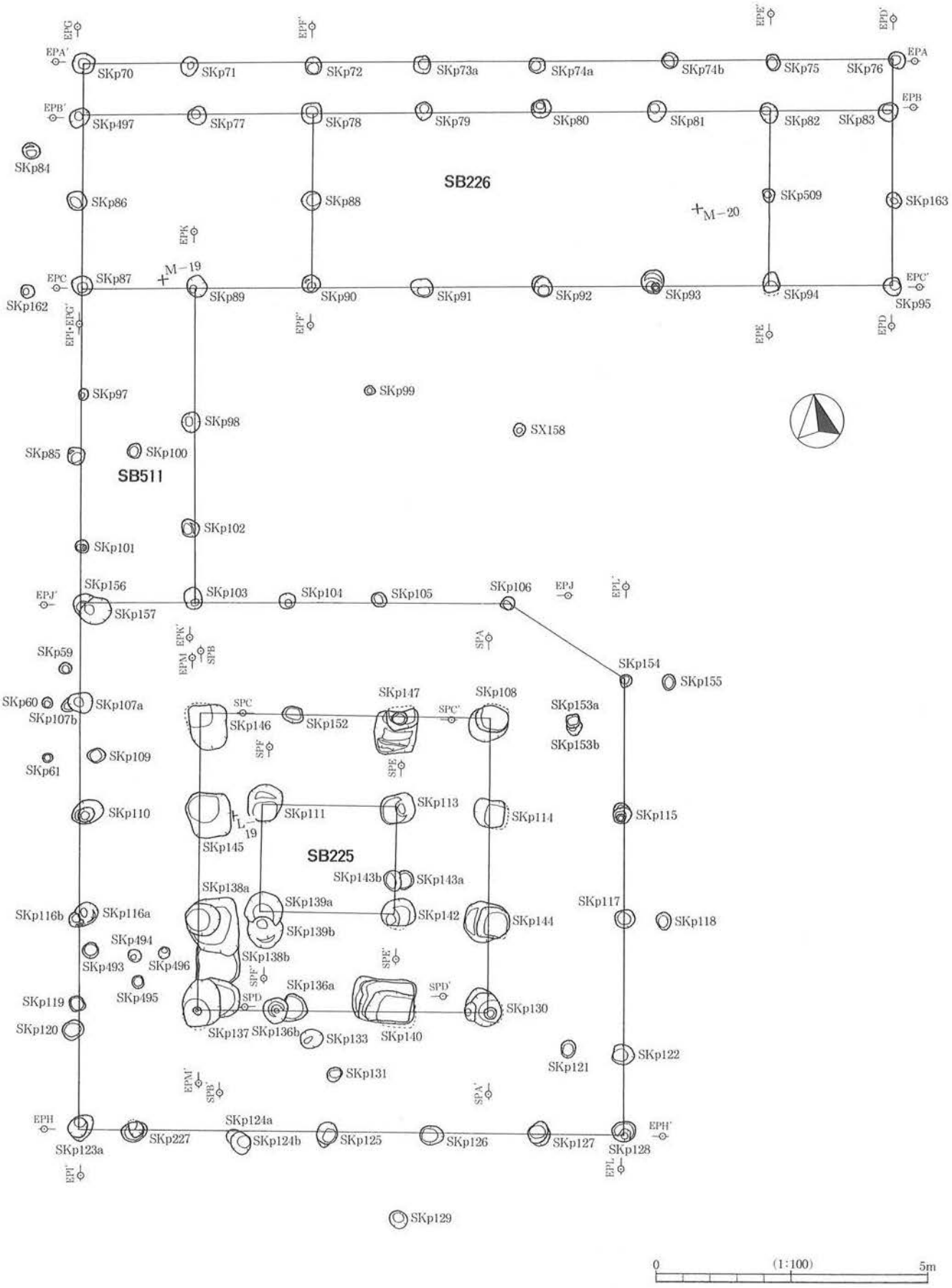
〈SD−38B断面・SD−39断面・SR−57断面〉
第1層　黒褐色土：SR−57覆土
第2層　黒褐色土：SD−39覆土
第3層　明褐色土：SD−39覆土
第4層　茶褐色土：少量の木炭粒を含みしまりなし。
第5層　茶褐色土：第4層より褐色土が多くやや暗色を呈する。少量の木炭粒を含みしまりなし。
第6層　橙褐色土：橙色・白色等の風化地山粒を主体に，茶褐色土との混土。全体としては橙色が強い。
第7層　橙褐色土：橙色・白色等の地山土粒主体。風化土ではなく，粘性あり。

A地区　土坑・溝跡

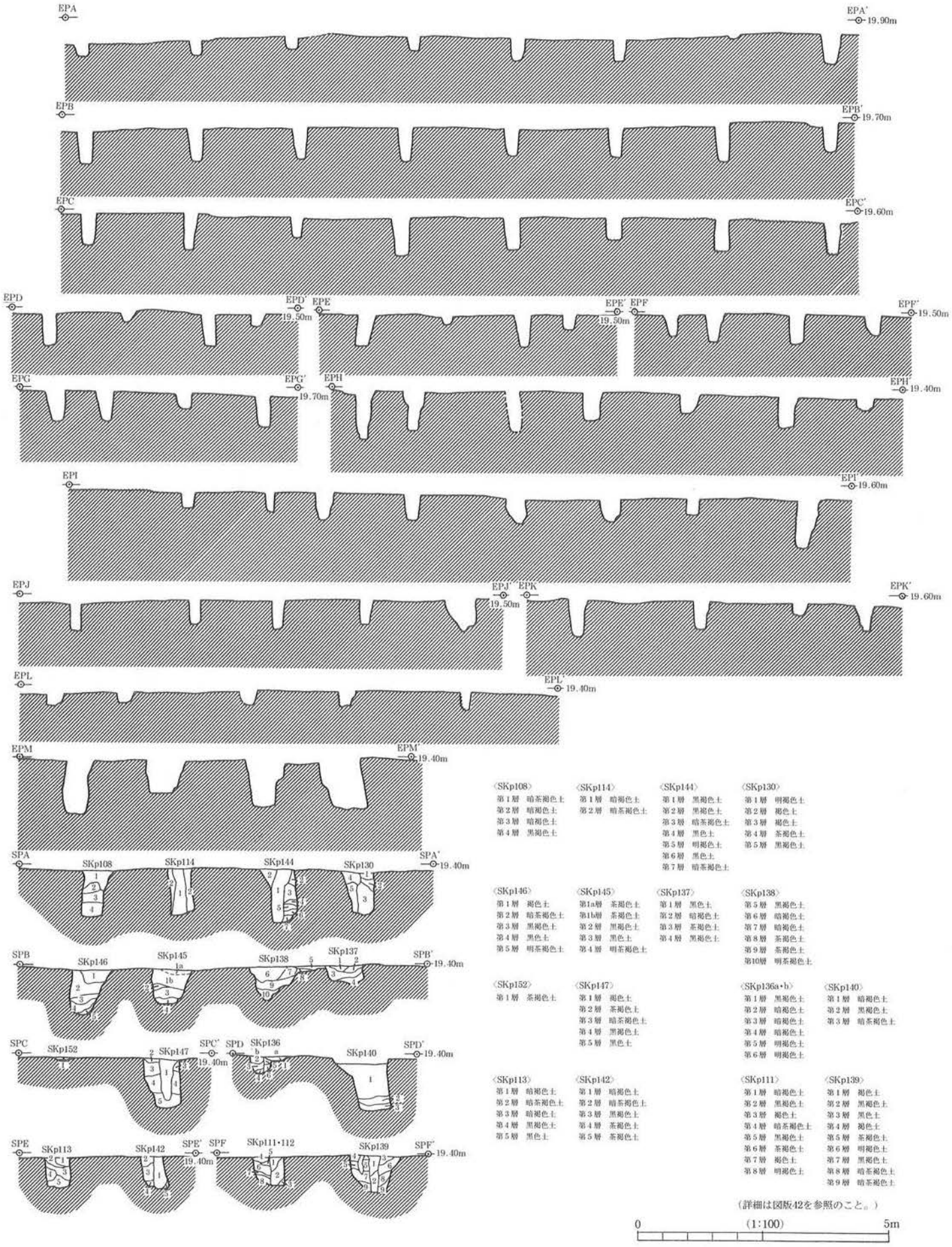

SK30
SK22
SD26
SD21
SR51
SR52
SD14
SD47
1.黒褐色土
(木炭多・焼土少)
2.褐色土(木炭粒若干)
3.暗橙褐色土
(木炭粒少・焼土少)
1.褐色土
2.褐色土(第1層より暗褐色土多)
3.暗褐色土(木炭多)
1.暗茶褐色土(地山土若干)
2.暗橙褐色土(地山土少)
3.明茶褐色土(地山土主体・木炭粒若干)
1.茶褐色土(地山土粒多)
2.暗橙色土(褐色土と橙色土の混合)
1.褐色土
(地山土粒と褐色土の混合)
1.褐色土(地山土粒と褐色土の混合)
2.褐色土(地山土粒と褐色土の混合)
3.茶褐色土(第1層と地山土の混合)
4.茶褐色土(第2層と地山土の混合)
1.濁褐色土(表土)
2.濁褐色土(地山土粒多)
3.暗褐色土
4.褐色土(地山土粒多)
5.暗褐色土(地山土粒多)
1.明褐色土
2.明褐色土(地山土多)
3.褐色土(3bは3aより地山土少)
4.明褐色土(地山土粒多)
5.橙褐色土
6.明褐色土
7.橙褐色土
8.明橙褐色土
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPSW
SPNE
18.60m
18.40m
18.80m
18.20m
18.00m
18.46m
18.66m
C-20
0
(1:40)
1m
SK30・SK22
SD21・SD26
(1:60)
3m

図版28

B地区　仏　　堂


SB226
SB511
SB225
SKp70
SKp71
SKp72
SKp73a
SKp74a
SKp74b
SKp75
SKp76
SKp497
SKp77
SKp78
SKp79
SKp80
SKp81
SKp82
SKp83
SKp84
SKp86
SKp88
SKp509
SKp163
SKp87
SKp89
SKp90
SKp91
SKp92
SKp93
SKp94
SKp95
SKp162
SKp97
SKp99
SKp98
SX158
SKp85
SKp100
SKp102
SKp101
SKp156
SKp103
SKp104
SKp105
SKp106
SKp157
SKp59
SKp154
SKp155
SKp60
SKp107a
SKp107b
SKp147
SKp108
SKp153a
SKp146
SKp152
SKp153b
SKp61
SKp109
SKp110
SKp111
SKp113
SKp114
SKp115
SKp145
SKp143b
SKp143a
SKp138a
SKp139a
SKp142
SKp144
SKp117
SKp118
SKp116b
SKp116a
SKp494
SKp139b
SKp493
SKp496
SKp138b
SKp495
SKp136a
SKp119
SKp130
SKp120
SKp137
SKp136b
SKp133
SKp140
SKp121
SKp122
SKp131
SKp124a
SKp123a
SKp227
SKp124b
SKp125
SKp126
SKp127
SKp128
SKp129
M−19
M−20
L−19
EPA
EPA'
EPB
EPB'
EPC
EPC'
EPD
EPD'
EPE
EPE'
EPF
EPF'
EPG
EPG'
EPH
EPH'
EPI
EPI'
EPJ
EPJ'
EPK
EPK'
EPL
EPL'
EPM
EPM'
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPD
SPD'
SPE
SPE'
SPF
SPF'
0
(1:100)
5m

B地区　仏　　堂



〈SKp108〉
第1層　暗茶褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　黒褐色土

〈SKp114〉
第1層　暗褐色土
第2層　暗茶褐色土

〈SKp144〉
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　暗茶褐色土
第4層　黒色土
第5層　明褐色土
第6層　黒色土
第7層　暗茶褐色土

〈SKp130〉
第1層　明褐色土
第2層　褐色土
第3層　褐色土
第4層　茶褐色土
第5層　黒褐色土

〈SKp146〉
第1層　褐色土
第2層　暗茶褐色土
第3層　黒褐色土
第4層　黒色土
第5層　明茶褐色土

〈SKp145〉
第1a層　茶褐色土
第1b層　茶褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　黒色土
第4層　明茶褐色土

〈SKp137〉
第1層　黒色土
第2層　暗褐色土
第3層　茶褐色土
第4層　黒褐色土

〈SKp138〉
第5層　黒褐色土
第6層　暗褐色土
第7層　暗褐色土
第8層　茶褐色土
第9層　茶褐色土
第10層　明茶褐色土

〈SKp152〉
第1層　茶褐色土

〈SKp147〉
第1層　褐色土
第2層　茶褐色土
第3層　暗茶褐色土
第4層　黒褐色土
第5層　黒色土

〈SKp136a・b〉
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　明褐色土
第6層　明褐色土

〈SKp140〉
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　暗茶褐色土

〈SKp113〉
第1層　暗褐色土
第2層　暗茶褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　黒褐色土
第5層　黒色土

〈SKp142〉
第1層　暗褐色土
第2層　暗茶褐色土
第3層　黒褐色土
第4層　茶褐色土
第5層　茶褐色土

〈SKp111〉
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土
第4層　暗茶褐色土
第5層　黒褐色土
第6層　茶褐色土
第7層　褐色土
第8層　明褐色土

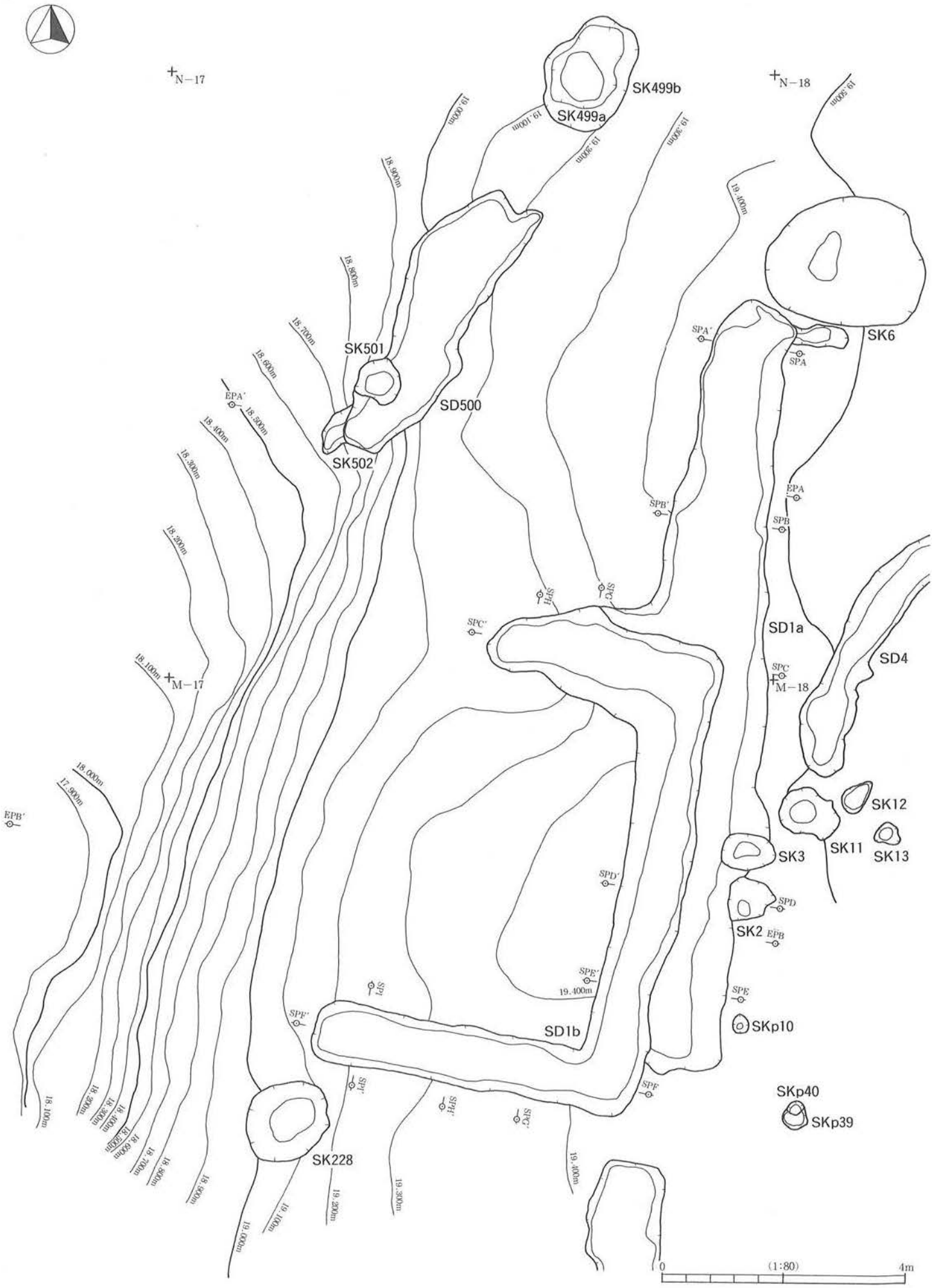
〈SKp139〉
第1層　褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　黒色土
第4層　褐色土
第5層　茶褐色土
第6層　明褐色土
第7層　黒褐色土
第8層　暗茶褐色土
第9層　暗茶褐色土

（詳細は図版42を参照のこと。）

0　(1:100)　5m

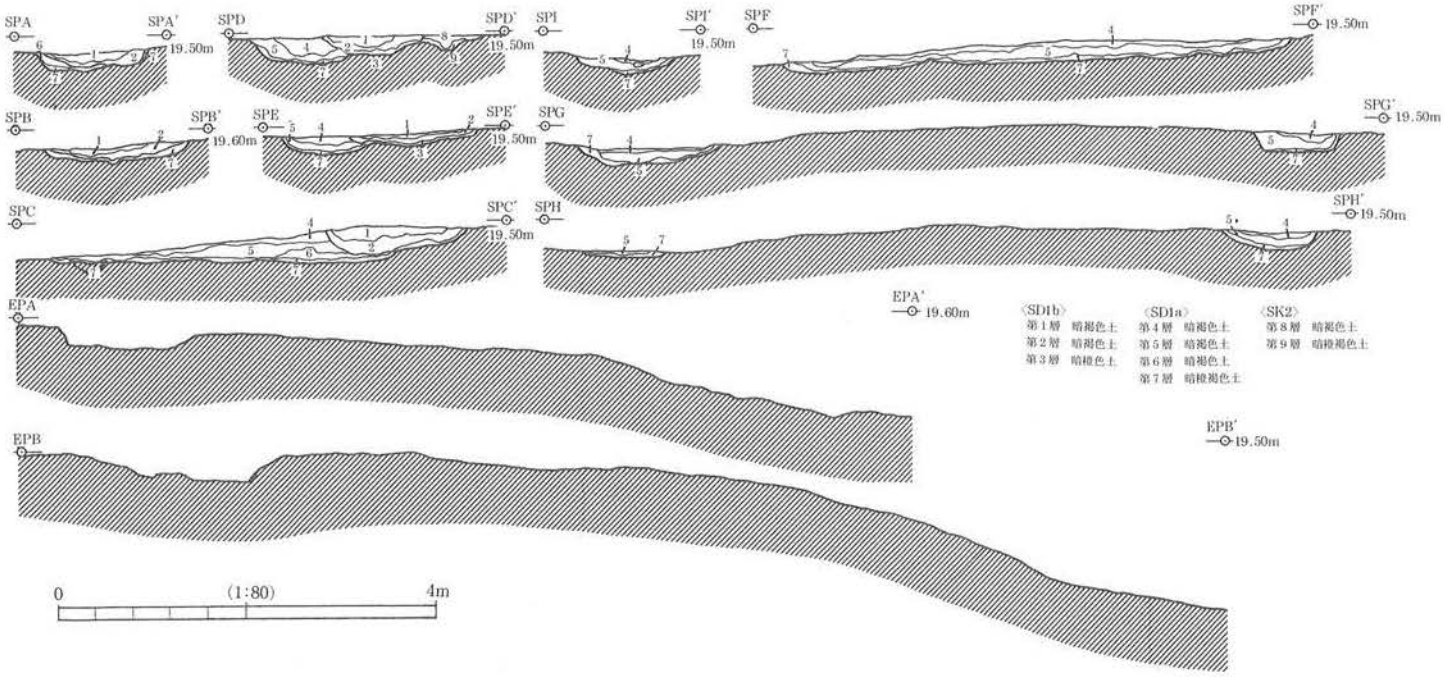
図版30

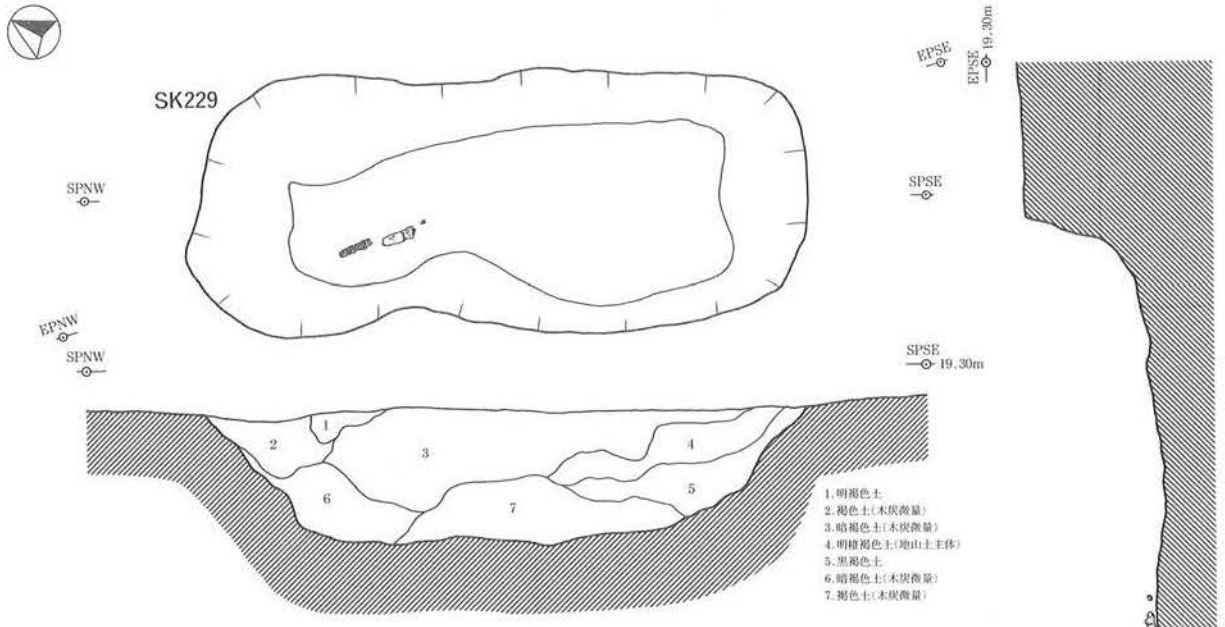
B地区　区画溝

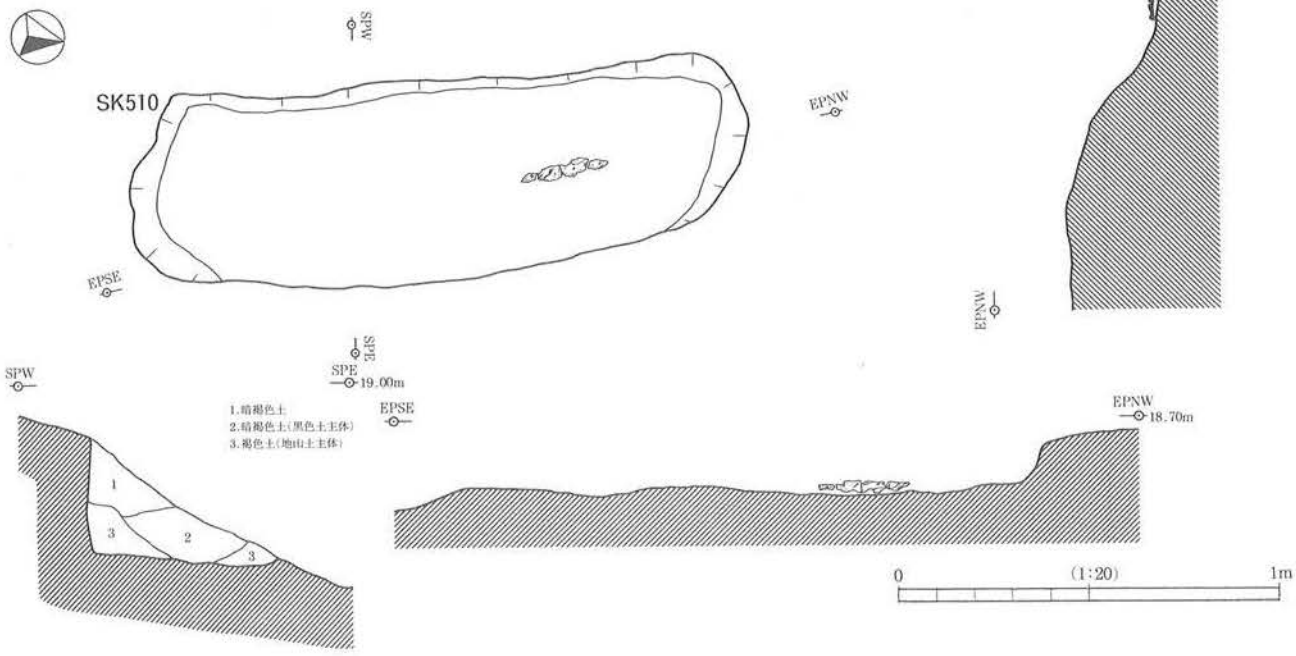


N−17
N−18
M−17
M−18
SK499a
SK499b
SK501
SK502
SD500
SK6
SD1a
SD4
SK12
SK11
SK13
SK3
SK2
SD1b
SKp10
SKp40
SKp39
SK228
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPD
SPD'
SPE
SPE'
SPF
SPF'
SPG
SPG'
SPH
SPH'
SPI
SPI'
EPA
EPA'
EPB
EPB'
19.000m
19.100m
19.200m
19.300m
19.400m
19.500m
18.900m
18.800m
18.700m
18.600m
18.500m
18.400m
18.300m
18.200m
18.100m
18.000m
17.900m
0
(1:80)
4m

B地区　区画溝・土壙墓


SPA
SPA'
19.50m
SPD
SPD'
19.50m
SPI
SPI'
19.50m
SPF
SPF'
19.50m
SPB
SPB'
19.60m
SPE
SPE'
19.50m
SPG
SPG'
19.50m
SPC
SPC'
19.50m
SPH
SPH'
19.50m
EPA
EPA'
19.60m
EPB
EPB'
19.50m
〈SD1b〉
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗橙色土
〈SD1a〉
第4層　暗褐色土
第5層　暗褐色土
第6層　暗褐色土
第7層　暗橙褐色土
〈SK2〉
第8層　暗褐色土
第9層　暗橙褐色土
0
(1:80)
4m

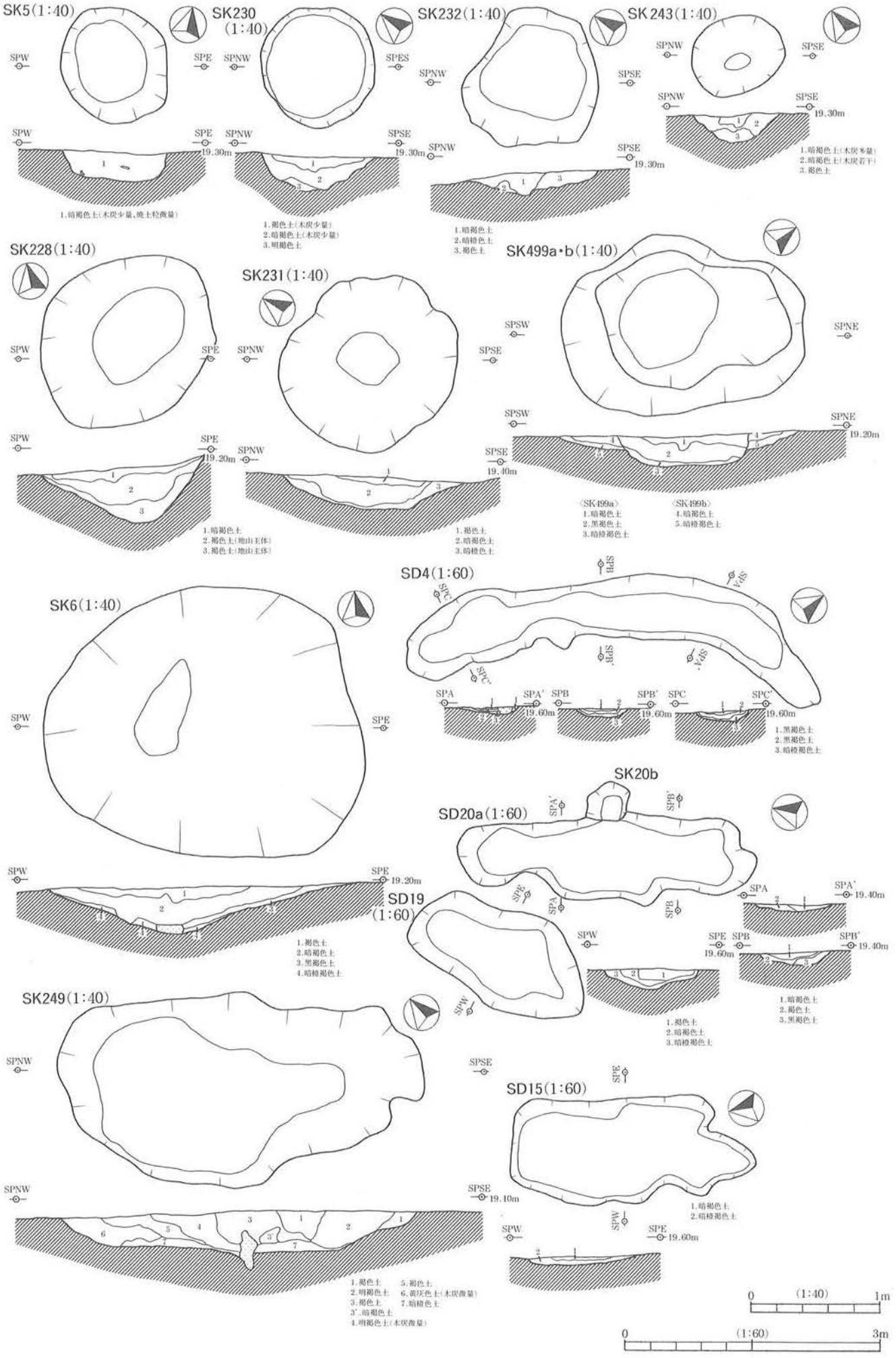

SK229
SPNW
EPNW
SPNW
EPSE
19.30m
SPSE
SPSE
19.30m
1.明褐色土
2.褐色土(木炭微量)
3.暗褐色土(木炭微量)
4.明橙褐色土(地山土主体)
5.黒褐色土
6.暗褐色土(木炭微量)
7.褐色土(木炭微量)


SK510
SPW
EPNW
EPSE
EPNW
SPE
SPE
19.00m
EPSE
1.暗褐色土
2.暗褐色土(黒色土主体)
3.褐色土(地山土主体)
EPNW
18.70m
0
(1:20)
1m

図版32

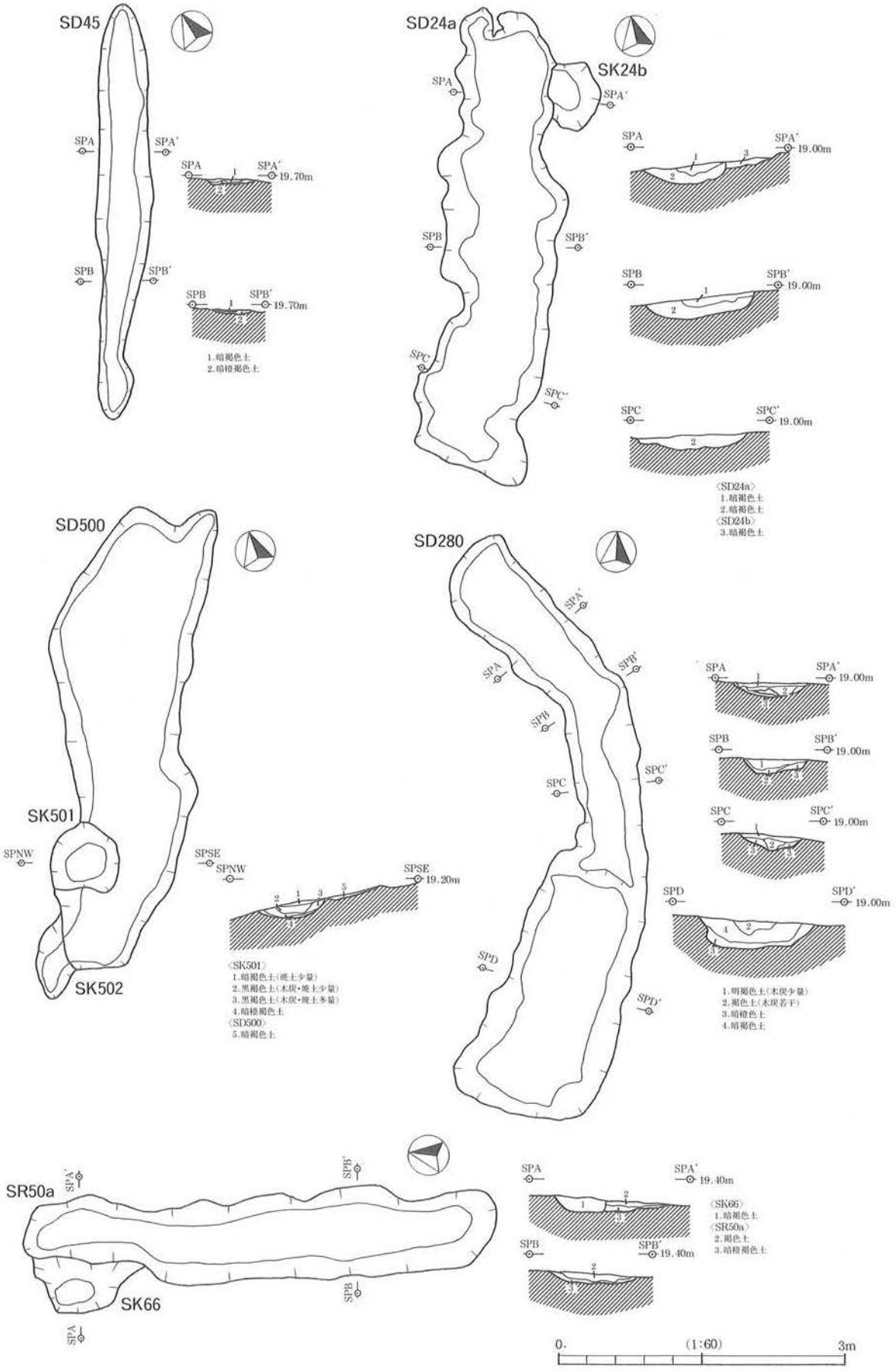
B地区　区画溝（溝区画）

B地区　土坑・溝跡

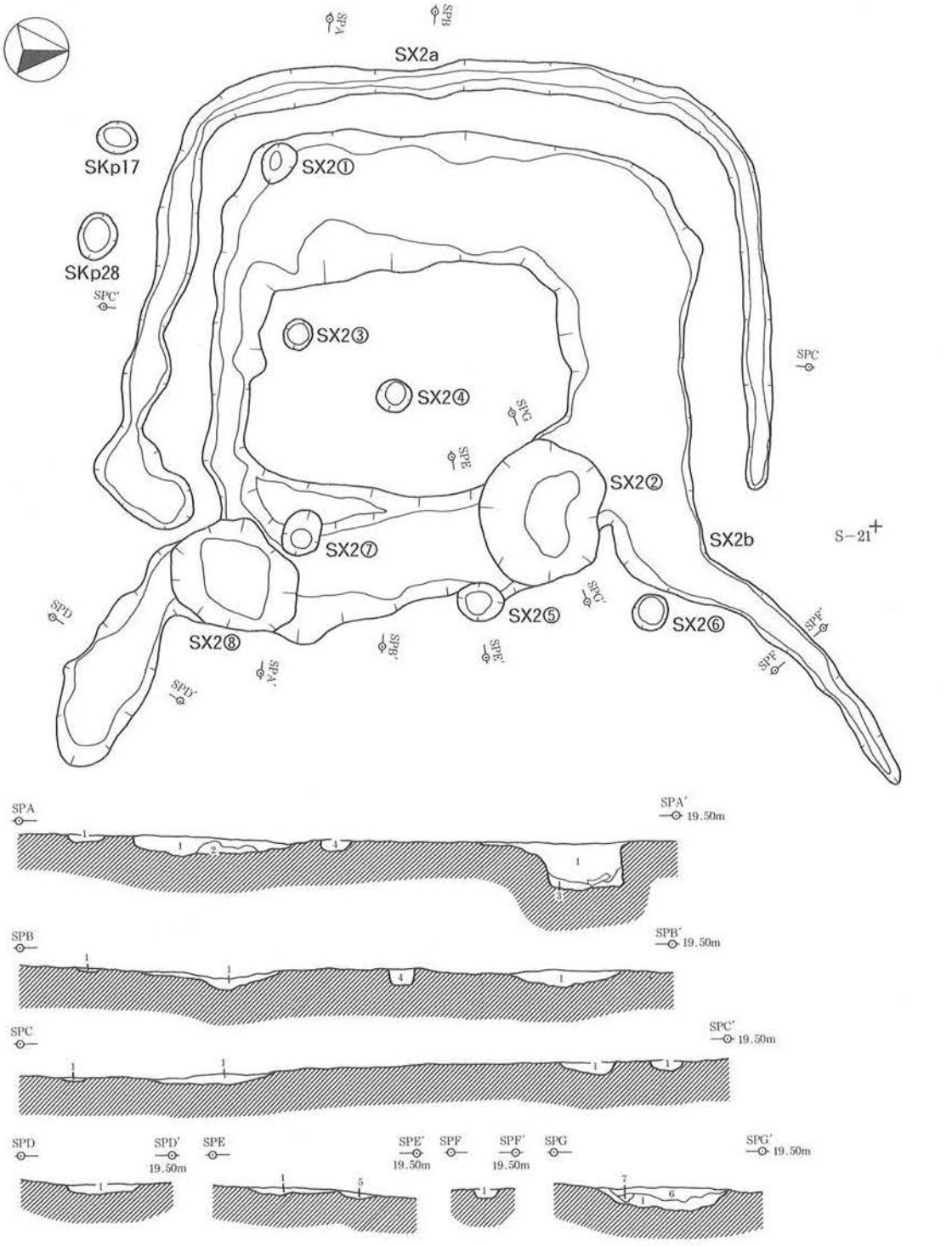

SK5(1:40)
SPW
SPE
19.30m
1.暗褐色土(木炭少量、焼土粒微量)
SK230 (1:40)
SPE
SPNW
SPSE
19.30m
1.褐色土(木炭少量)
2.暗褐色土(木炭少量)
3.明褐色土
SK232(1:40)
SPES
SPNW
SPSE
19.30m
1.暗褐色土
2.暗橙色土
3.褐色土
SK243(1:40)
SPNW
SPSE
19.30m
1.暗褐色土(木炭多量)
2.暗褐色土(木炭若干)
3.褐色土
SK228(1:40)
SPW
SPE
19.20m
1.暗褐色土
2.褐色土(地山主体)
3.褐色土(地山主体)
SK231(1:40)
SPNW
SPSE
19.40m
1.褐色土
2.暗褐色土
3.暗橙色土
SK499a・b(1:40)
SPSW
SPNE
19.20m
〈SK499a〉
1.暗褐色土
2.黒褐色土
3.暗橙褐色土
〈SK499b〉
4.暗褐色土
5.暗橙褐色土
SK6(1:40)
SPW
SPE
19.20m
1.褐色土
2.暗褐色土
3.黒褐色土
4.暗橙褐色土
SD4(1:60)
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
19.60m
1.黒褐色土
2.黒褐色土
3.暗橙褐色土
SK20b
SD20a(1:60)
SPA'
SPB'
SPA
SPA'
19.40m
SPB
SPB'
19.40m
1.暗褐色土
2.褐色土
3.黒褐色土
SD19 (1:60)
SPE
SPA
SPW
SPE
19.60m
1.褐色土
2.暗褐色土
3.暗橙褐色土
SK249(1:40)
SPNW
SPW
1.褐色土
2.明褐色土
3.褐色土
3'.暗褐色土
4.明褐色土(木炭微量)
5.褐色土
6.黄灰色土(木炭微量)
7.暗橙色土
SD15(1:60)
SPSE
SPE
19.10m
SPW
SPE
19.60m
1.暗褐色土
2.暗橙褐色土
0 (1:40) 1m
0 (1:60) 3m

図版34

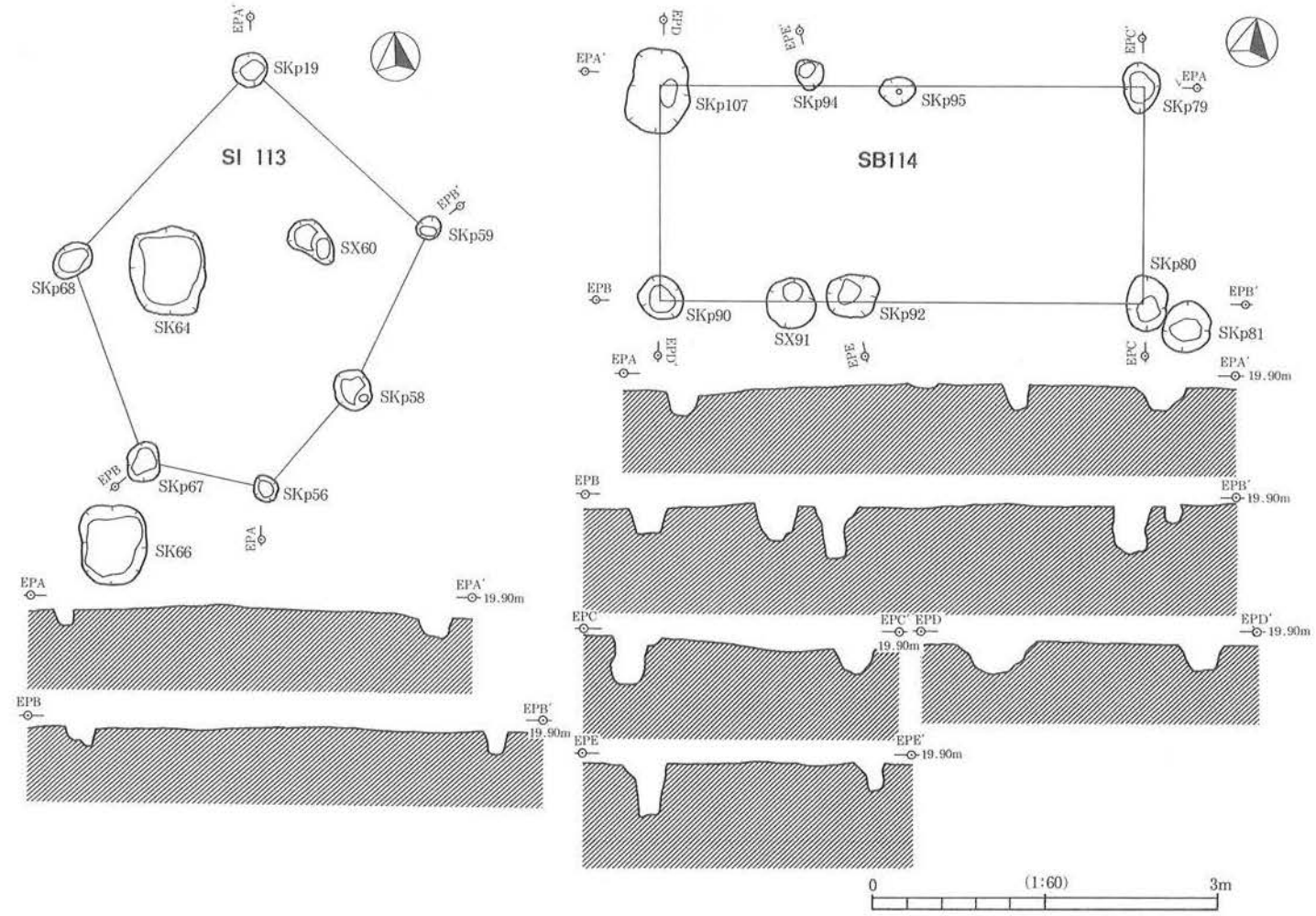
B地区　溝・道路跡

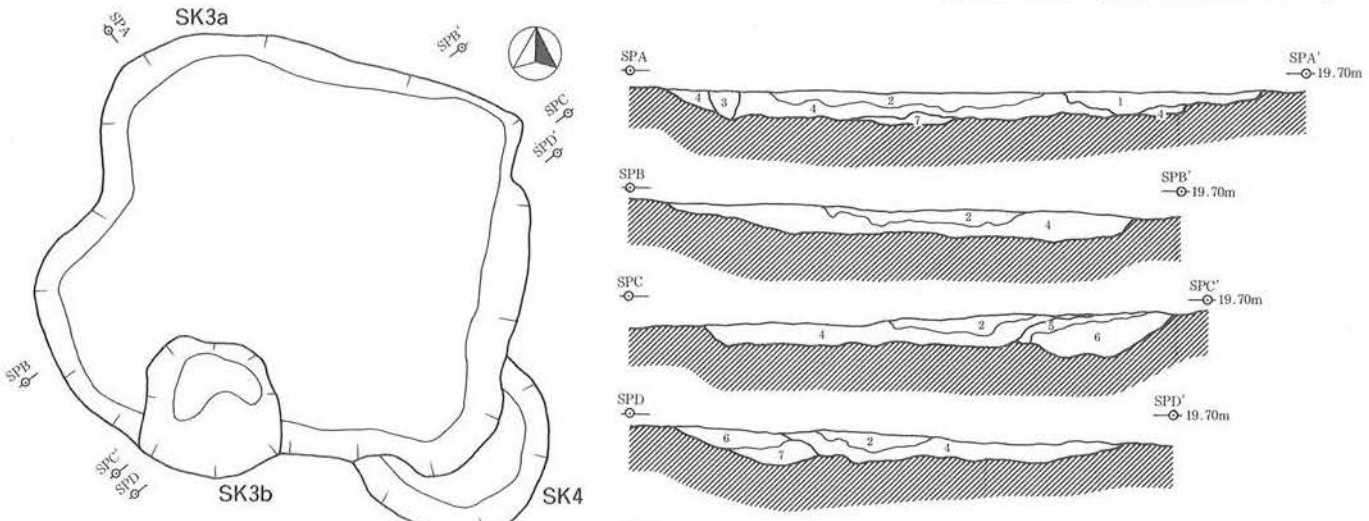


C地区　ＳＸ２

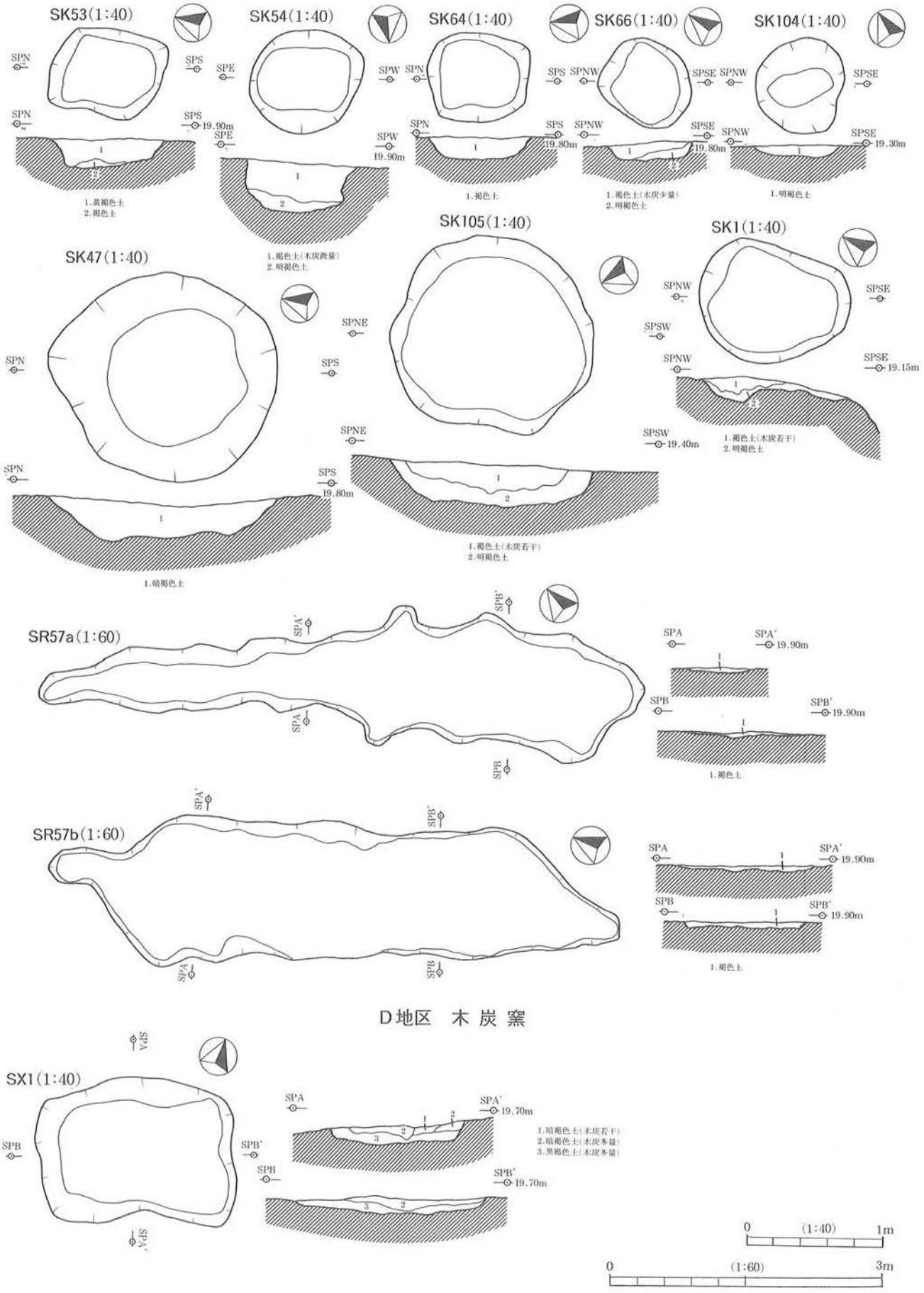

SX2a
SKp17
SKp28
SX2①
SX2②
SX2③
SX2④
SX2⑤
SX2⑥
SX2⑦
SX2⑧
SX2b
S−21
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPD
SPD'
SPE
SPE'
SPF
SPF'
SPG
SPG'
19.50m
〈SX2〉
1.褐色土（木炭・焼土少量）
2.明褐色土
3.明褐色土（木炭・焼土少量）
〈SX2③④〉
4.暗褐色土
〈SX2⑤〉
5.褐色土（木炭微量）
〈SX2②〉
6.赤橙色土（焼土多量）
7.暗褐色土（焼土微量）
0
(1:40)
1m

C地区　住居跡・土坑


SI 113
SKp19
SKp59
SX60
SKp68
SK64
SKp58
SKp67
SKp56
SK66
EPA
EPA'
19.90m
EPB
EPB'
19.90m
SB114
SKp107
SKp94
SKp95
SKp79
SKp80
SKp90
SX91
SKp92
SKp81
EPC
EPC'
EPD
EPD'
EPE
EPE'
19.90m
0
(1:60)
3m

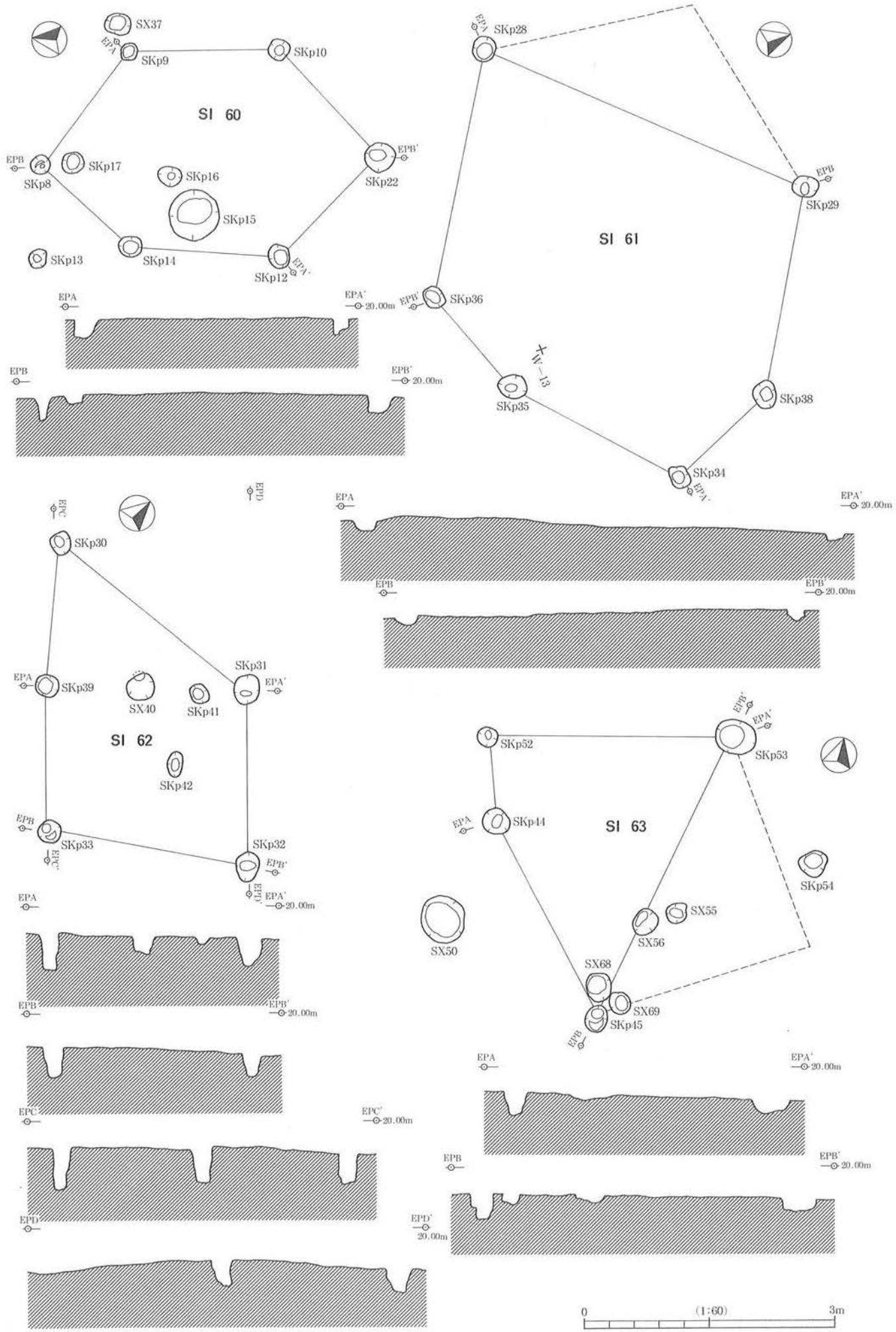

SK3a
SK3b
SK4
SPA
SPA'
SPB
SPB'
SPC
SPC'
SPD
SPD'
19.70m
〈SK4〉
1.褐色土
〈SK3a〉
2.暗褐色土(木炭若干)　4.褐色土(木炭・焼土若干)
〈SKp3c〉
3.黒褐色土(木炭少量)
〈SK3b〉
5.明褐色土
6.暗赤褐色土(焼土多量)
7.褐色土(木炭少量)
0
(1:40)
1m

C地区　土坑・道路跡

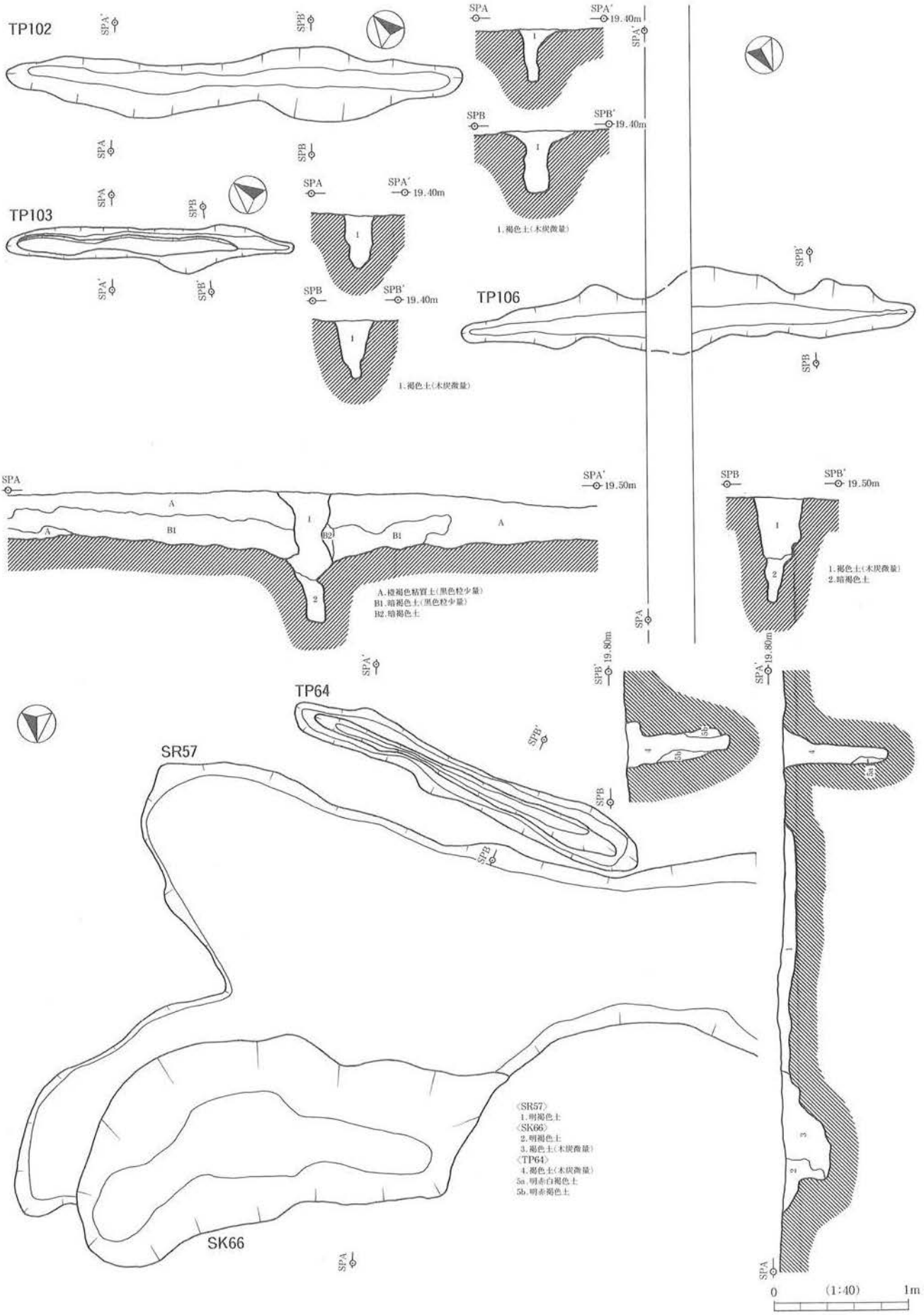

SK53(1:40)
SPN
SPS
SPE
19.90m
1.黄褐色土
2.褐色土
SK54(1:40)
SPW
SPE
19.90m
1.褐色土(木炭微量)
2.明褐色土
SK64(1:40)
SPW
SPN
SPS
19.80m
1.褐色土
SK66(1:40)
SPS
SPNW
SPSE
SPNW
19.80m
1.褐色土(木炭少量)
2.明褐色土
SK104(1:40)
SPSE
SPNW
19.30m
1.明褐色土
SK47(1:40)
SPN
SPNE
SPS
19.80m
1.暗褐色土
SK105(1:40)
SPNE
SPS
1.褐色土(木炭若干)
2.明褐色土
SK1(1:40)
SPNW
SPSE
SPSW
19.15m
19.40m
1.褐色土(木炭若干)
2.明褐色土
SR57a(1:60)
SPA'
SPB'
SPA
SPB
19.90m
1.褐色土
SR57b(1:60)
SPA'
SPB'
SPA
SPB
19.90m
1.褐色土
D地区　木炭窯
SX1(1:40)
SPA
SPB
SPA'
SPB'
19.70m
1.暗褐色土(木炭若干)
2.暗褐色土(木炭多量)
3.黒褐色土(木炭多量)
0
(1:40)
1m
0
(1:60)
3m

図版38

D地区　住居跡

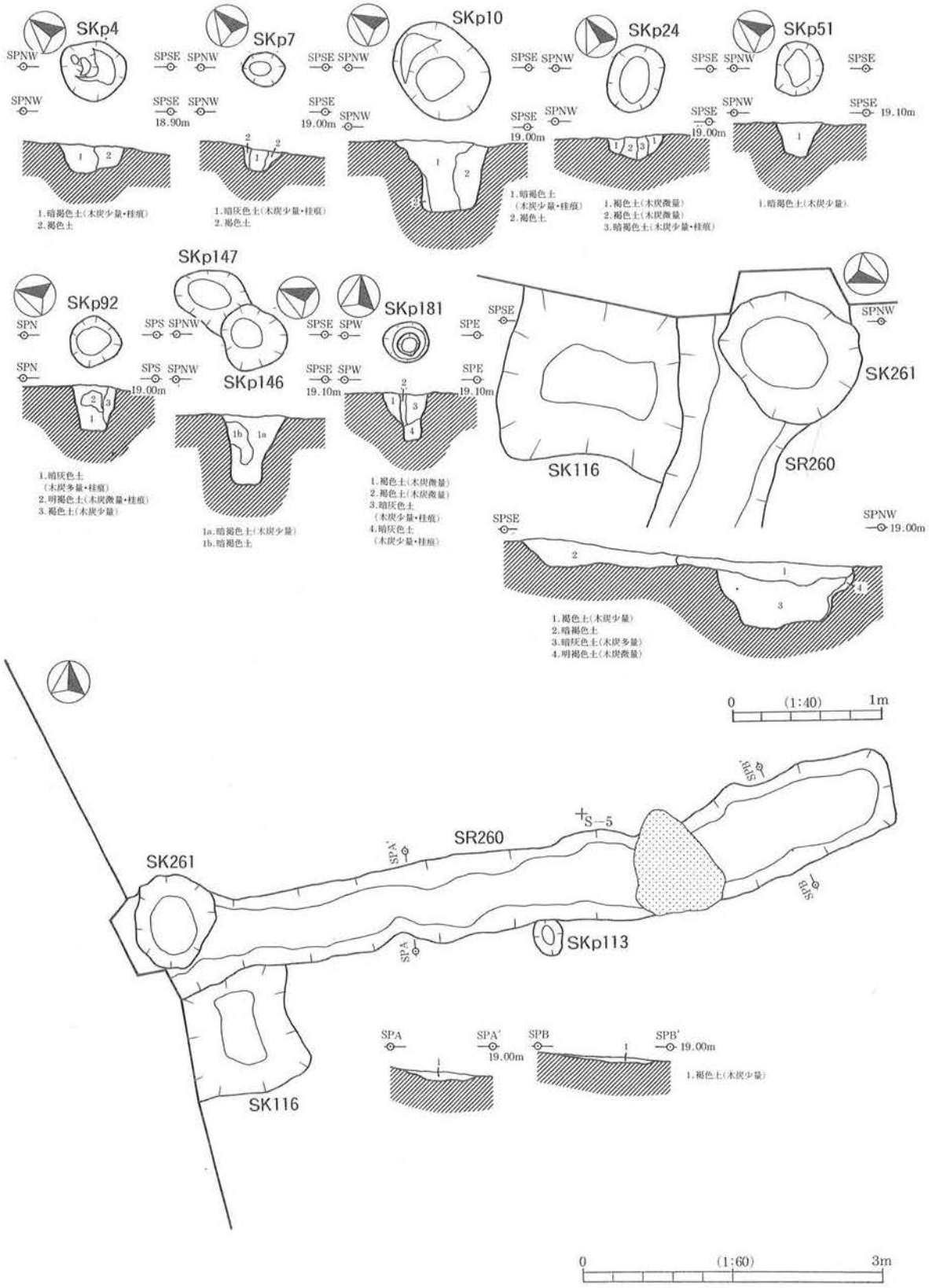

SI 60
SX37
SKp9
SKp10
SKp8
SKp17
SKp16
SKp15
SKp22
SKp13
SKp14
SKp12
EPA
EPA'
EPB
EPB'
20.00m
SI 61
SKp28
SKp29
SKp36
SKp35
SKp38
SKp34
W-13
SI 62
SKp30
SKp31
SKp39
SX40
SKp41
SKp42
SKp33
SKp32
EPC
EPC'
EPD
EPD'
SI 63
SKp52
SKp53
SKp44
SKp54
SX50
SX55
SX56
SX68
SX69
SKp45
0
(1:60)
3m

D地区　トラップピット・土坑・道路跡

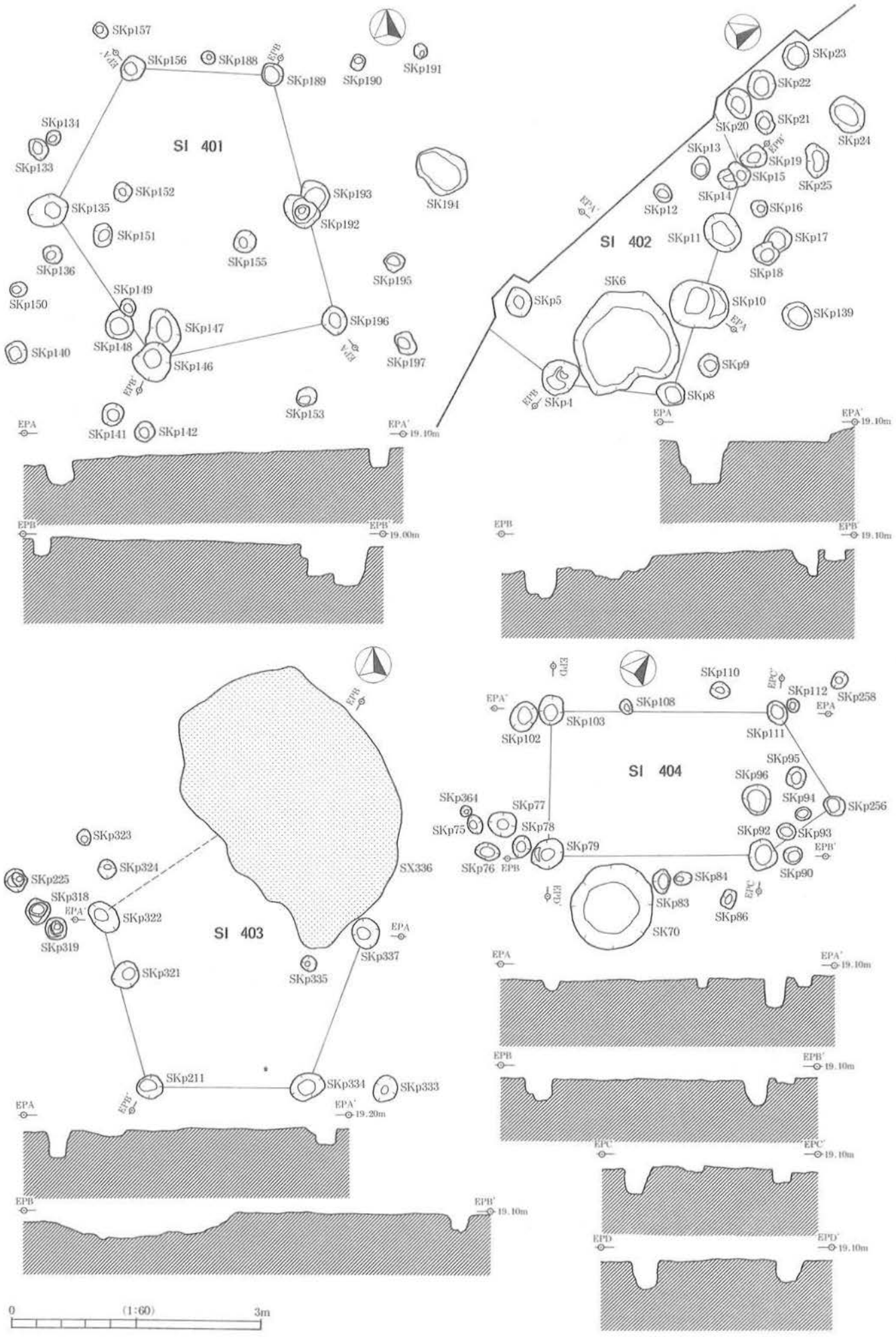


図版40

E地区　柱穴・土坑・道路跡



E地区　住居跡


SI 401
SKp157
SKp156
SKp188
SKp189
SKp190
SKp191
SKp134
SKp133
SKp135
SKp152
SKp151
SKp136
SKp150
SKp149
SKp147
SKp148
SKp146
SKp140
SKp141
SKp142
SKp153
SKp155
SKp193
SKp192
SK194
SKp195
SKp196
SKp197
EPA
EPA'
EPB
EPB'
19.10m
19.00m
SI 402
SKp23
SKp22
SKp20
SKp21
SKp24
SKp13
SKp19
SKp15
SKp25
SKp14
SKp12
SKp16
SKp11
SKp17
SKp18
SK6
SKp5
SKp10
SKp139
SKp9
SKp4
SKp8
SI 403
SKp323
SKp324
SKp225
SKp318
SKp319
SKp322
SKp321
SX336
SKp337
SKp335
SKp211
SKp334
SKp333
19.20m
SI 404
EPD
EPD'
EPC
EPC'
SKp110
SKp112
SKp258
SKp108
SKp103
SKp102
SKp111
SKp95
SKp96
SKp94
SKp256
SKp364
SKp77
SKp75
SKp78
SKp79
SKp76
SKp92
SKp93
SKp90
SKp84
SKp83
SKp86
SK70
0
(1:60)
3m

B地区　SB225柱穴土層注記表

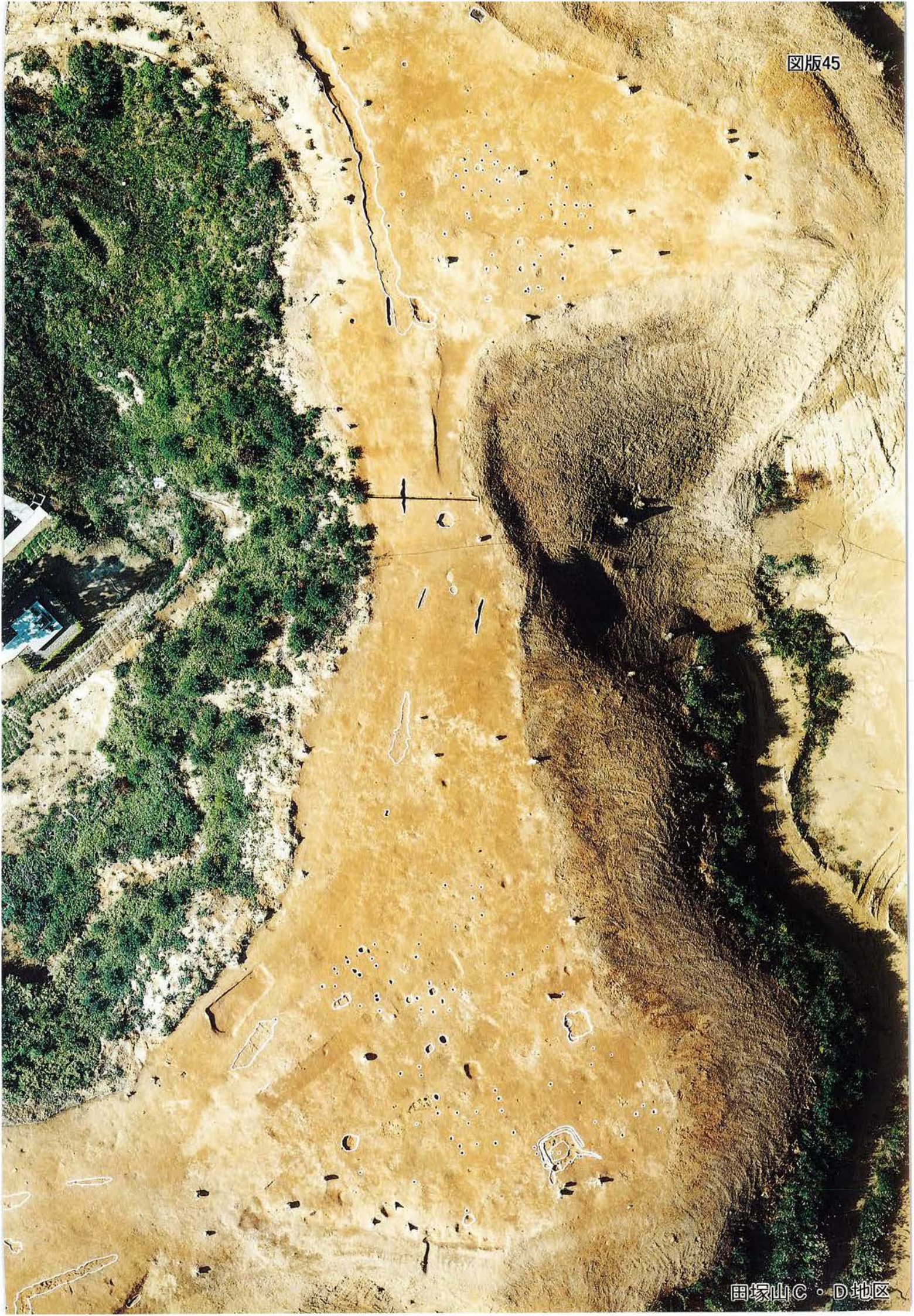
遺構名	層	色調	注記
SKp108	1	暗茶褐色	地山土主体、黒褐色土がブロックで混入
	2	暗褐色	しまりのない黒褐色土と地山土の混合
	3	暗褐色	基本的に第2層と同じだが、黒色土が多い
	4	黒褐色	黒褐色土を多く含み、地山土混入
SKp114	1	暗褐色	しまりがなく、地山土と暗褐色土、黒褐色土との混合。柱痕
	2	暗茶褐色	しまりがなく、地山土主体
SKp144	1	黒褐色	地山土と暗黒褐色土との混合、しまりなし。柱痕
	2	黒褐色	地山土と黒褐色土がブロック状に混合、ややしまりあり
	3	暗茶褐色	地山土が主体で、黒褐色土をブロック状に含む
	4	黒色	黒色土をブロック状に含む、しまりなし
	5	明褐色	地山土と黒色土がブロック状に混合、しまりなし
	6	黒色	黒色土をブロック状に含む、しまりなし
	7	暗茶褐色	地山土が主体で、褐色土が粒状に含まれる、しまりあり
SKp130	1	明褐色	地山土と褐色土がブロック状に混合、しまりなし。柱痕
	2	褐色	暗褐色土が主体で、粒状の地山土が多く含まれる。柱痕
	3	褐色	暗褐色土が主体で、粒状の地山土が多く含まれる。柱痕
	4	茶褐色	地山土を主体とし、若干の褐色土を含む。ややしまりあり
	5	黒褐色	暗褐色土・黒褐色土を主体とし、粒状の地山土が多く含まれる
SKp146	1	褐色	地山土と暗褐色土の混合
	2	暗茶褐色	地山土を主体とする暗褐色土との混合
	3	黒褐色	暗褐色土を主体とする黒色土との混合
	4	黒色	黒色土を主体とする暗褐色土・地山土との混合
	5	明茶褐色	地山土を主体とする暗褐色土との混合
SKp145	1a	茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒色土が混合
	1b	茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒色土が混合
	2	黒褐色	SKp-146 の第3層に同じ
	3	黒色	SKp-146 の第4層に同じ
	4	明茶褐色	SKp-146 の第5層に同じ
SKp137	1	黒色	ブロック状の黒色土
	2	暗褐色	暗褐色土と地山土の混合
	3	茶褐色	地山土を主体とし、若干の黒色土を含む
	4	黒褐色	SKp-146 の第3層に同じ
SKp138	5	黒褐色	地山土と褐色土の混合、ブロック状の黒色土を含む
	6	暗褐色	褐色土を主体とする地山土との混合
	7	暗褐色	第2層に同じ
	8	茶褐色	地山土を主体とし、褐色土を若干含む
	9	茶褐色	SKp-145の第1層に同じ
	10	明茶褐色	SKp-145の第4層に同じ
SKp152	1	茶褐色	しまりがある褐色土
SKp147	1	褐色	地山土を主体とする褐色土との混合
	2	茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒色土を含む
	3	暗茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒色土を多く含む
	4	黒褐色	地山土を主体とし、黒色土を含む
	5	黒色	黒色土を主体とし、地山土を含む
SKp136	1	黒褐色	黒色土・暗褐色土・地山土との混合
	2	暗褐色	地山土を主体とする褐色土、柱痕
	3	暗褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒褐色土を含む。柱痕
	4	暗褐色	地山土を主体とする。柱痕
	5	明褐色	地山土を主体とする
	6	明褐色	第5層よりやや明色を呈する
SKp140	1	暗褐色	地山土を主体とする黒褐色土と褐色土の混合
	2	黒褐色	SKp-146の第3層に同じ
	3	暗茶褐色	地山土を主体とし、若干の褐色土を含む
SKp113	1	暗褐色	地山土粒を多く含む、しまりあり
	2	暗茶褐色	地山土と黒色土ブロックを含む
	3	暗褐色	地山土粒を多く含む
	4	黒褐色	黒色土・暗褐色土・地山土との混合土
	5	黒色	黒色土を主体とし、地山土と暗褐色土が含まれる
SKp142	1	暗褐色	地山土粒が多く含まれる
	2	暗茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の黒色土を含む
	3	黒褐色	黒色土を主体とし、ブロック状の地山土を含む
	4	茶褐色	地山土を主体とし、褐色土粒を含む
	5	茶褐色	地山土を主体とし、褐色土粒を含む

遺構名	層	色調	注記
SKp111	1	暗褐色	褐色土を主体とし、地山土粒を多く含む。柱痕
	2	黒褐色	黒色土と暗褐色土との混合。柱痕
	3	褐色	地山土粒を多量に含む。柱痕
	4	暗茶褐色	ブロック状の地山土を多く含む
	5	黒褐色	ブロック状の黒褐色土と地山土の混合
	6	茶褐色	地山土を主体とし、ブロック状の暗褐色土を含む
	7	褐色	褐色土を主体とし、地山土粒を若干含む
	8	明褐色	地山土粒を多量に含む
SKp139	1	褐色	褐色土と地山土粒の混合。柱痕
	2	黒褐色	黒色土を主体とする。柱痕
	3	黒色	ブロック状の黒色土を主体とし、ブロック状の地山土を含む
	4	褐色	黒褐色土と地山土との混合
	5	茶褐色	ブロック状の地山土を主体とし、褐色土を含む
	6	明褐色	褐色土粒を主体とし、地山土を含む
	7	黒褐色	ブロック状の黒色土を主体とし、ブロック状の地山土を含む
	8	暗茶褐色	地山土を主体とする褐色土との混合
	9	暗茶褐色	褐色土と地山土との混合。第8層より暗色を呈する

田塚山遺跡群全景

図版44

田塚山A・B地区



田塚山C・D地区

田塚山D・E地区

田塚山B地区仏堂関連遺構群

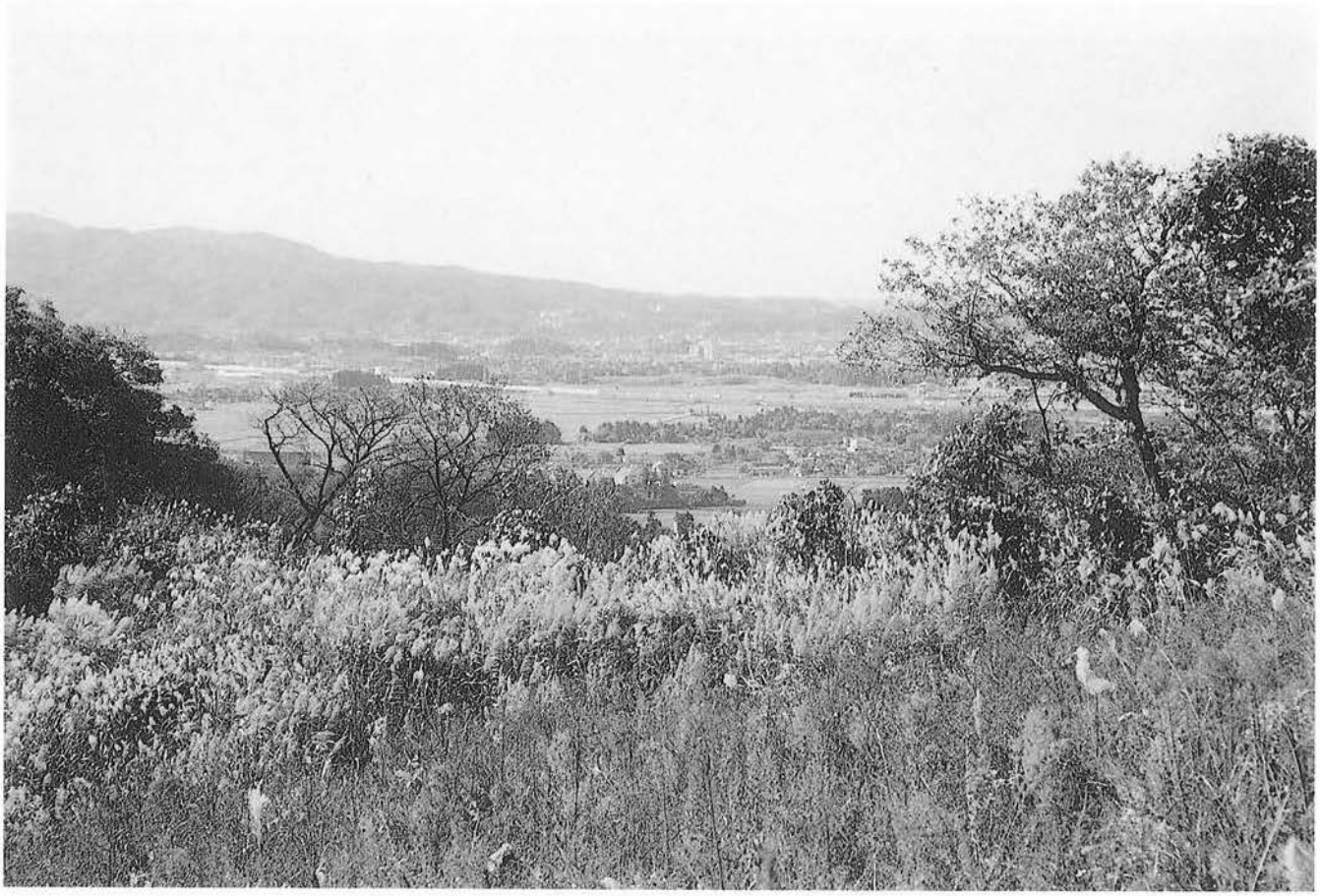
SB-225仏堂本堂

SB-225仏堂本堂の内陣と外陣

田塚山遺跡群　1

田塚山遺跡群とその周辺　　1964.10 撮影

田塚山遺跡群　2



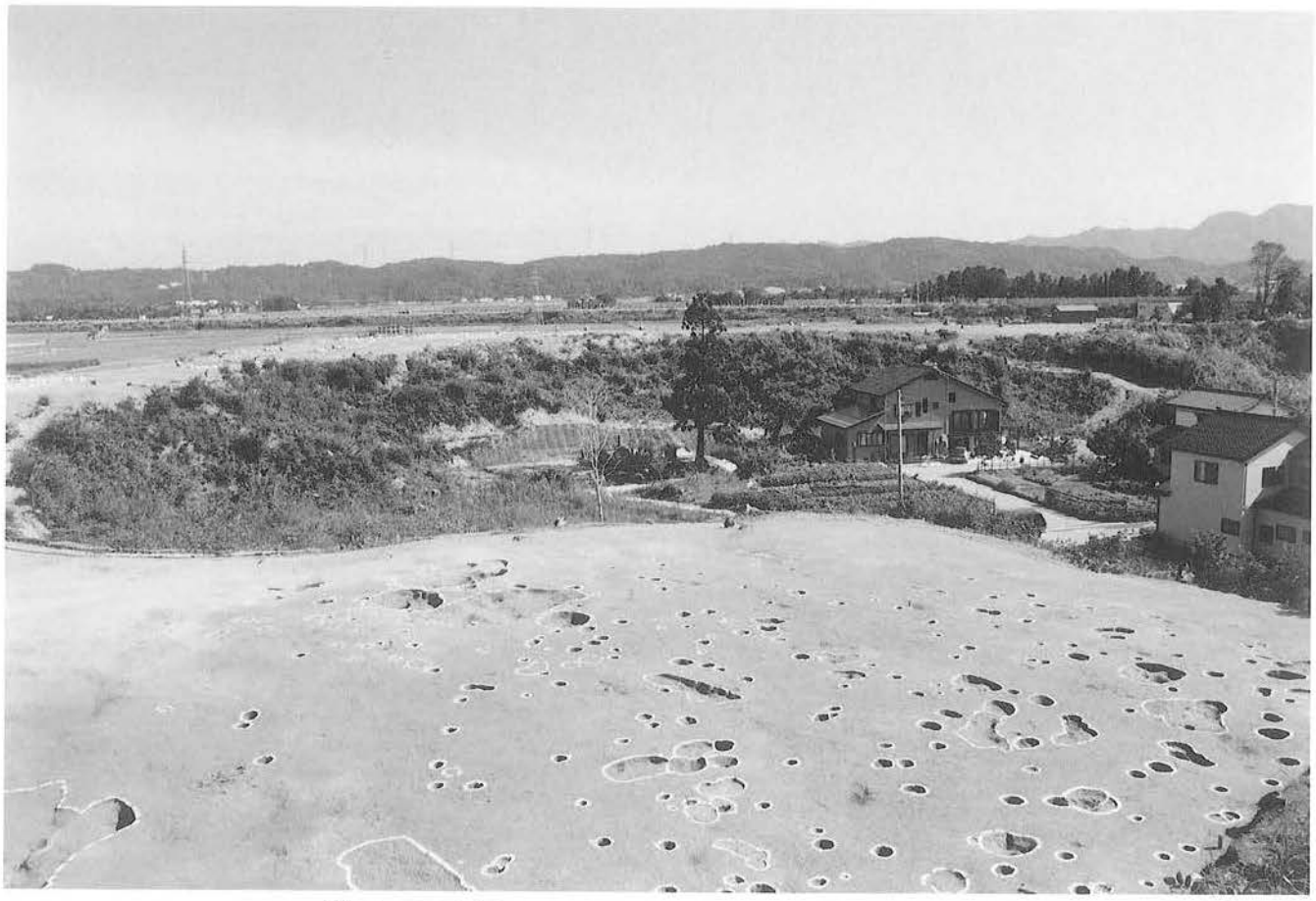
a．田塚山遺跡群遠景　（東から）

b．田塚山遺跡群近景　（東から）

田塚山遺跡群　3

遺跡群全景

田塚山遺跡群　4



a．調査区近景　（北西から）

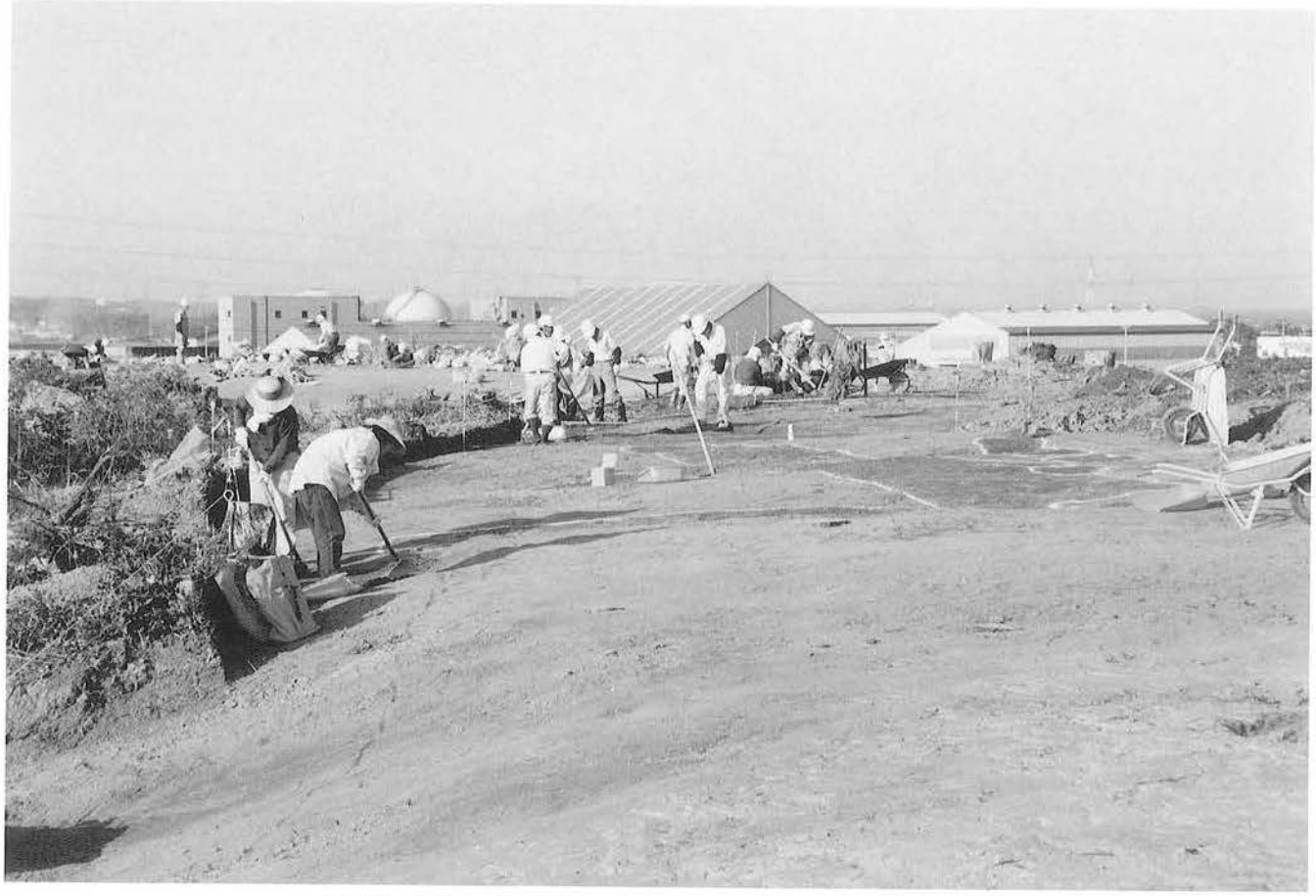
b．調査区近景　（北から）

調　　査　1

a. 表土剝ぎ（A地区）　（南から）

b. 表土剝ぎと遺構確認（A・B地区）　（北西から）

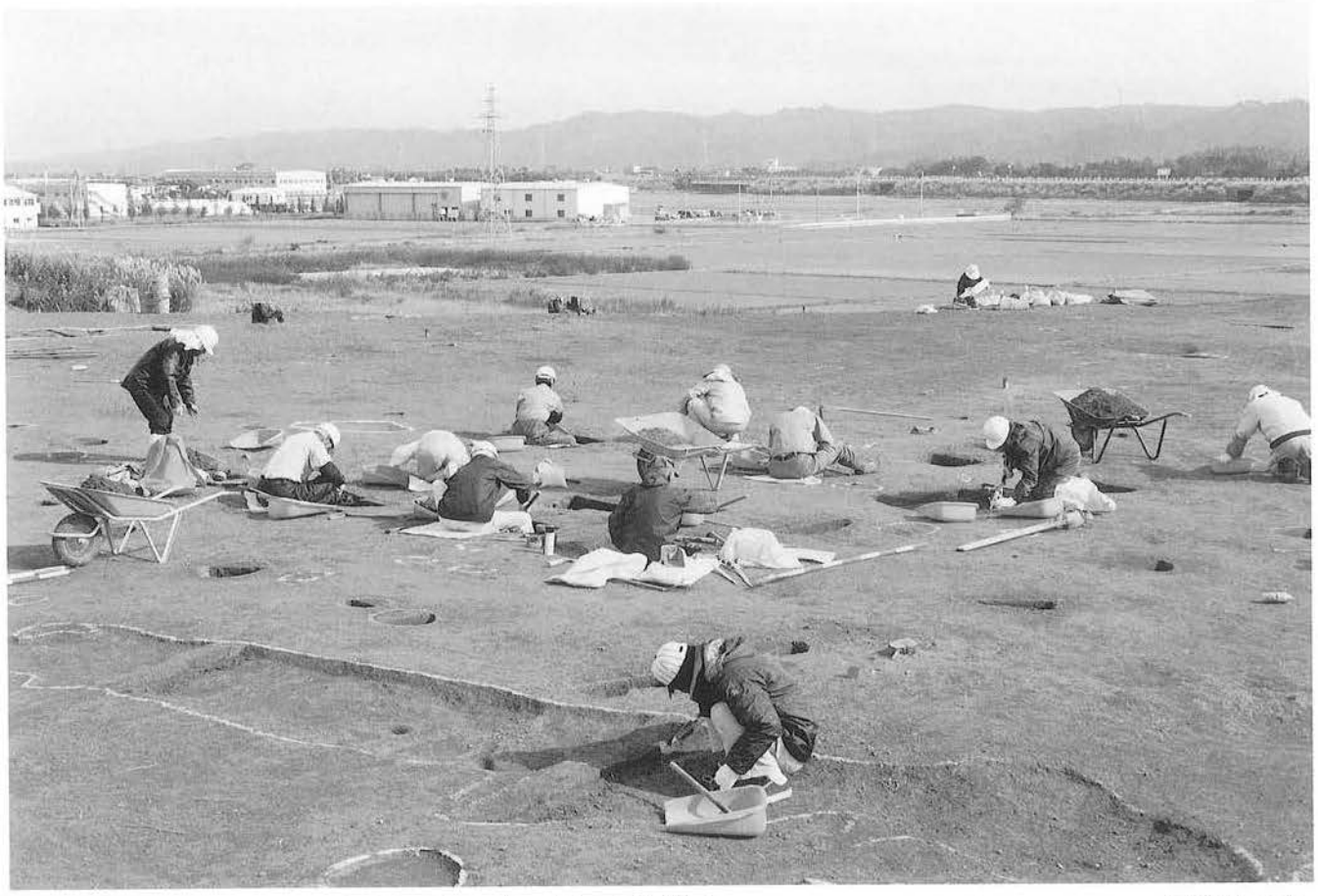
調　　査 2



a. 遺構確認（B地区）　　（南から）

b. 遺構発掘（A地区SD－38）　　（西から）

調　　査　3



a．遺構発掘（B地区本堂）　（南西から）

b．遺構発掘（E地区）　（北西から）

田塚山A地区　1

a．調査区全景　（北東から）

b．調査区近景（濠内）　（北東から）

田塚山A地区　2

a．調査区全景　（北から）

b．調査区近景（濠内）　（北から）

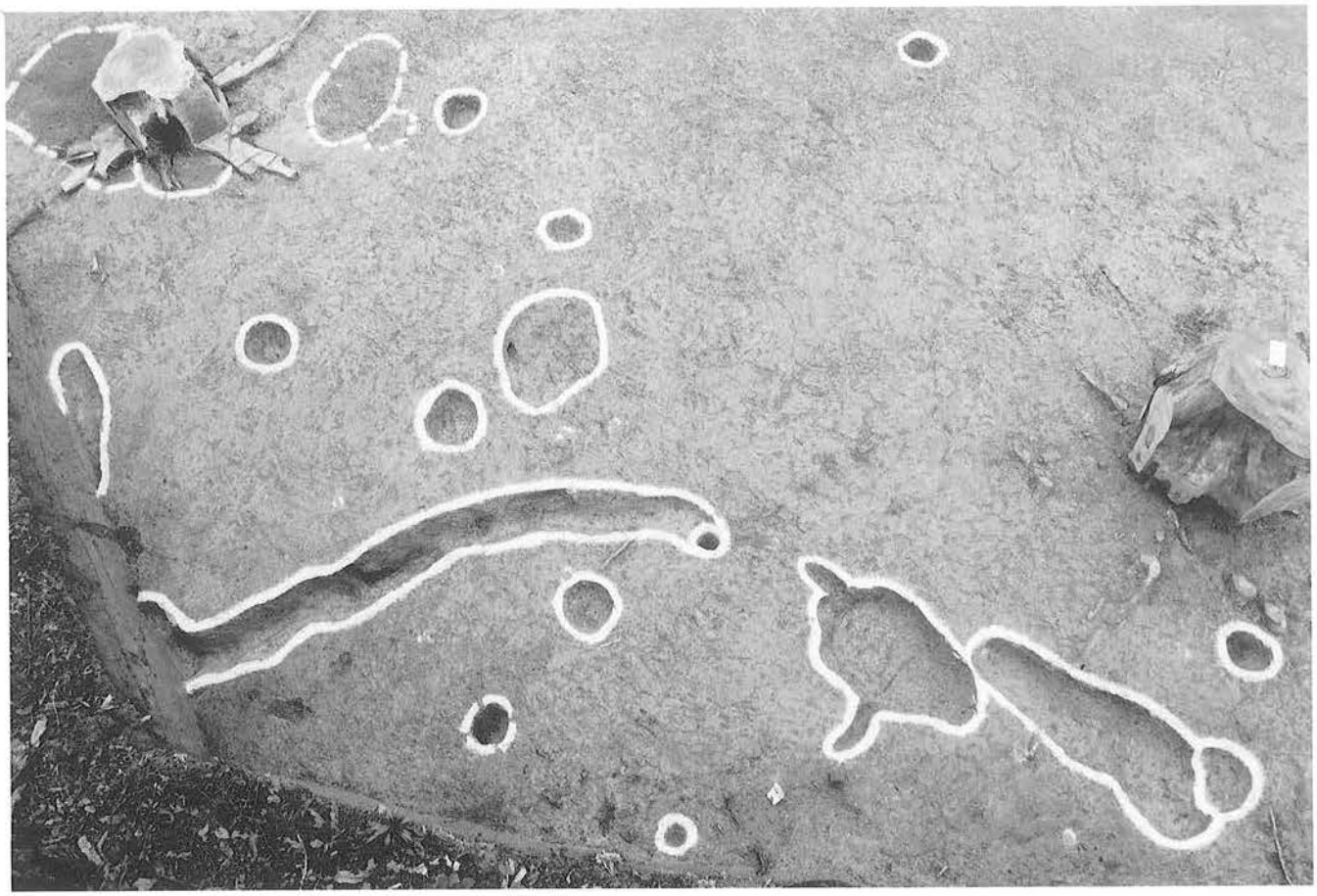
田塚山A地区　3

a. 調査区全景　（南から）

b. 調査区近景（溝群・道路跡）　（南から）

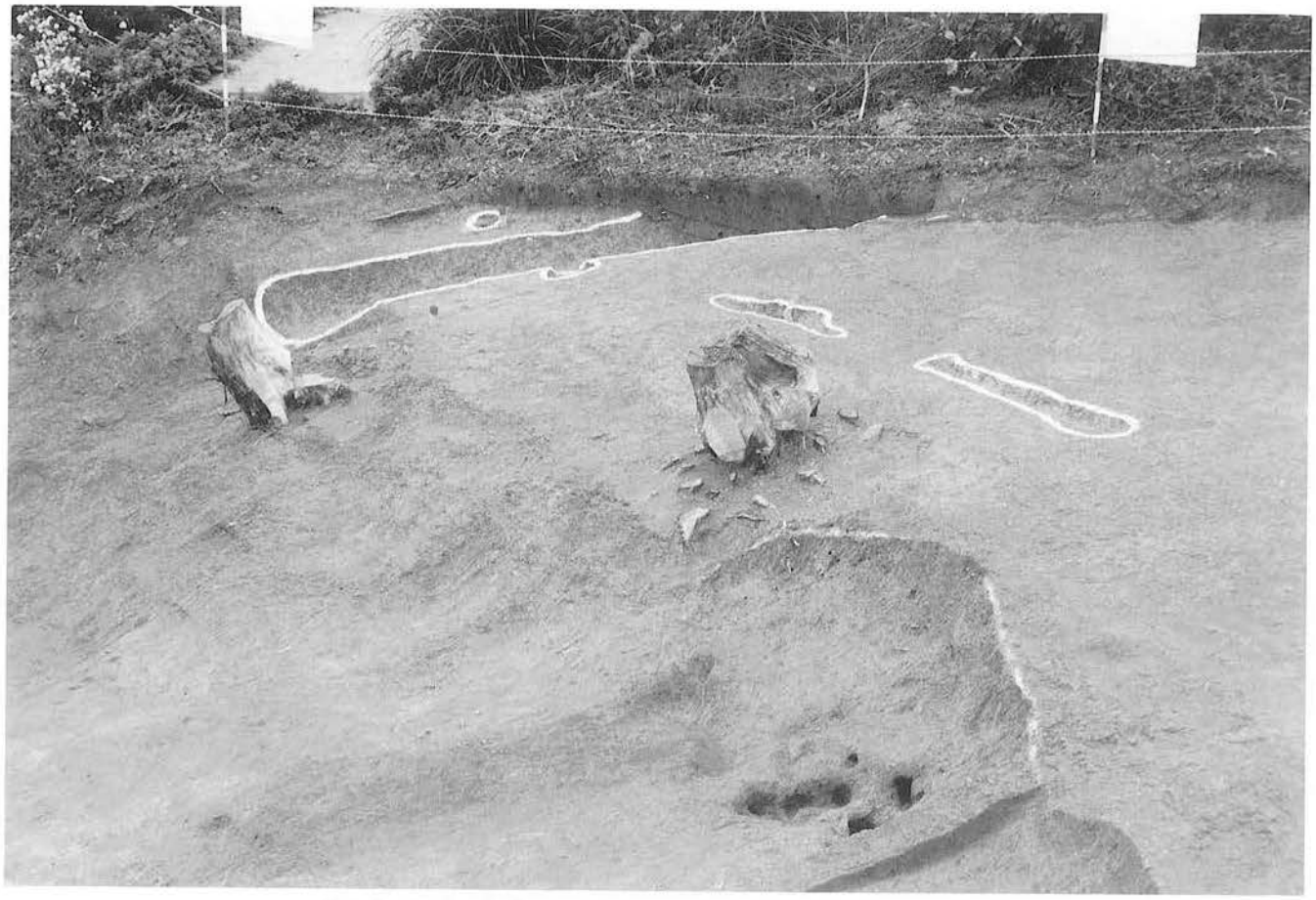
田塚山A地区　4

a. 濠（大溝）内ピット・溝群　（北東から）



b. 濠（大溝）内ピット・溝群　（南から）

田塚山A地区　5

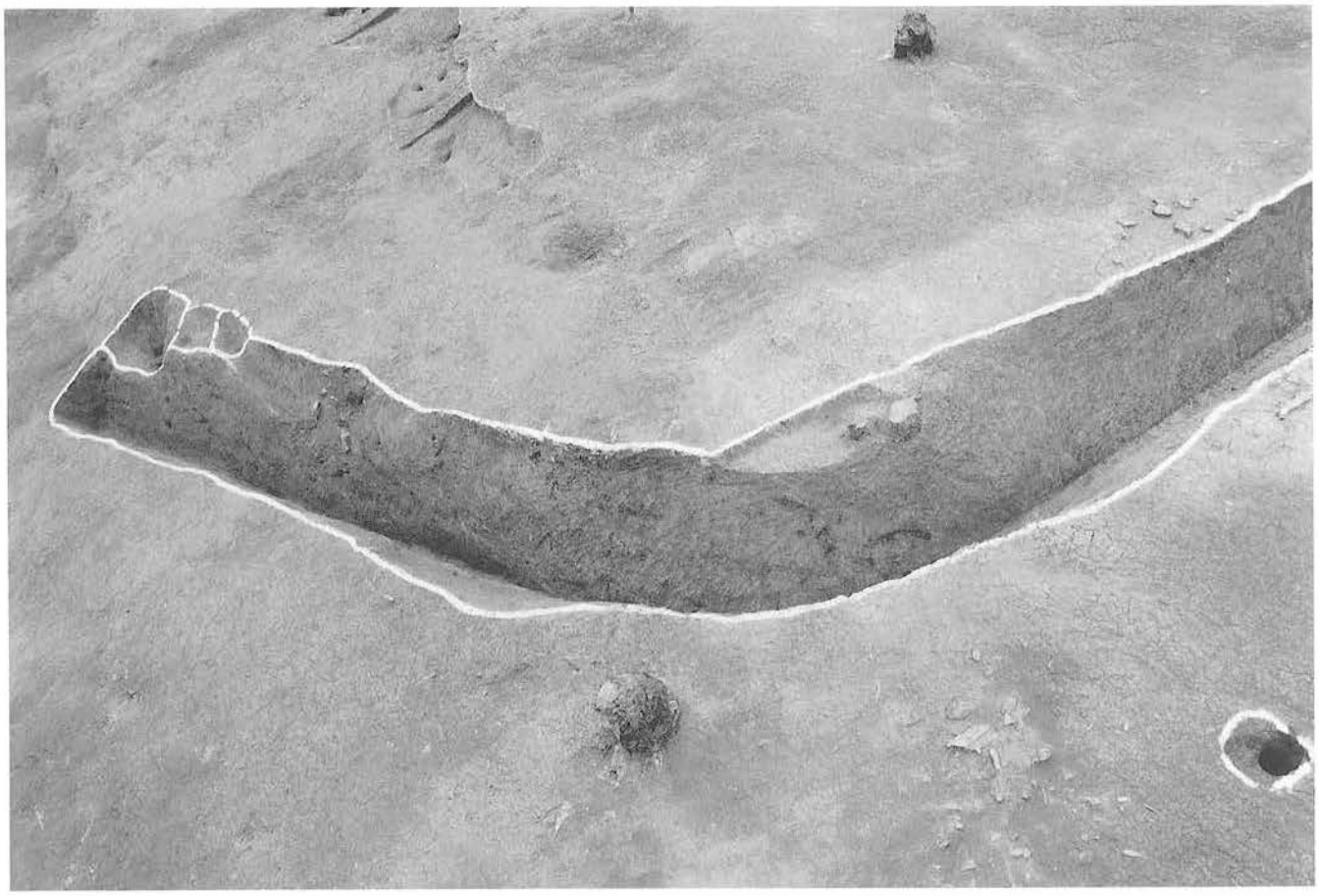


a．調査区南東部　（北から）

b．調査区南東部　（西から）

田塚山A地区　6

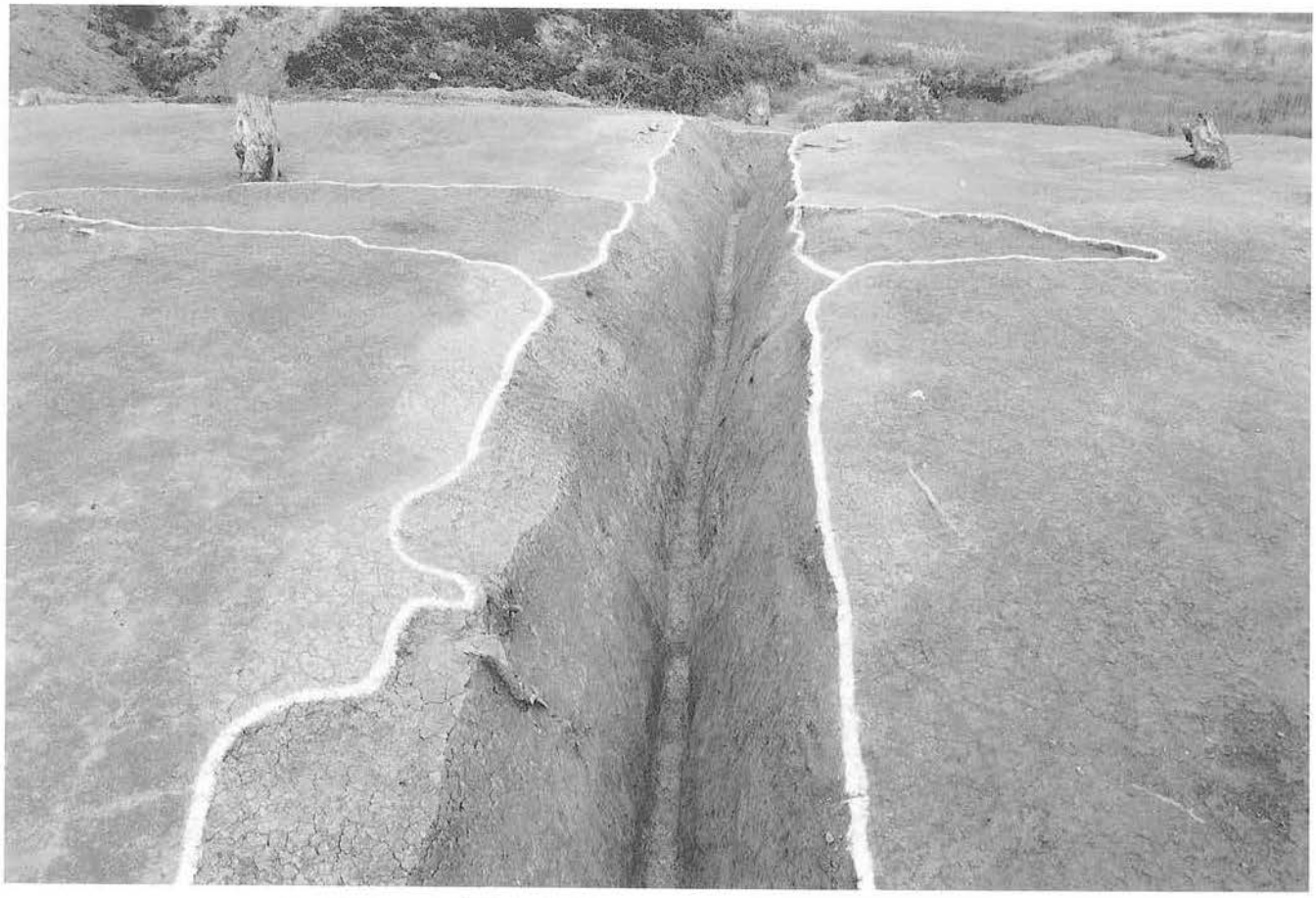
a．SD－38濠（大溝）　（東から）



b．SD－38濠（大溝）　（北東から）

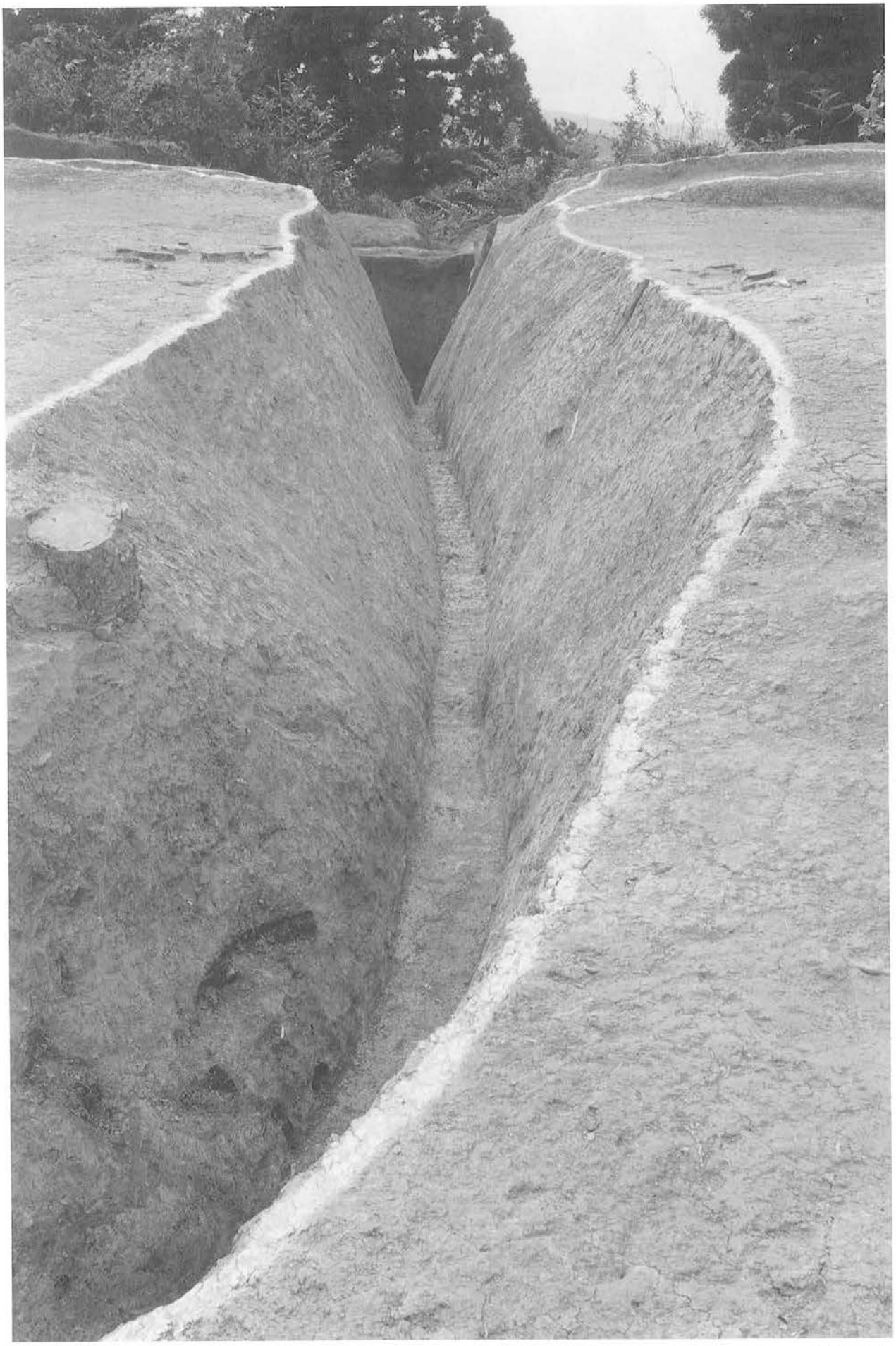
田塚山A地区　7

a．SD－38濠（大溝）　（西から）



b．SD－38濠（大溝）　（西から）

田塚山A地区　8



SD－38濠（大溝）　（東から）

田塚山A地区　9

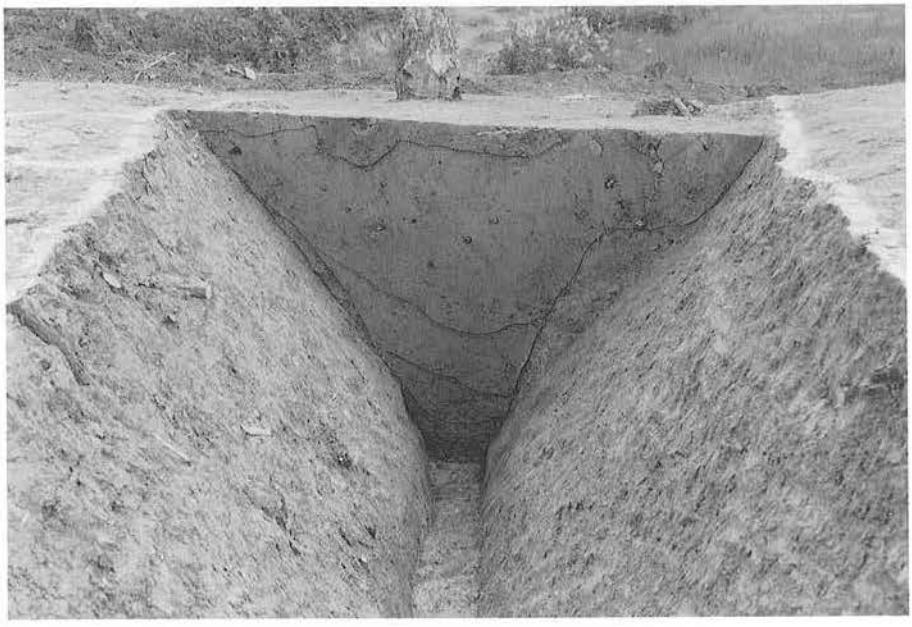
a．SD－38濠（大溝）

b．SD－38濠（大溝）

田塚山A地区　10

a. A断面　（西から）

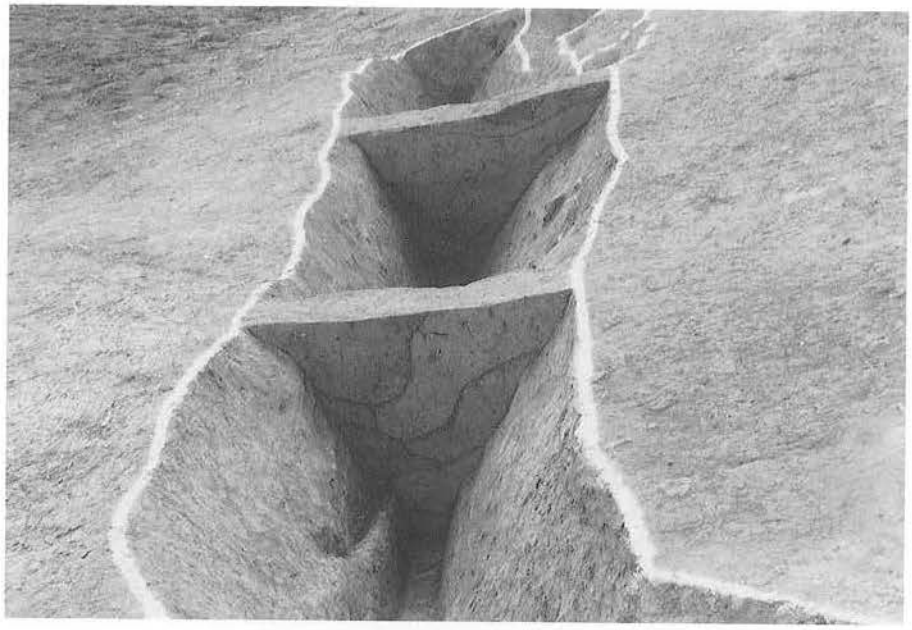
b. C断面　（西から）



c. D断面　（西から）

SD－38濠（大溝）

田塚山A地区　11



a. E・F断面　　（北西から）

b. E断面　　（北西から）

c. F断面　　（北西から）

SD－38濠（大溝）

田塚山A地区　12

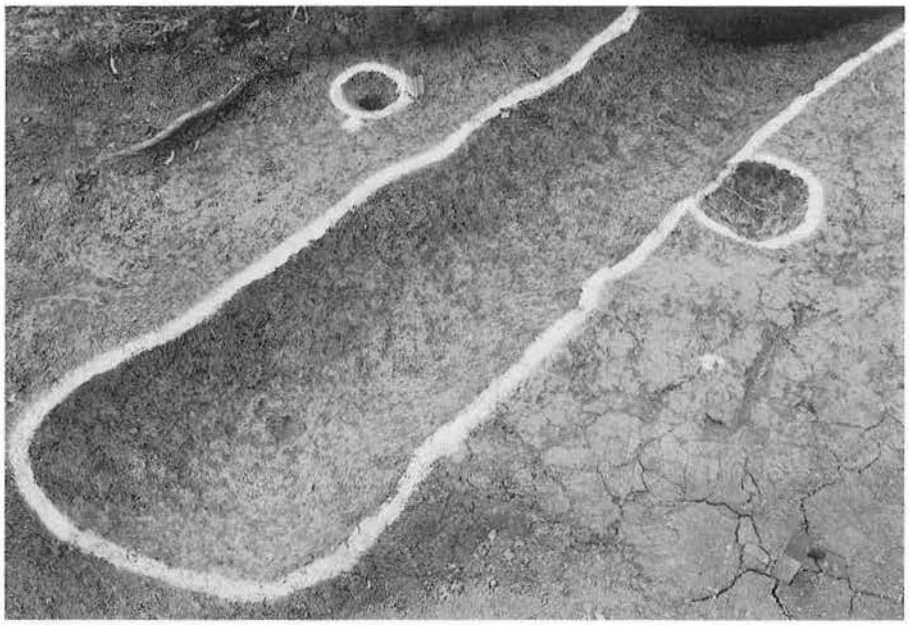
a. 完掘　（北西から）

b. 完掘　（東から）

c. A・B・C断面　（北西から）

SD－47溝

田塚山A地区　13



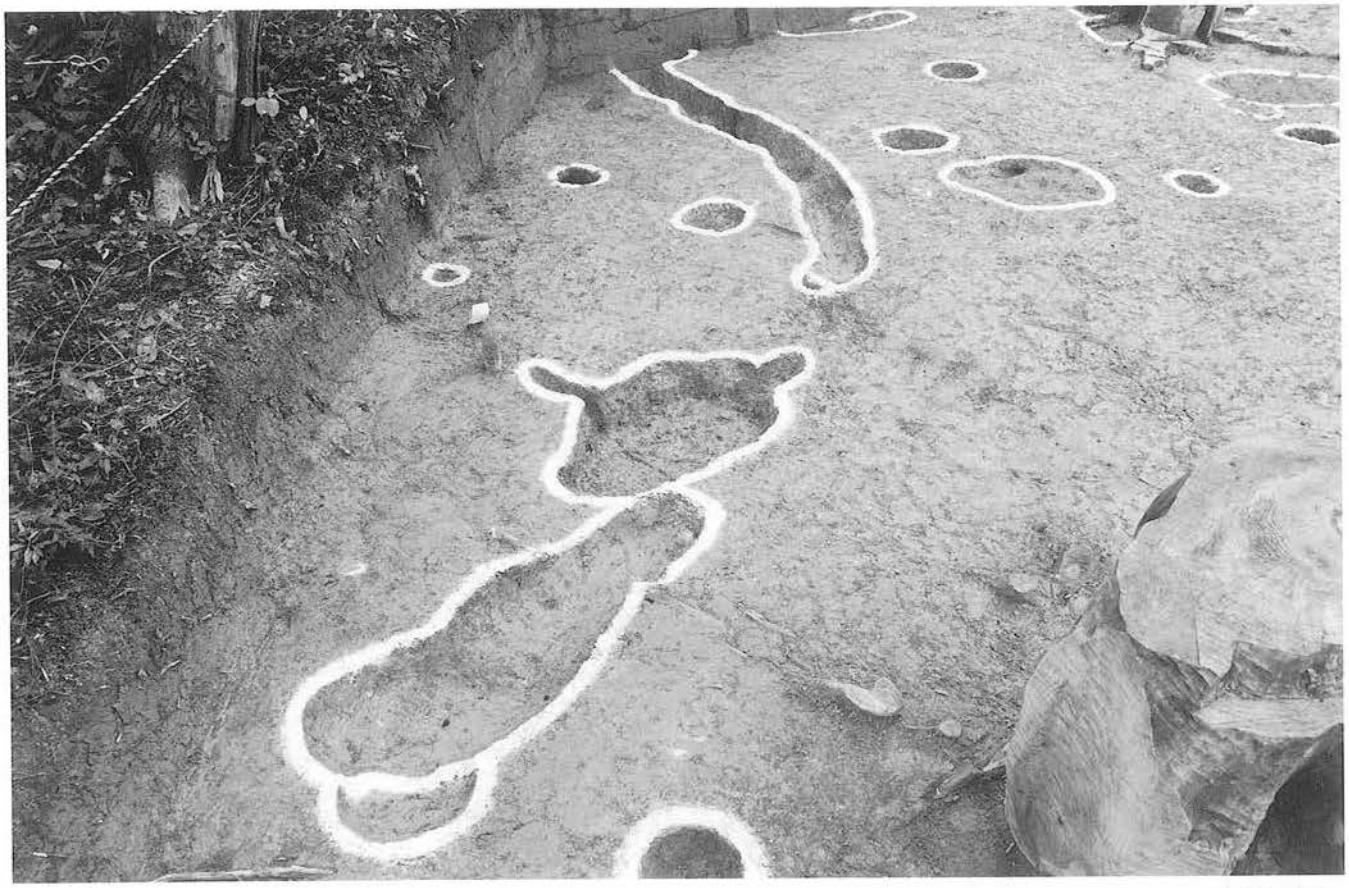
a. SD－14溝　　（北東から）

b. SD－14溝　　（東から）

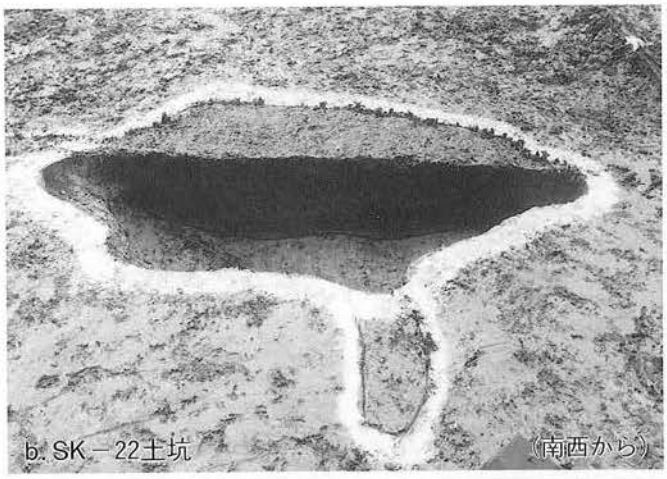
c. SD－51溝　　（南から）

溝

田塚山A地区　14

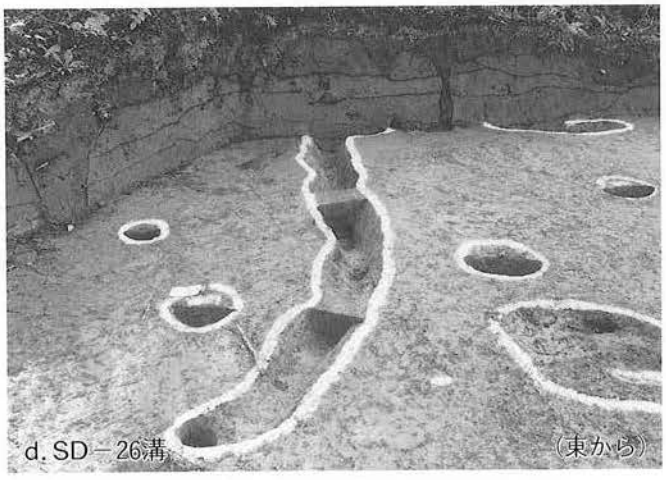


a．濠（大溝）内遺構群　（東から）



b. SK－22土坑　（南西から）

c. SK－22土坑（木炭出土）



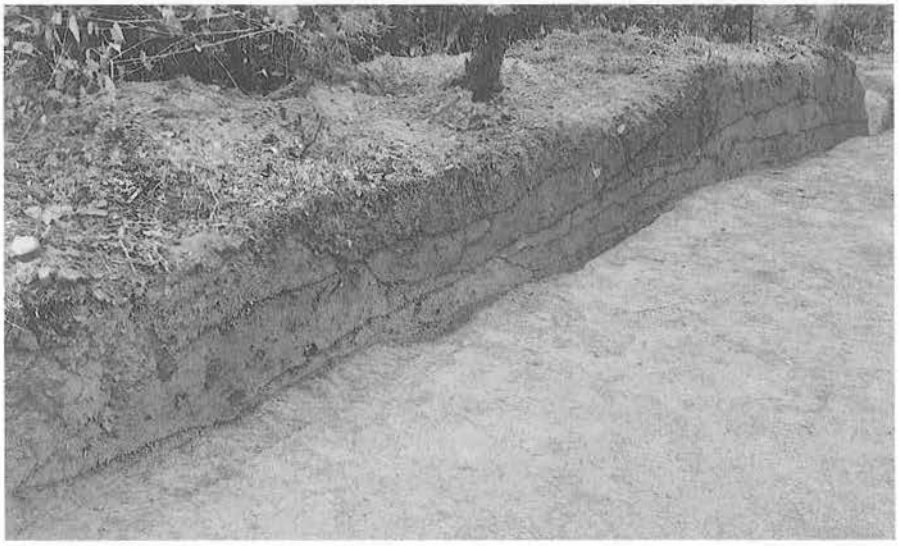
d. SD－26溝　（東から）

e. SD－21溝　（南から）

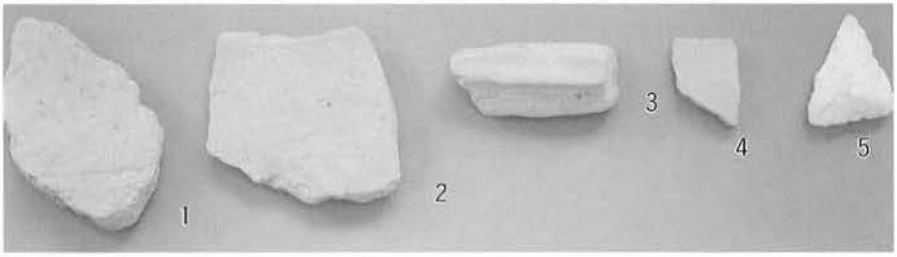
田塚山A地区　15

a. SD－39溝（道路跡）　（南から）

b. SD－51・52溝
SR－57g道路跡　（北から）



c. A地区南西調査区壁
（南東から）



d. 出土遺物　（約1：2）

田塚山B地区　1

a．調査区近景　（北から）

b．調査区近景　（南から）

田塚山B地区　2

a. 仏堂関連建物群全景（正面）　（東から）

b. 仏堂関連建物群全景（背面）　（西から）

田塚山B地区　3

a. 仏堂関連建物群全景　（南西から）

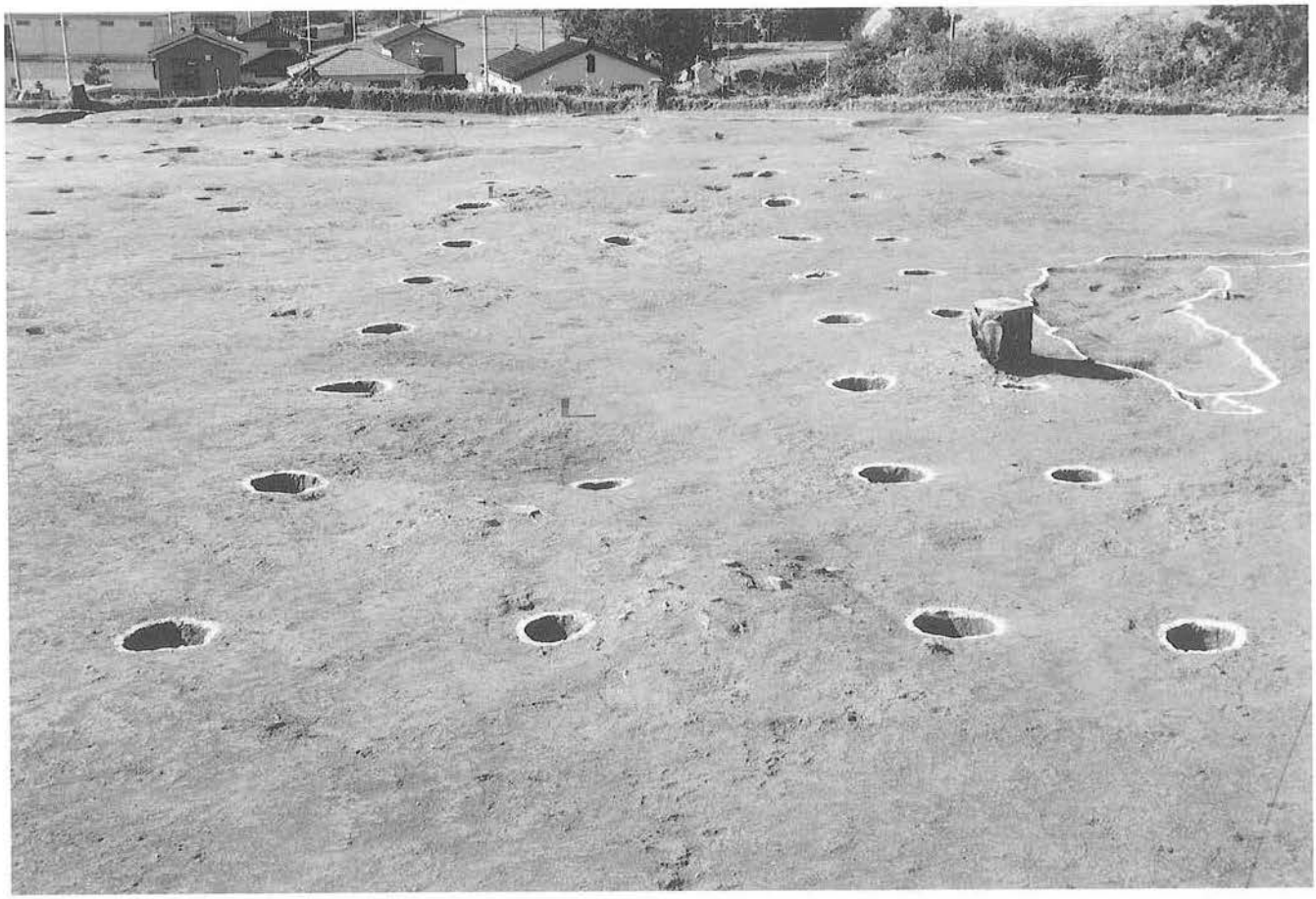
b. 仏堂関連建物群全景　（南から）

田塚山B地区　4

a. 仏堂本堂の内陣・外陣　（東から）

b. 仏堂本堂の内陣・外陣　（南から）

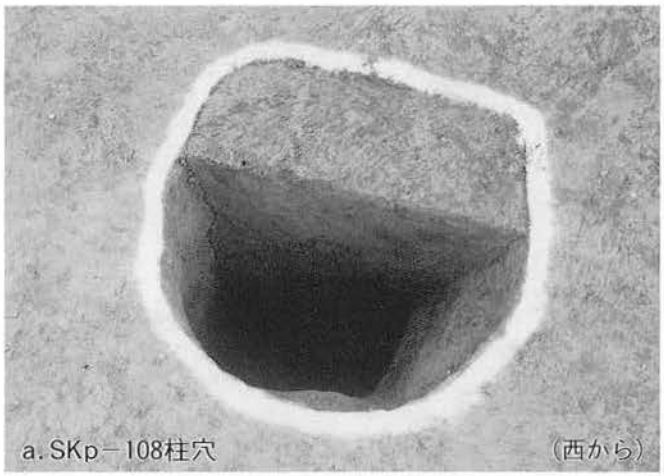
田塚山B地区　5

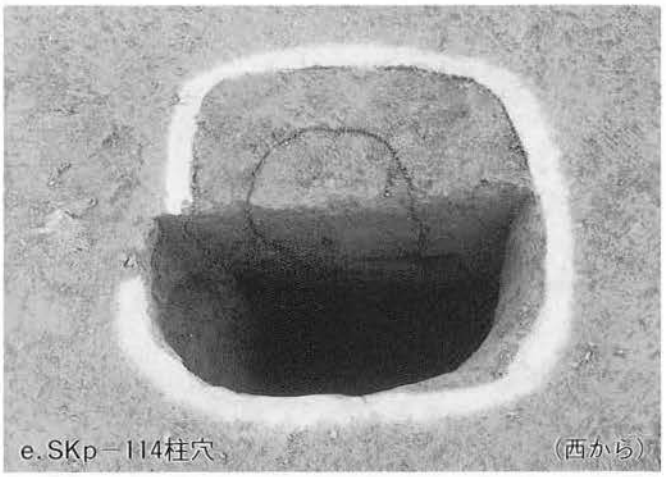


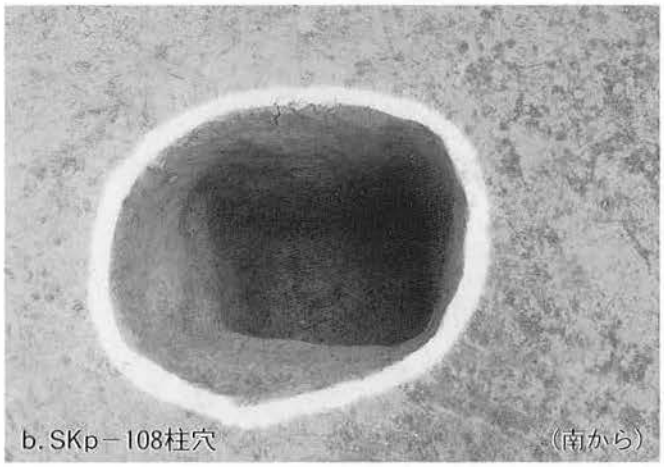
a．庫 裡（SB－226）　（東から）

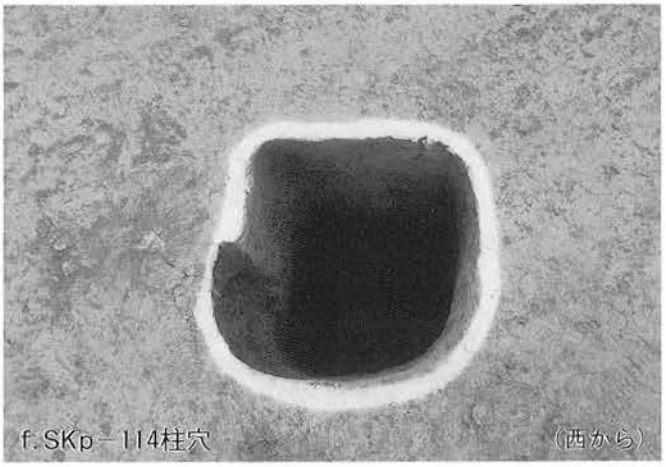
b．庫 裡（SB－226）　（西から）

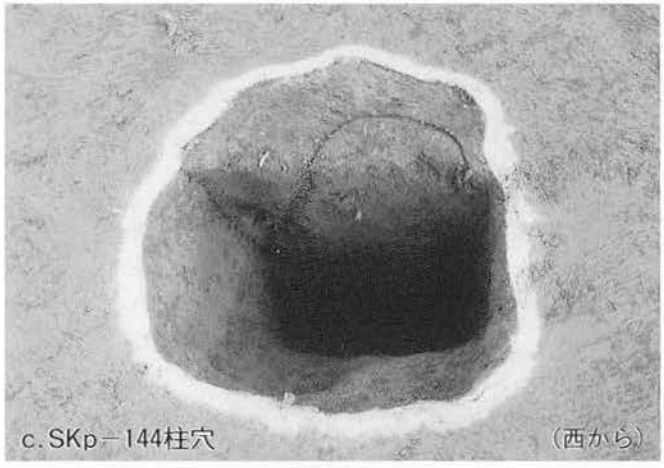
田塚山B地区　6

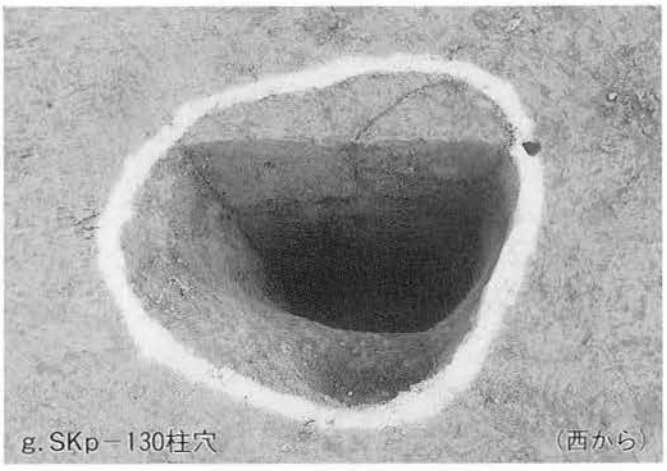

a. SKp－108柱穴　（西から）

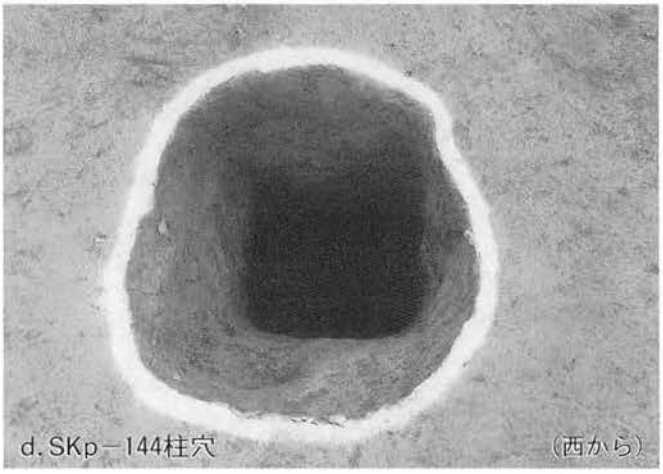

e. SKp－114柱穴　（西から）

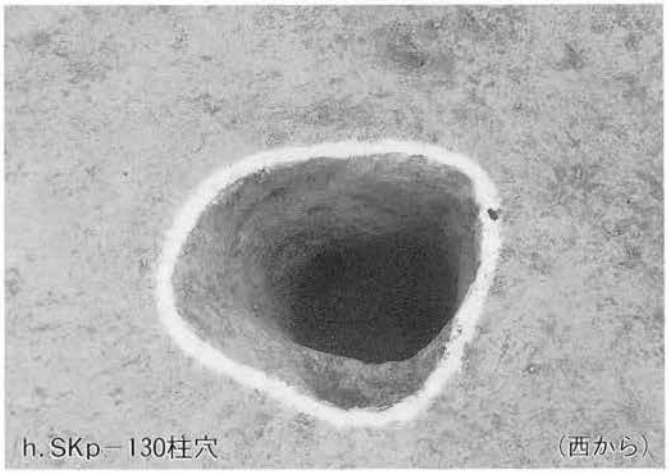

b. SKp－108柱穴　（南から）


f. SKp－114柱穴　（西から）


c. SKp－144柱穴　（西から）

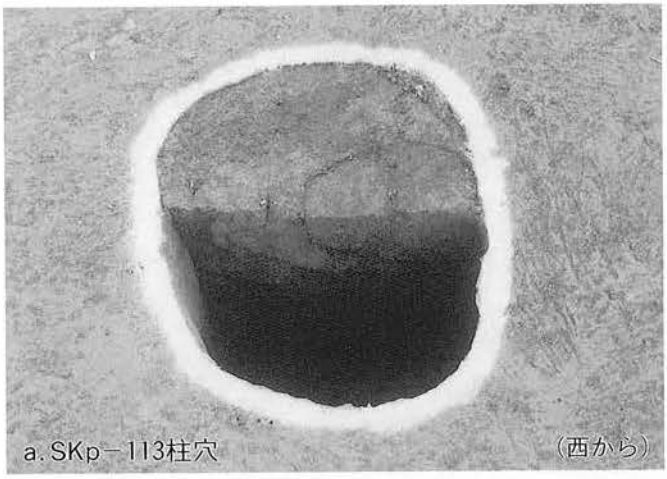

g. SKp－130柱穴　（西から）

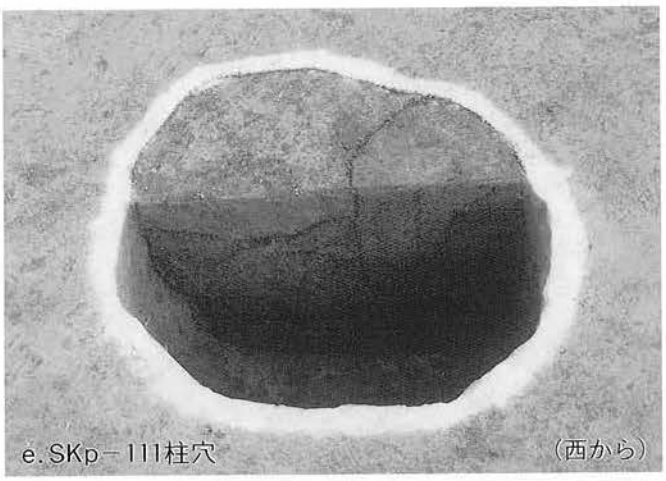

d. SKp－144柱穴　（西から）

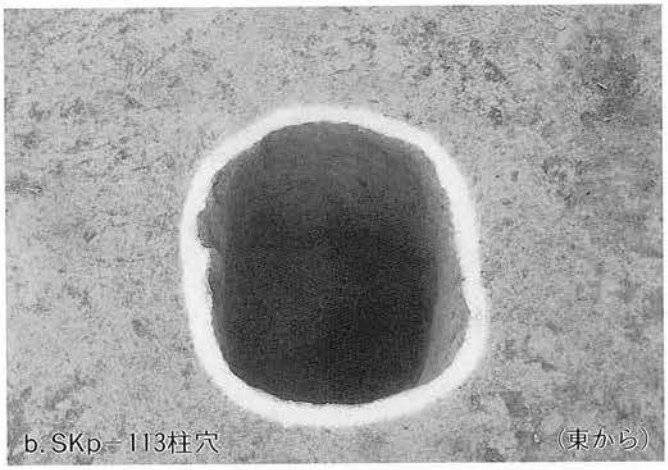

h. SKp－130柱穴　（西から）

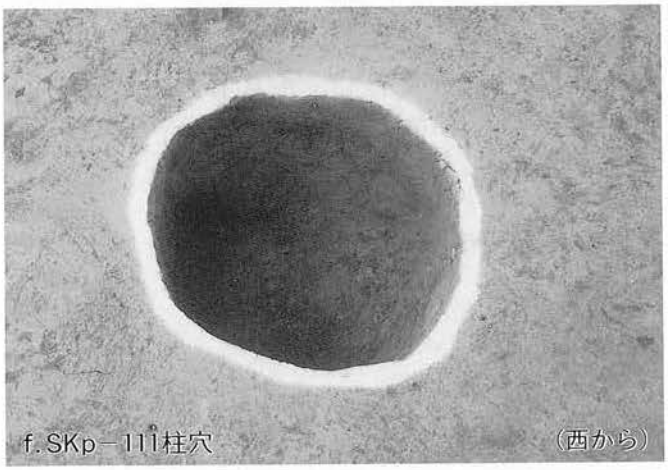
本堂柱穴群　1

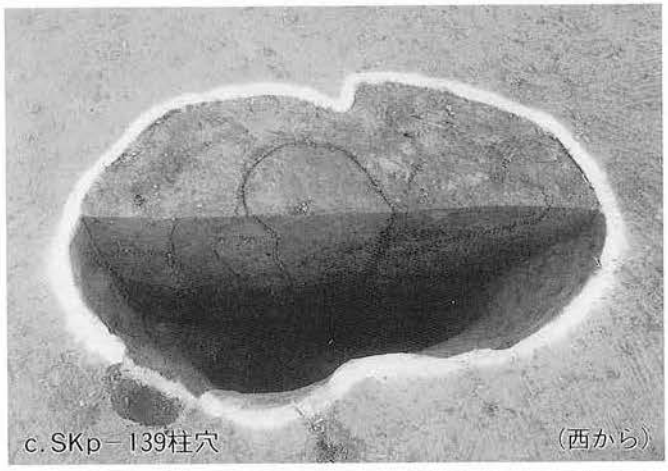
田塚山B地区　7

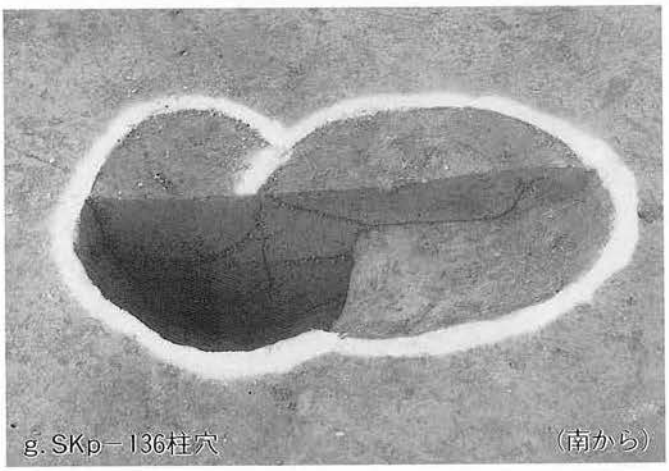

a. SKp－113柱穴　（西から）


e. SKp－111柱穴　（西から）


b. SKp－113柱穴　（東から）


f. SKp－111柱穴　（西から）


c. SKp－139柱穴　（西から）

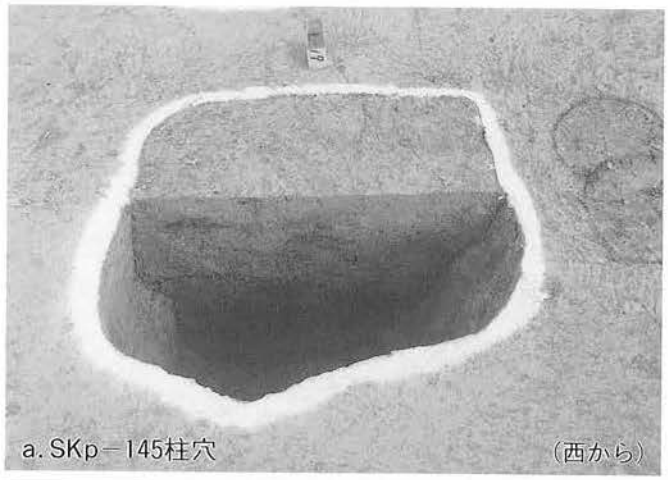

g. SKp－136柱穴　（南から）

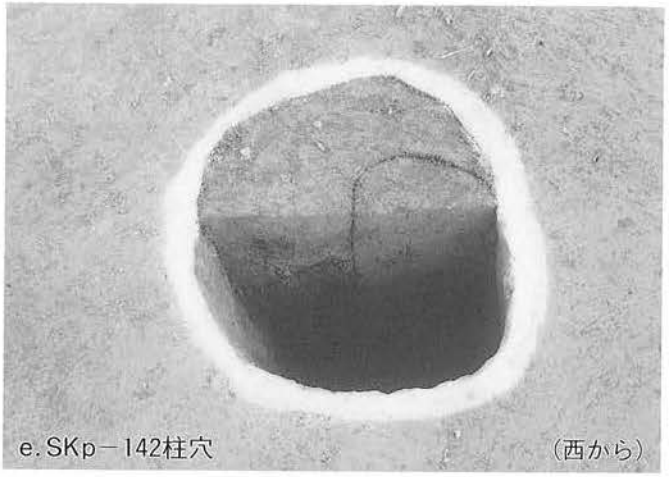
d. SKp－139柱穴　（東から）

h. SKp－152柱穴　（南から）

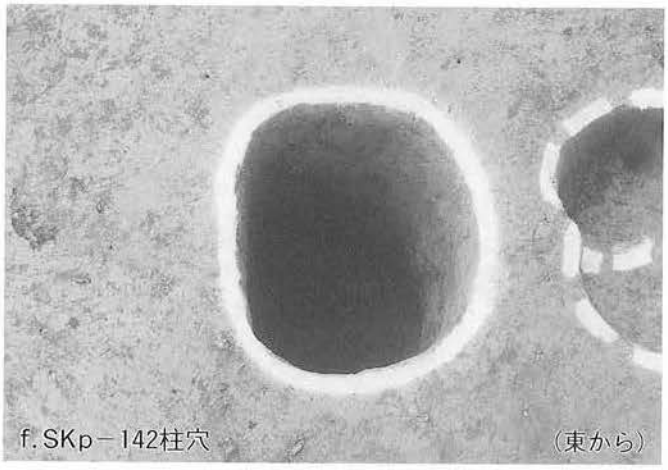
本堂柱穴群　2

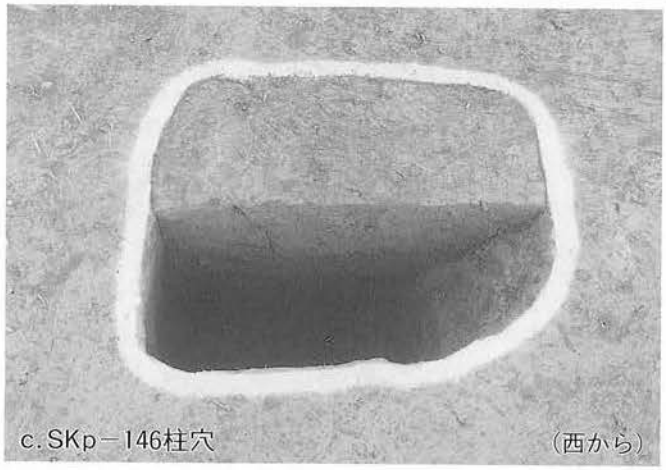
田塚山B地区　8

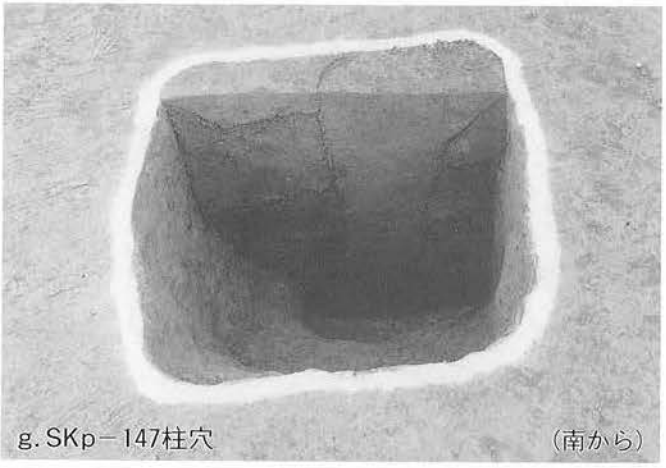

a. SKp－145柱穴　（西から）

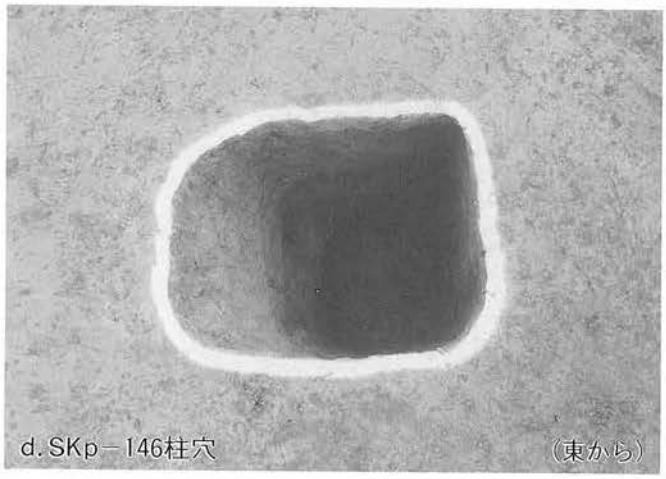

e. SKp－142柱穴　（西から）

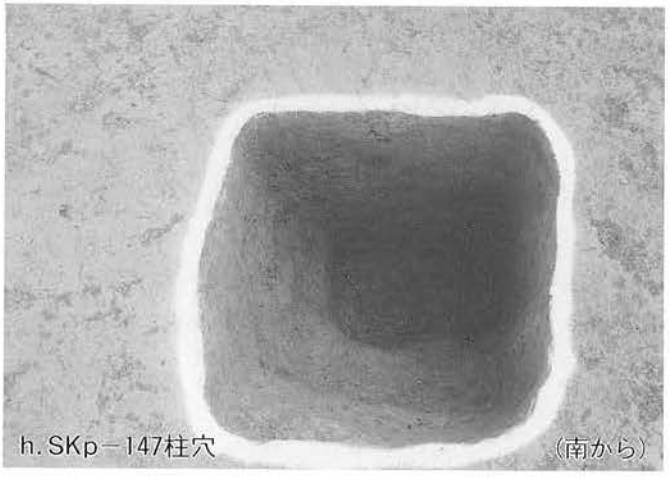
b. SKp－145柱穴　（東から）


f. SKp－142柱穴　（東から）


c. SKp－146柱穴　（西から）

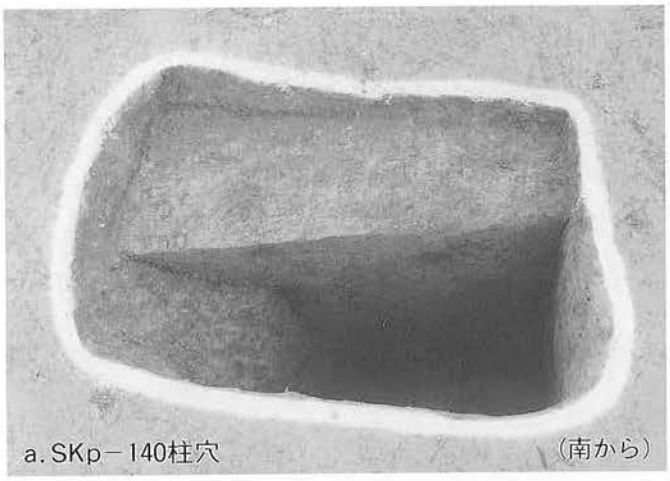

g. SKp－147柱穴　（南から）


d. SKp－146柱穴　（東から）

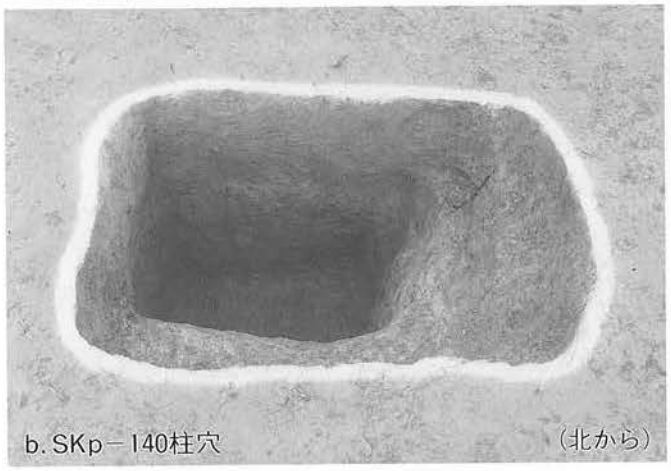

h. SKp－147柱穴　（南から）

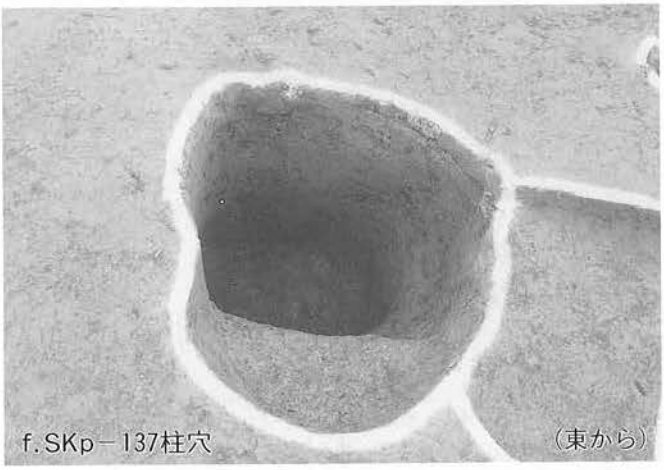
本堂柱穴群　3

田塚山B地区　9

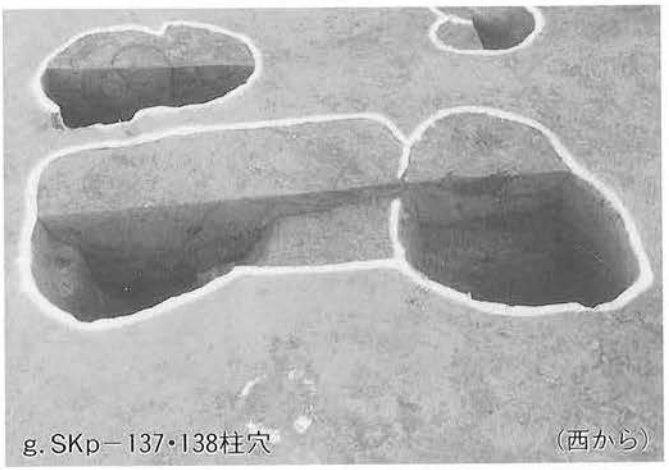

a. SKp－140柱穴　（南から）

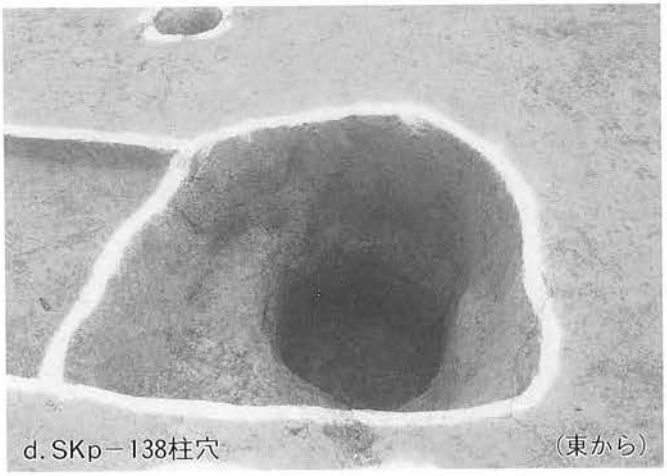
e. SKp－137柱穴　（西から）

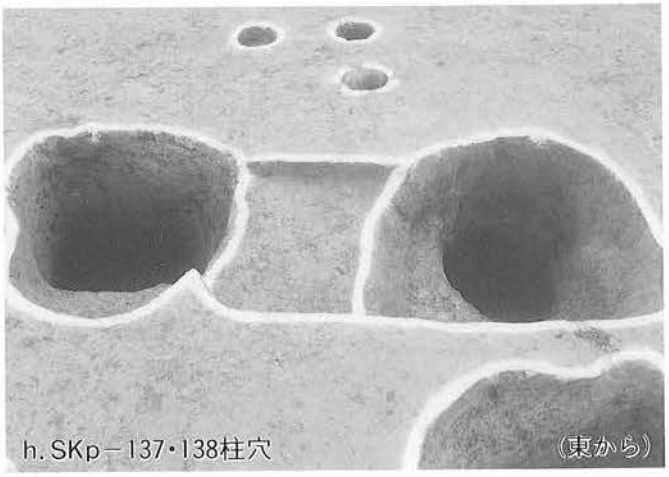

b. SKp－140柱穴　（北から）


f. SKp－137柱穴　（東から）

c. SKp－138柱穴　（西から）

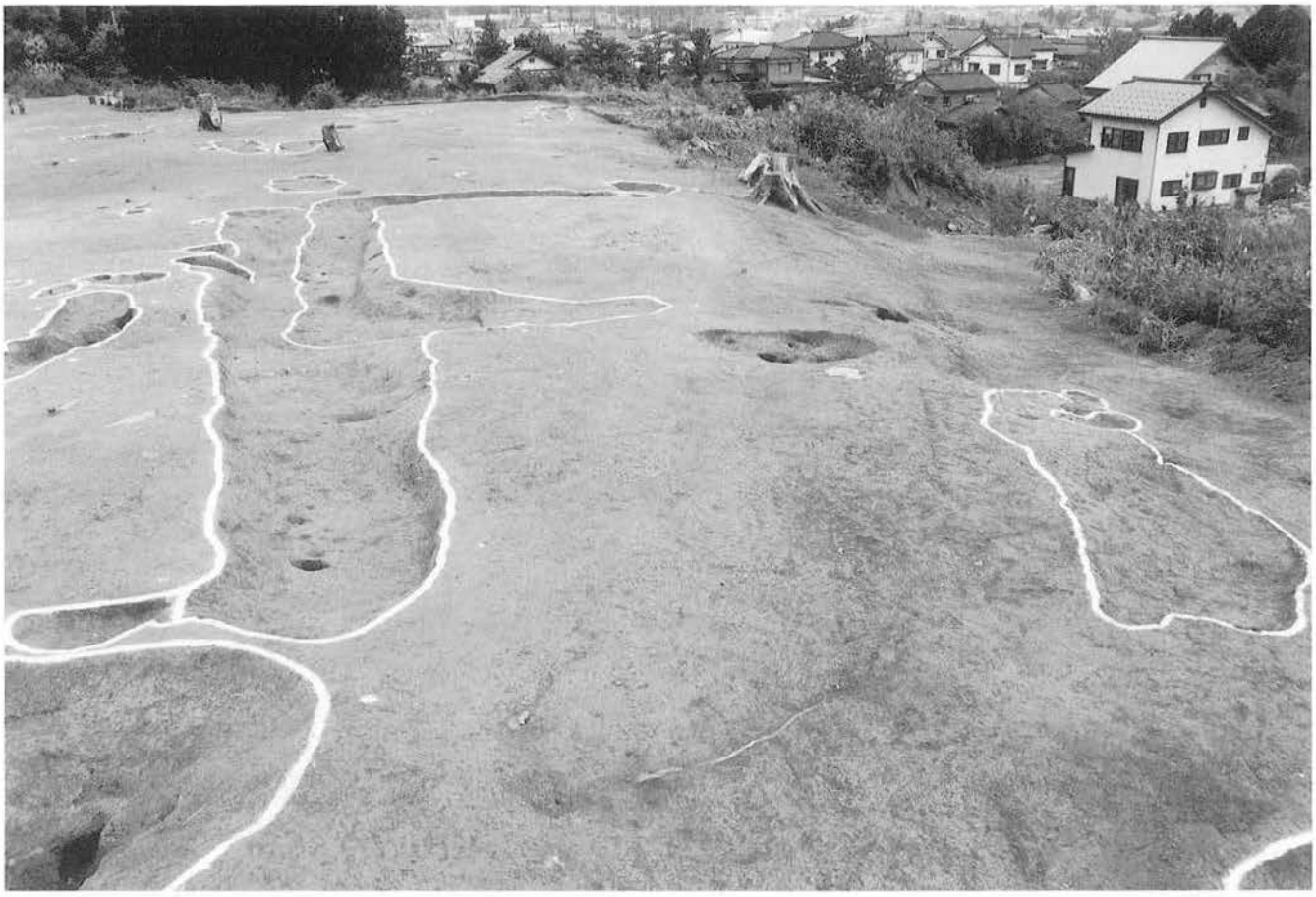

g. SKp－137・138柱穴　（西から）


d. SKp－138柱穴　（東から）


h. SKp－137・138柱穴　（東から）

本堂柱穴群　4

田塚山B地区　10



a．SD－1a・b溝　　（北から）

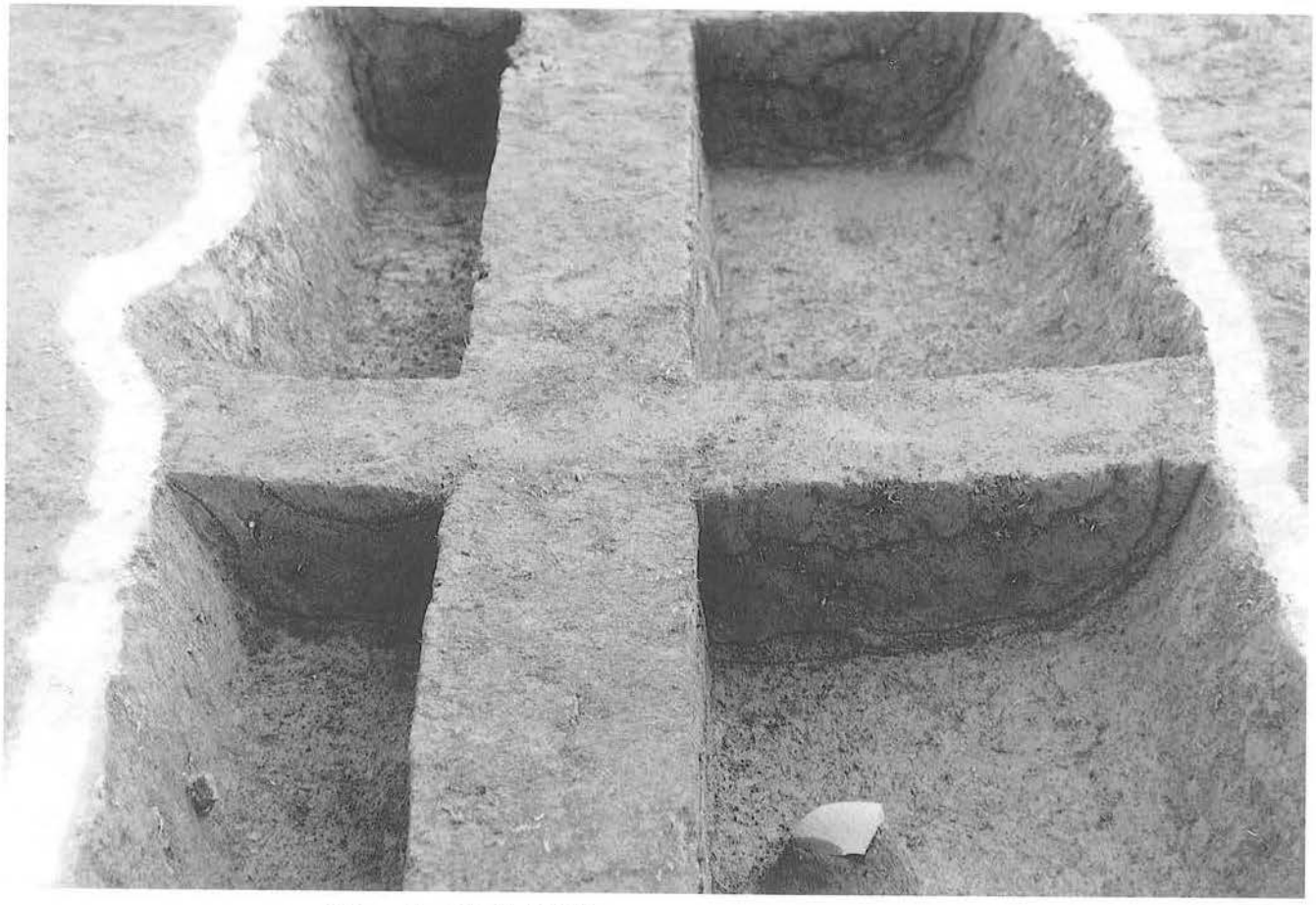
b．SD－1a・b溝　　（南から）

田塚山B地区　11

a．SD－1a・b溝　（東から）

b．SD－1a・b溝土層D断面　（南から）

田塚山B地区　12

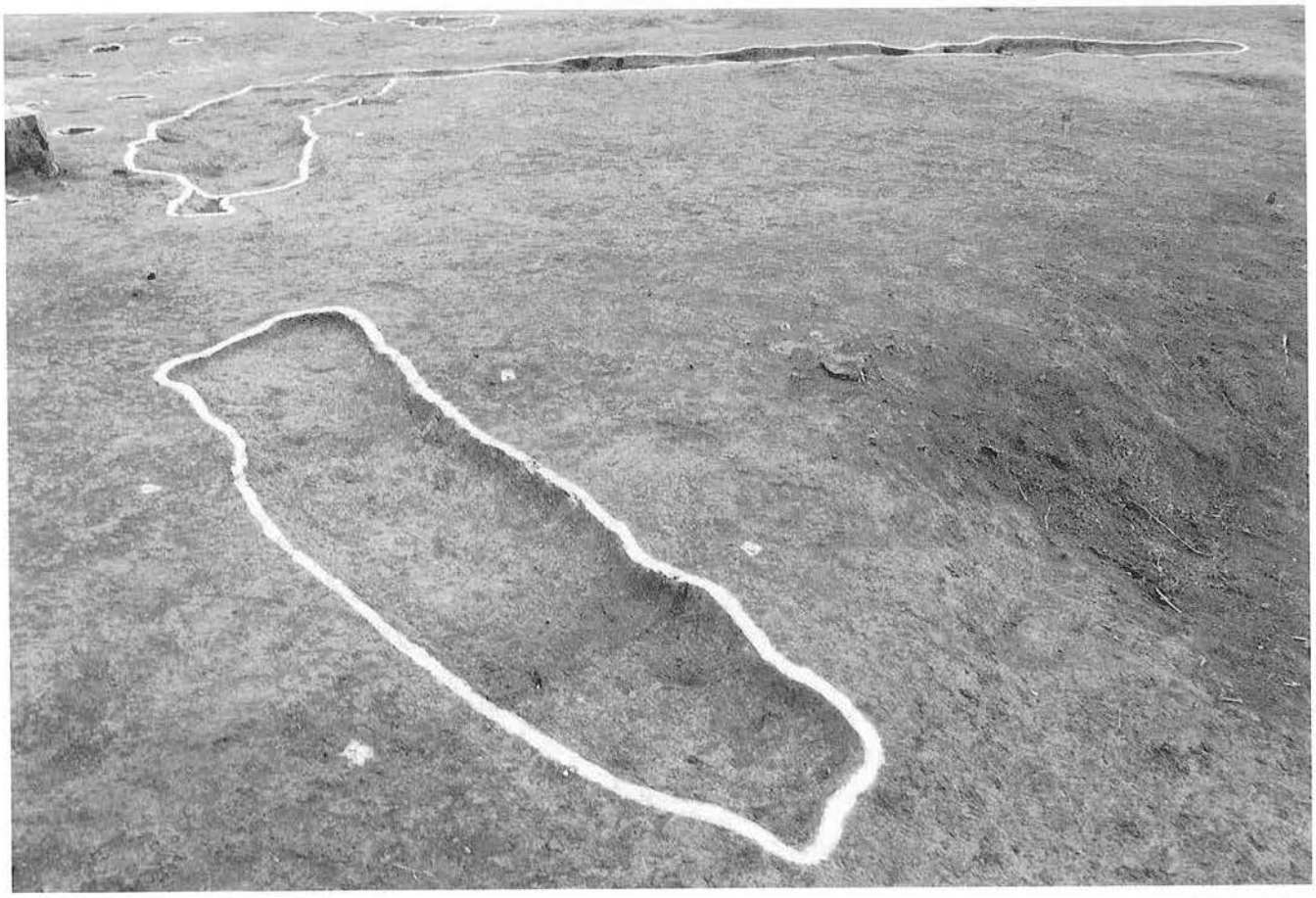


a．SD－1a溝 H 断面　　（南から）

b．墳丘墓盛土（SD－1）　　（北西から）

田塚山B地区　13

a．SD－160a・b区画溝　（南西から）

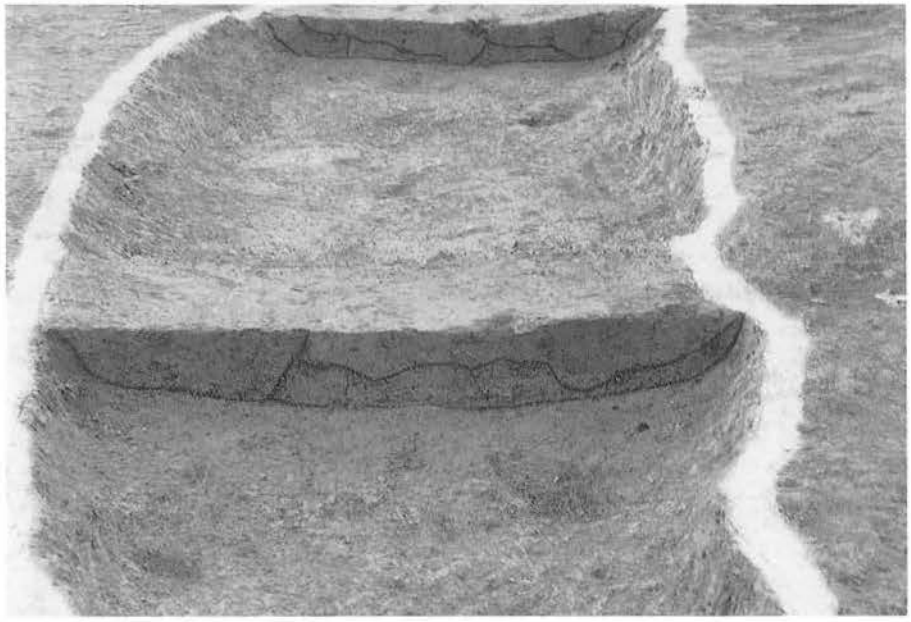


b．SD－160a・b区画溝　（東から）

田塚山B地区　14

a. C断面　（南から）

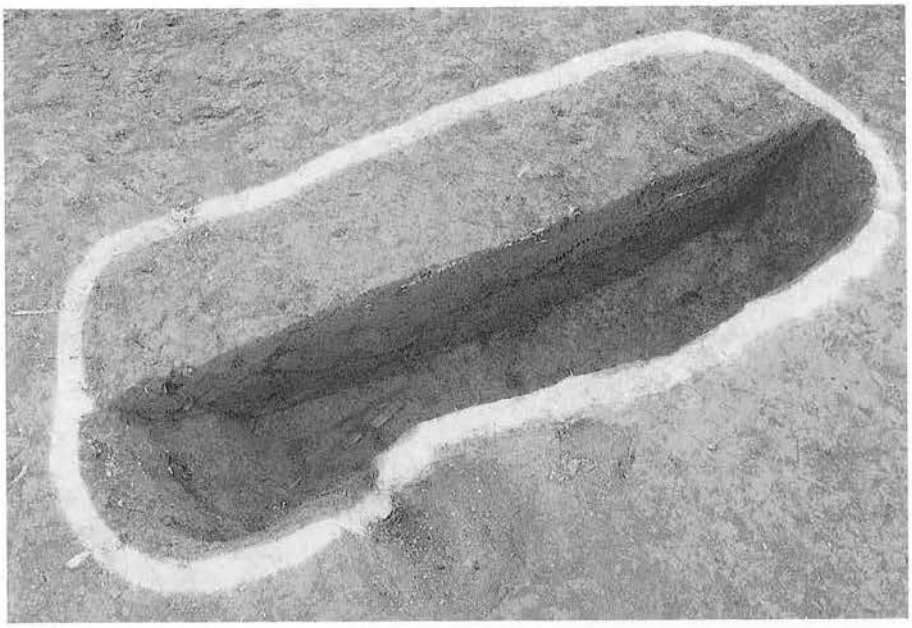
b. H断面　（東から）



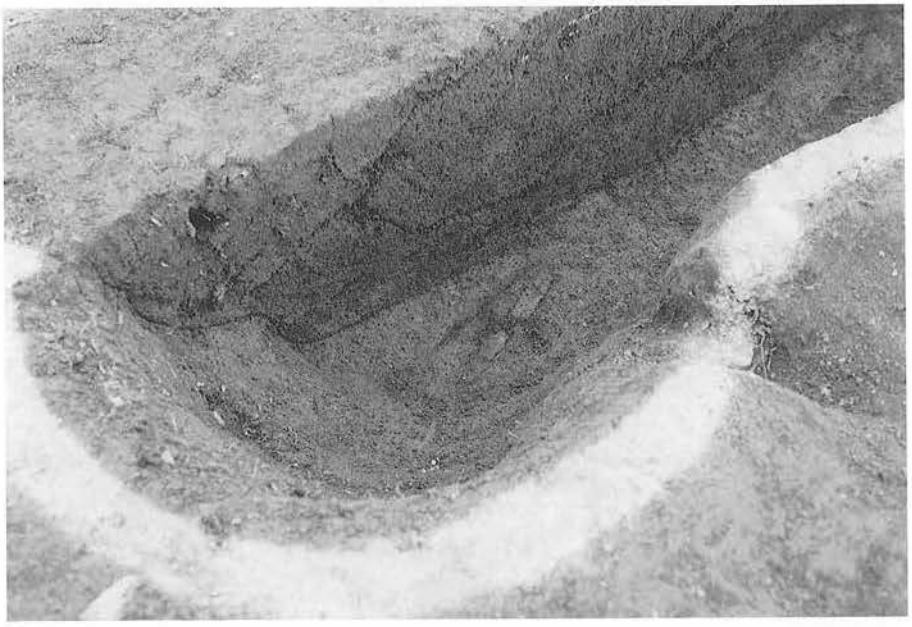
c. J断面　（北東から）

SD－160区画溝

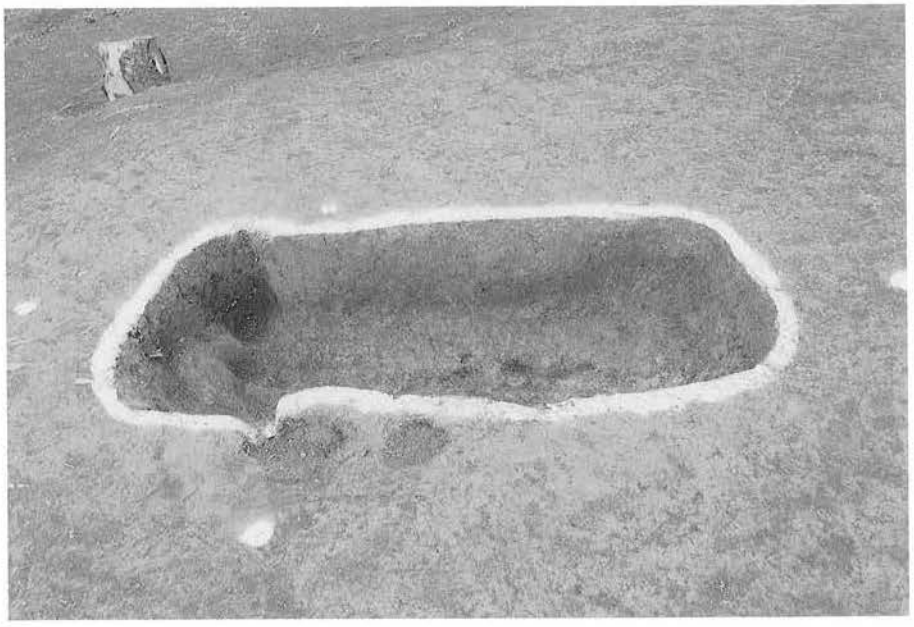
田塚山B地区　15



a. 土層断面と刀子　　（西から）



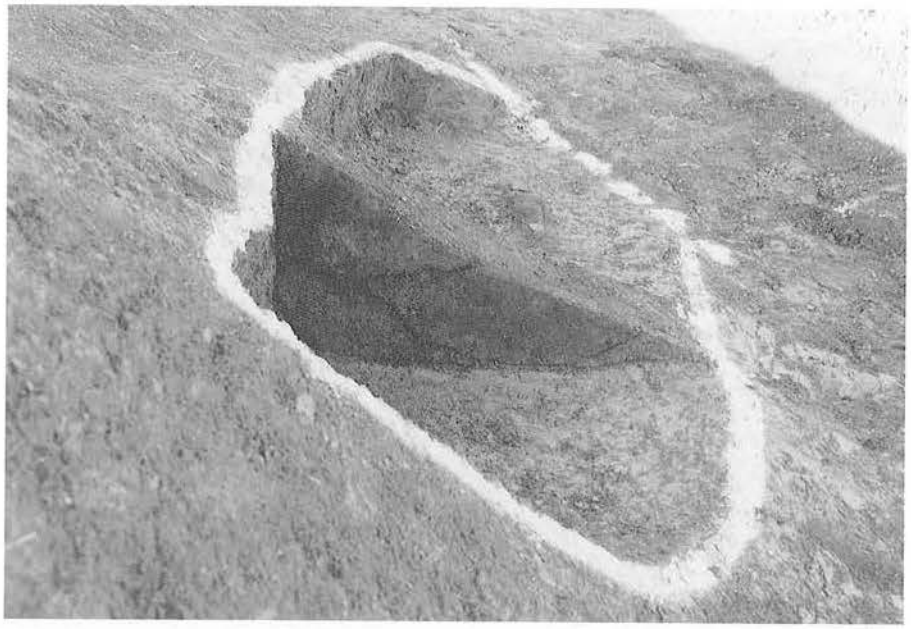
b. 刀子出土状況　　（西から）



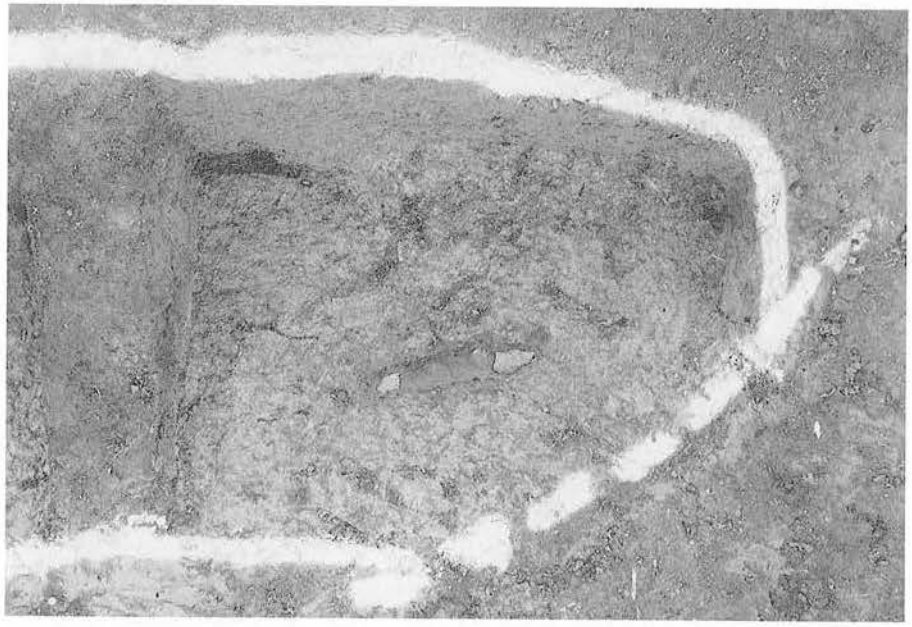
c. 完掘　　（南西から）

SK－229土壙墓

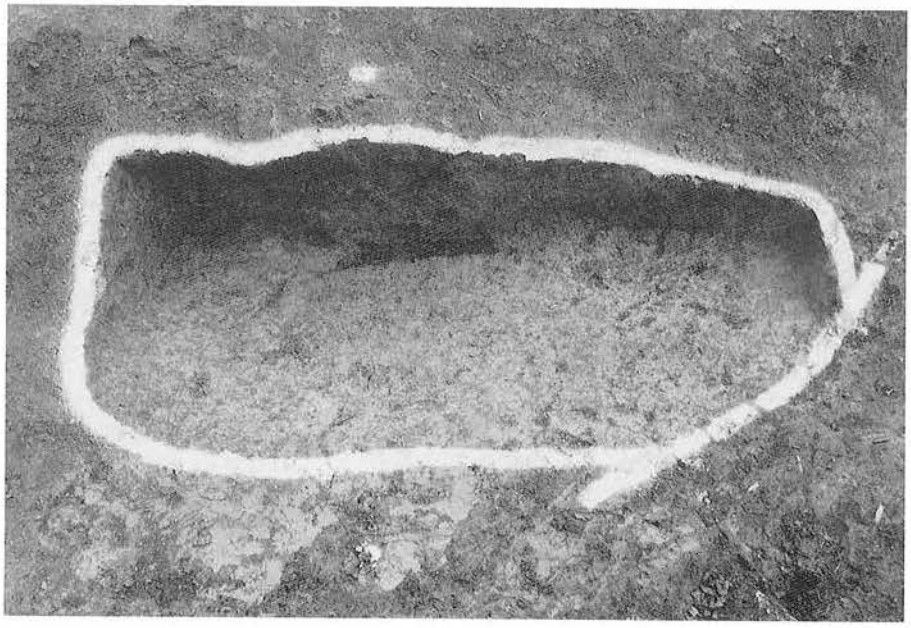
田塚山B地区　16



a. 土層断面　（南から）



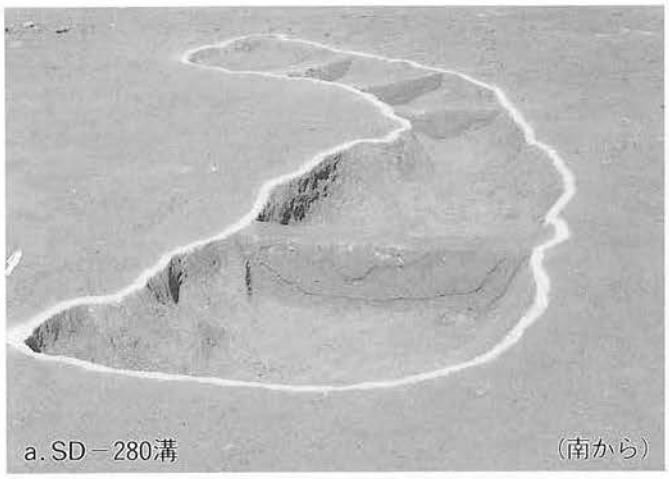
b. 刀子出土状況　（東から）

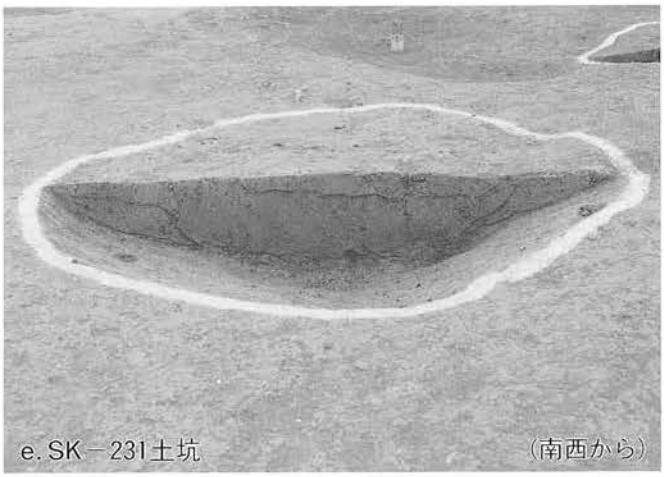


c. 完掘　（東から）

SK－510土壙墓

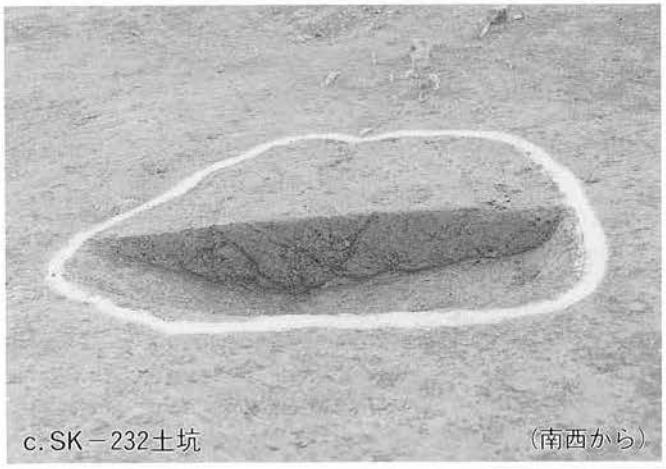
田塚山B地区　17


a. SD－280溝　（南から）

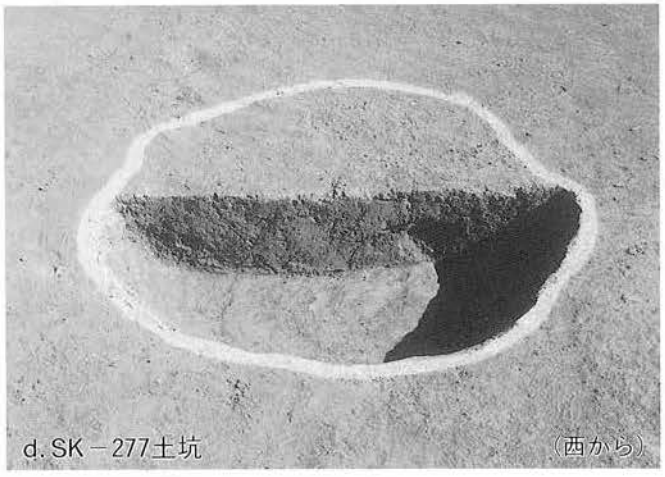

e. SK－231土坑　（南西から）

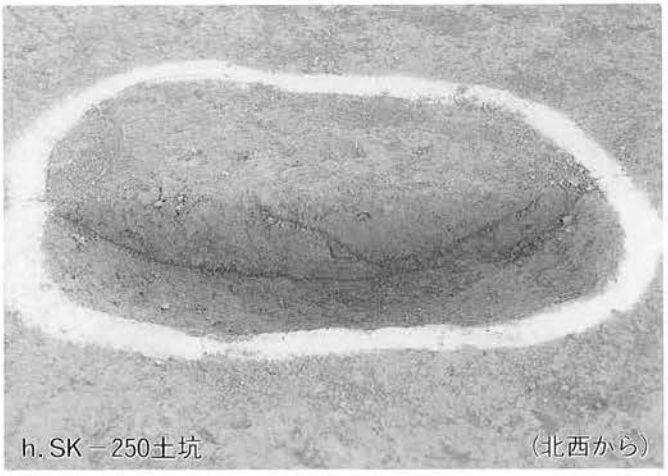
b. SD－280溝　（南から）

f. SK－231土坑　（南西から）


c. SK－232土坑　（南西から）

g. SK－243土坑　（南から）

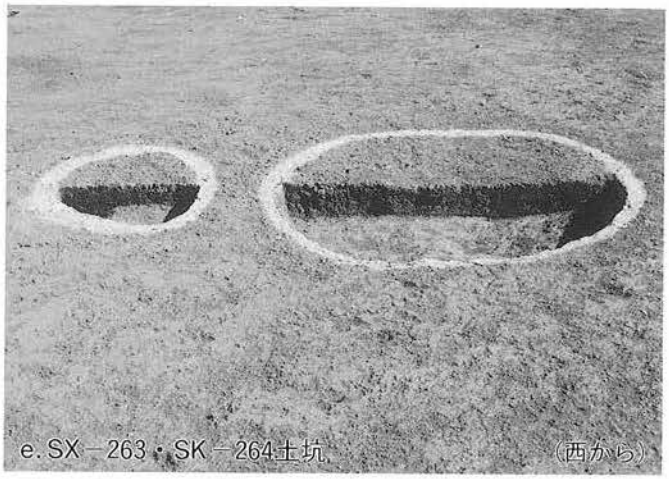

d. SK－277土坑　（西から）

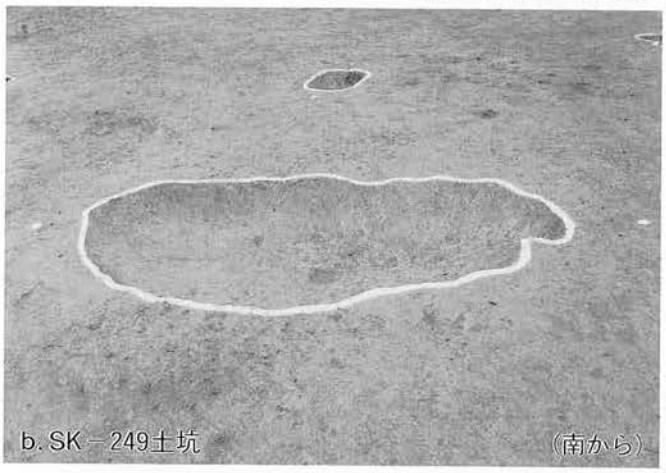

h. SK－250土坑　（北西から）

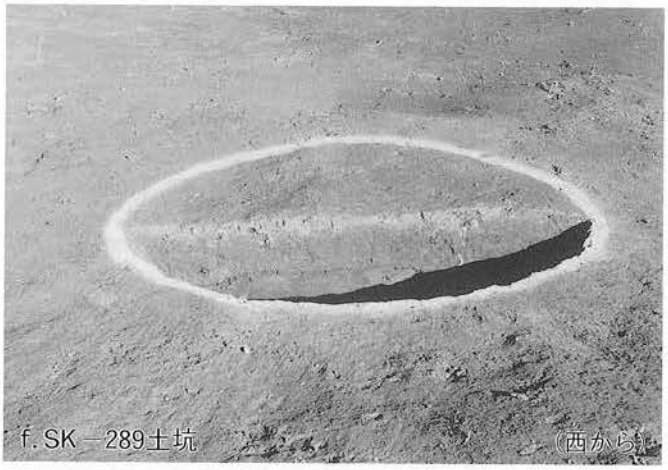
土坑・溝群　1

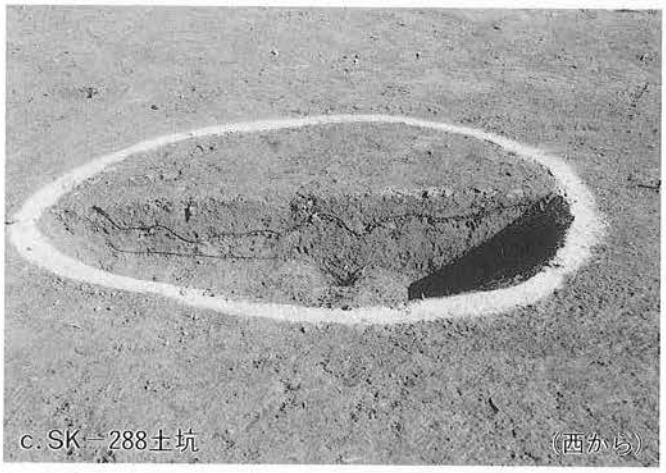
田塚山B地区　18

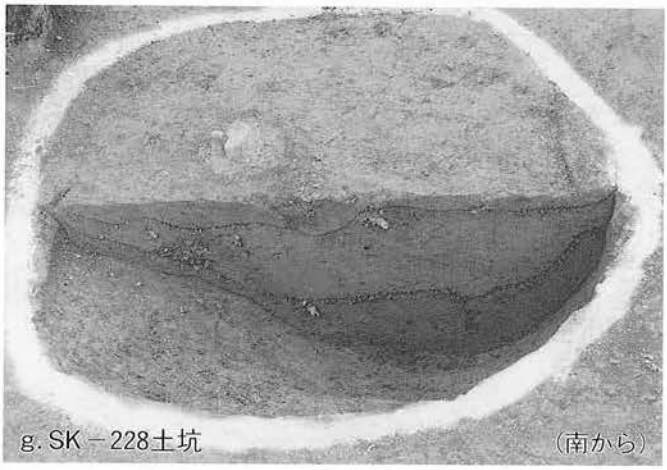
a. SK－249土坑　（南から）

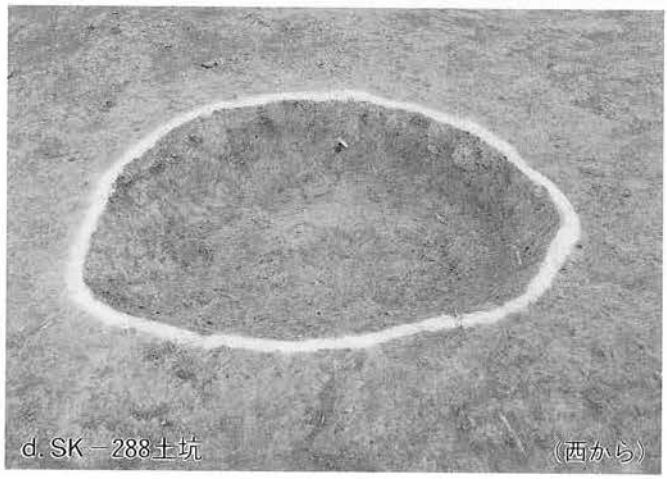

e. SX－263・SK－264土坑　（西から）


b. SK－249土坑　（南から）


f. SK－289土坑　（西から）


c. SK－288土坑　（西から）

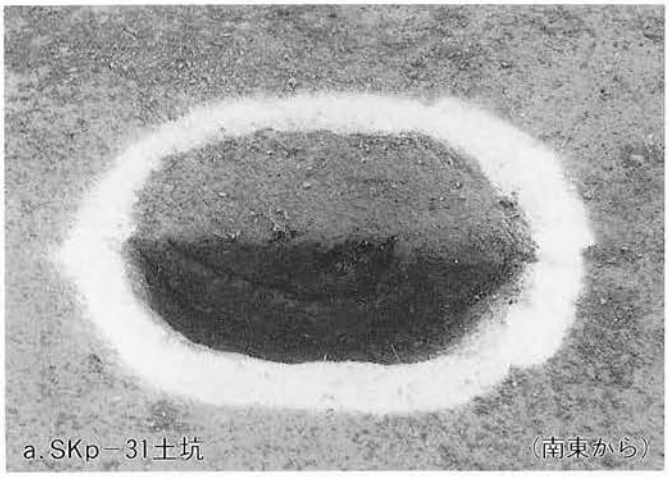

g. SK－228土坑　（南から）

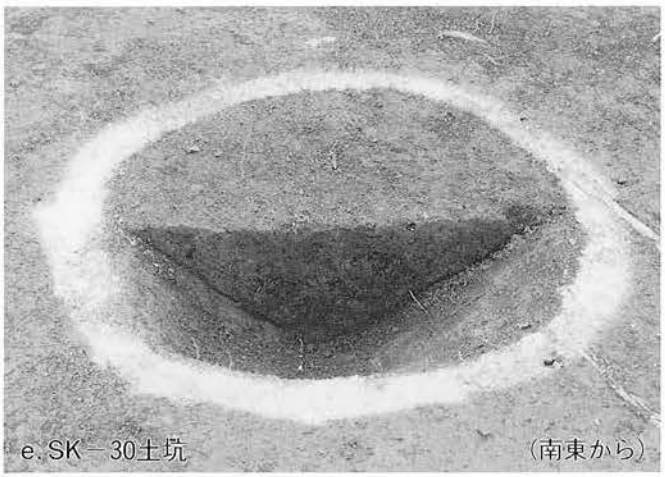

d. SK－288土坑　（西から）

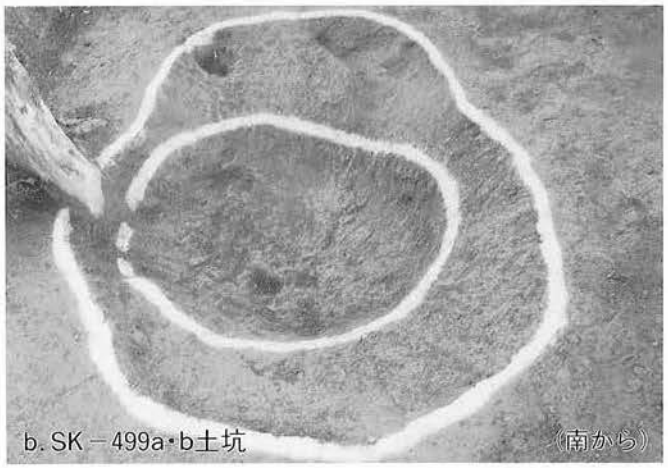
h. SK－228土坑　（南から）

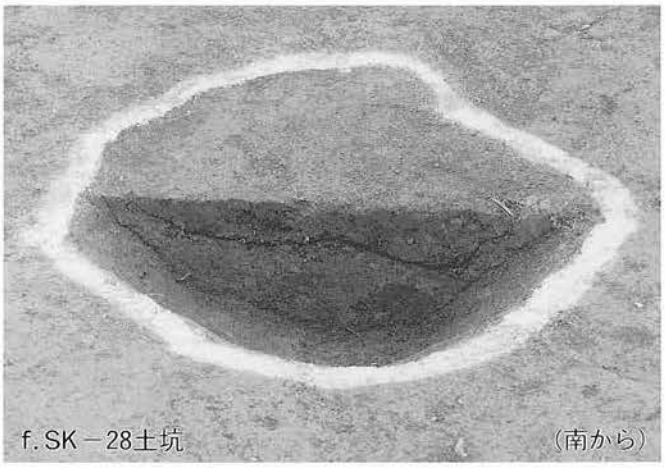
土坑・溝群　2

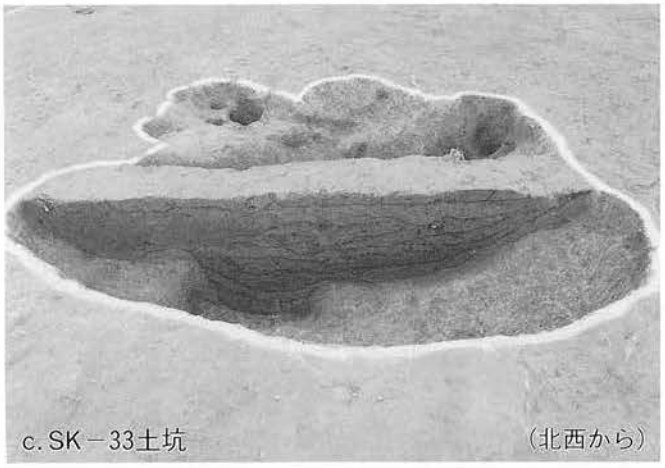
田塚山B地区　19

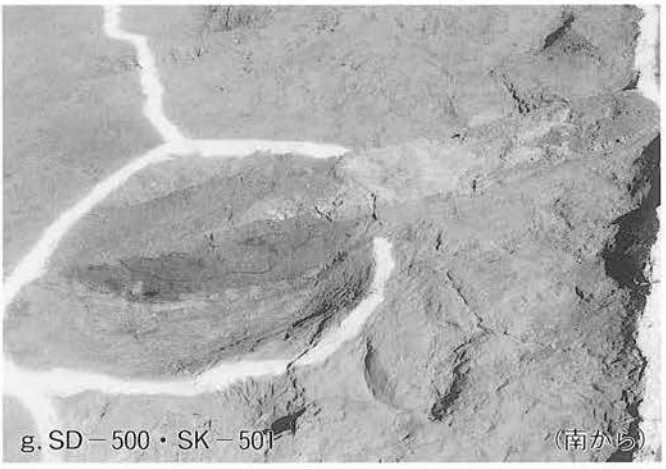

a. SKp－31土坑　（南東から）

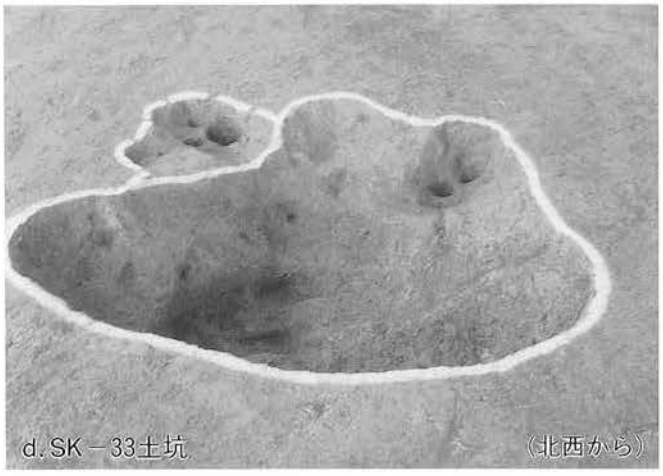

e. SK－30土坑　（南東から）


b. SK－499a・b土坑　（南から）


f. SK－28土坑　（南から）


c. SK－33土坑　（北西から）

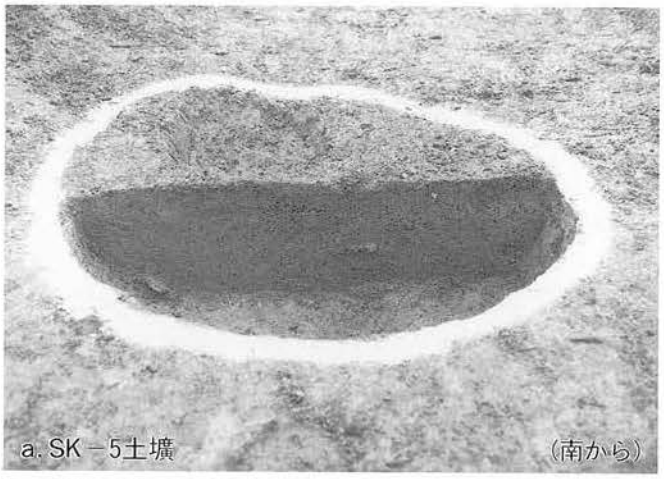

g. SD－500・SK－501　（南から）

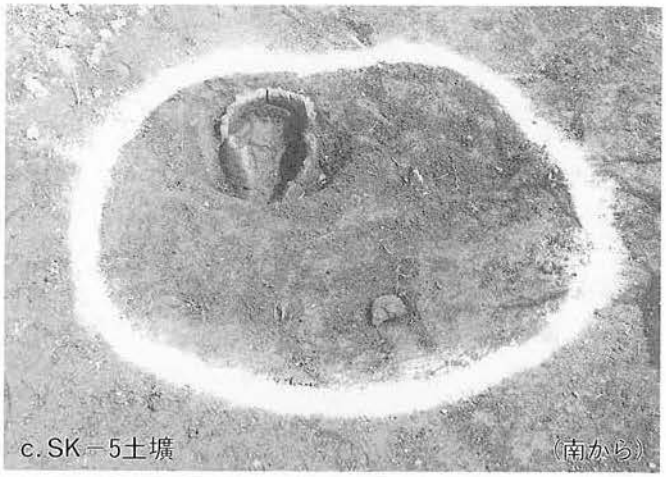

d. SK－33土坑　（北西から）

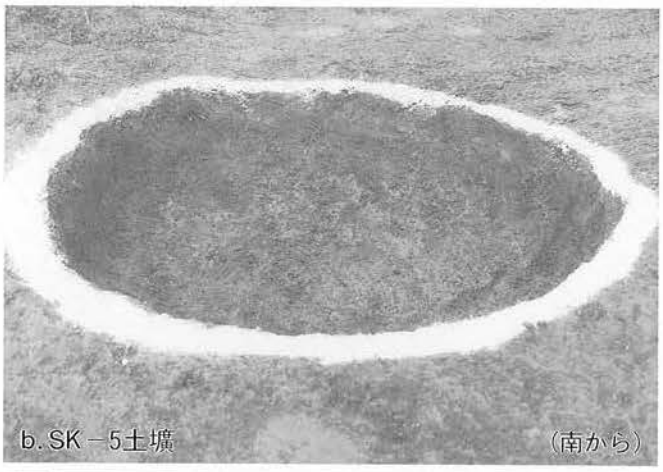
h. SD－500・SK－501　（南から）

土坑・溝群　3

田塚山B地区　20


a. SK－5土壙　（南から）


c. SK－5土壙　（南から）


b. SK－5土壙　（南から）

d. SK－5土壙土器出土状況　（北から）

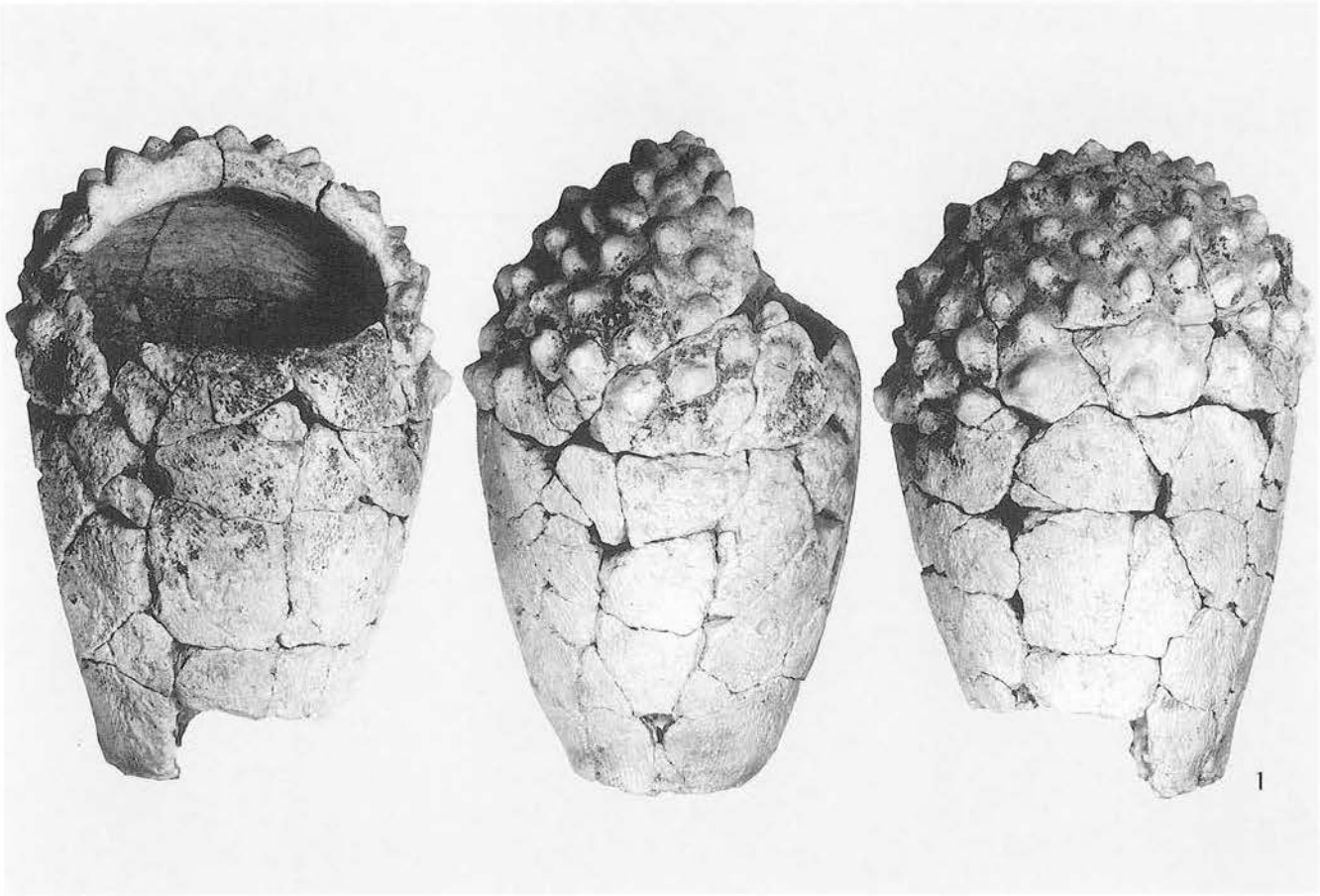
e. SD－4溝　（南から）

g. SD－15溝　（南から）

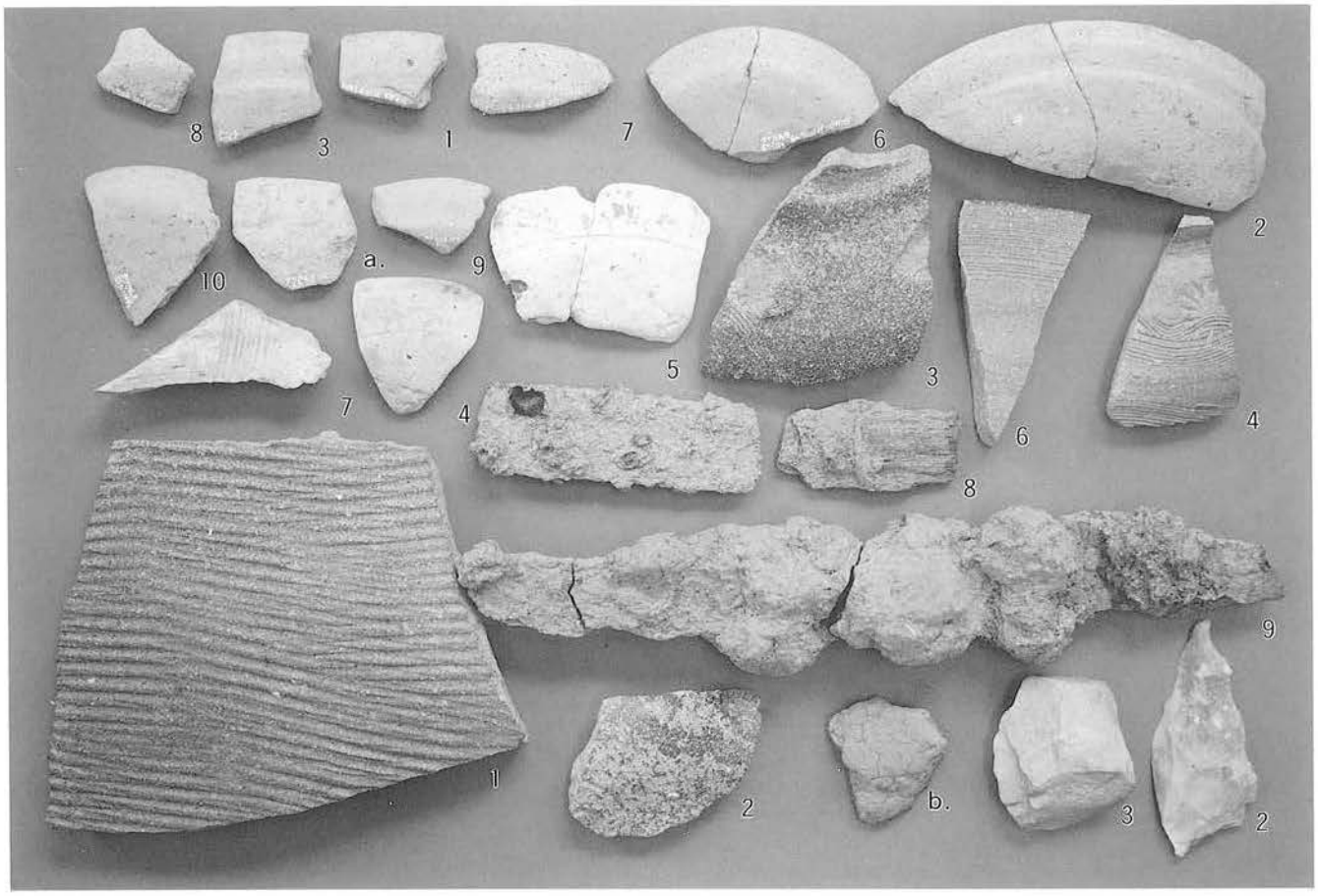
f. SD－20a溝　（南から）

h. SD－24a溝　（南西から）

田塚山B地区　21

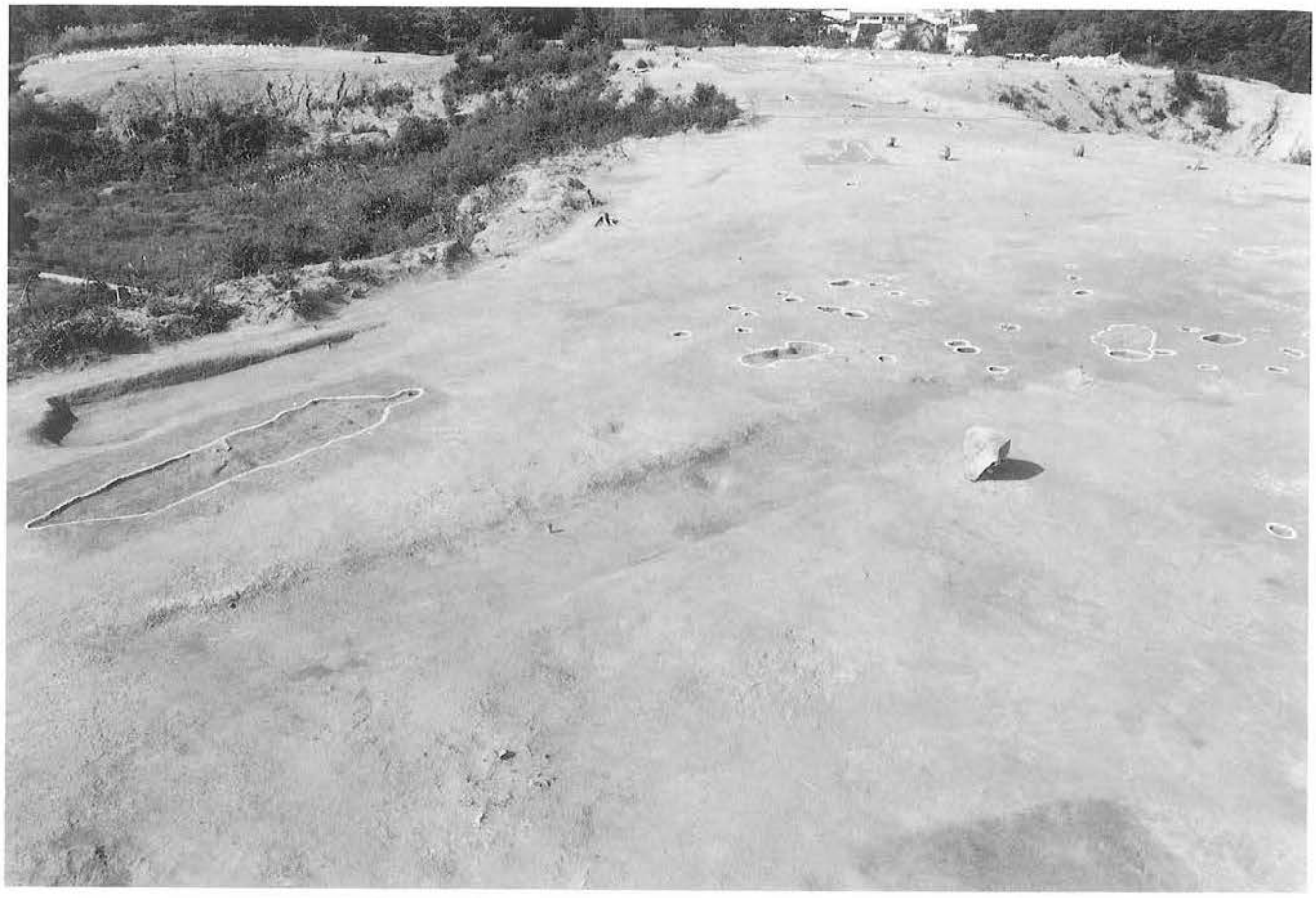


a. 出土遺物（1）　(約1：3)



b. 出土遺物（2）　(約1：2)

田塚山C地区　1



a．調査区西部　（南東から）

b．調査区北東部　（南から）

田塚山C地区　2

a．調査区東部　（北西から）

b．調査区中央部　（北から）

田塚山C地区　3

a．調査区北東部（SX－2・SK－3周辺）　（南から）

b．調査区北東部（SX－2・SK－3周辺）　（北西から）

田塚山C地区　4

a．SI－113住居跡　（北から）

b．SB－114建物跡　（南から）

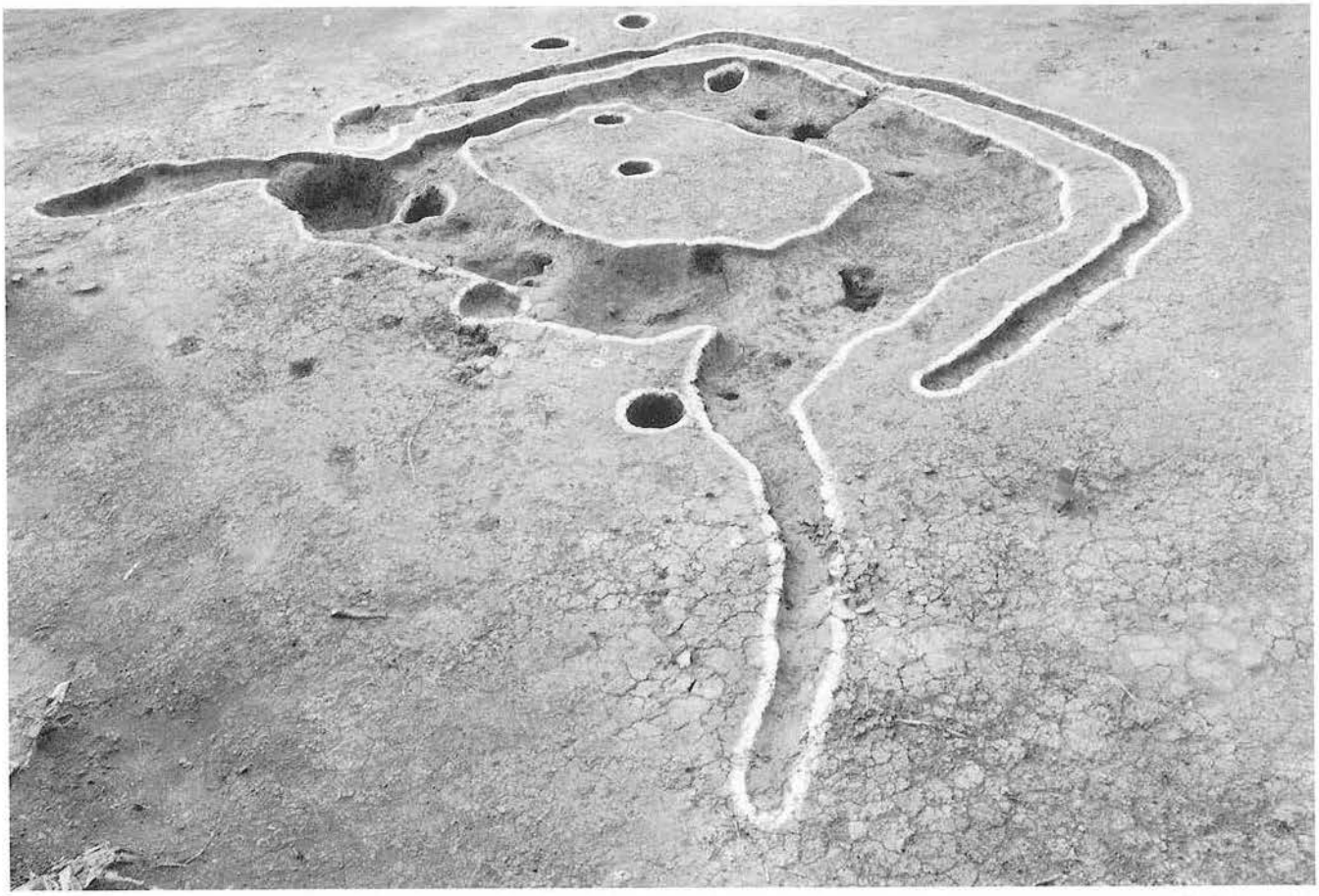
田塚山C地区　5

a．SX－2遺構（検出状況）　（南西から）

b．SX－2②焼土遺構（検出状況）　（東から）

田塚山C地区　6

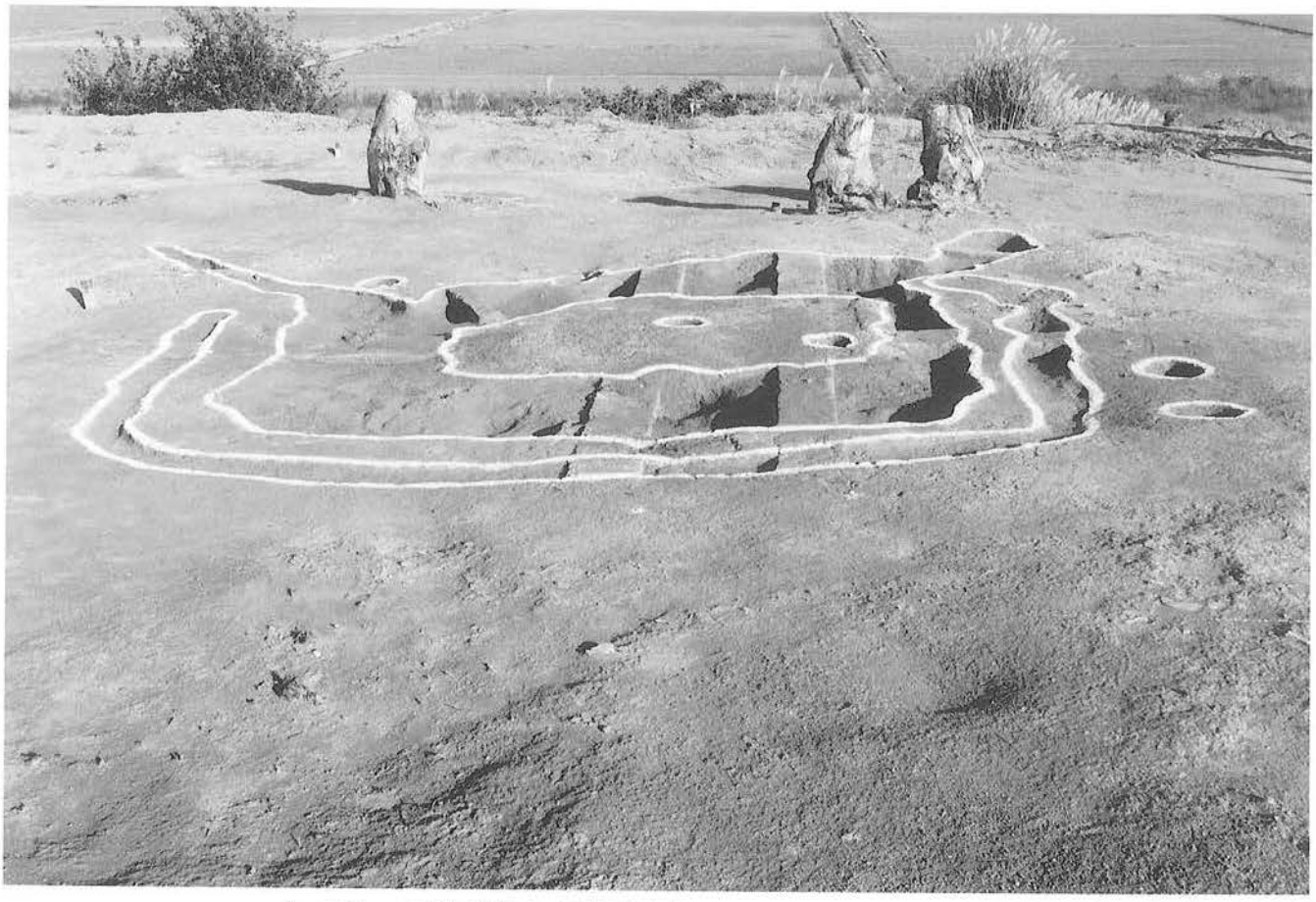
a．SX－2遺構（完掘）　（南から）



b．SX－2遺構（完掘）　（北東から）

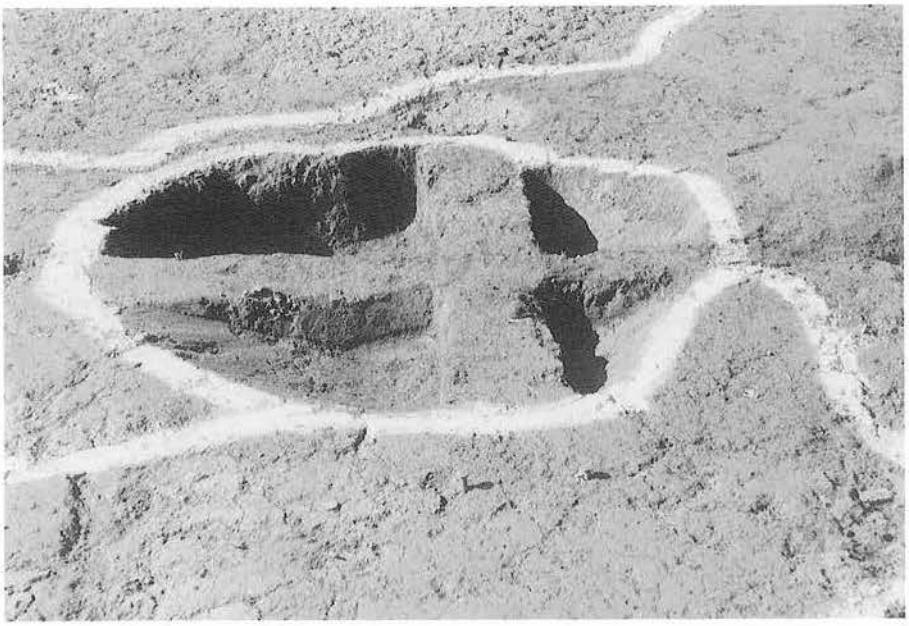
田塚山C地区　7

a．SX－2遺構（土層断面）　（南から）



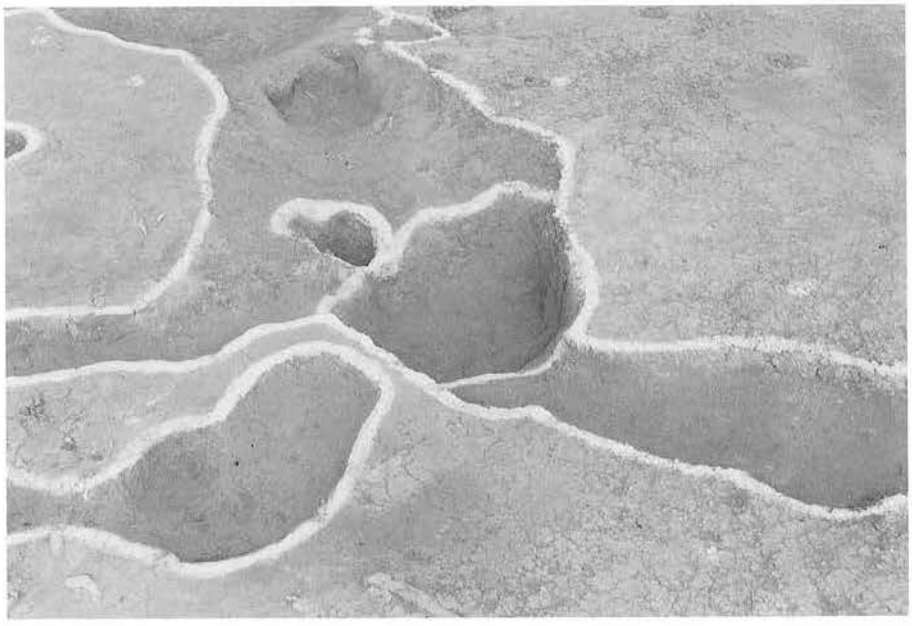
b．SX－2遺構（土層断面）　（西から）

田塚山C地区　8



a.焼土断面　　（北東から）

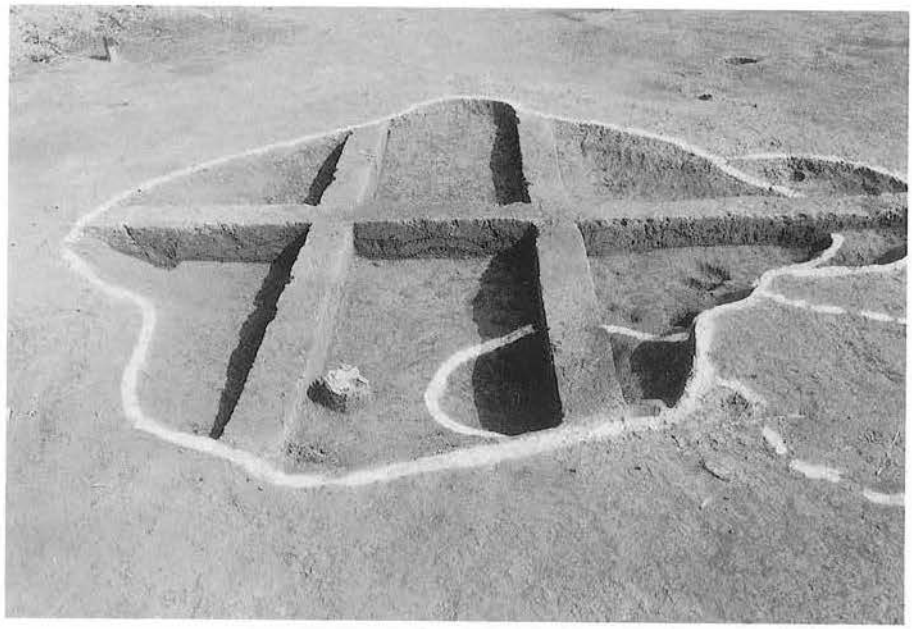
b.焼土断面　　（南東から）



c.完掘　　（南から）

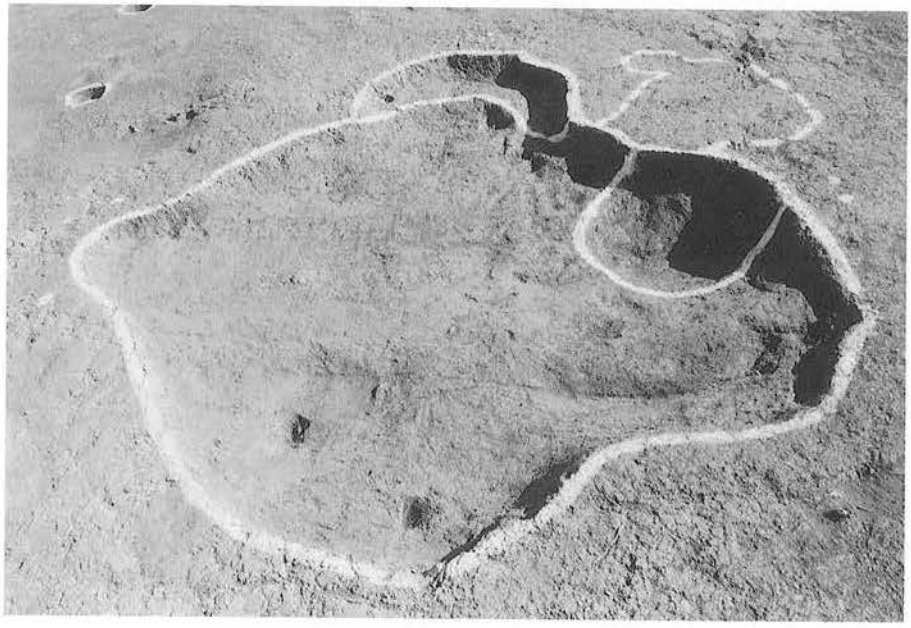
SX－2②焼土遺構

田塚山C地区　9



a. 土層断面　（南西から）

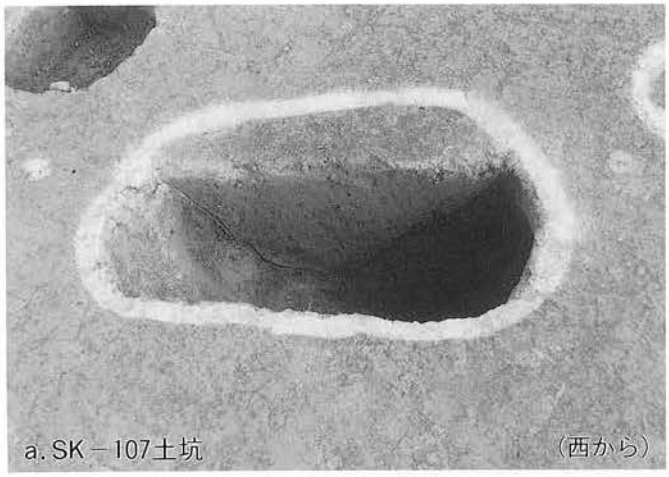
b. 土層断面　（南東から）

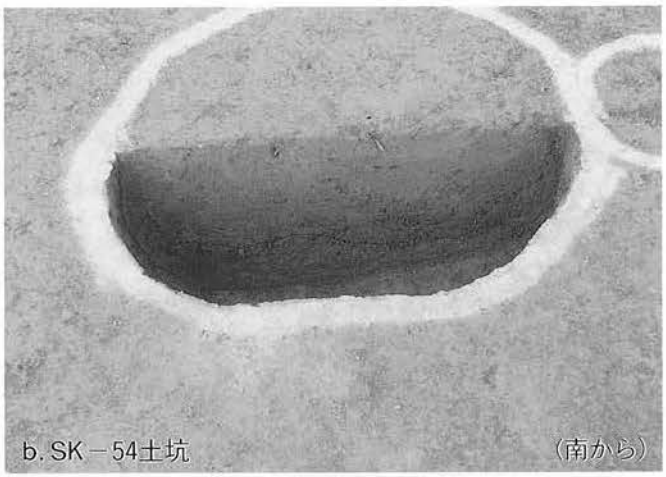


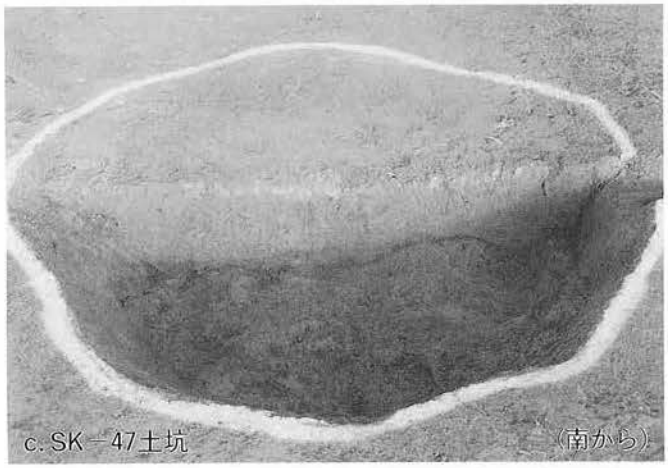
c. 完掘　（北西から）

SK－3・4土坑群

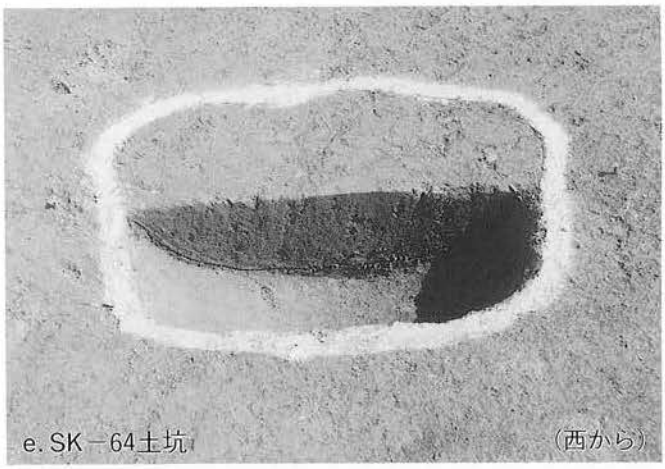
田塚山C地区　10

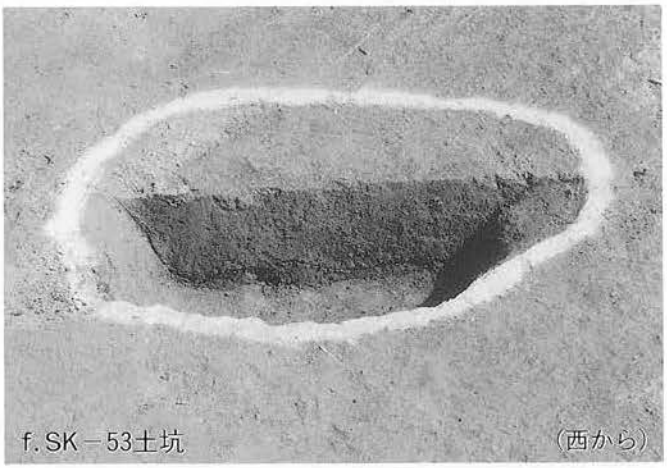

a. SK－107土坑　（西から）


b. SK－54土坑　（南から）

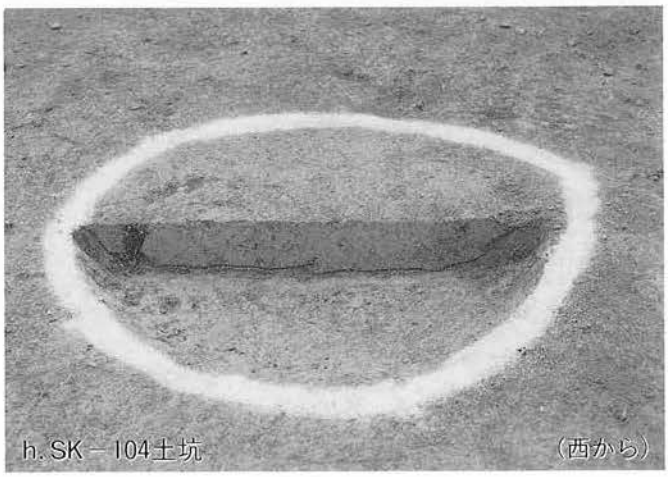

c. SK－47土坑　（南から）

d. SK－111土坑　（北から）


e. SK－64土坑　（西から）

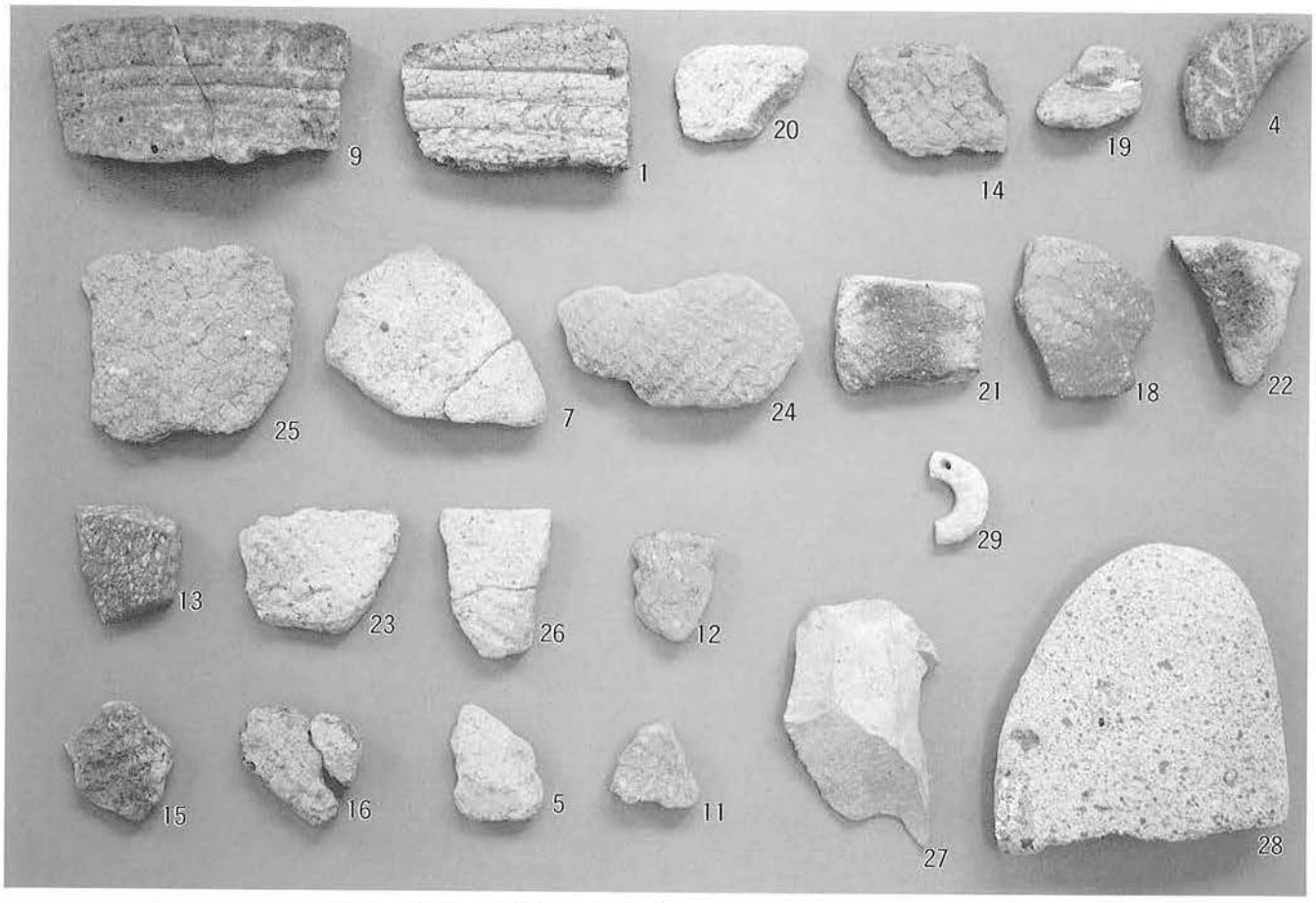

f. SK－53土坑　（西から）

g. SD－84土坑　（南から）

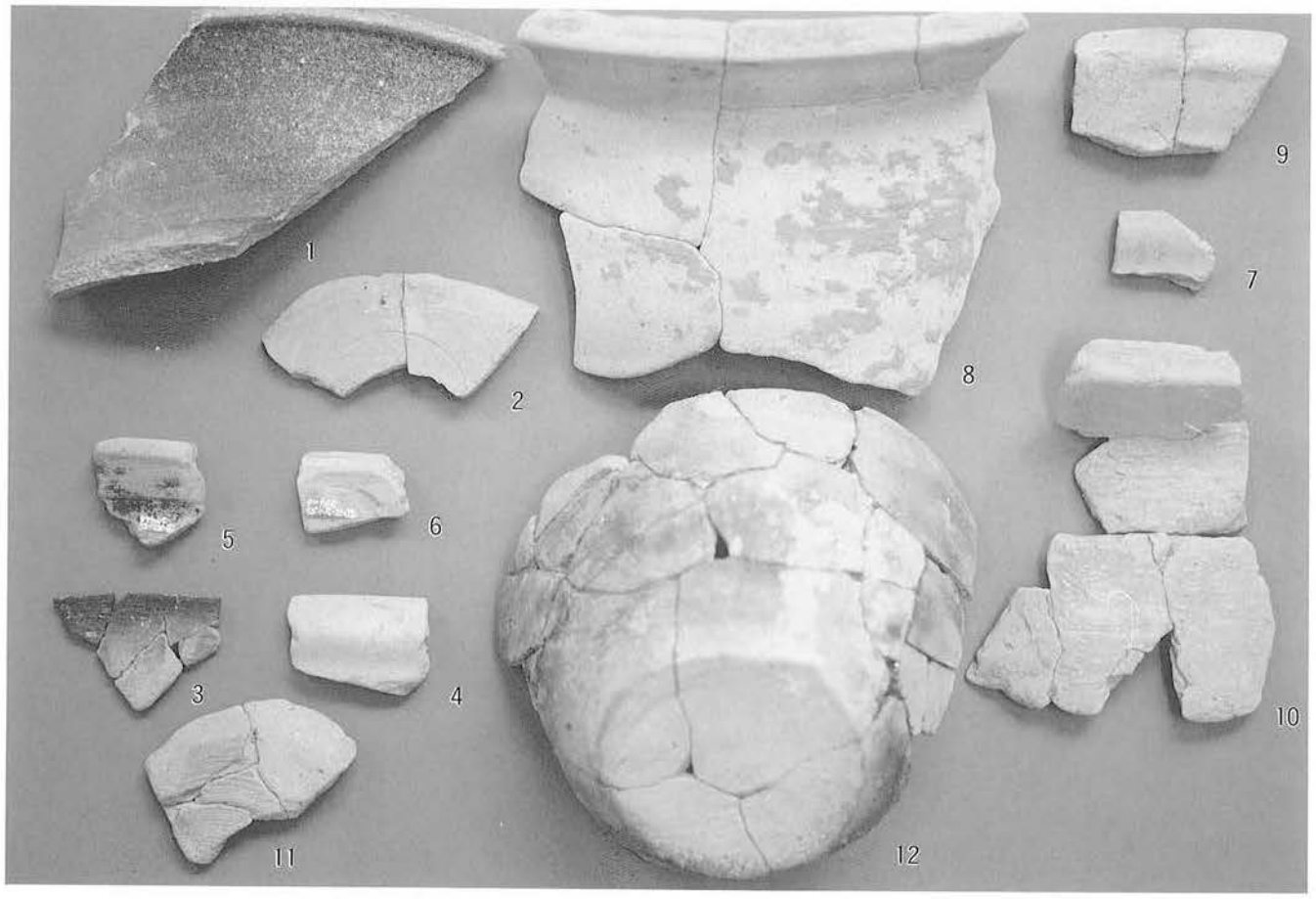

h. SK－104土坑　（西から）

土　坑　群

田塚山C地区　11



a. 出土遺物（縄文時代）　(約1：2)



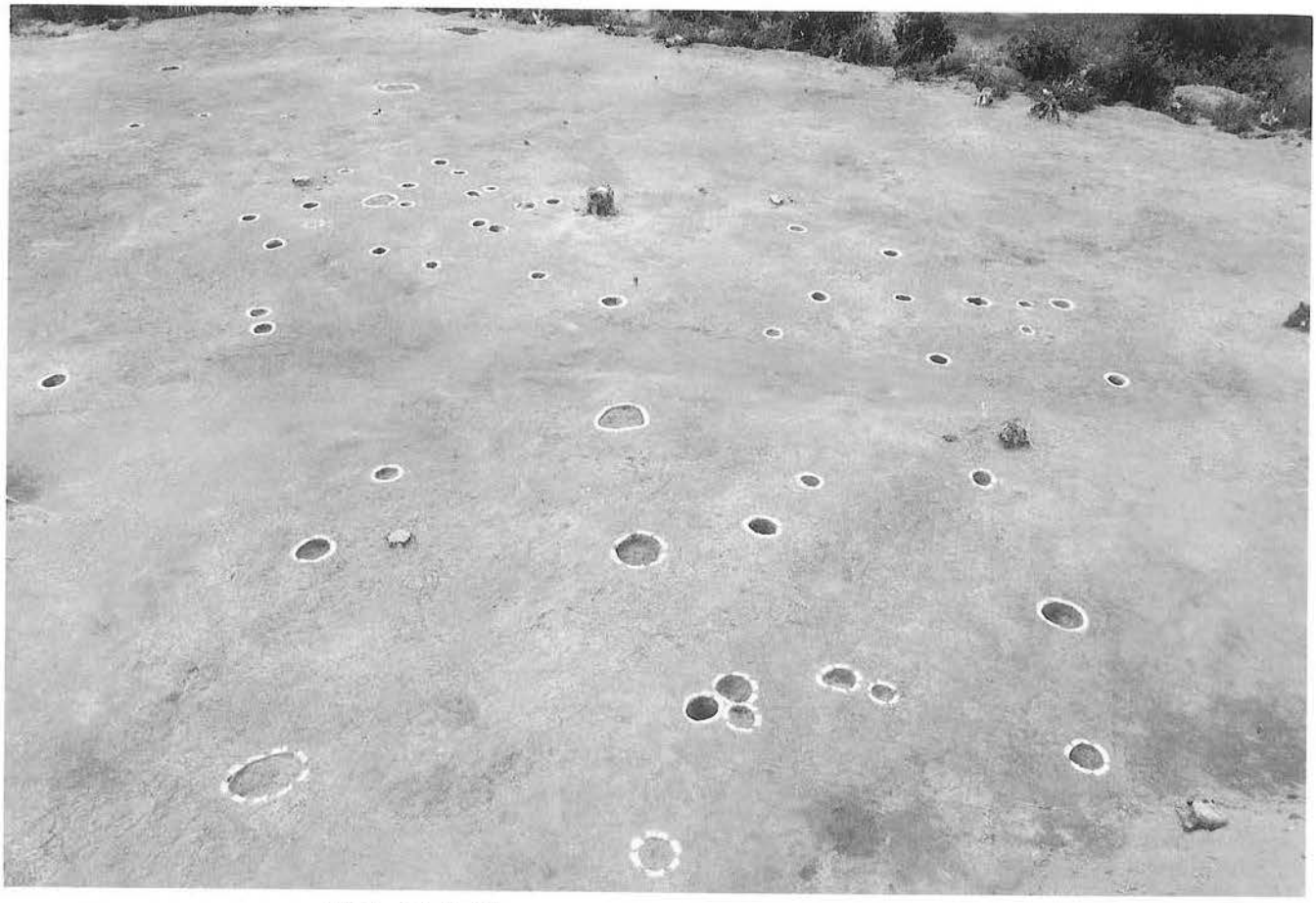
b. 出土遺物（平安時代）　(約1：2)

田塚山D地区　1

a. 調査区全景　（西から）

b. 調査区全景（ピット群）　（西から）

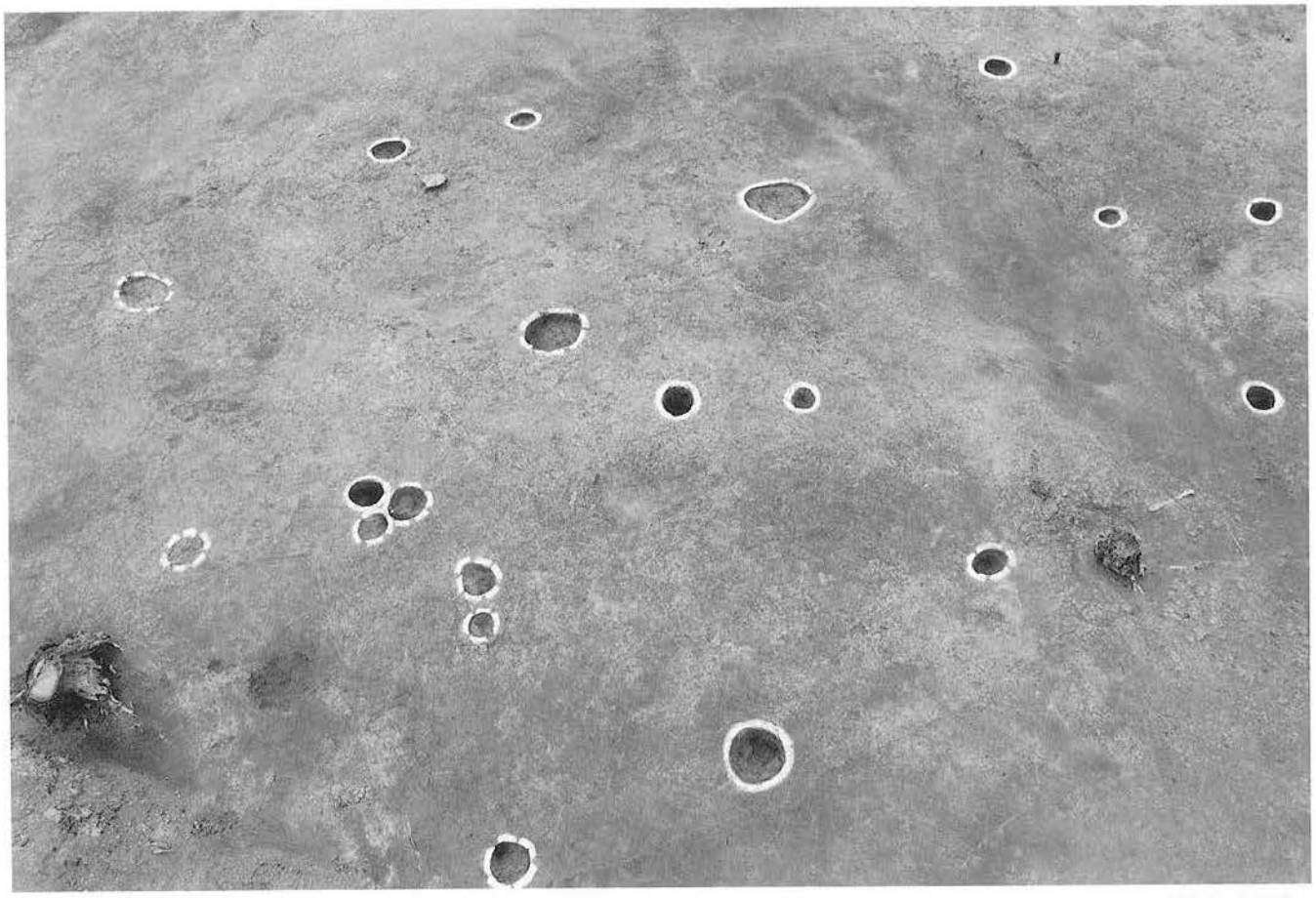
田塚山D地区　2



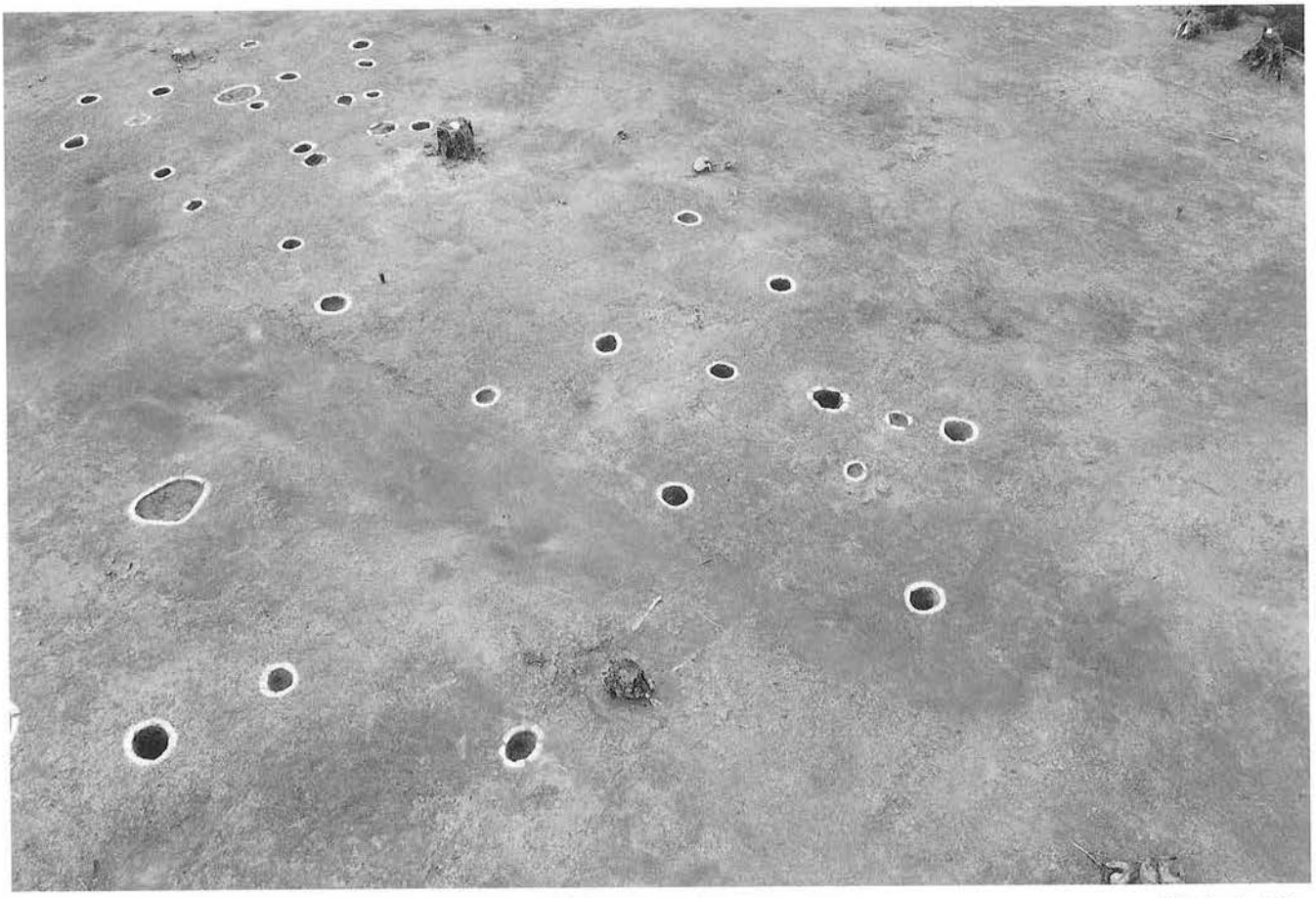
a．調査区全景　（東から）

b．調査区南部　（北東から）

田塚山D地区　3

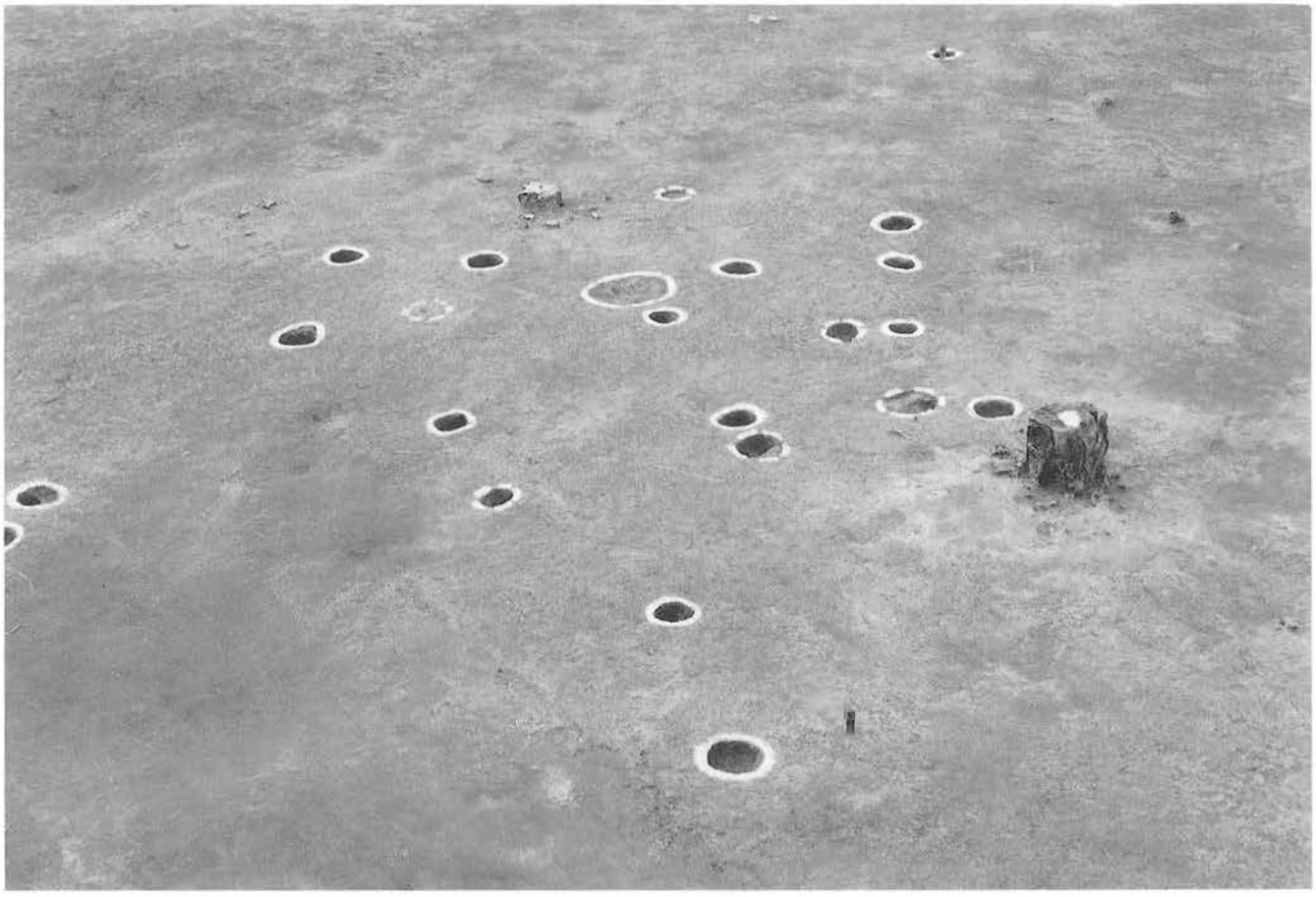


a．SI－63住居跡周辺　（北東から）

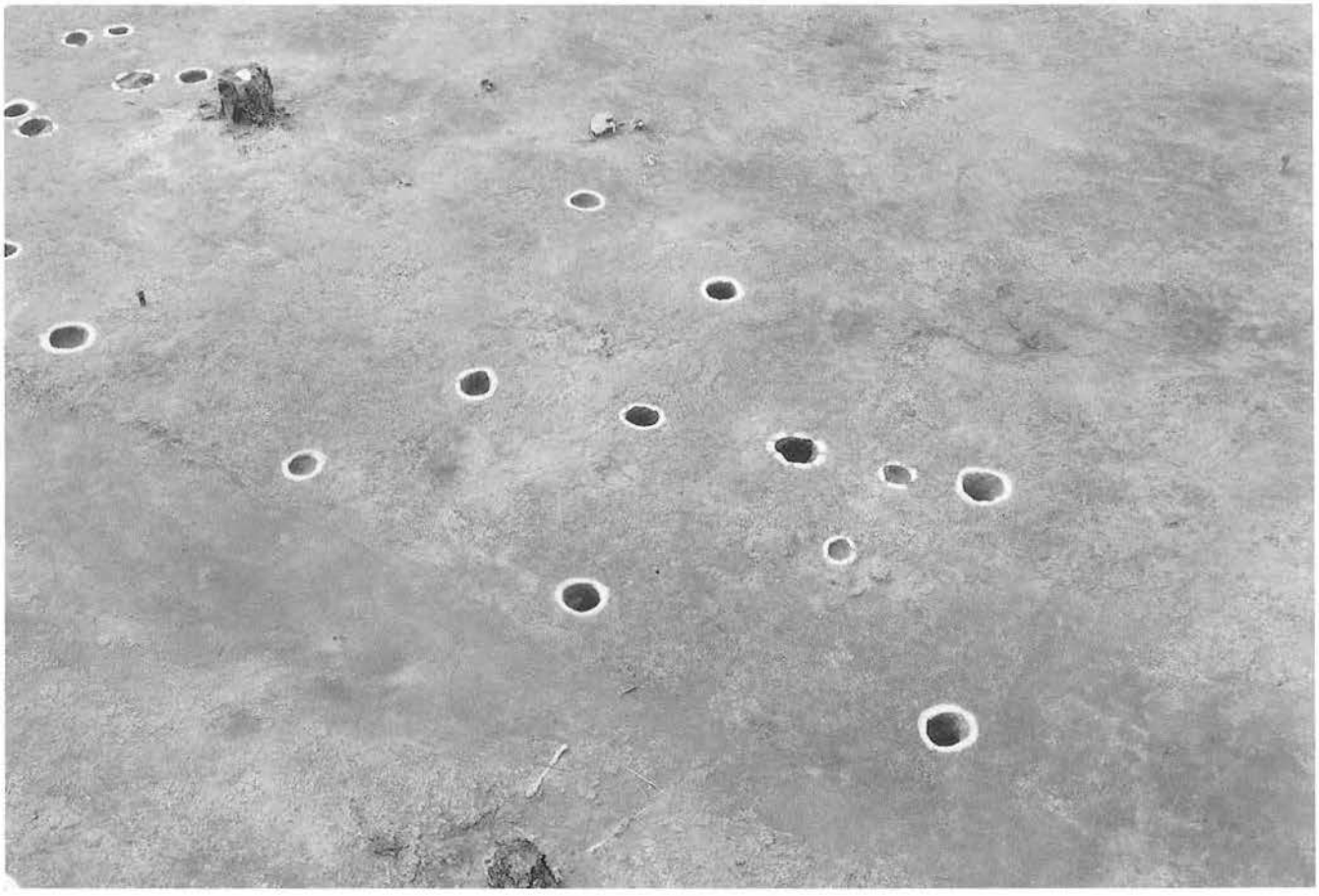


b．SI－60・61・62住居跡周辺　（南東から）

田塚山D地区　4

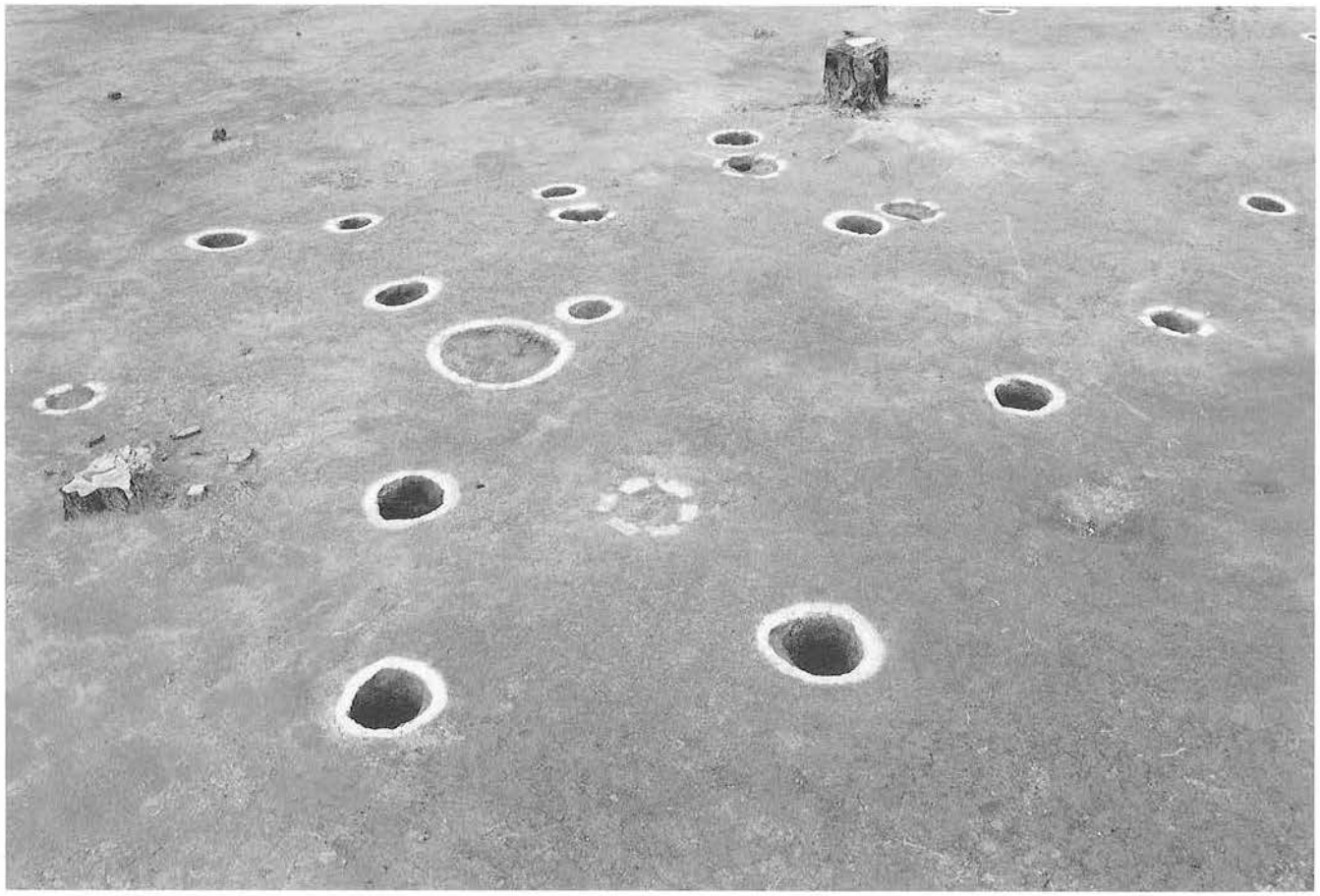


a．SI－60住居跡周辺　（北東から）

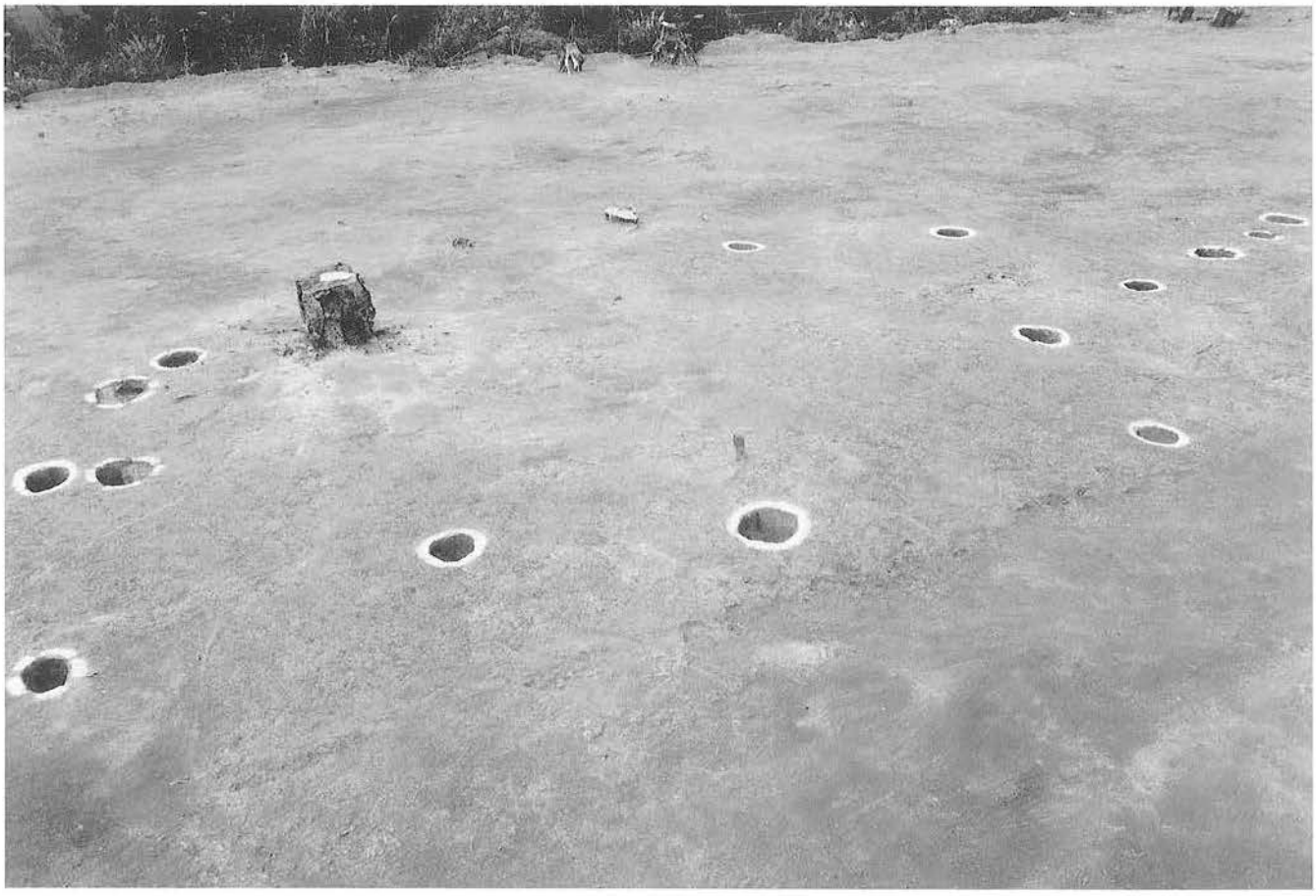


b．SI－62住居跡周辺　（北東から）

田塚山D地区　5

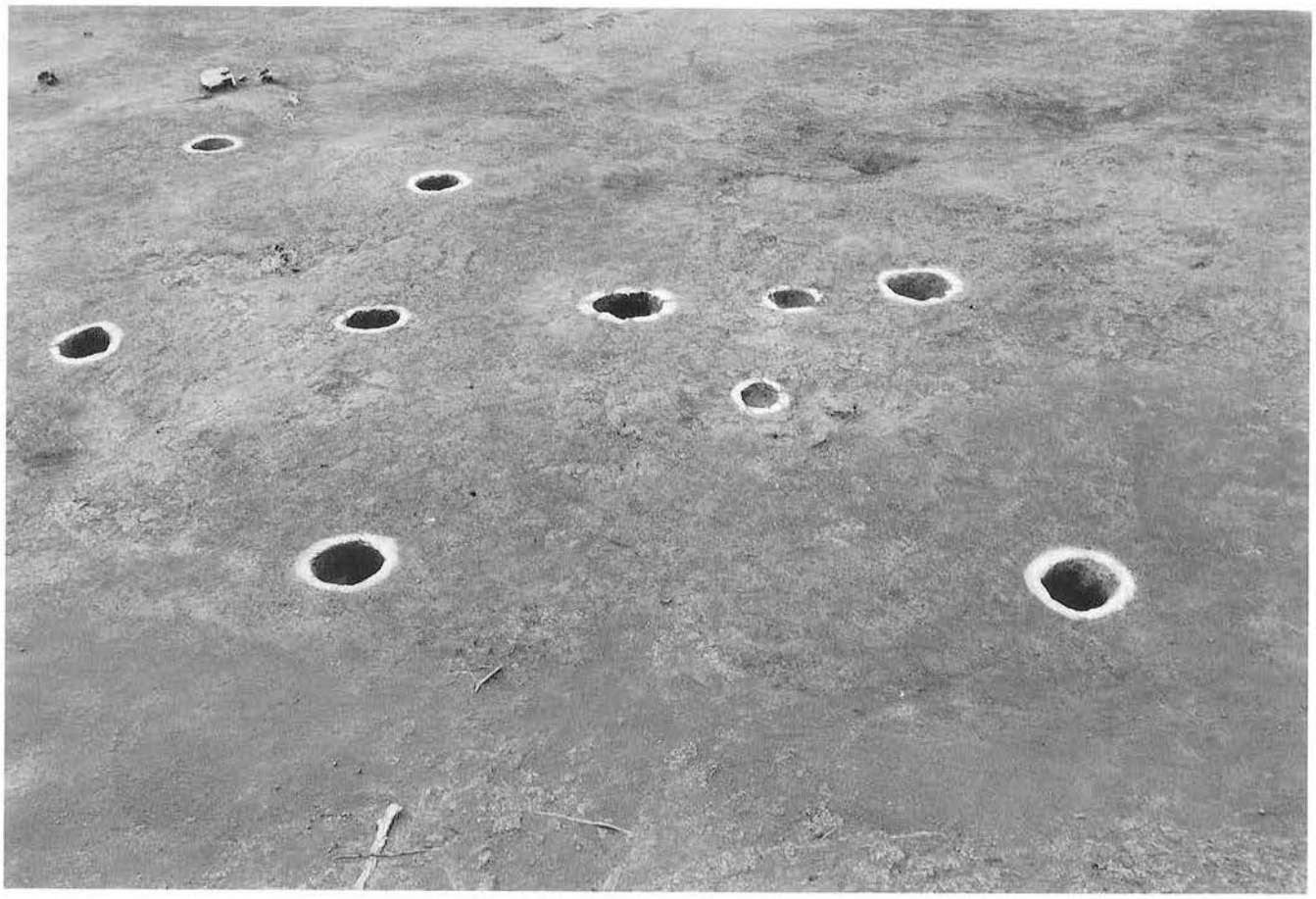


a．SI－60住居跡　　（南から）



b．SI－61住居跡　　（南から）

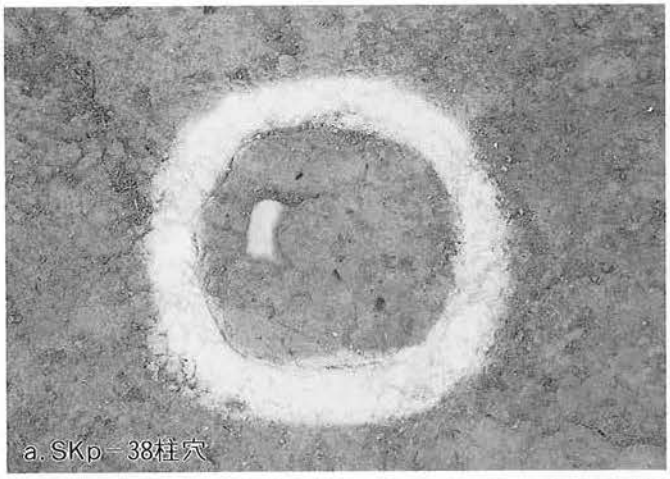
田塚山D地区　6



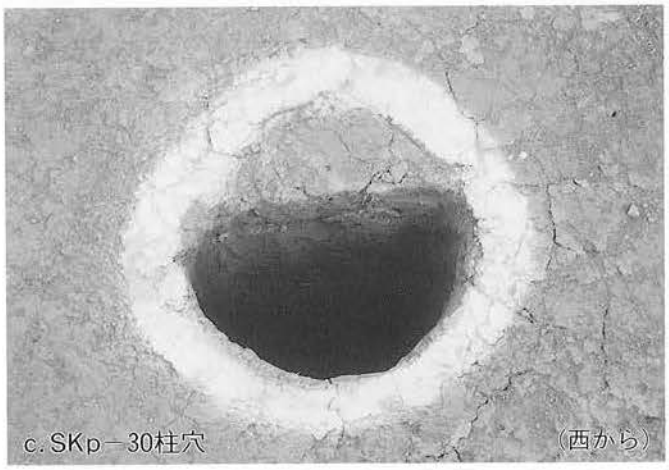
a．SI－62住居跡　　（南東から）

b．SI－63住居跡　　（東から）

田塚山D地区　7

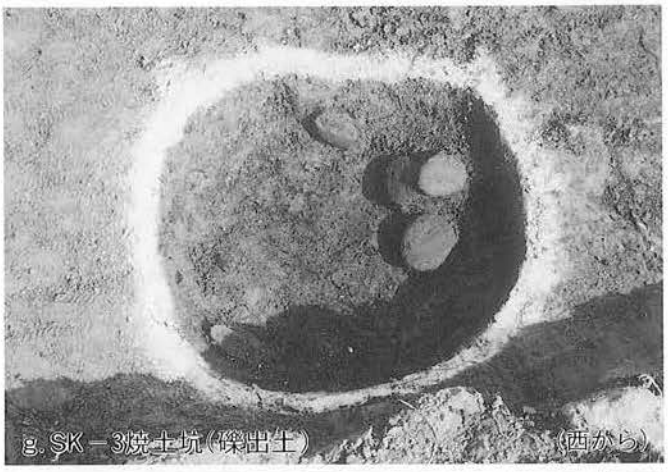

a. SKp－38柱穴

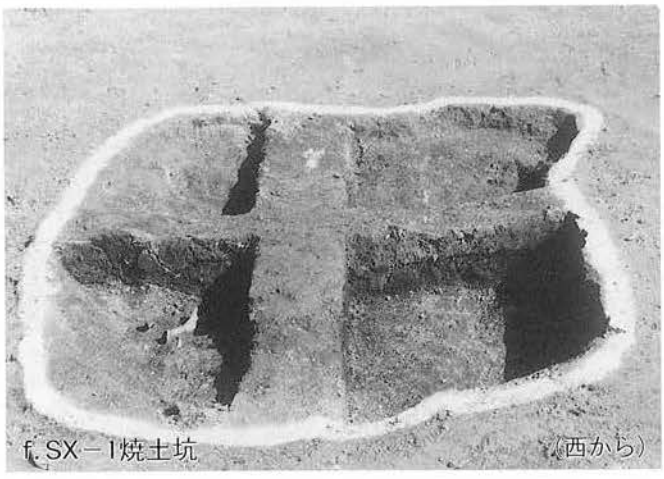
b. SK－66土坑　（西から）


c. SKp－30柱穴　（西から）

d. SK－65土坑　（西から）

e. SX－1焼土坑　（北から）

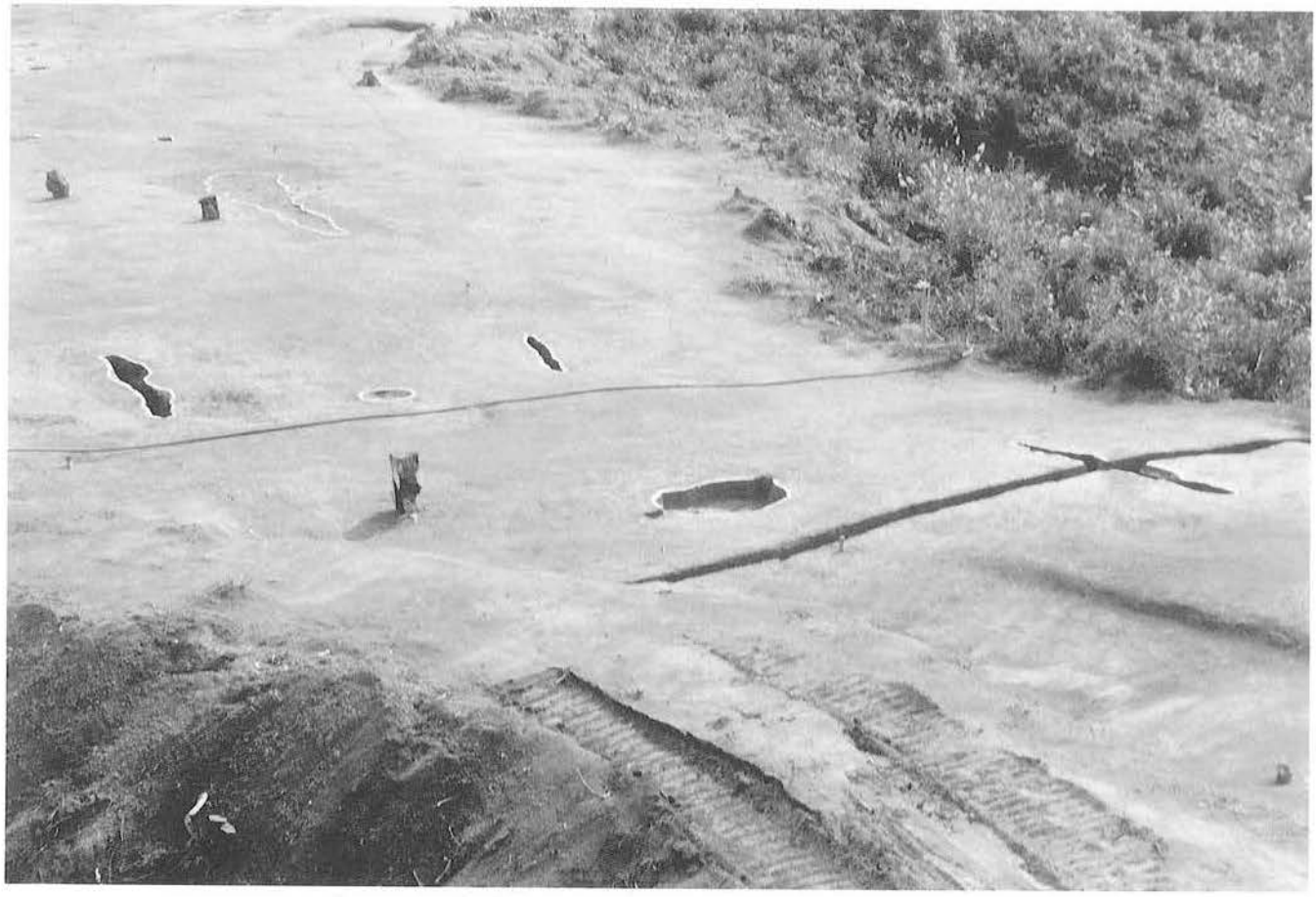

g. SK－3焼土坑（礫出土）　（西から）


f. SX－1焼土坑　（西から）

h. SK－3焼土坑　（南から）

田塚山D地区　8

a. トラップピット群全景　（北から）



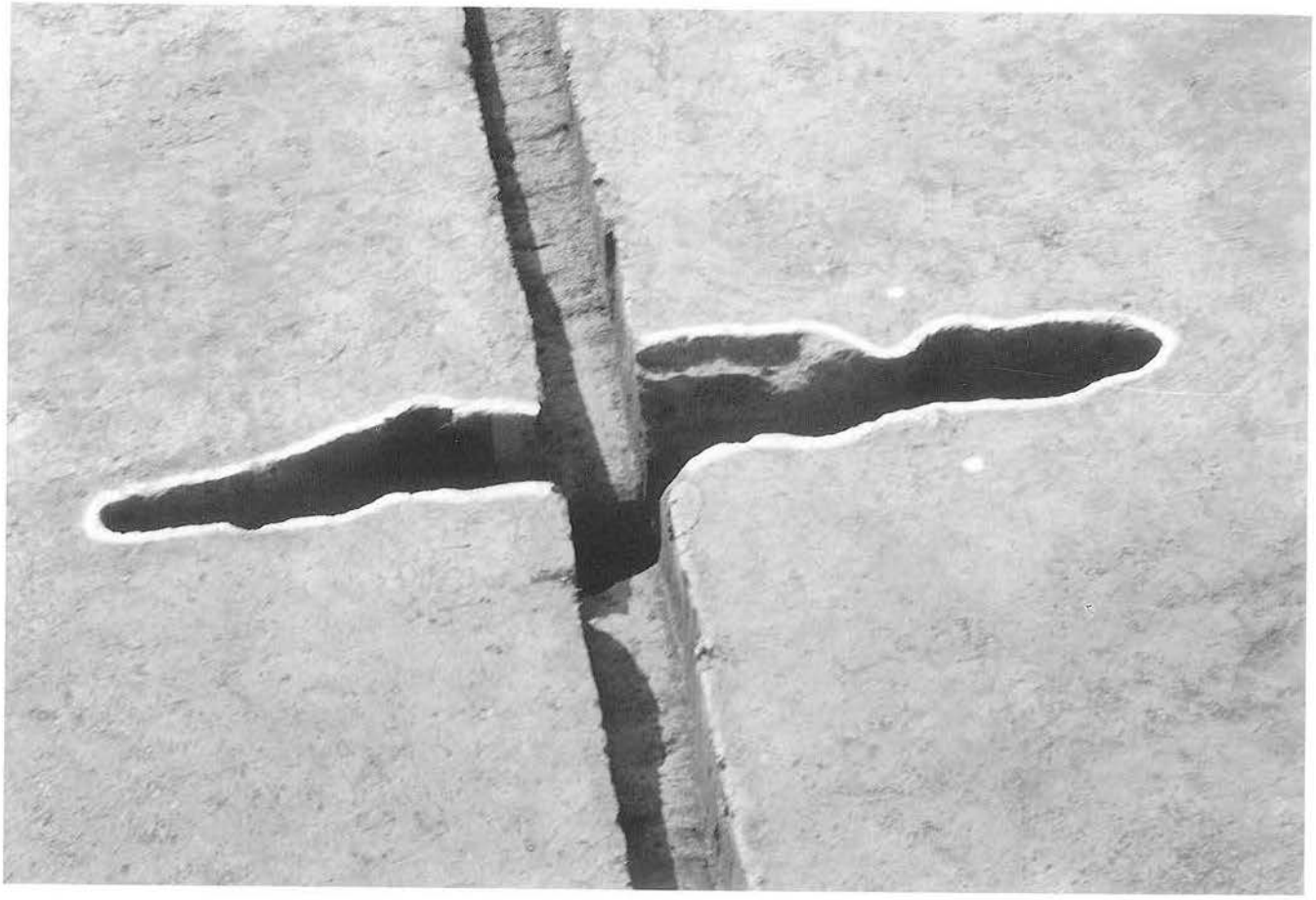
b. トラップピット群（TP－102・103・106）　（北から）

田塚山D地区　9

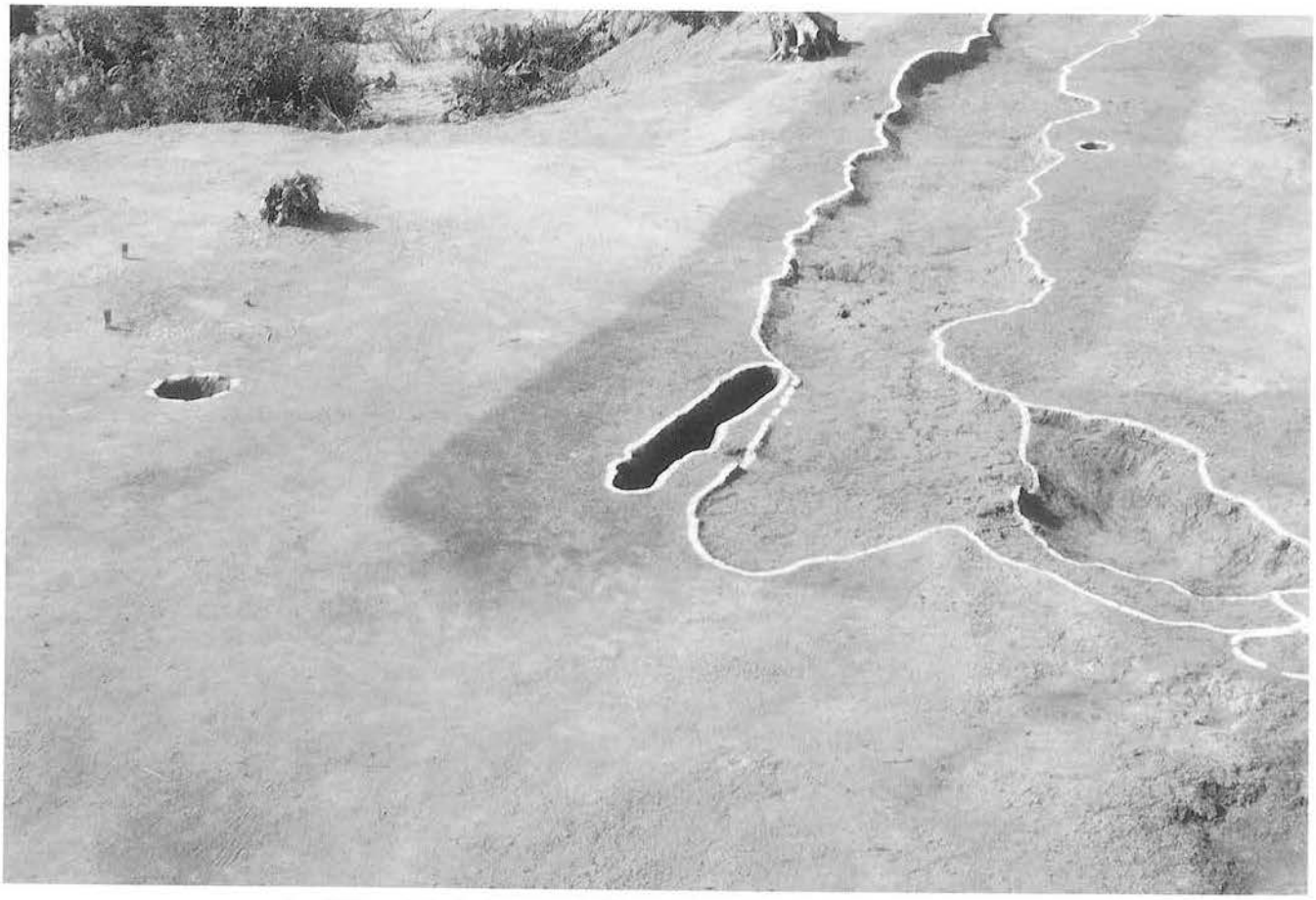
a.TP－102・103トラップピット　（北西から）

b.TP－106・64トラップピット　（東から）

田塚山D地区　10

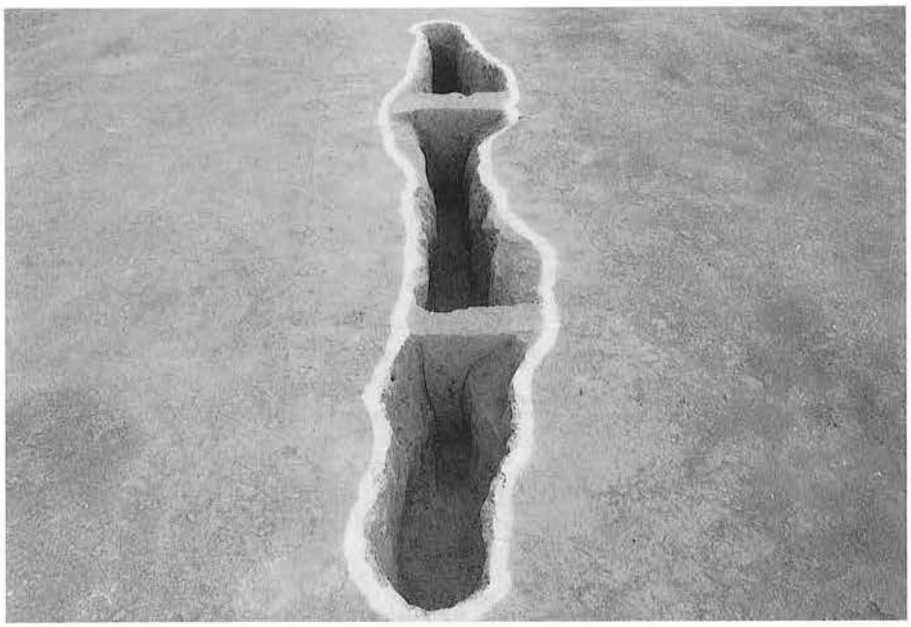


a.TP－106トラップピット　（北東から）



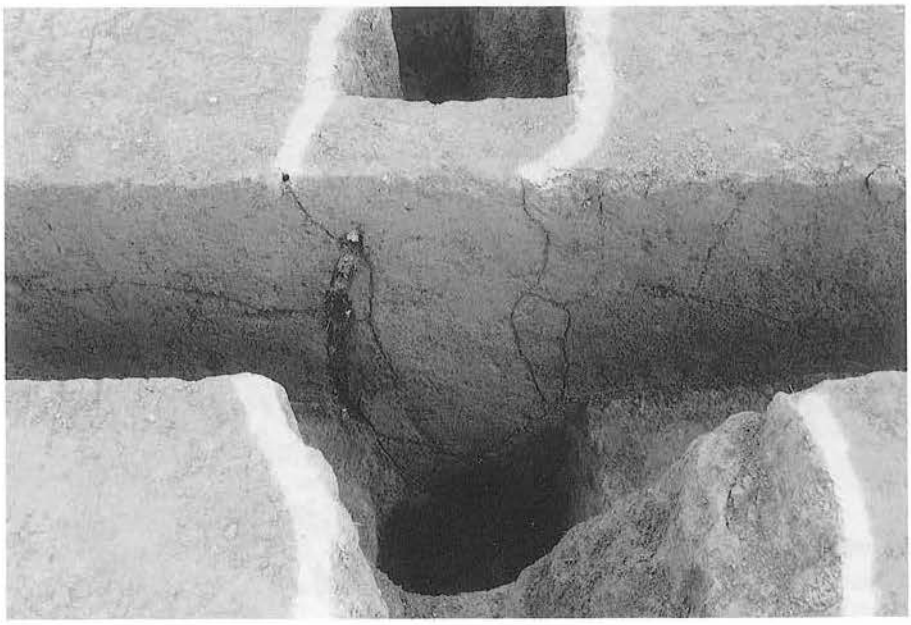
b.TP－64トラップピット　（東から）

田塚山D地区　11



a. TP－102

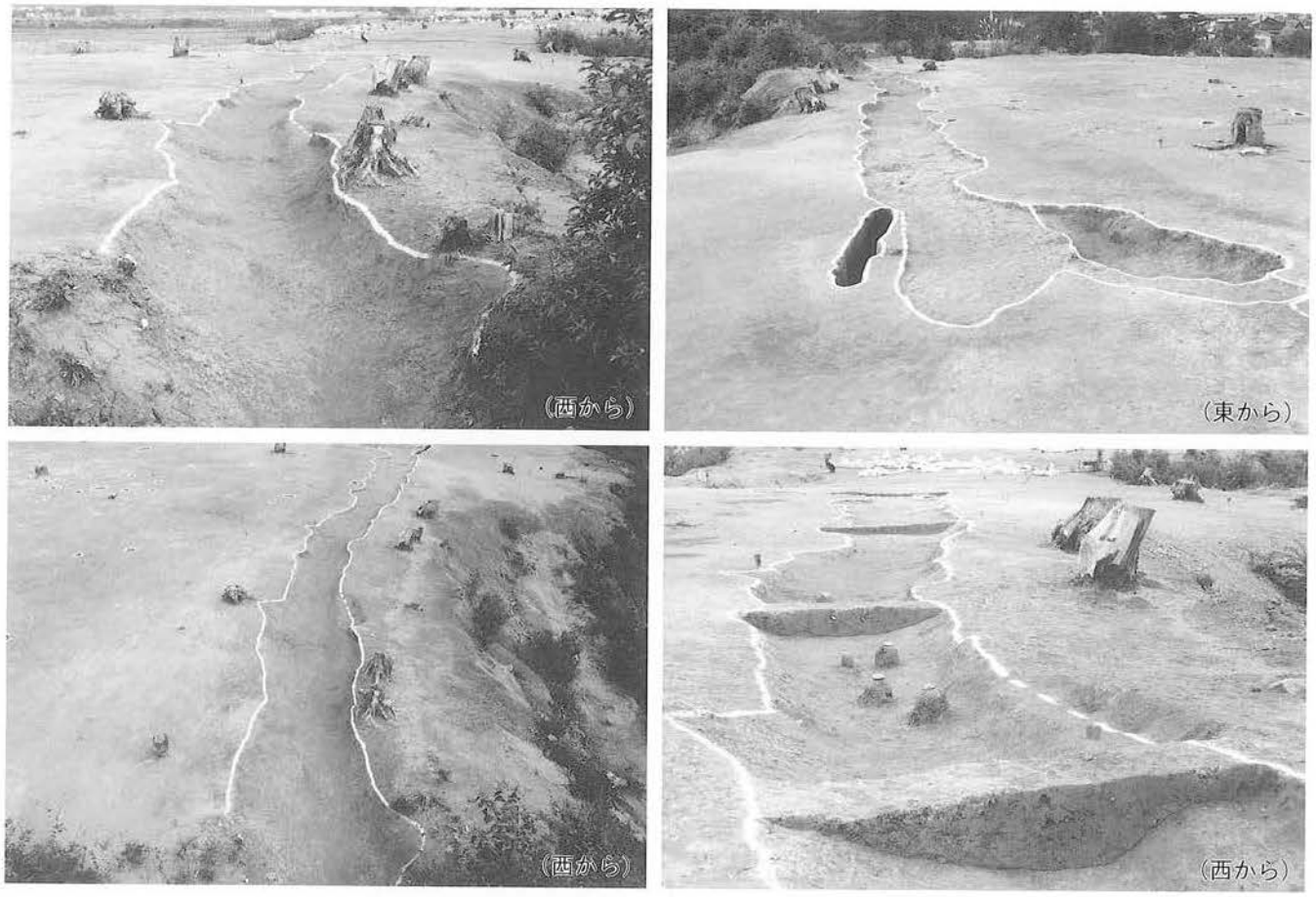
b. TP－102



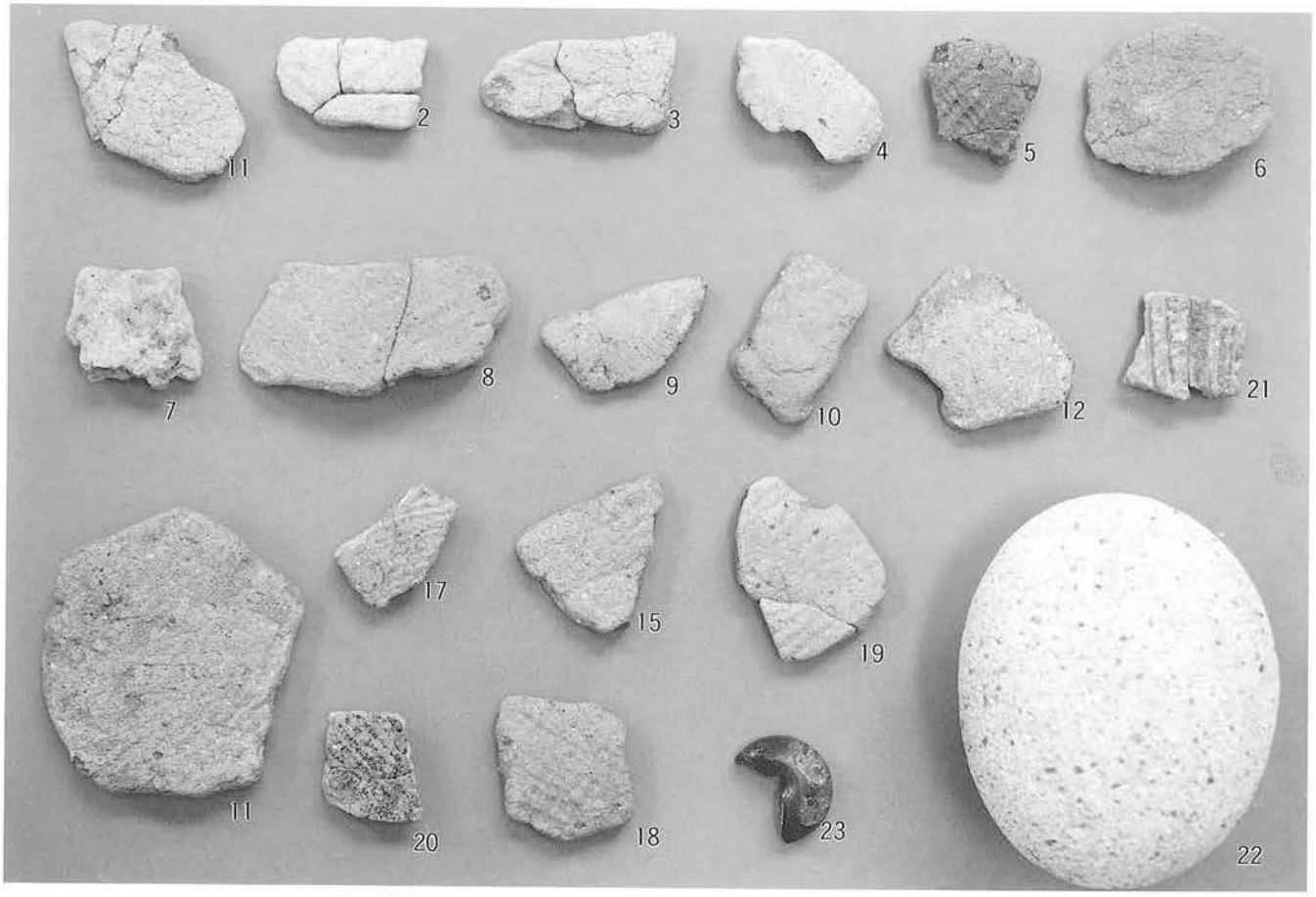
c. TP－106

トラッピット（土層断面）

田塚山D地区　12



a．SR－57道路跡



b．出土遺物　　(約1：2)

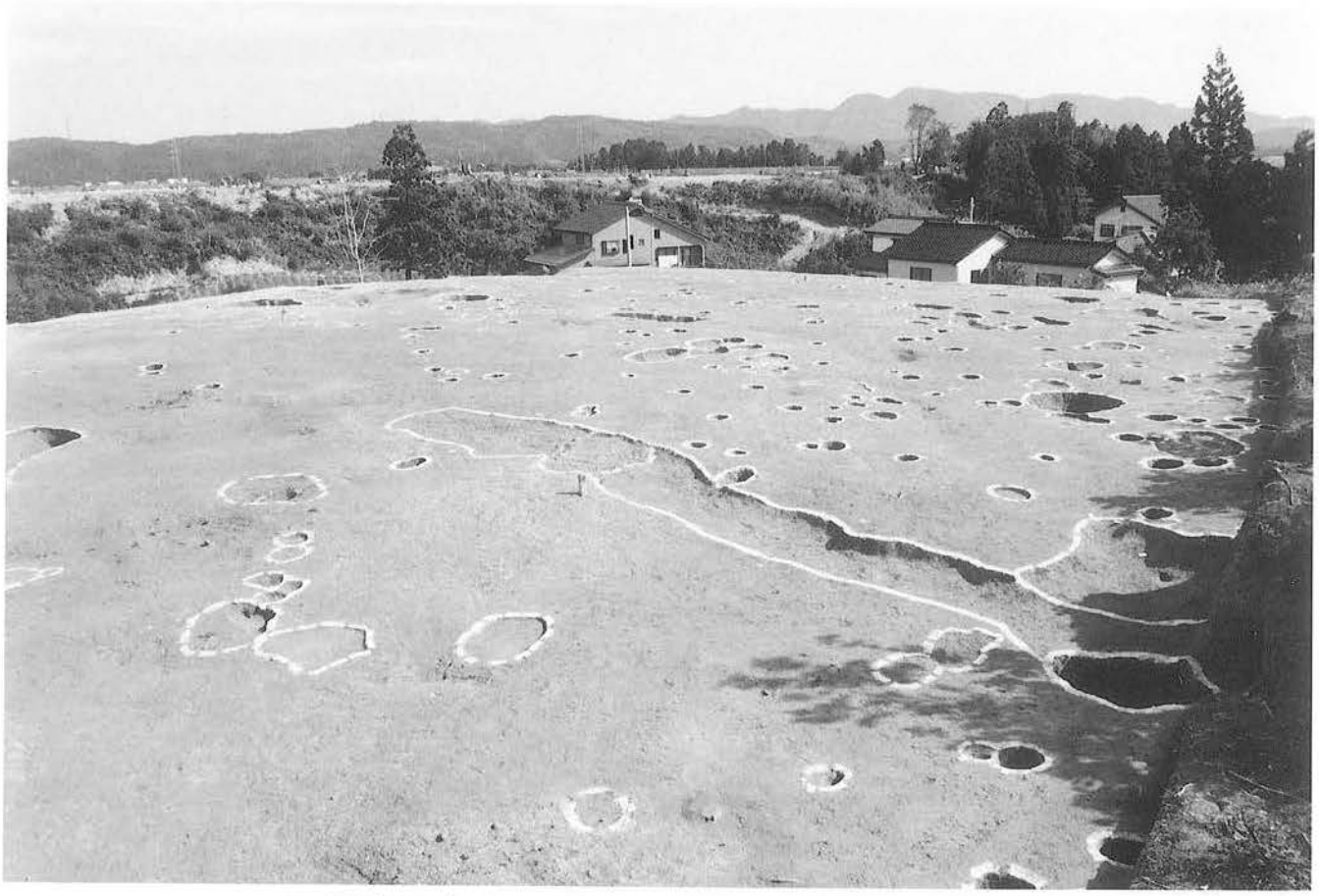
田塚山E地区　1

a．E 地 区 全 景　　（南東から）

b．E 地 区 近 景　　（東から）

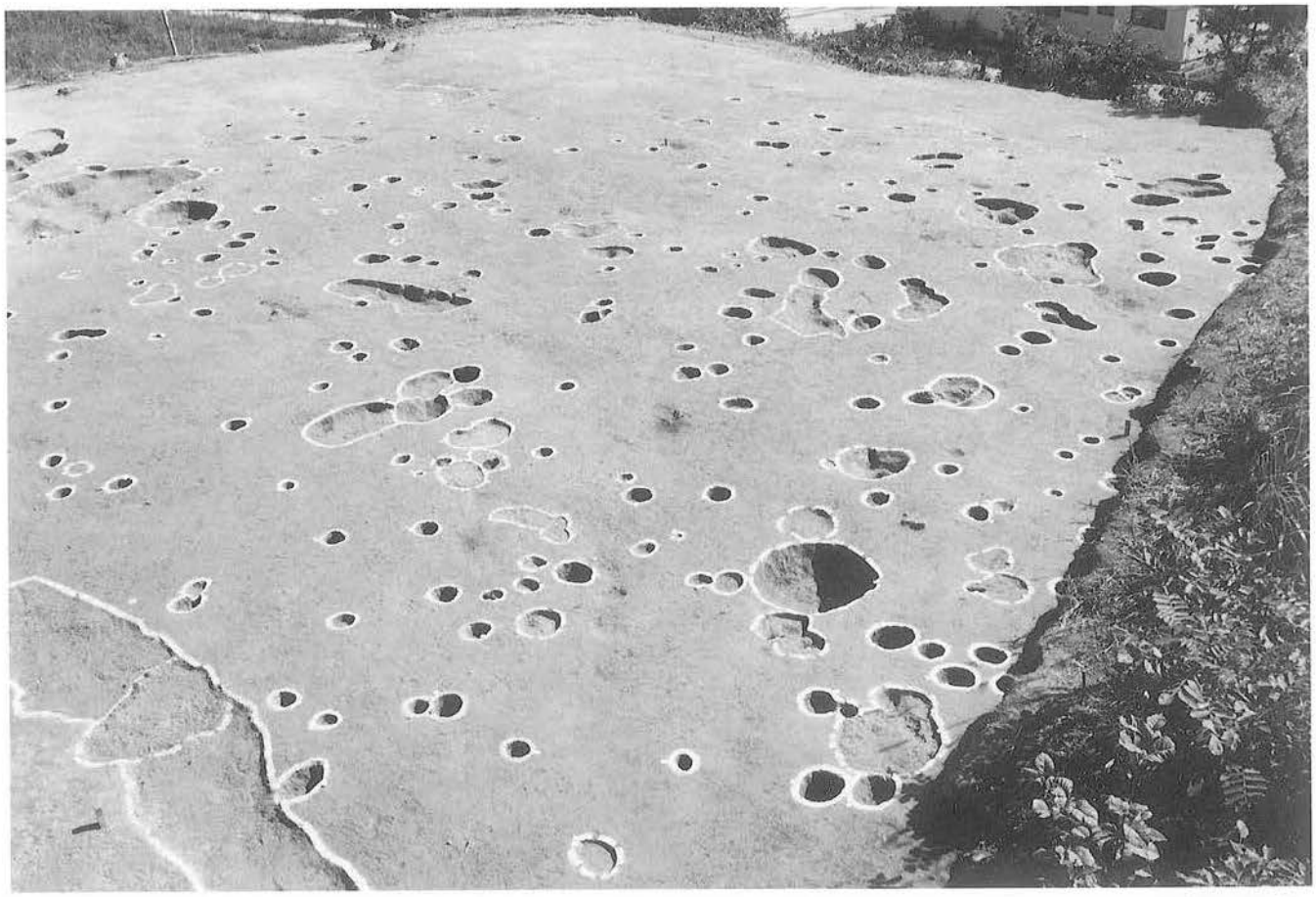
田塚山E地区　2

a．調査区全景　（北から）



b．調査区全景　（北西から）

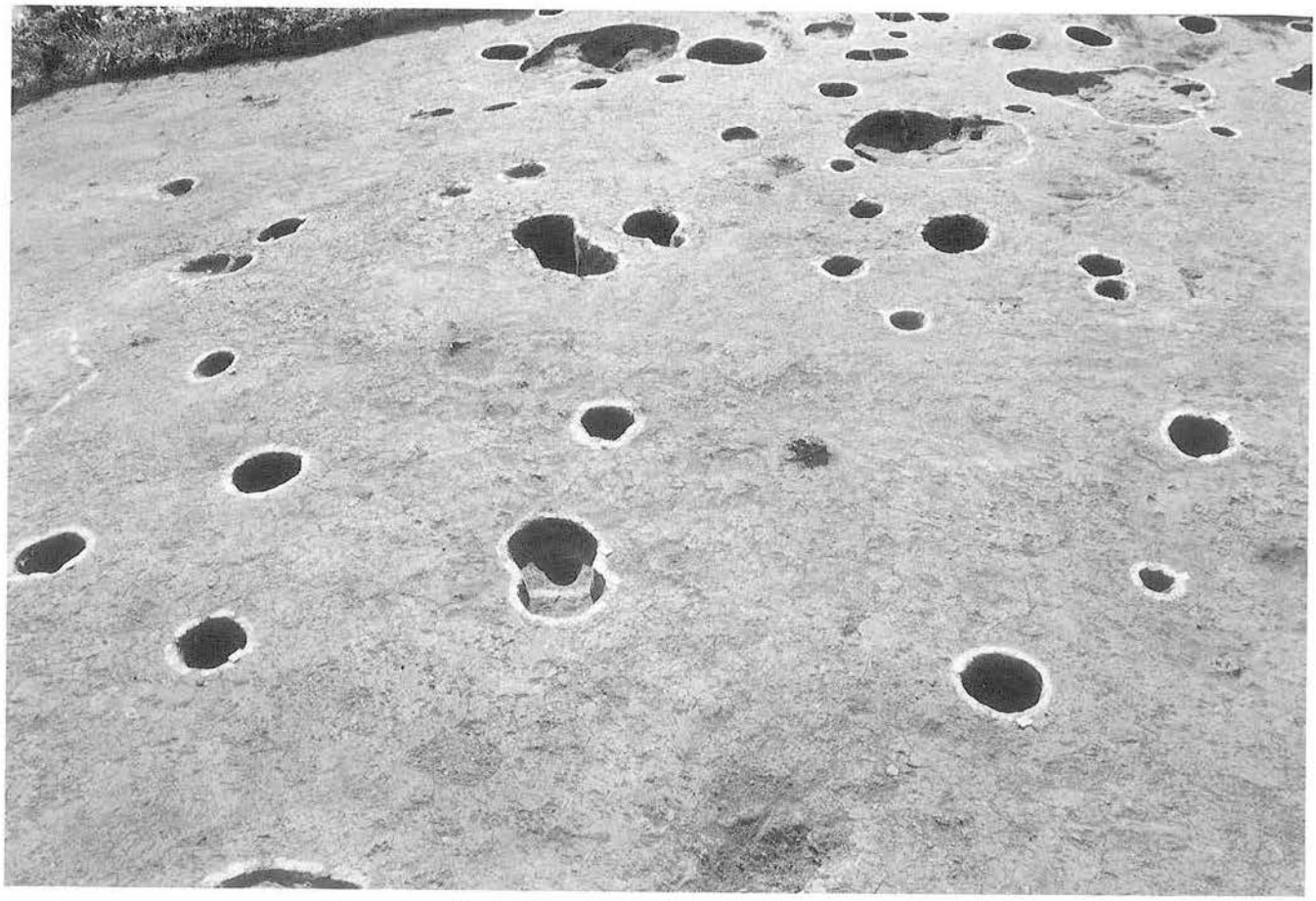
田塚山E地区　3



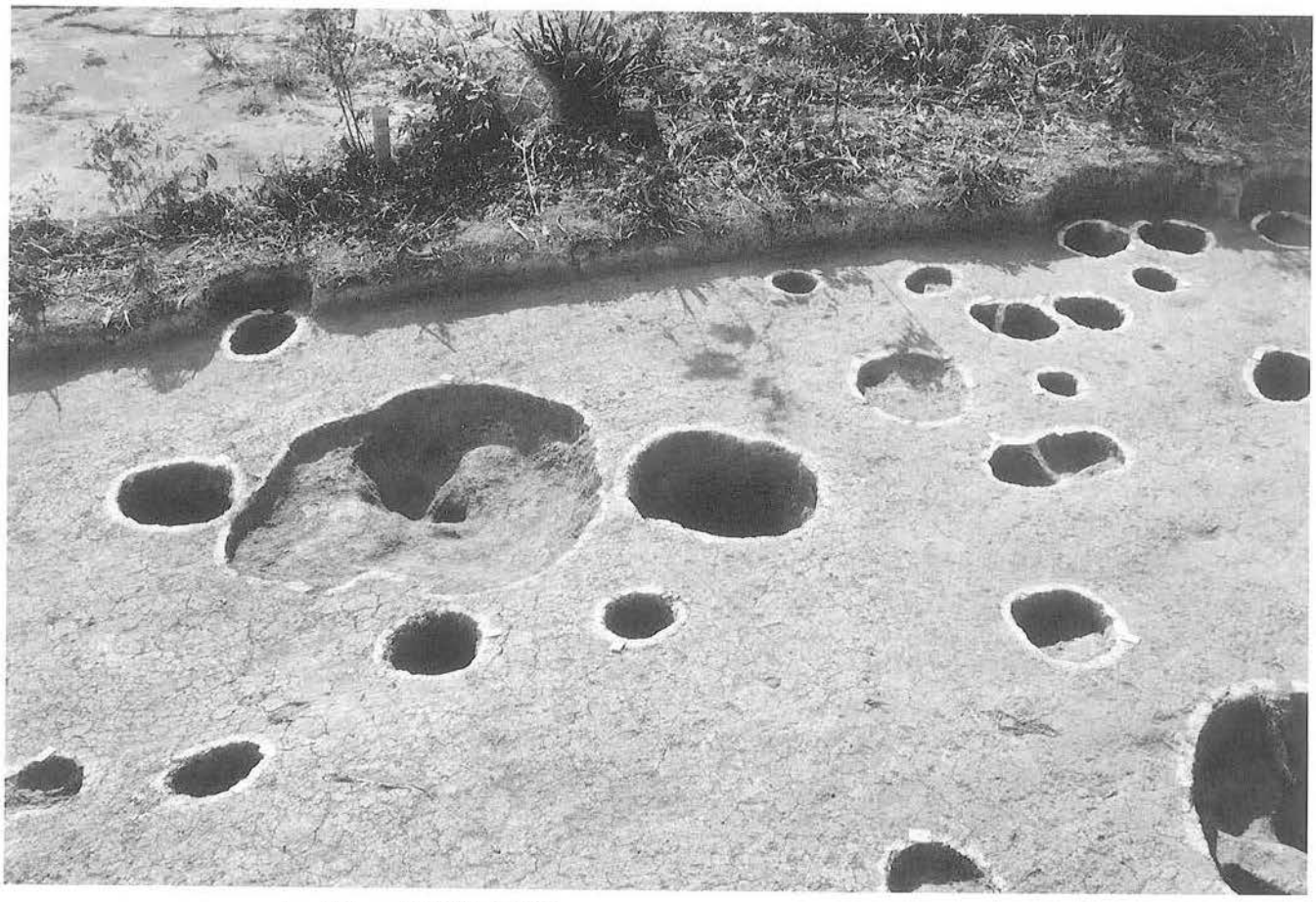
a．調査区全景　（北西から）

b．調査区全景　（南東から）

田塚山E地区　4

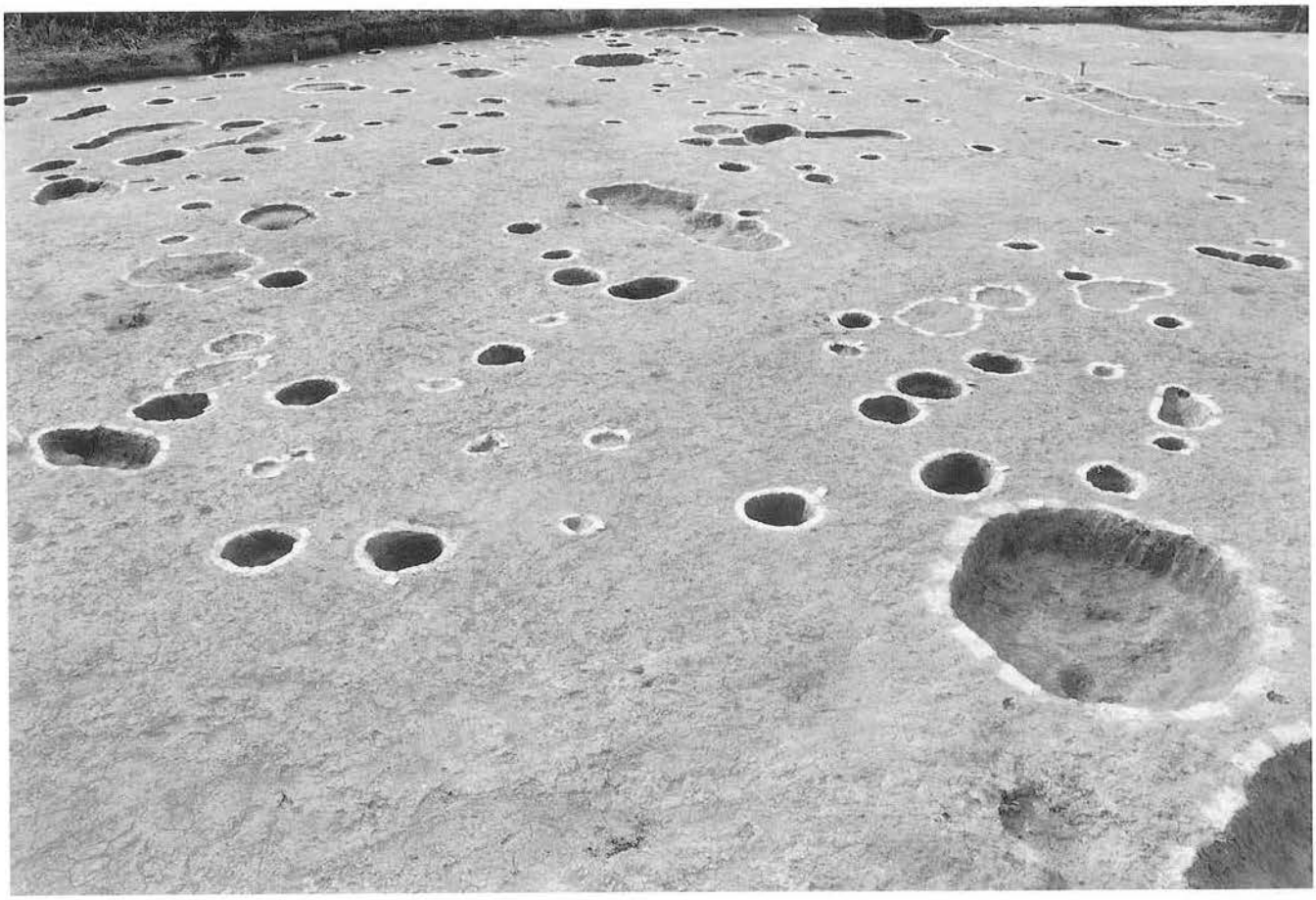


a．SI－401住居跡　　（東から）



b．SI－402住居跡　　（東から）

田塚山E地区　5

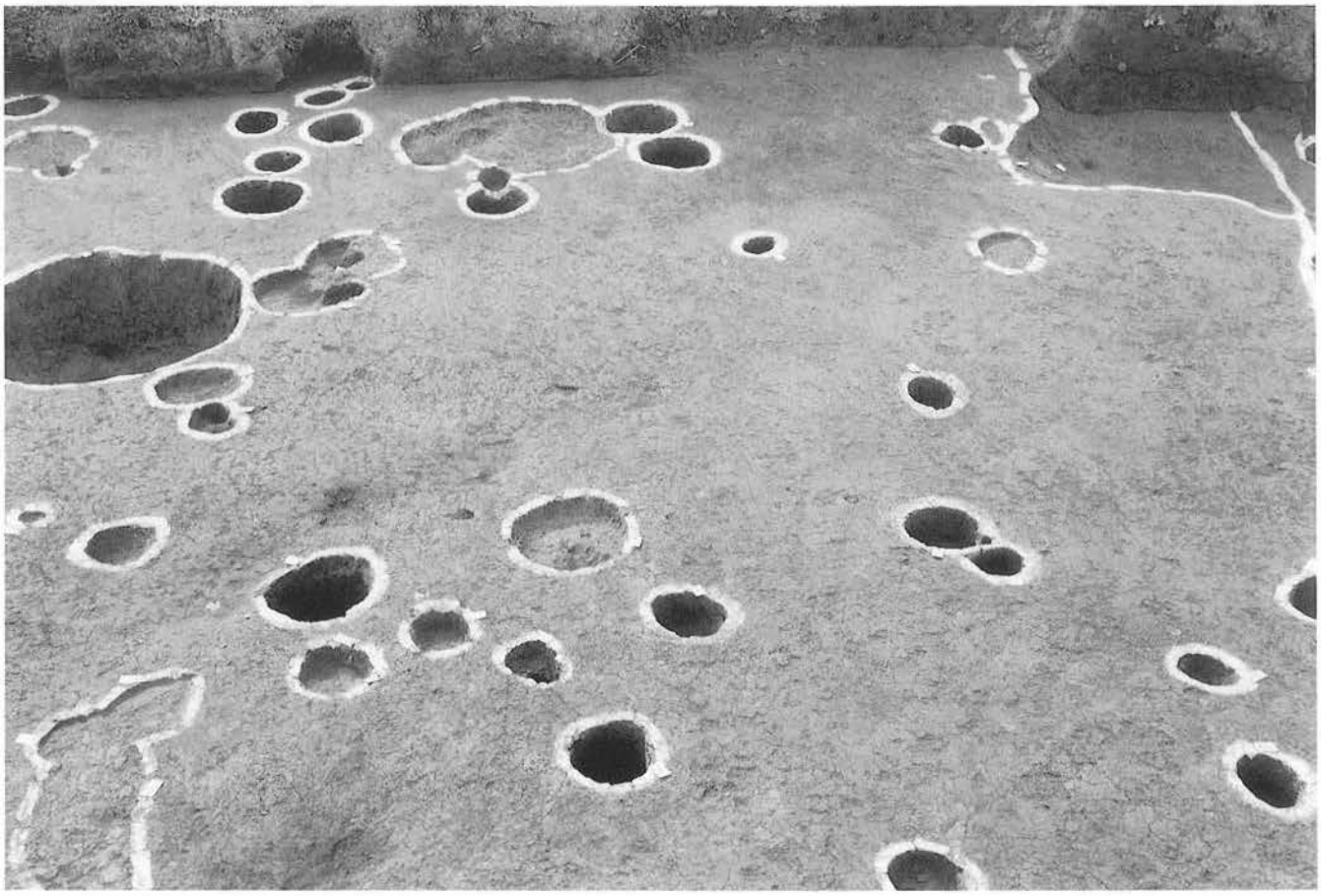


a．SI－403住居跡　（東から）

b．SI－404住居跡　（東から）

田塚山E地区　6

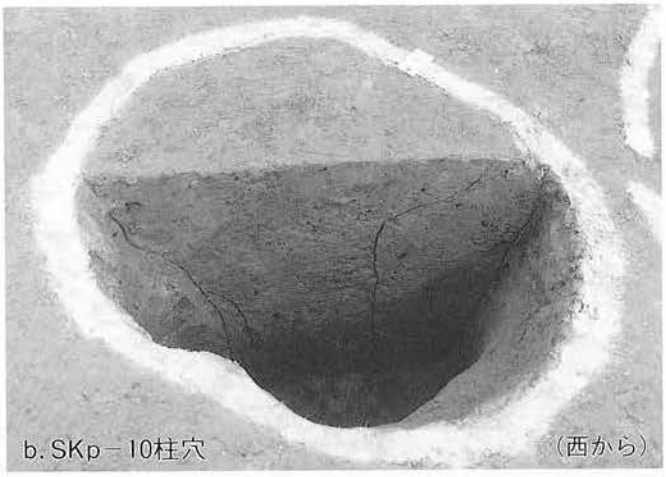
a．SI－405住居跡　（東から）



b．SI－406住居跡　（東から）

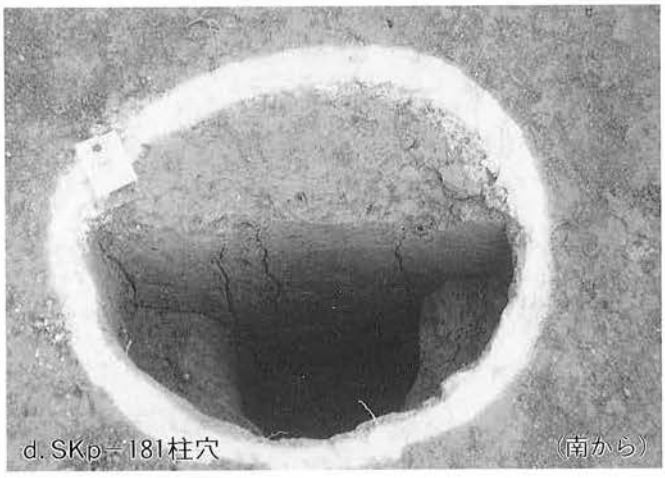
田塚山E地区　7

a. SI－408住居跡　（東から）



b. SKp－10柱穴　（西から）

c. SKp－92柱穴と玦状耳飾り　（西から）

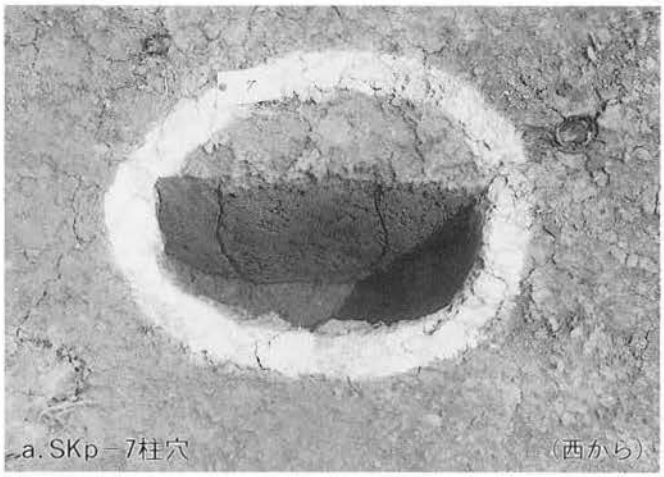


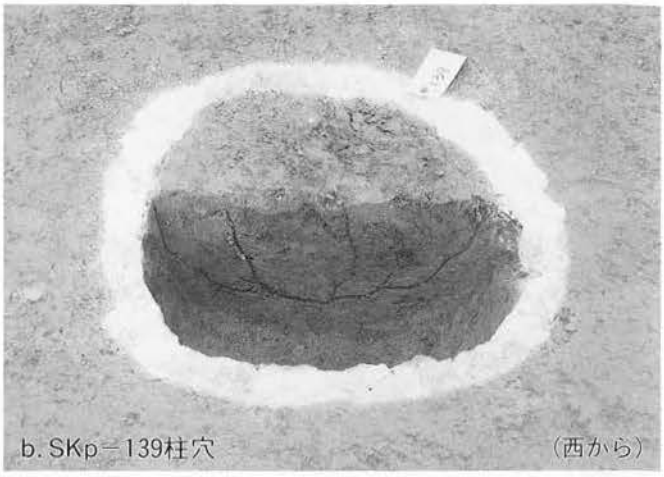
d. SKp－181柱穴　（南から）

e. SKp－321柱穴　（西から）

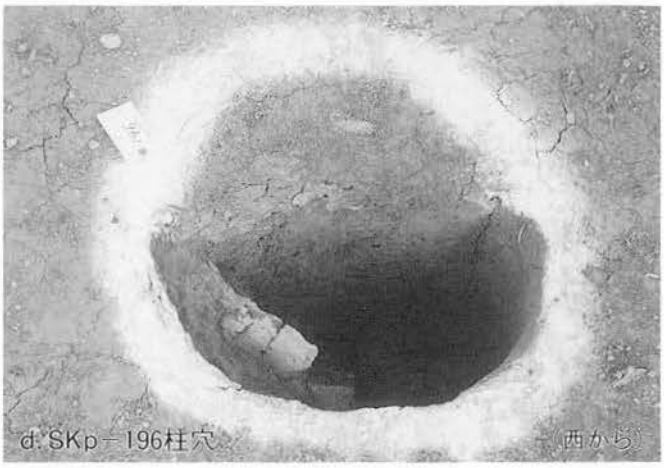
柱穴土層断面

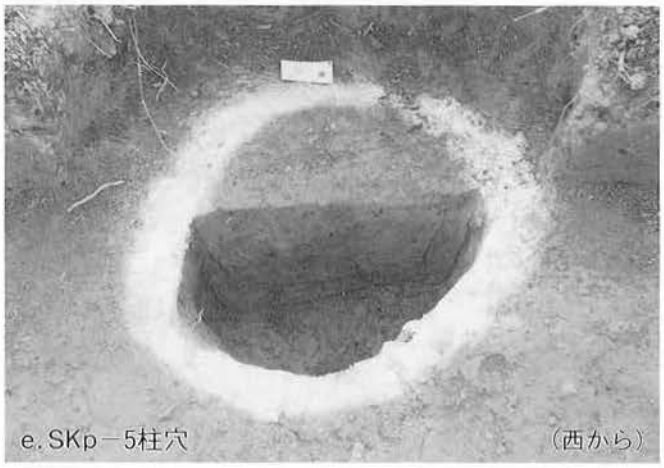
田塚山E地区　8


a. SKp－7柱穴　（西から）

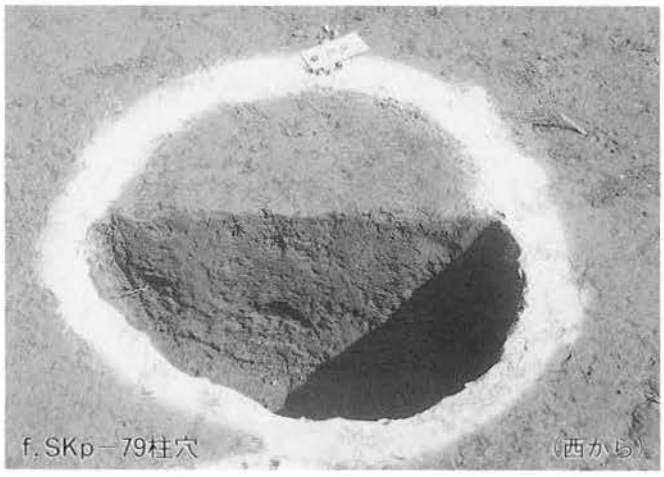

b. SKp－139柱穴　（西から）

c. SKp－135柱穴　（西から）


d. SKp－196柱穴　（西から）


e. SKp－5柱穴　（西から）

g. SR－260道路跡　（東から）


f. SKp－79柱穴　（西から）

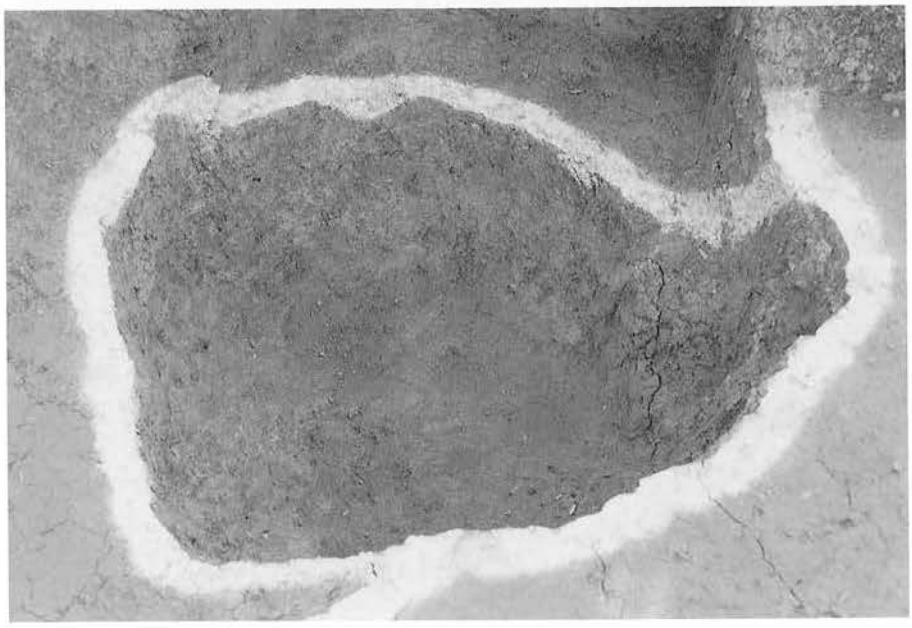
h. SR－260道路跡　（東から）

柱穴土層断面と道路跡

田塚山E地区　9

a.覆土A断面　　（東から）

b.覆土D断面　　（南から）

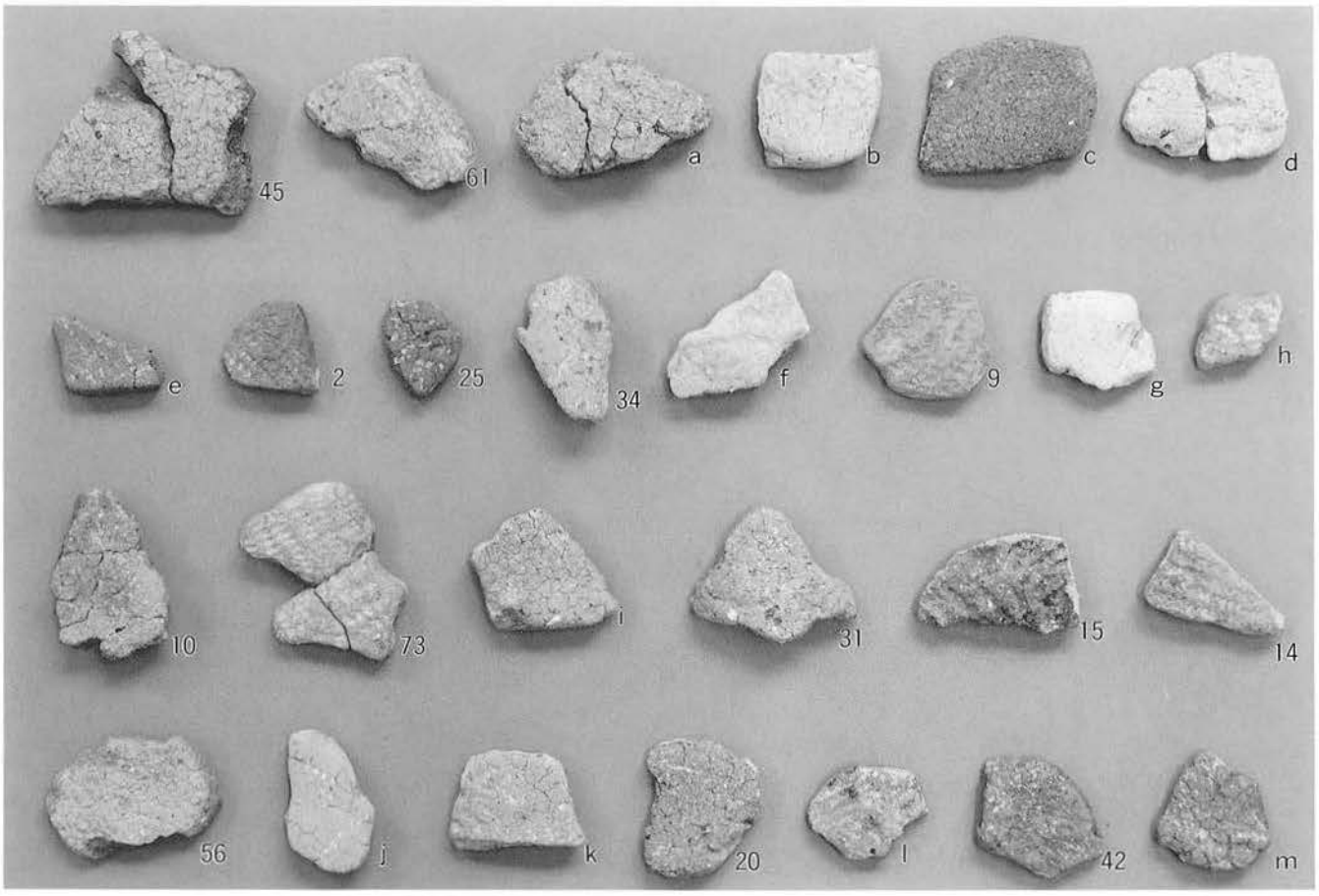


c.完掘　　（北東から）

SK－261土坑

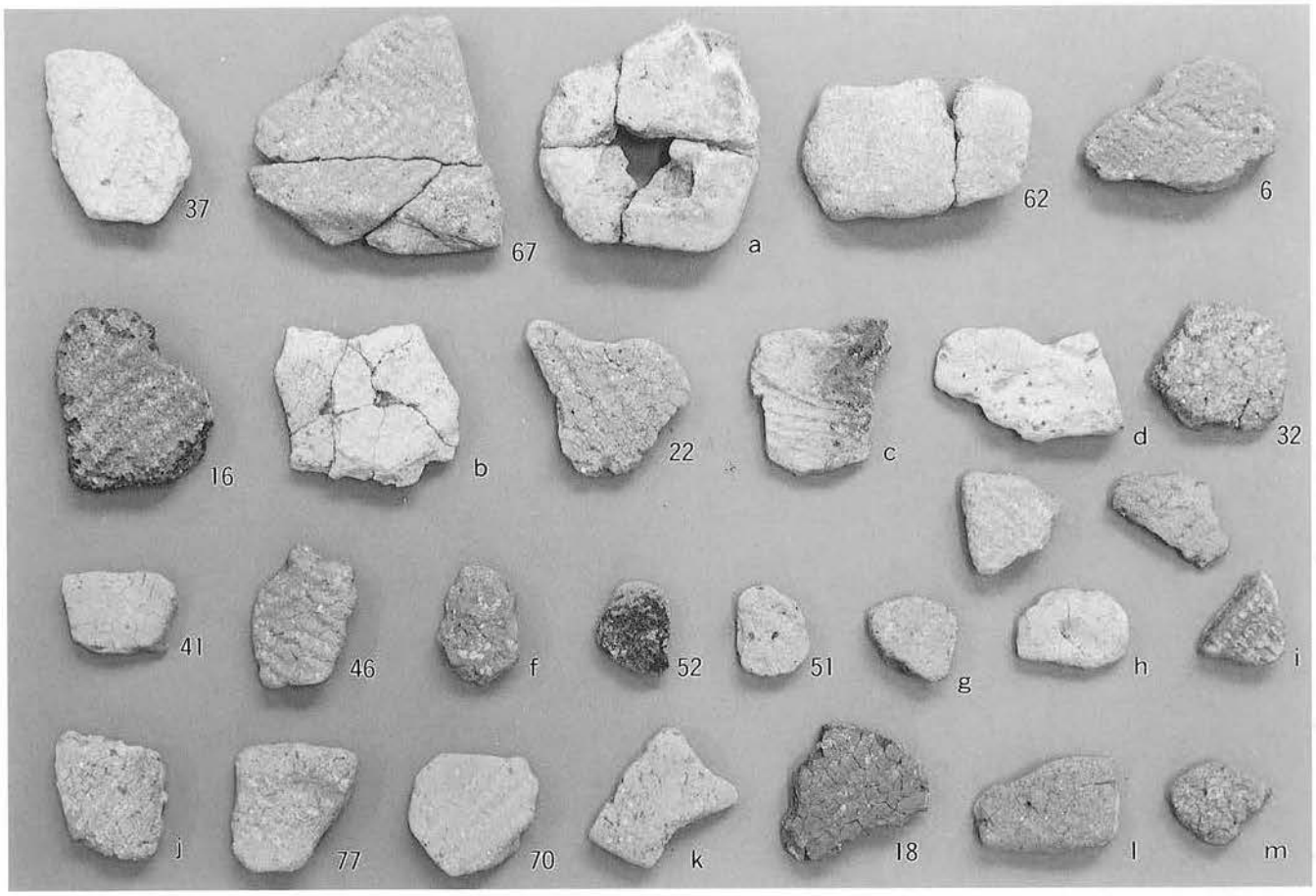
田塚山E地区　10

a. 出土遺物（1）　(約1：2)



b. 出土遺物（2）　(約1：2)

田塚山E地区　11



a. 出土遺物（3）　（約1：2）

b. 出土遺物（4）　（約1：2）

田塚山A地区SD－38にて

田塚山B地区仏堂にて

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集

田塚山遺跡群

— 新潟県柏崎市田塚山遺跡群発掘調査報告書 —

平成８年３月28日　印　刷
平成８年３月29日　発　行

発　行　　柏崎市教育委員会
新潟県柏崎市中央町５－50

印　刷　　株式会社　柏崎インサツ